廚川白村全集第二卷

文學論

下

改造社版

「苦悶の象徴」の原稿

第二卷目次

文藝思潮論……………………三
苦悶の象徴……………………一三五
最近英詩概論……………………二三七

文藝思潮論

Wilt thou yet take all, Galilean? but these thou
shalt not take,
The laurel, the palms and the pæan, the breasts
of the nymphs in the brake:
Breasts more soft than a dove's, that tremble
with tenderer breath;
And all the wings of the Loves, and all the
joy before death;
All the feet of the hours that sound as a single
lyre,
Dropped and deep in the flowers, with strings
that flicker like fire.

—Swinburne, *Hymn to Proserpine.*

卷頭に

ことし正月の時事新報文藝欄に、私は自分の著書に就いて下のやうな事を書きました。

『私は自分の專攻の學科が西洋文學にあるのですから、十數年來その方の書物ばかり讀んでゐました。しかし今まで別にそれを講義したり、或は他人さまに吹聽しようといふ必要もなかつたのですから、謂はば唯自分勝手な好きな道としてやつて來たに過ぎないのです。ところが數年前わが文壇に、西洋の自然派や象徵派の文學が喧傳され、それらに關して色々の議論のやかましかつた頃の事です、私の親しくしてゐた學生のうちで文藝に熱心な一部分の人たちが、さういふ最近文藝の問題に就いて一般的の知識の得られるやうな講義をして呉れよと望まれました。なるほど考へて見ますと、さういふ方面の正確な知識は一般の學生はいふまでもなく、また文壇以外の教育家とか、或は宗教家とか或は政治家とかいふ人たちにも、甚だ必要なものであるにも拘はらず、西洋の學者でまだ、之に就いて纏まつた組織的研究の書物を公にした人を聞きませんでした。そこで私も自分ながら大膽な寧ろ橫着な企だとは思ひながら、とにかく乞はるゝ儘に、さういふ講義を一つやつて見ようといふやすい受合ひをしたのです。ところが實際やつて見ると、果して中々うまく行かない。なるべく方法的に組織的に秩序を亂すまい、手落の無いやうに心掛けると、なほさら話が前後したり錯雜したりして大に閉口し

ました。のみならず實際講義をして見ると、有名な作品で名ばかりはとくに知つてゐても、お恥づかしながらまだ讀んでゐない物が澤山あるので、急にそれを取り寄せて讀む必要を生じたり、或は嘗て以前には讀んだ本でも、講義の材料にしようなぞといふ心掛けで讀んだのではないのですから、何頁のどこにあつたといふやうなことも思出せないし、急に調べてもなか〳〵出て來ないといふやうな次第、或はまるきり忘れて了つたのさへ多くつて、實に困つたのです。しかし聽講者の熱心に勵まされて、とにかく歪みなりに一年間その講義を續けて、一段落を告げました。ところがその後になつてまた學生の或人たちから、あの講義は本にして出版したらいゝでせう、といくたびか勸められました。元來私は自分勝手な人間ですから、以前から時々興に乘じては、自分の讀んだ本などに就いて、つまらない事を雜誌や新聞に斷片的に書き散らした事はあつても、纏まつた著述といふやうな面倒な仕事はして見る氣もなかつたのです。第一講義のノオトを文章に書き直して、それを訂正し、淸書して、また印刷の校正をするといふやうな時間と勞力が、自分の研究のためには何にもならない事だし、それよりまだ讀みもしないで徒らに机の前に積んである本の一冊でも、早く片附けた方がよからうといふ風な、甚だ身勝手な事ばかり思つてゐたのです。しかしかうやつて講義出版の事を勸められて見ると、成るほど自分でも一年間相應に頭を苦しめたものでもあるのですから、其儘に棄てるのも實は少し惜しいやうな氣がしました。そこで煽てられるが儘に、また一年間それを書き直す事にかかつて

漸く出版したのが、あの拙い『近代文學十講』であつたのです。

幸ひにしてあの數ならぬ小著は皆さまからの歡迎を受けましたが、これは自分に取つては全く望外の光榮とする所で、厚く讀者諸君の好意を感謝して居ります。それにつけても自分が後になつて氣附いた多くの不備な點なぞに想ひ到ると、眞に慚愧に堪へないのです。（中略）

實は私のあの著書には別に一つ大なる缺點がありましたので、これはどの批評家も申されませんでしたが、自分ではそれを氣付いてゐるだけに、獨り竊かに氣が濟まないやうに思つてゐるのです。それは外でもないので、近代文學の評說として、あの本には全く現代文藝思潮の歷史的觀察といふものを缺いてゐます。申すまでもなく近代學藝の進步はすべての研究にこの史的發展の說明を要求して居りまするのに、あの本には其方面の事を全く省略しておきました。歐洲文藝思潮史の根本に立ち歸つて、現代文學の由つて來る所以を說かなければ駄目だと思ひました。だからあの書物には說き及ばなかつた最近西歐文壇の事實と共に、之に對する私みづからの獨立した歷史的解釋を纏めて、更に今一卷の新しき著述に、前著の不備を補はうと思つて私は筆を執る事にしたのです。遠からずそれを出版したとき、更にまた江湖の諸賢に教を仰ぎたいと思つて居ります。』

かういふわけで出來たのが即ちこの『文藝思潮論』ですから、さきの『近代文學十講』と重複するやうな點は、本書に於てすべて省略することにしました。

本書のなかに用ゐた基督教思潮といひ、異教思潮といふ言葉は、普通にいふのよりも遙かに廣い意味に用ゐたので、それは本書二二、三頁にある對照の表に見るやうな、色を異にした二つの思潮に名づけた假の名に過ぎないのです。基督教とか希臘思想とかいふ文字に拘泥して、そのため誤解をせらるることの無いやうにと、特に此點をおことわりして置きます。

大正三年四月二日

伊豆修善寺の客舍に於て

著　者

『文藝思潮論』目次

第一　序　論……………………………………一五

文藝の組織的研究――研究と鑑賞と――ラスキン――文藝思潮の歷史的解釋――歐洲の二大思潮――靈と肉、神性と獸性――バイロンのマンフレッド――テニソン――ドストイエフスキイの『罪と罰』――基督教思潮と異教思潮――希臘思潮――二大思潮の比較對照

第二　思潮史の回顧（古代）………………………二四

一　肉　の　帝　國…………………………………二四

希臘の文明――現代に及べる希臘思潮のながれ――その源泉――羅馬帝國末期の頹廢――帝王の暴虐――皇帝ニイロ――美的生活

二　靈　の　曙　光…………………………………二八

ベトレヘムの星――基督の教――『パンは死せり』――ミルトンが基督降誕の歌――ブラウニング夫人の『死したるパン』――歷山府時代――背教者ジュリアン――イブセン作『皇帝とガ

リレア人』――メレジコウスキイ作『群神死滅』――キングズレイ作『ハイペイシア』――當時の哲學――新プラトオン派の思想――プロティヌスの哲學――シルレル『世界の四期』

第三　思潮史の回顧(中世)……………………四三

戰國時代と近世主義――宗教的禁慾主義――肉を虐ぐること――聖フランシス上人――知識の禁厭――中世の哲學――かくれたる異教思潮の勢力――中世傳說、ファウスト――藝術的要求――ハイネの『流謫の神々』――『カルミナ・ブラナ』――ペイタァの所說

第四　思潮史の回顧(近世)……………………五三

一　近代思想の黎明……………………五三

近代思想の源泉――古學復興――異敎思潮の復活――人間本位の思想――新文學の勃興――肉の美と造形藝術――各國の繪畫彫刻――ルネッサンスの年代とその歷史的意義――『モンナ・ヴンナ』

二　近世史の波瀾……………………六一

思想史上の波瀾――二大思潮の混淆時代――十七八世紀の思想界、(第一)宗敎改革――(第二)主知的傾向――狂熱の反動――知識萬能主義――ベイコン、デカルトの哲學――啓蒙運動

——循俗主義——(第三)古典主義の文學——古典の研究とその崇拜——藝術上の法則——文字の彫琢——佛蘭西路易十四世王朝の文學——英國の古典派文學——形式模倣と似而非古典主義
カントの哲學——ルッソオの思想——浪漫主義——自然派時代——近世史上基督教思潮と異教思潮との混合とその消長——二十世紀現代の思潮——基督教思想の受けたる二つの打擊——(參考)二大勢力の衝突——懷疑思想對神祕思想
第五　希臘思潮の勝利……………………………八五
一　靈肉合一觀……………………………八五
ロバアトソンの希臘思想論——靈肉合一觀——歐洲最近の反物質主義——象徵主義——肉の讃美者ホヰットマン——肉の要求と靈の要求——千八百八十九年
二　聰明の智力……………………………八九
明敏なる理知——マシュウ・アアノルドの所說——ショオ、アナトオル・フランス——嚴正と明晰——希臘藝術の特色——クラシシズム——ニイチェの『悲劇發生論』——希臘人の運命觀——諦めと努力——人生全面の觀察

三　現在生活の享樂……………………………………………………………九七
今人の現世主義――今日を享樂せよ――レミ・ドゥ・グウルモン――現代の宗教――オイケンの宗教觀――建築に於けるゴシック式とルネッサンス式――ラスキンの說――希臘人の現世思想――人間本位――神の思想――ボイナス――ニイチェの美的個人主義――その超人說――ショオの「人と超人」――神と超人と――グウルモンの說――希臘のアンティアス――自我の解放――個人主義――希臘人の神――聖書――プロミイシュウスと約百との比較――政治上の自由――モオリス・バレスと『自己の崇拜』――その作品

四　美の宗教……………………………………………………………一一三
肉感美の崇拜――美と善の一致――希伯來思想との比較――肉體の美――男性美――ロダン――ペイタァ――ワイルド――ダンヌンチオ――ピエエル・ルイ――レオン・バクスト――參考書

第六　EPILOGUE

EPILOGUE……………………………………………………………一三一
現代文學の新潮……………………………………………………………一三一

現代藝術の思潮――生活の愛慕と享樂――ヒュウマニスト――最近の佛蘭西文學――過去の人ピエエル・ロティ――新傾向――懷疑厭世の舊思想――實行的努力――人生の實際的傾向と文藝の接觸――新傾向の代表作――家族主義――自我主義と共存主義――祖先の信念に歸ること――『人生派』の文藝――クロオデルの絶叫――その詩風――この派の諸家――ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』――加特力教復活――希臘戰士の生活

第一　序論

文藝の組織的研究――研究と鑑賞と――ラスキン――文藝思潮の歴史的解釋――歐洲の二大思潮――靈と肉、神性と獸性――バイロンのマンフレッド――テニソン――ドストイエフスキイの『罪と罰』――基督教思潮と異敎思潮――希臘思潮――二大思潮の比較對照

'A convent and self-quenching;—cloisters would seem to me like holy dew. But that would be sleep, and I feel the powers of life?'

—George Meredith, *Diana of the Crossways*, chap. vii.

僧院の生活と自己抑損と、――いかにも修道院は神聖な露のやうに私にも見える。しかしそれは眠である、自分は飽くまで生の力を感ずる者だ。

（メレディス）

私はいつも、花やかなすぐれた藝術品の貴さをおもふとき、蠟を嚼むが如き乾燥（ドライ）な論議をこれに加へるのを憚らずには居られない。理路に走つたこちたき主義（イズム）の論や、人生觀のむづかしい說を暫く後廻しにしておいて、唯それ藝術品としての强大なる力に感じ、美しさに醉うてゐたいとのみ思ふ。かの血の氣の涸れた科學者が實驗室に閉ぢ籠つては、美しい花や寶石に遠慮會釋もなうべたべたと學名

の札を貼り附けて、分類して行くやうな眞似を私は成るべくならばしたくないものだと思ふ。

しかし文藝の研究は、今日に於て旣に嚴然たる一科の學である。學問である以上、近世のすべての知識は必ず系統的組織的の體制を必要とする。單にあの作は面白い、この作は巧いなどと、雲を掴むやうな呑氣な事ばかりいつても濟まされない。また在來多くの文學史や美術史がしたやうに、唯徒らに名高い作品や作家を、年代の順などに臚列し敍述しただけでも滿足されないであらう。たとひ獨逸の或一派の學者たちがするやうな煩瑣な無味な詩文研究の法を執らずとも、とにかく或程度に於て、解剖のメスを使つたり、分類の札を貼ることは研究者として避くべからざる必然の道であらう。

研究と享樂と、また論議と鑑賞と、これら二つのものは、しかしながらさまで不調和なものであらうか、自分は決してさうは思はない。否な寧ろ兩者は立派に併立せしむべきもので、研究批判に得た精確なる知識を基礎にした鑑賞の可能は、自分が年來の確信であつた、從つて私にとつては、たとへばかの Ruskin（ラスキン）が一代の名著『近代畫家論』"Modern Painters" に用ゐたやうな、詩情と趣味に富んで、而も整然たる秩序と論理の正確を亂さない研究の方法、——謂はば理趣情景相待つといつたやうなやりかたが、先づ學徒として藝術品を取扱ふ唯一の道であるやうに、今もなほ信じてゐる。私は藝術に對してどこまでも精緻嚴密な研究を積むと共に、かのシルレルが、

Auf deinen Lippen selbst erkaltet

Der Liebe Kuss, und in der Freude Schwung
Ergreift dich die Versteinerung.

—Schiller, *Poesie des Lebens.*

爾の唇には戀の接吻も冷やかに、また喜びの高まる中にても、爾は化石となる。（シルレル『人生の詩』）

と嘲つたあのやうな枯淡なる學究ではありたくないと思ふ。

さて西洋文藝の系統的研究に入るとき、先づその第一歩として、近世のすべての學藝が要求する歷史的發展の說明がなくてはならぬ。卽ち文藝の根柢を流れてゐる思潮が、果して如何なる源に發し、いかなる變遷を經て今日に至つたか、現代文藝の主潮はいかなる歷史的解釋を加へらるべきものか、この點に關して成るべく首尾一貫して纏まつたる說明を試みたいといふのが、此小著の目的とするところである。

歐洲の文明史を繙いた人は誰しも、その根柢には明らかに人間の本性に基づいた二つの異なつた潮流が横たはつてゐる事に氣がつく、著しく色調を異にした二つの流れが、そこに一盛一衰、一勝一敗の爭の歷史を繰返して來たといふ事實に強く注意を惹かれるだらう。これが卽ち史家の所謂、人性の異教的基督教的二元論、英語でいふ the Pagano-Christian dualism of our human nature で、

私の論の出發點も亦ここに在る。

むかしの埃及人は種々さま〴〵の奇怪至極な神體を彫つた。それらは頭だけが犬、猫、或は猿、鰐などの類で、からだは全くの人間である。中でもかの女頭獅身の sphinx は一番ひろく世に知られたものだ。それから希臘人もまた同じやうなことを考へて、半人半獸の Pan や Centaur などを拵へた。これらは果して何をあらはし何を意味するものであらうか。考古の學者の煩瑣な所説はしばらく措いて、これら半人半獸の像は、はやく既に古代人類の胸奥に兆(きざ)した靈肉の鬪爭、神性と獸性との不調和の問題に對する彼等の極めて幼稚な、また原始的な一種の解決法を示したものだと見ても、必ずしも牽强附會ではなからうと私は思ふ。

靈と肉と、聖(きよ)く明るい神性と醜く暗い獸性と、精神生活と肉體生活と、內なる自己と外なる自己と、道德を基とした社會生活と自然の本能を重んずる個人生活と、これら二つのものの間の不調和は、苟も人類が思索といふ事を始めてよりこのかた、その苦惱煩悶の素因であつた。如何(どう)にかして靈肉の調和を求めたいと焦心(あせ)るのは、殆ど人類一般の本性であつて、これが今日までの人文發達史の根柢に伏在する大問題であつた。

Byron(バイロン) が悲曲『マンフレッド』"Manfred" の主人公は、獨り Jungfrau(ユングフラウ) の峰に立つてから叫んだ。

How beautiful is all this visible world!
How glorious in its action and itself!
But we, who name ourselves its sovereigns, we,
Half dust, half deity, alike unfit
To sink or soar, with our mix'd essence make
A conflict of its elements, and breathe
The breath of degradation and of pride,
Contending with low wants and lofty will.

目に見ゆる此世界の美しさ。その働作(はたらき)もそれ自らも花やかなるかな。されども自ら稱してその主權者なりと言へる吾等人間は、なかば塵にしてなかばは神、沈まんこともまた上らん事も共にかなはず。獸性と神性と二つ相交れる吾等が本性は、その要素互に相爭ひて、一は卑しく一は誇りかに、低き欲求と高き意志と爭へるなり。(『マンフレッド』第一幕第二場)

またかの Tennyson(テニソン) が十二篇の『國王牧歌』"Idylls of the King" にあらはした思想も要するに、Arthur(アアサア) 王が地上に建設しようとした神聖な理想の王國が、王妃の道ならぬ戀に起つた肉のけがれに破られる靈肉の爭といふ事を中心にしたのであらう。更にこれらとはよほど懸け離れた種類の文學で例を取れば、Dostoievsky(ドストイエフスキイ) が『罪と罰』の深刻な心理描寫も、畢竟あの個人主義的な自我狂(エゴメニア)の Raskolnikov(ラスコルニコフ) に於て人間の肉的方面を代表せしめ、また賤しい賣春婦ではありながら心けだかき

Sonia（ソオニア）といふ女に於て神聖な靈的生活を代表させ、つまりはこの二元の爭を描いたのである。唯前者が遂に後者ソオニアによつて感化せられ、靈肉一致の生活に入るところまでを書いたのは、此露西亞近世の大作家が他の詩人と異なつた點であらう。

二つの力の衝突するところに、人生のすべての悲劇は生ずるのである。理想と現實と、個人と社會と、理性と感情と、知識と信仰と、――そしてまた肉と靈と、これらのものの衝突し分裂するところにこそ、人生の最も慘憺たる悲劇が見られる。そして人生の眞味はまた實にこの悲劇のうちにあるのではなからうか。

この靈肉鬪爭の問題は歐洲では、靈を重んずる基督教思想に對し、肉を貴ぶ異教思想 Paganism の爭となつた。或はまたこれを冷やかな精神的思索の北歐思潮と、熱烈な肉慾的本能的の南歐思潮との對立と見るも可からう。わが國でいへば、『古事記』にあらはれた神話時代からの日本人固有の思想こそ、その現世的肉的なる點に於て、まさに歐洲に於ける異教思潮に比すべきもので、後に這入つた儒佛二教の思想は、ちやうど基督教思潮の立場に類するものだと見てよい。

基督教に對する反基督教（アンティ）思想たる異教思潮の源は、やはりすべての歐洲文明の源である希臘に發した。だから名づけて希伯來主義 Hebrewism に對する希臘主義 Hellenism とも云へば、或はまた基督崇拜に對して希臘の酒の神、歡樂の神なる Dionysus の崇拜とも呼ばれ得るのである。

この二大思潮の特色に就いて稍詳しい說明は、後段に至り現代の異教思潮を說く時に讓つて、ここでは單に兩方を對照して、その最も著しい相異の點だけを擧げるに止めよう。

むかし希臘の Delphi（デルファイ）に在つた Apollo（アポロ）の神殿に錄された名高い言葉がある。それは

Γνῶθι σεαυτόν （なんぢ自らを知れ）

Cicero 羅句譯 (Tusculanae Disp. i. 22,52) には 'nosce te' とある。

といふのであつた。ところが之に對して基督教の聖書を見ると、かういふ句がある。

『エホバを畏るることは智慧の根本（もと）なり。聖（いよ）き者を知るは聰明（さとり）なり』――箴言第九章十節

一は希臘哲學の祖 Thales（タアレス）の語として傳へられ、他は Solomon（ソロモン）王の敎として今日に殘つてゐる。そしてよく考へて見ると、異教思想と基督教思想との根本的差異は、この簡單な二つの文句に盡くされてゐる。先づ『なんぢ自らを知れ』と說くのは人にむかつて個人的に自覺せよ覺醒せよと促すもの、從つてまた自我中心の思想 (egocentricism) であり、自由主義の思想である。之に反してエホバの神を畏れよと訓ふるのは、神を尊びその權威の前に絕對の服從を強ひる所謂敎權主義に他ならない。前者は飽くまで人間本位 human の現世主義であるが、後者は未來をいひ天國を說く神本位 divine の思想だ。

更にまた他の方面からいふと、基督教が天國を慕ひ理想にあこがれる靈を重んずるに對して、希臘

思想は地上の現實に執せんとする肉の解放を主張した。基督教のごとくに利他（アルトルイズム）を說かずして、先づ自我の滿足と、個人生活の充實を要求するのがその特徵だ。從つて平和を頌するよりは、寧ろ戰爭を歌ひ英雄を嘆美した。超自然（シュパナチュラル）ではなくして人間の本能を重んずる自然主義こそ、希臘人の信念であつた。前者には、だから肉慾的分子が多く、後者には禁慾生活の美が貴ばれた。かくて一方が歐洲人の藝術的意識を代表すると共に、他の一つが宗教的道德的意識の中心となつたのは、また當然の成行きであつた。

最後に、思索の傾向からいふと、希臘の方はよほど智的であり客觀的であつた。從つて自然の精緻なる觀察に長じ、それが遂には歐羅巴近世の科學的精神、知識的欲求の淵源となり素因となつたのである。然るに基督教思想の方では、之と反對に主觀的傾向が主になつて、想像や感情の豐富がたしかにその大なる特徵をなしてゐた。

以上述べた事を約めて對照の表にして掲げると、

靈的、禁慾的	肉的、本能的
神を知れ	爾自らを知れ
絕對的服從	個人的自覺

基督教思潮（ヒイブルウ）（希伯來思想）	異教思潮（ペイガニズム）（ヘレニズム）（希臘思想）
教權主義	自由主義
天國、神本位	現世、人間本位
利他主義	自我の滿足
超自然主義	自然主義
宗教的、道德的	知識的、藝術的
信仰的、獨斷的	科學的、實驗的
主觀的傾向	客觀的傾向

かうした全く色のちがつた二つの思想の流れは、現代に至るまで果して如何なる道を辿つて歐洲文明の歴史を彩（いろど）つて來たか、それをかい摘んで次の數章に述べようと思ふ。

第二　思潮史の回顧（古代）

一　肉の帝國

希臘の文明――現代に及べる希臘思潮のながれ――その源泉――羅馬帝國
末期の頽廢――帝王の暴虐――皇帝ニイロ――美的生活

"To the glory that was Greece,
To the grandeur that was Rome."

—E. A. Poe, *To Helen.*

ありし昔の希臘のほまれに、
ありし昔の羅馬のさかえに、

――ポオ、『ヘレンに寄す』

地中海の浪に洗はれた南歐の美鄕、山水明媚の希臘半島の一角 Attica（アテイカ）の州に、光芒燦然たる文化の輝きを見たのは、今から言へばもう二千年にも餘る遠い昔であつた。その豐麗な思想と藝術とがながく百代の民衆を動かして、影響感化が遙かに現代にまで及んでゐるといふ事實は、それ自らに於て

既に世界文明史上の一大壯觀たるを失はないのである。先づ言葉が何よりの證據、exotism, politics, democracy, drama, comedy, anarchism, philosophy, history, physics, arithmetic, academy, geography, 擧げればまことに際限も無からうが、とにかく歐洲人が今日、一日も使はずに居られないし、また吾々日本人までがいつもそれを借用してゐるかういふ大切な言葉が、みな古代の希臘語その儘であるではないか。

希臘の文化は忽ち他國に傳はつた、緣もゆかりも無い――否などうかすると敵であつた他の民族をさへ感化した。羅馬人が先づ之を學んだのは言ふまでもないとして、あの使徒保羅(パウロ)の如き、基督教思想を提げ來つて希臘人を愚なりとさへ嘲つた者が、なほ且希臘の詩文に學ぶところあつたのは面白い。爾後この思潮の勢は一張一弛、時に或はかくれ或は現はれて複雜多趣なる歐洲人文史の根柢を流れた。羅馬帝國亡んで後は、暗黑の中世にかくるる事幾百年、この思潮は遂に猛然として、近世文明の淵源である文藝復興期(ルネッサンス)の伊太利にあらはれたのである。それからまた暫くすたれてゐたのが、十八世紀になつて Winkelmann(ヰンケルマン) の古代藝術史論となり、轉じてまた Goethe(ゲエテ) にうつされて殆どすべての十九世紀以後の文藝に影響した。近代に於ては、Nietzsche(ニイチェ) の思想こそ最も大膽に、また最も痛快にこの希臘思想を宣傳したものであつた。

おのづから山水秀麗の氣にはぐくまれ、また民族固有の富贍なる想像力に彩られて、希臘の國土に

あの美しい神話や傳說の出來たのは、今から約三千年前の Homer よりも、なほもつと遠い遠い昔であつた。それが漸く進んで遂に紀元前五世紀の頃 Pericles の時代に至つて、文物典章の美は備はり、詩文藝術の上にも千古不朽の大作が現はれた。そしてこれが後の所謂希臘思潮の源泉である事は、西洋史を繙いた人の誰しも知る所であらう。

ちやうど日本が、印度や支那から儒佛二教の思想を受入れて之を同化したやうに、この希臘思想をその儘繼承したものこそ羅馬人であつた。かの『七丘の都』を中心とした羅馬大帝國の文明は、確かに人類が嘗て建設した最も光榮ある偉業ではあつたが、その根柢をなしてゐたものは矢張り希臘思潮に外ならなかつた。

しかし羅馬人は、希臘人のやうな聰明の智力と節制の美德を缺いた。肉の歡樂を求めて飽くことなく、情熱の奔放に任せては、遂に頽廢糜爛の極度に達しなければ止まない南歐羅甸民族の特徵を、彼等は遂に遺憾なく發揮するに至つた。たださへ現世的個人的自然主義的の希臘思想が、この節制なき羅馬人の生活に移された結果として、羅馬帝政の末路は甚だしく荒廢した。文明爛熟期の常として、人はただ樂欲の巷に本能の滿足を求め、歡樂の毒酒に醉うてまた他を顧みなかつたのである。後代の史家が呼んで「羅甸頽廢期』Decadence latine といふ時代は、即ちこの帝政の末年だ。英國十八世紀の歷史家 Edward Gibbon かつて羅馬の廢墟を逍遙し、古への帝王が榮華のあとを弔うて懷古の

感に堪へず、椽大の筆を揮うて遂にかの羅馬衰亡論 "The Decline and Fall of the Roman Empire" 七卷の大著を完成した。異教文明爛熟の時代を精論細叙して殆ど餘蘊なきものである。

その頃の帝王が殘忍横暴を極め、榮耀榮華の限りを盡くした有樣は、到底今日の吾々が想像の外であつた。例の肉慾の滿足と快樂主義とを極度まで持つて行つた結果は、遂にかの Caligula(カリギュラ) や Nero(ニイロ) のやうな、先づ東洋でいへば桀紂にも比すべき暴君の代となつた。皇帝カリギュラが、生前すでに自分を神として禮拜せしめ、或は澤山の人民を饗宴に招いてさて兵を放つて之を皆海中へ追ひ落し、何の意味もない虐殺を樂しんだといふやうな類の話は數かぎりもない。また小說ではあるが、波蘭(ポオランド)の Sienkiewicz(シェンキキッツ) の名作『何處へ行く』"Quo Vadis" を繙き、或は英國の Farrar(ファラア) 僧正の筆に成つた名高い物語『闇黑と黎明』"Darkness and Dawn" や、伊太利の劇作家 Cossa(コッサ)、又は現英の詩人 Stephen Philips(スティイン フィリップス) の史劇『ニイロ』などを讀んだ人は、その中に生けるが如く描かれた皇帝ニイロが、人を人とも思はぬ殘忍非道の所行に戰慄を覺えない者は無からう。わが國の歷史で、所謂『美的生活』の標本に擧げられた淸盛入道の專橫などより、遙かに烈しい毒々しいものであつたらうと思はれる。今もなほ殘つてゐる遺跡で羅馬名所の隨一、バイロンが『チャイルド・ハロルド巡遊』"Childe Harold's Pilgrimage" の有名な絕唱に壯麗の詩句をつらねて懷古の感を寄せたあの Coliseum などは、當時猛獸と人間とを戰はせ、gladiator の眞劍勝負に流血の慘劇を何よりも面白がる十萬の

群集が、やんやと喝采した圓形の演戲場であつた。また古今東西にわたつて浴場といふものは、淫靡の風俗と殆ど離れがたい關係のあるものだが、これも羅馬帝政の末期の名物の一つ、浴場（特に溫浴場）の設備といひ建築といひ、更に宏大な贅澤の限りを盡くしたものであつた。一々かういふ事例を擧げれば殆ど無限であるが、敗德亂倫の風一世に瀰漫して、異教思潮の本能的快樂主義、自我中心主義の極端に走つたのが羅馬晩期の狀態であつた。

二　靈の曙光

ベトレヘムの星――基督の敎――『パンは死せり』――ミルトンが基督降誕の歌――ブラウニング夫人の『死したるパン』――歷山府時代――背教者ジュリアン――イブセン作『皇帝とガリレア人』――メレジコウスキイ作『群神死滅』――キングズレイ作『ハイペイシア』――當時の哲學――新プラトオン派の思想――プロティヌスの哲學――シルレル『世界の四期』

"The dawn of Christ is beaming blessings o'er the new-born world."

—H. H. Boyesen, *Earl Sigurd's Christmas Eve.*

『基督の曙は、新しく生れし世界の上に祝福の光を照らしぬ。』（ボイエセン）

"Where we finish they shall begin. Let Hellas die! Man shall dig up her relics—unearth her divine fragments of marble, yea, over them shall weep and pray! From our tombs shall the

yellowed leaves of the books we love be unsealed, and the ancient stories of Homer, the wisdom of Plato, shall be spelt out slowly anew, as by little children."

——Merejkowski, *The Death of Gods*, chap. xxi.

『吾々のなし終つた所から後世の人は始めるでせう。ヘラスは亡んでも宜しい。人々がその遺物を掘り出し、大理石の斷片を取つて來て、泣いて祈る時がまたあるでせう。吾々の墓からは、吾吾の愛讀した書物の黄色くなつた紙が取り出され、ホオマアの昔話やプラトオンの教など、子供が本を讀むやうにまたそろ〱と讀まれる時があるでせう。』（メレジコウスキイ。）

羅馬帝政の末年、人は肉の歡樂に飽き果て、その生活は疲勞し頽廢し糜爛し盡くして、頻りに新しき何物かを求めつつあるとき、はるか東方 Bethlehem（ベトレヘム）の空に靈の曙光は現はれた。

『夫れイエスはヘロデ王の時、ユダヤのベトレヘムに生れ給ひしが、そのとき博士たち東の方よりエルサレムに來り、言ひけるは、ユダヤ人の王とて生れ給へる者は何處にいますや、われら東のかたにて其星を見たれば、彼を拜せんために來れり。』

馬太傳第二章一、二、

肉的現世主義に飽き果てた當時の人心に向つて、默示を說き天國を教へ禁慾愛他主義を奬めて、その靈的宗教的欲求を滿足させようとしたのが、即ち基督の教であつた。さきに述べた皇帝ニイロの暴虐の如き、即ちこの基督教徒に對する猛烈なる迫害となつてあらはれたのは、當然の結果である。

（羅馬歴代の皇帝は皆、甚だしい迫害を基督教徒に加へた。しかし殉教者は死に臨んで少しも騒がず、聖なる教のために身を殉ずるのを此上もなき幸福なりとして天に感謝し、現世の肉的生活をすてて天國に行くことを樂しんだ。この偉大な信仰の力がまた大に一部の人士を感動させたので、殉教者が流した血こそ他日教會の勢力の基をなしたのだ（Semen est sanguis Christianorum)）。

すべての點に於て希臘思想と正反對である基督の教は、忽ちにして羅馬の人心を動かし、彼等を導いて靈的な新生活に入らしめた。さしも一代を風靡した異教思想の現世主義も、基督降誕と共に衰頽の第一歩に入つたのである。之に就いて名高い傳説がある。基督降誕の夜 Tarentum（タレンタム）の岬を過ぎ行くさる旅人が、いづくともなく聞ゆる物悲しい聲、『大なるパンの神死せり』'The great Pan is dead' といふのを聞いた。パンはいふまでも無く希臘山野の神、その意は明らかに異教思潮の滅亡を諷したのである。詩聖 Milton（ミルトン）が少時の作『基督降誕のあした』'On the Morning of Christ's Nativity' といふ歌にも、希臘のアポロの託宣は全くやみ、異教の多くの神神の亡び行くさまを歌つた數節がある。

The lonely mountains o'er,
And the resounding shore,
A voice of weeping heard and loud lament

From haunted spring, and dale
Edged with poplar pale,
The parting genius is with sighing sent;
With flower-inwoven tresses torn
The nymphs in twilight shade of tangled thickets mourn.

寂しき山、波音たかき濱邊に、聲たからかに泣きさけぶを聞く。住みなれし泉より、また白楊の並木の谷間より、嘆きつつも神仙は去る。花の髪かざり振り亂したる女神ニンフ、くさむらのを暗きかげに悲しめり。

近代の詩人では Browning 夫人の作『死したるパン』'The Dead Pan' に、この異教滅亡のことを歌つた美しい句がある。冒頭の一節に、

Gods of Hellas, gods of Hellas,
Can ye listen in your silence?
Can your mystic voices tell us
Where ye hide? In floating islands,
With a wind that evermore
Keeps you out of sight of shore?
Pan, Pan is dead.

希臘の神々よ、沈默のうちにてなんぢ聞くことを得るや。また爾が不思議の聲は爾がいづくに隠る

るやを吾等に語るを得るや。風吹き荒びて、とこしへに岸を見ることなき浮島に在りや。パンよ、
パンは死したり。

『パンは死したり』の句がこの詩の毎節の折返し（リフレイン）になつてゐる。左の一節の如きには、更にそれがいくたびも繰返されてゐる。

And that dismal cry rose slowly
And sank slowly through the air,
Full of spirit's melancholy
An' eternity's despair!
And they heard the words it said—
PAN IS DEAD—GREAT PAN IS DEAD—
PAN, PAN IS DEAD.

また物悲しきその聲は靜かに起り、靜かに空中に消えたり。心の鬱憂と、とこしへの絶望とに滿ちて。彼等はその言葉を聞けり。パンは死したり、——大なるパンは死したり。

しかしながら歐洲文明の最初から、その基礎となつて殆ど幾百年間勢力を占め、人間の自然のままな肉的欲求に基づいた希臘思潮のことだから、如何に基督教の力を以てしても、さう／＼右から左に滅ぼされるものではなかつた。即ち紀元後二三世紀の間、歷史家が所謂歷山府（アレクサンドリア）時代は異教對基督教、

希臘主義（ヘレニズム）對希伯來主義（ヒイブルイズム）、現世主義對天國主義の衝突、換言すれば肉に對する靈の抗爭時代であつた。之を文藝史上の言葉でいへば、古典（クラシック）時代より浪漫的の中世へ遷らうとする、人文史上最も興味ある過渡期であつた。（Constantine 大帝が基督教を以て國教と定めたのは、紀元三三四年のことである）。

最もよく此過渡時代の思想界を代表した人物、二大思潮衝突の渦中に捲き込まれて遂に慘憺たる最後を遂げた悲劇的人物は、羅馬の皇帝『背教者ジュリアン』Julian the Apostate （紀元三六一年—三六三年在位）であつた。まだ歲のゆかないうちから哲學的な思索に耽つた人で、當時漸く勢力を得た基督教に對しては夙に反感を抱いてゐた。いよ〳〵帝位に登つて後は、遂に堂々と異教信仰と希臘諸神の復活を首唱し、靈的なる基督教主義に對して迫害をさへ加ふるに至つたのである、だから當時の基督教徒の記錄には、ジュリアン皇帝のことを極重惡人のやうに言つてあるが、實際かれは極めて情愛の深い正義の士で、また清淨潔白な人であつた。ただ時運の大勢如何ともすべからずして、遂に悲劇的最後を遂ぐるに至つたのである。

思想史上極めて興味ふかきこの皇帝ジュリアンの事蹟を題目として、それによつて靈肉鬪爭、希臘思想對希伯來思想の問題を取扱つた作家がある。近代の文藝に於てその最も著しきものをいへば、露西亞の Merejkowski（メレジコスキイ）と諾威の Ibsen（イブセン）とである。

イブセンの初期の作品中に、『皇帝とガリレア人』"*Kejser og Galilæer*"（英譯 Emperor and Ga-

lian) といふのがある。やはり散文劇で、かれの作中で一番長たらしい物だ。イブセン自ら自分の世界觀、自分の內的經驗を此主人公ジュリアンといふ人物のうちに現はしたとさへ告白してゐる。此の作は前後二部に分れ、前篇は『皇帝の背教』Caesar's Apostasy と題して、最初まだジュリアンが基督教信者であつた頃に筆を起して、其の後の信仰動搖の時代が描かれてある。古き希臘思想の美は既に滅びようとして、しかも基督教の新信仰もまた彼を安んぜしむるに足らない。煩悶の結果、かれもまた Faust(ファウスト) がしたやうに、學藝に赴き哲學に走つて遂に安住の地を得なかつた。が、遂に彼は神祕家 Maximos(マクシモス) の教に動かされ、魔法を信じて遂に希臘多神教の復活をはかるに至つた、のみならず色々な周圍の事情は、彼をして益々ガリレア人卽ち基督教信者に對する惡感を深からしめるのである。後篇は『皇帝ジュリアン』The Emperor Julian と題して、かれが君斯士堡(コンスタンティノプル)に卽位して以後にやつた基督教迫害の時の話で、最後に波斯遠征の軍中に傷いてジュリアンが陣歿する所で終つてゐる。臨終に際してジュリアンは、遂に空中に大きく現はれた基督のみすがたを仰ぎ見た。そして『がりレア人、爾は勝てり』といふのが、彼の最後の言葉であつた。(「爾は勝てり、ガリレア人」Vicisti, Galilae. といふこの言葉をジュリアンの語だとしたのは、昔からの基督教徒の誤傳で、決して歴史的事實ではない)。

イブセン嘗て羅馬の古都を逍遙して古代異教文明の遺跡を訪ね、希臘羅馬の盛時を想うて感慨禁ぜず、乃ち筆を執つてこの一篇を草したと傳へられて居る。人文發達の幼年期であつた希臘異教思想の

時代から、進んでその青年期とも云ふべきガリレア人の基督教時代に入つて、肉の帝國は靈の帝國となつた。イブセンの意は更に進んで、第三帝國の建設を理想としたのである。即ち靈肉合一の理想境の出現こそ、かれの切に望んだところのものである。『皇帝ジュリアン』第三齣の終の方に、皇帝とその友マクシモスとの間の下の對話は、イブセンの理想たる第三帝國の意を示したものとして、特に注意すべきだと思ふ。

ジュリアン　どうだ、君、皇帝かガリレア人か、孰らが果して勝利者になるのだらう？
マクシモス　皇帝もガリレア人も、兩方とも屈して仕舞ひますよ。
ジュリアン　屈するつて？　兩方とも？
マクシモス　兩方ともにです。今日だか或は幾百年の後にだか、それは分らんです。が、とにかく本當の人物が出さへすれば、兩方とも屈してしまふんです。
ジュリアン　本當の人物つて誰のことだ？
マクシモス　皇帝もガリレア人も、兩方ともに併存して了ふ人物。
ジュリアン　君は謎を解くに謎を以てするんだから、なほさら分らない。
マクシモス　まあお聞きなさい、私は兩方が共に屈すると言ふんです。決してあなたが滅亡してしまふと言ふのでは無いのですよ。幼年が屈して青年になり、青年が大人になるぢやないのですか。しかしそれで幼年も青年も滅びるのではないのです。あなたは、以前三つの帝國に就いて私が Ephesus でお話したのを、お忘れになりましたか。

ジュリアン　あれからは隨分もう年も經つたから、もう一度話したまへ。

マクシモス　私はあなたの皇帝としての政策(やりくち)には甚だ不賛成です。あなたは靑年をつかまへて無理にでも、も一度幼年(こども)になれといふんです（譯者曰くこれジュリアンの希臘異教復活を指す。）。いかにも肉の帝國は靈の帝國に吸取されて了つたのですが（異教に對する基督教の勝利をいふ――譯者）さりとて靈の帝國が終極のものでは無いのです。それはちやうど靑年が靑年で終るものでないのと同じです。あなたは靑年の發育を妨げて、一人前の大人(おとな)になるのを邪魔しようといふのです（靈肉合一の第三帝國の出現を妨ぐるの意――譯者）。あなたは未來といふものを毀(こは)してかかるんです。即ち靈肉兩面の性質を具へた第三帝國に對して刄を向ける事になるのです。

露西亞の文豪メレジコウスキイも、嘗て杖を小亞細亞、希臘に曳き、雅典(アセンズ)に入つては Parthenon(パアセノン) 殿堂のあとをたづね、去つて君士都堡(コンスタンチノプル)の古都に St. Sophia(セントソフィア) の寺院を訪うた。到るところ古代文化の美を讃嘆するの餘り、彼はその印象を材として遂に三部曲(トリロジイ)『基督と反基督』"Christ and Antichrist" の制作を思立つた。心を潜めて歐洲人文發展のあとを研究したる結果、かれはその根柢に横たはれる異教對基督教の二大思潮の鬪爭に眼を着けた。また基督教の『神の性質を有つた人』God-Man の理想と、希臘の『人の性質を有つた神』Man-God の理想との二元的對照を認めたのである。そして第三部作の第一卷に取つた題目が、即ち背教者ジュリアン皇帝の異教復活の事蹟で、歴史小説『群神死滅』"The Death of Gods" と題する名作が即ちそれだ。結構の雄大と描寫の精巧は言はずもが

な、この異教最後の戰士の悲壯なる生涯を遺憾なく紙上に活躍し得たものである。これは既に日本譯も出來てゐることだから私がここに架說するまでもなからう。

ひとしく羅馬帝政末期の暗潮が生み出した悲劇的人物で Hypatia(ハイペイシア) といふ名高い女があつた。史實はギボンの羅馬衰亡史論にも詳しく出てゐるが、之を題目にして一篇の歷史小說を編み、希臘思想對基督教の衝突時代を描いたのが、英國十九世紀の大作家 Charles(チャアルズ) Kingsley(キングズレイ) である。舞臺は紀元五世紀ごろの歷山府(アレクサンドリア)、人物は當時橫暴殘忍を極めた基督教僧侶と、才色兼備のそして德望一世に高き女性ハイペイシア。

紀元後三世紀のころから起つた新プラトオン學派 Neo-Platonism は、希臘思想を綜合してその最後の哲學組織を試み、古代の多神教を復活しようとする思想界の活動であつた。ハイペイシアは卽ち此派の哲學者で、辯舌に巧みなのみか數學のやうな學問にさへ精しかつた。美しい一女性の身を以て、彼女は實に當時の異教思想の代表者であり、希臘宗教の最後の宣傳者であつた。教を乞ふもの門前市をなすといふ風で、これがまた尠からずその頃埃及布教中の基督僧侶の癪に障つたのである。

當時の歷山府(アレクサンドリア)は實に東西文化の中心であつた。從つて希臘人、埃及人、羅馬人はいふに及ばず、北方の Goths(ゴス) 人も大勢這入つて來た。人種の異なると共に宗教もさま〴〵で、勢ひその間には葛藤もあり軋轢も甚だしかつた。いつの世にもある野心を逞うする政治家、僧 Cyril(シリル) を筆頭に澤山の暴慢

な基督教徒、それにこの才女ハイペイシアを旗頭にしてゐる哲學者の一群など、互に甚だしく勢力を爭つたものである。作者キングズレイが描いた悲慘なハイペイシアの殺害こそ、即ち希臘思想が希伯來思想に壓倒される最後をあらはしたのだ。ハイペイシアが殺される少し前のこと、彼女はひどく苦悶してゐたが、そこへ猶太人の巫女でMiriam（ミリアム）といふ魔法使の婆がやつて來た。そしていろ〱慰めるやうな嘲るやうな事をいふのに對して、ハイペイシアは、自分の哲學でも遂に安心が得られないから、何とかして與れないかと言ふ。新プラトオン派の哲學も、かういふ風ではもう全く力を失つてゐるのであつた。すると間もなく街（まち）には基督教徒の暴徒（モッブ）が、ハイペイシアをCaesareum（シイザリアム）にある教會へ引ずり出して殺してしまふ。その殺しかたがまた如何にも殘忍酷薄を極めたもので、即ちこの美女を眞裸にしてしまつて四肢五體を切り離し、牡蠣の貝殼で骨に附いた肉を搔き取つたのである。かうして古代希臘の思想は、その美しい女の殉教者であつたハイペイシアの悲劇を最後の幕として、全く勢力を失墜した。

（因みにキングズレイの此名作は、當時ゴス人など北歐蠻族が南歐文化の民を征服した歴史を語るものだ、とも解釋される。即ち前者の剛健素朴の風が爛熟した花やかな羅馬の文明を壓倒した當時の有樣を描いたものだ、と見ても甚だ興味が深い。北歐對南歐の問題は、基督教對異教の問題と聯關していつも吾々の注意を惹くからである）。

序に當時思想界の中心であつた哲學に就いて一言しよう。元來 Aristoteles（アリストテレス） 以後になると、希臘の哲學思想は Epicurus（エピキユラス） の快樂主義にせよ、また懷疑學派にせよ、みな既に靈肉の衝突不調和の傾向をあらはしてゐた。古代の人は心身の健全なる發達によつて、地上生活のうちに安心立命の地が得られるものと確信してゐた。それが次第に深く自己を內觀し反省するに及んで、自分の生活に矛盾があり、分裂のあることに氣附いた。理想と現實の背反、神性と獸性との不調和を自覺した。即ち肉體 σῶμα はあらゆる惡の源であつて、また靈の墳墓 σῆμα である。だから吾々人間はこの肉の生活を解脫して、清淨無垢の心靈生活に入らねばならぬ、と哲學者たちは說いたのである。それには到底自力のみでは出來ないから、神を禮拜してその力を仰ぐの外はないといふので、哲學が漸く出世間的宗教的色彩を帶びるやうになつたのは、此頃からである。そしてそれが遂に純然たる哲學者の宗教となつて、出來たのが新プラトオン派の教であつた。そしてさきに述べたやうにこれが卽ち希臘思想掉尾の運動でもあり、また基督教の當の敵となつた多神教哲學でもあつた。

希臘思想の根本は現實主義であつた。從つて數ある希臘哲學者の說のうちで、夙に肉の繫縛を脫した高遠の理想境を說いたものといへば、先づプラトオンの形而上哲學である。今や人々が自己の內部生活を反省し、外物の賴みがたく物慾の言ふに足らざるを、しみ〳〵と感じる宗教的欲求の時代に入つたので、勢ひこのプラトオンの理想說が頓に有力となり、時代精神の根柢をなすやうになつたので

ある。即ちプラトオンの形而上論に神祕的宗教的色彩を施して、ちやうど印度古代の佛教のやうに、哲學のやうでもあり宗教のやうでもある中途半端なものを拵へて、當代民心の要求に應じようとしたのが、即ち新プラトオン派で、その代表者は即ち Plotinus（プロテイヌス）（紀元二〇四年生、二七〇年死）であつた。古代から中世への橋渡としても、此ニオ・プレイトニズムの思想ぐらゐ、思潮史の研究者にとつて興味ふかきものはなからう。

プロティヌスの說は發生論即ち Emanationslehre である。天地間には一の根本になる力があつて、森羅萬象すべて皆これから發生すと說くのである。そして此根本たるものは全く現象界を超越し、吾々が見ることを得ず形容することも出來ない至高至大の力であつて、これが即ち神である。この神から發生したものが精神 φυχή で、これが高い方と低い方との二つに分れる。前者は永遠不滅の理想を有し、天地を貫くところの靈である。これに對して後者即ち低い方の精神は、常に肉に結ばれ物質と形骸に縛られてゐる。そして此精神に次いでも一つ下位にある者が即ち物質であつて、これが最も不完全なものまた無常なもの、世界一切の惡は皆これから起るのである。だから色相界を超越し形骸を解脫することによつて、吾吾は遂に神の生活に合することを得るのだ。

かういふ風にプロティヌスの哲學では、官能の世界即ち物質を蔑（さげす）んだが、一方に於ては宇宙の一大靈氣たる精神がこの物質界に現はれて、そこに始めて天地萬象の美が生ずるのだと說いた。肉を賤し

みながらも、なほ一方におてその美と調和と秩序とを嘆賞し、之を以て天地間の一大靈氣が物質界に現はれたのだと見た點は、後に說くべき基督敎思想が現世を惡魔の穢土だと觀たのと全く正反對で、プロティヌスが明らかになほ希臘思潮の特色を失つてゐなかつた事を示してゐる。このプロティヌスが物質卽ち肉の美を說いた事は、今や異敎思想の光の消えようとする折の最後の一閃とも見るべきであつた。

プロティヌス以後になつて、新プラトオン派の哲學は益々濃厚なる宗敎的色彩を帶びるに至つた。卽ち物質界を離れて眞如の世界に入らうといふには、神の力によつて禮拜修行を行ひ一切の物慾を絕たねばならぬと說き、そのためには古代の神々を賴んで來て一大多神敎を作らうとしたのがある(さきに述べた皇帝ジュリアンの如きが卽ちそれであつた)。かうして靈肉の爭は益々人々の心を煩悶させて、それが遂に基督敎のために破られるに至つたのである。

かくて時代の思潮は流れ〳〵て、知識と哲學と藝術との時代を去り宗敎信仰の時代に這入つた。人の心は現實より理想へ、肉より靈へと移つて行つた。同時に歷史の軸は廻轉して古代は中世となつたのである。

獨逸の大詩人は世界人文發展の四期“Die vier Weltalter”を歌つて、異敎文明から基督敎時代に變つて行くこの轉機を下のやうに言つた。

Die Götter sanken vom Himmelsthron,
Es stürzten die herrlichen Säulen,
Und geboren wurde der Jungfrau Sohn,
Die Gebrechen der Erde zu heilen;
Verbannt ward der Sinne flüchtige Lust,
Und der Mensch griff denkend in seine Brust.

Und der eilte, der üppige Reiz entwich,
Der die frohe Jugendwelt zierte;
Der Mönch und die Nonne zergeisselten sich,
Und der eiserne Ritter turnierte.
Doch war das Leben auch finster und wild,
So blieb doch die Liebe lieblich und mild.

—Schiller, *Die vier Weltalter*

異教の神々は（オリンパスの）高御座より下り、壯麗なる宮柱もたふれぬ。地上の缺陷を癒やさんとて、（マリア）永貞童女は神子を生みたまへり。かくて官能の慾は追ひ拂はれ、人は思に沈みて、おのが胸を抱きぬ。

歡樂のわかき世界を飾りたる空なるみだらなる（肉の）興奮は遁れ去れり。世は僧尼の難行苦行と、騎士の仕合とのみ。かくて生活は陰鬱荒涼たれども、愛のみはなほ美しくおだやかなりき。（シルレル、『世界の四期』）

第三　思潮史の回顧（中世）

戰國時代と遁世主義――宗教的禁慾主義――肉を虐ぐること――聖フランシス上人――知識の禁壓――中世の哲學――かくれたる異教思潮の勢力――中世傳說、ファウスト――藝術的要求――ハイネの『流謫の神々』――『カルミナ・ブラナ』――ペイタァの所說

If the Christian life is one of observances, if freedom from sin is to be secured by penance and by fleeing from temptations, then the holiest life will be secured by abandoning the world entirely, and either alone, in solitude, or in company with a few others like-minded, giving one's self wholly up to penances, and mortifications of the flesh, and pious observances. The more external and formal the religious life became, the stronger became the tendency toward the ascetic and monastic ideal.

—Adams, *Civilization during the Middle Ages*, P. 131.

基督教生活が若し戒律を守るの生活ならば、また罪を免るるは苦行をなし誘惑を遁るるに在りとせば、全く現世を捨つることによつて、ここに最も神聖なる生活は得らるべし。或は單獨に、或はまた同氣相求むる他の人々と共に、苦行に身を捧げ、肉を虐げ、戒律を守るべきなり。かくて宗教生活が外面的形式的なるに從つて、禁慾遁世の理想に對する傾向は益々强くなれるなり。（アダム著

西羅馬帝國滅亡（西暦四百七十六年）より後約千年間の歐洲は、基督思想の全盛期、歴史家が所謂中世暗黑の時代である。

大帝國が滅びて統一者のなくなつたあとは、勢ひ群雄割據の戰國時代になる。平和の時代には歡樂の美酒に醉うてすべてを忘じた人たちも、ひとたび戰亂の世となれば、忽ち現世の幸福をはかなみ有爲轉變の世のさまを觀じて、ひたすら墓のあなたの天國をのみ祈願する。おのづから厭世的悲觀的ならざるを得ない。我が國の鎌倉時代に厭世的佛教の盛になつたとおなじわけで、所謂『羅馬の平和』Pax Romana の亡んだあとは、節慾苦行の生活と遁世主義 monasticism とを中心とした基督教が勢力を逞うするに至つたのは、まことに當然の成行きである。

紀元二、三世紀の頃から旣に、自我的本能主義の異教思潮に對する反動として現はれたこの宗教的禁慾主義 Religious asceticism は、詳しく言へば知識の禁壓と快樂の否定との二つであつた。

現世の生活は、當時の僧侶の言葉でいふと試驗の狀態（プロベイション）に在るので、吾々は此世で抑損難行苦行をつづけ、それによつて來世の安樂と幸福とを得るのである。また美は陷穽であり、一切の快樂は惡魔の誘惑である、吾々は唯この誘惑に打勝つことによつてのみ、眞に神の救濟を得るのだと說かれた。現在の生命の力や要求を極端に虐げ、靈的生活のために肉的生活を全然壓服しようとした點に於て、日

本の或時代の佛教思想をおもはせるものがある。一休といふ坊主が杖のさきに髑髏をつけて、現世の享樂のはかなきを敎へて歩いたやうに、中世の基督敎僧侶も亦腐つた死骸と蛆蟲とで滿ちた骨堂（チャアネル）を開けて見せて、人生はこの通りだよと善男善女に說いて聞かせたものだ。

中世の宗敎がいかに甚だしく肉を虐げたかは、當時の高僧聖フランシス上人 St. Francis of Assisi の一代記を讀んだだけでもわかる。上人はもと相當な家柄に生れながら身には襤褸を纏うて乞食のやうな生活を送り、諸國を流浪し到るところに神の道を說き貧者を救うた。遂に親戚故舊はもとより、父からも見放されたのを幸ひ、神を唯一の父として益々敎法のために盡くした。清淨（チャスティティ）、服從（オビィディエンス）、清貧（ポヴァティ）の三つを根本にして、飽くまでも自我と肉的生活とを否定した。夜も眠らず斷食をして、日に三たびわれとわが身を鐵の鎖で鞭打つた。食物に趣味を感じないやうに、わざ〳〵灰をなかに混ぜて食つたとさへ傳へられてゐる。かうしてかれはフランシスカン派の宗祖となつたのである。

すべての美と快樂は皆こと〴〵く、現世にあつて人を誘ふ陷穽であると言つて、或坊さんなぞは美しい瑞西の山のなかを旅するのに、山水の美に目を觸れないやうにと決して左右を見なかつた、といふ有名な話も傳へられてゐる。之れをかの美的享樂を以て中心とした希臘思想に較べると、眞に千里の差ではないか。

次に知識の禁壓に至つては更に甚だしい。折角希臘羅馬の異敎時代に進んでゐた學藝の研究は全く

禁壓せられ、一世を擧げて無知文盲の愚民の世界と化した。個人に自由もなければ自覺もなかつた。唯もう一向專念に神を祈願すればそれで救はれる、無學文盲こそ信仰の母だと言つて、法王の暴威のもとに遂には聖書をすらも讀むことを禁じた。民を愚にする法としては確かに秦の始皇の焚書などよりも、なほ一歩を進めたやりかたであつた。無知蒙昧の徒の迷信につけ込んで、聖骨(レリックス)や呪符(アミュレット)や、そのほか色々の fetish を賣つて巧みに世を欺き、むかし耶蘇の說いた敎とは似ても似つかぬ基督敎を說く坊主ばかりが多かつた。それらは先づ兎の角としても、歐洲中世史上の最大事件であるあの前後八回の十字軍といふ馬鹿馬鹿しい騷ぎを考へて見ただけでも、當時のことは大抵推測せられるではないか。

また思想界の指導者であるべき筈の哲學が、當時は全く基督敎の御用哲學であつた。即ち中世のスコラ哲學は、その名の示す如く基督敎僧侶を養成する學林即ち schola から出た說である。だから哲學者とはいふものの、純なる眞理の探求者ではなくして、つまり敎法の學者 Doctores ecclesiae に過ぎなかつた。基督敎の說くところに都合のよささうな理窟をつけて、うまく信仰と道理との調和を謀つて行けばそれでよかつたのである。之を以て、かの學術的であり知識本位であつた古代の希臘哲學に比するならば、眞に驚くべき變化であつた。獨斷主義(ドグマティズム)と形式主義(フォオマリズム)と、これを除けば中世哲學は零(ゼイロ)であつた。

以上は普通にどの歷史の本にでも說明されてゐる話だが、ここに一つ特に思潮史の研究者にとつて最も興味ある現象があつた。それはかういふ禁慾主義萬能の世界に於てすら、なほ人間自然の本能の欲求に根ざした異教的現世主義が、隱然動かすべからざる潜勢力を有してゐたといふ事實である。禁慾節制を旨とした宗教生活の僧院の奥深くからは、藝術と歡樂を求める聲が、たとひかすかながらも絕えず洩れてゐたのである。この反基督教的氣分が種々さま〲に姿を變じて、落莫たる中世思想の半面に美しい詩を飾つたといふ事は、藝術史の研究者にとつて此上もなき興味ある問題であるが、いま試にその例證となる二三の事實を擧げよう。

先づ第一に擧げらるべきものはかの豐富なる中世傳說である。これが近代浪漫派の文藝に如何に有力な詩材を供給したかは、讀者の既に知らるる通りであらう。たとへば、初は英國の Marlowe（マアロオ） 次いでは西班牙の Calderon（カルデロン） 等によつて戲曲化され、後遂にゲエテの大作となつて全世界に知られた、かの Faust（ファウスト） 傳說の如きこれ全く中世異教思想の變形に外ならないのである。概して當時の惡魔とか魔法とかいふ觀念は、疑もなく反基督的思想の權化ともいふべき性質のものだが、その中に甚だしく詩的な滑稽なまた狂的な分子の多いことを、私などは非常に面白く思ふので、Mephistopheles（メフイストオフエレス） は即ちその最も著しきもの、徹頭徹尾これ破壞思想、懷疑的態度、乃至異教の氣分を人格化（パアソニフアイ）したるものに外ならない。（序ながら、近代に於てバイロン等の文學を魔王派 Satanic School といひ、更に後の

Baudelaire 一派の詩文を惡魔派 Diabolists の名によつて呼び、その反基督的、反道徳的、或は肉的官能的藝術たるの意味をあらはすのも、畢竟同じ異教的傾向を示すの意に外ならぬ。）

　ここを書くとき、ふと私は嘗て、マアロオの古曲『フォオスタス博士』“Doctor Faustus” に下のやうな一節を讀んだことを想ひ起すのである。フォオスタスの心のうちで二つの聲が耳語いてゐる。その一つは神のおん許へと彼を呼ぶ聲であるが、他の一つはそれと反對に『神はお前なぞを愛しやしない、お前自分の意志、それが卽ちお前の神であらう。そしてそれは地獄の與へるものを欲しがつてゐる』といふ。また善の精と惡の精とが現はれて、一は天國を示し、他は現世の歡樂を說いてフォオスタスを誘はうとしたがその結果、かれは遂に幾人かの女に關係するやうになつたといふところがある。これなども矢張り靈肉兩生活の不調和から來る中世の人の煩悶を寫したものだ、と見るの外は無からう。

　またもつと面白い事には、異教的藝術的氣分が當時の基督教そのもののうちに色々現はれてゐた事である。たとへば畵像にある基督のすがたが、古代希臘の美しい牧羊者のそれになつてゐたり、或はむかしの異教徒の祭典をその儘宗教の儀式禮拜に用ゐてゐたなぞは、當時の人が表面だけは飽くまでも靈的宗教的でありながら、實は肉體美を讃し歡樂を求むる熱意を洩らしたものに外ならなかつた。そのほか、南佛地方に出た Troubadours の詩人が地上の歡樂を頌し、燃ゆるやうな戀を歌うた名高

い抒情詩の類、または Aucassin と Nicolette の美しい戀物語、近世に至つて Wagner の樂劇をはじめ、多くの詩人が材料に使つた Tristan と Isolde 或は Tannhäuser の傳説、または羅馬の大詩人 Virgil が當時は魔術師として傳へられてゐた話、美と愛の女神がかくれてゐたヸイナス山 Venusberg の傳説（詩人 Swinburne の名作『ヸイナスの讃美』Laus Veneris 參照）、昔の Troy の Hector や Helen の物語、これらは悉く皆當時の禁慾的宗教の領域を離れて、別にその背後に潜んでゐたゆたかな藝術的氣分の所産であつた。

　また獨逸の詩人 Heine の散文集に、『流謫の神々』“Die Götter im Exil”と題した一篇がある。紀元三世紀のころ基督教の全盛と共に全く力を失つてひそかに山野を落ち延び、果敢ない流竄の身となつた希臘の神々のその後のさまを面白く書いた物、中世傳説に於ける美しい異教的藝術的分子の存在が、ここにも窺はれるのである。中世になつてからは、古代の神々はいろ／＼に姿を扮して遠く埃及に遁れ、そこでは動物に早變りして隱れてゐたのも多かつた。或は商賣人に化けてゐたのもあつた。獨逸の森林に樵夫となつて雇はれ、もう神酒は飲めず麥酒ばかり飲んでゐたといふやうな神樣もあつた。なかでも祖神アポロの話がおもしろい。アポロは牧羊者になつて、墺太利の山間に隱れてゐたのであるが、いつも好い聲で美しい歌を謠ふものだから、遂に或學問のある坊主からその正體を嗅ぎ付けられた。これは何でも異教の神々にちがひないといふので、法廷に引き出され嚴しい拷問にか

けられた。アポロも仕方なしに遂に實を白狀した。いよ〳〵刑に處せられようといふ時、せめて今生の思ひ出にいま一曲を彈じ、美しい歌を謠つて見たいと賴んだ。するとアポロの聲のすぐれて美しいばかりでなく、けだかい眉目淸秀の美男であるのに、今まで唯うつとりと聞き惚れてゐた女人どもが俄に泣き出して、遂には皆が病人になつて了つた。何でもあれは vampire であるに違ひないといふので、日を經てからアポロの墓を發いた。死骸に棒杭を突きさしさへすれば女どもの病は癒るだらうといふので、さて掘つて見ると墓は空であつたといふ話。これなどは特に名高い話で、先日も現代英國文壇の名家 Galsworthy の文集を讀んでゐたら、下のやうな一節があつた。今おもひ出したから序に書き附けておく。

> "A legend runs, that driven from land to land by Christians, Apollo hid himself in Lower Austria, but those who aver they saw him there in the thirteenth century were wrong; it was to these enchanted climes, frequented only by the mountain shepherds, that he certainly came."
>
> —Galsworthy, *The Inn of Tranquillity*, p. 71.

併しこれらのほかにまだ、當時潜んでゐた美的享樂の思想を最もよく表はしたものがある。それは近世文獻學の發達につれてその道の學者が、Bavaria の僧院の經藏に奥深く祕められてゐたのを探り出して得た一卷の雜句詩集、題して Carmina Burana といふ寫本であつた。

おもむろに白髯を撫して道を說くやうな老人ならばいざ知らず、青春の血うちに燃えて見るもの聞くもの、すべてが皆おのれの生活内容を豐富にするやうに感ぜられる二十歳あまりの若盛りに、どうしてあの死灰枯木のやうな修道院の禁慾生活が堪へられよう。十二世紀のころ、歐羅巴大陸の諸方に散らばつてゐた大學を、あちこちと遍歷する青年學生が肉の歡樂を歌ひ奔放の熱情を洩らして、それが遂にこの一卷にをさめられたやうな美しい詩篇をなしたのである。この詩集は別にまた『放浪者の歌』Carmina Vagorum ともいふので、近代英國散文の大家 John Addington Symonds は、その一部を譯して『酒と女と歌』"Wine, Woman, and Song." と題した。集中の歌は主として羅句語であるが、獨逸語も交つてゐる。なかには神や天國を歌つた宗教詩も這入つてゐる。そして最も面白いことは、詩形だけは全く當時の基督教の讃歌と同一の體を用ゐたことで、その怪しい不調和が特に私どもの目を惹くのである。

さて此詩集を讀んで行くと、そこに歌はれた美と戀と春とがいかにも強く肉感的で、燃えるやうな情熱の溢れてゐるのに誰しも驚くのである。實際あのやうな時代にかういふ歌が出るかとおもふだけでも、いかに生の歡樂と藝術衝動とが深く人心に根ざしてゐるかに今更のやうに私どもは呆れるのである。異教時代の美と春と愛の神 Venus の讃美はもとよりのこと。Phyllis, Flora, Caecilia といふやうな名も美しい麗人に捧げて思を抒べた歌、久しく忘れられてゐた希臘の Paris や Helen の

名をさへ、この集のうちには屡見るのである。

先づ女のすがたや肉體の美を歌つた句には、どうかすると近代の抒情詩でも及ばないやうな濃厚な色彩がある。百合や薔薇の美しさを頬の形容に使つて、さて『花かざりしたる額、黒き眉』Frons nimirum coronata, supercilium nigrata といふやうな句がある。

> Frons et gula, labra, mentum
> Dant amoris alimentum;
> Crines ejus adamavi,
> Quoniam fuere flavi.
>
> —*Carm. Bur.*, p. 231.

> 額、喉、唇、頤、
> みな戀の糧を與ふ。
> かの髮をわれは愛せり、
> こがねの色にてありしかば。
>
> （これはシモンヅの英譯にないので、原詩を引用した）

シモンヅは此四行を評して、『リズムと重々しい羅甸語とが、三行目から四行目へ急に移る變化と相俟つて、よく情の高調をあらはしてゐる』と言つたが、それがいかにもと肯かれる。

今は引用を省くが、酒神 Bacchus（バッカス） の讃美の歌などには、春の希臘の詩人 Anacreon（アナクレオン） の快樂歌も及ばないやうな絶唱がある。ここにシモンヅの英譯のうちから、名高い數節を引用して詩風を示さう。先づ現世の讃美として、集中で一番名高い歌 " Gaudeamus igitur " (『されば吾等はよろこぶ』)には、冒頭先づ

Let us live, then, and be glad
　While young life's before us!
　After youthful pastime had,
　After old age hard and sad,
Earth will slumber o'er us.

と歌つて、それから人生の幸福を願ひ、最後の二節に下の數行がある。

Live all girls! A health to you,
Melting maids and beauteous!
　Live the wives and women too,
　Gentle, loving, tender, true,
Good, industrious, duteous!
Perish cares that pule and pine!

Perish envious blamers!
Die the Devil, thine and mine!
Die the starch-necked Philistine!
Scoffers and defamers!

また青春は歡樂の時であるといふ意を歌つて、

Whatsoe'er the rest may do,
Let us then be playing:
Take the pastime that is due
While we're yet a-Maying;
I am young and young are you;
'Tis the time for Playing.

—No. 37 : *Phyllis.*

また女の肉體美を讃した美しい歌の一例として、『リディアに寄す』といふ歌のはじめ數章を掲げよう。この類の秀句は集中の隨所に見られるのである。

TO LYDIA

Lydia bright, thou girl more white
Than the milk of morning new,

Or young lilies in the light!
  Matched with thy rose-whiteness, hue
Of red rose or white rose pales,
And the polished ivory fails,
                Ivory fails.

Spread, O spread my girl, thy hair
  Ambered hued and heavenly bright.
As fine gold or golden air!
  Show, O show thy throat so white,
Throat and neck that marble fine
Over thy white breasts incline,
                Breasts incline.

Life, O life thine eyes that are
  Underneath those eyelids dark,
Lustrous as the evening star
  'Neath the dark heaven's purple arc—
Bare, O bare thy cheeks of rose,
Dyed with Tyrian red that glows,

Red that glows.

Give, O give those lips of love
　That the coral boughs eclipse;
Give sweet kisses, dove by dove,
　Soft descending on my lips.
See my soul how forth she flies!
'Neath each kiss my pierced heart dies,
　Pierced heart dies.

禁慾生活のために抑へられ虐げられてゐたかういふ藝術的本能的欲求の聲は、やがて十五六世紀に及んで遂に文藝復興（ルネツサンス）となつて、人心を中世の長い眠から目ざましたのであつた。Pater（ペイタア）はその『文藝復興期』"The Renaissance" に於て、中世のうちにあらはれてゐたこの異教的現象に就いて、下のやうに言つた（原文省略）。

中世に於ける理想と想像の發現、心の自由を主張すること、これらを名づけて余は『中世の文藝復興』と云つたが、その最も著しい特徴のひとつは反道德主義 antinomianism で、即ち當時の道德宗教の觀念に反抗するの精神であつた。彼等は官能と想像の快樂を求め、美を愛し肉體を崇拜するに當つて、全く基督教的理想の域を超脱した。これはかの、全く死んだのではなくて一時

ギイナス山の洞にかくれてゐた希臘のギイナスの再來で、また色々に姿をかへて世界をあちこちとうろつく古代異教の神々の再來であつた。中世を特に『信仰の時代』だとして論ずる人たちはかういふ要素を全く無視してゐるが、この反抗の要素を認めたことが、やがて佛蘭西浪漫派の作家の中世描寫をして暗示に富んだ興奮的のものたらしめた所以で、たとへば Victor（ギクトル） Hugo（ユゴオ） の『鐘樓守』"Notre Dame de Paris" の一篇の如きがそれだ。この要素はひとしくまた Abelard（アベラアル） の物語、タンホイゼルの傳説にもあらはれた。

—Pater, *The Renaissance* (Macmillan's New Shilling Lib. Edition), p. 26.

第四　思潮史の回顧(近世)

一　近代思想の黎明

近代思潮の源泉——古學復興——異教思潮の復活——人間本位の思想——新文學の勃興——肉と美と造形藝術——各國の繪畫彫刻——ルネッサンスの年代とその歴史的意義——『モンナ・ヴンナ』

"Thus what the word Renaissance really means is new brith to liberty—the siprit of mankind recovering consciousness and the power of self-determination, recognizing the beauty of the outer world, and of the body through art, liberating the reason in science and the conscience in religion, restoring culture to the intelligence and establishing the principle of political freedom."

—J. A. Symonds, *Renaissance in Italy; the Age of the Despots.* p. 22.

文藝復興といふ言葉の眞の意味は、自由の新しき誕生である。人心が自覺と自己決定の力とを恢復し、外界の美を認め、藝術によつて肉體の美を認め、科學に於ては道理を、宗教に於ては良心を解放し、教化を理知の域に復歸せしめ、政治上自由の主義を確立した事である。(シモンヅ『伊太利文藝復興史論』)。

かつて肉に飽いた者が靈を求めたのとは正反對に、今や中世の暗い冷たい宗教生活に疲れ果てた人の心は、おのづからまた肉的現世的方面に向つた、そして古代希臘の美しい文明と花やかな藝術を復興しようとした。たとひ政治史の上に何等急激な破壊や變化は無くとも、思潮の流はおのづからその行くべき道をたどつて暗遷默移するのである。新しい何ものかを求めてやまない人心熱烈痛切な要求、冒險進取の氣風、そこに近代思潮の源は發したのであつた。

思潮の一大轉機に臨んで、歐洲には文明史上最も注目すべき幾多の事實があらはれた。先づ西班牙にあつた亞剌比亞の文明が、希臘羅馬の學問を歐洲全體に傳播させたこと、十二世紀の頃からは伊太利の Bologna（ボロニア）、英國の牛津（オクスフオド）などの有名な諸大學が起つたこと、君斯土堡の陷落と共に、そこに居た東方の學者は遁れて伊太利に走り、希臘古典の研究は Florence（フロレンス）の市長 Medici（メデイチ）家の保護のもとに益益盛となつたこと、また各地方の寺院の奥から古文學の斷簡零墨を漁（あさ）つて、考證訓詁につとめる多くの學者の出たこと、幾百年間全く顧みられなかつたホオマアや Sophocles（ソフオクリイズ）の詩歌、アリストテレエス、プラトオンの哲學を、當時の學者が心血を灑いで研究しはじめたこと、すべてこれらの事實は當時の陸地發見、航海冒險熱の流行、印刷術の發明などと共に、敎課用の西洋史にすら必ず詳説されてゐる事ゆゑ、私は今煩を避けて説明を略する。

この新風潮新傾向が遂に花々しく十五世紀の歐羅巴に成熟したのを名づけて文藝復興（ルネツサンス）といひ、すべ

ての歷史家は近代史の第一頁をそこから數へる。狭義に解すればルネッサンスといふ言葉は、『新生』或は『再生』を意味するのであるから、單に異教時代卽ち希臘羅馬の學藝復活に過ぎないが、實を言へば中世基督教の因襲や權威を破つて、今や人心が個人的に覺醒したことを意味するのである。自然を重んじ自由を貴ぶ異教思潮の再起である。天國の幸福を祈願するよりも、人は先づ現在人生の享樂を求めようとする。永らく法王の暴威のもとに禁壓せられた知識の要求は、今やその桎梏を脱して學藝の自由討究に多年の渇を醫したのである。この時代に名高いかの Kepler や Galileo や Copernicus などの星學物理學上の大發見は、卽ち批評的實驗科學の精神が獨斷的宗教信仰に代つたので、これが卽ち近代思想の源であると共に、また一面に於て、古代希臘の學藝の復活に他ならないのである。（おもへば現代の科學と宗教との衝突、知識と信仰との不調和が、この文藝復興期の希臘主義對基督教思想の衝突に、源を發してゐることに注意せねばならぬ。）顧みれば古代の異教文明滅びてより殆ど一千年、その間、半未開の暗黑狀態に葬られてゐた歐羅巴に、今やこの美しい新時代の曙光は現はれたのである。かくして今までは全く獨斷的宗教の奴隸であつた藝術や學問が、近代的精神の心髓である自由と獨立とを得たので、南歐伊太利こそ卽ちこの異教思潮復活の新氣運の發源地であつた。

中世の間は一意專念に神や天國をのみ祈つて、人は全く自我といふものを忘れてゐた。それが今や人心の覺醒に促され、古代希臘の『なんぢ自らを知れ』といふ態度に歸つたのである。神本位の思想

は滅んで人間本位の思想が之に代つた。ちやうど當時の閣龍（コランバス）等の陸地發見と同じやうに、つまり今まで忘れられてゐた『人』といふ者を新に發見したのであるから、文藝復興期の思想は、一にまた人間主義卽ち humanism の名を以て呼ばれるのである。これを學藝の上から言へば、今までの宗教家が『神の知識』divinarum rerum cognitio をのみ重んじたに對し、新しい學者は『人間の記錄』literæ humaniores を研究するものであつた。シモンヅはその大著『伊太利文藝復興史』に、『文藝復興の大業は、世界の發見と人間の發見となりき』"The great achievements of the Renaissance were the discovery of the world and the discovery of man" と言ひ、また

『文藝復興史は藝術や科學や文學の歷史ではない、また國民の歷史でもない。それは歐洲民族のうちにあらはれた人間精神の自覺的自由に到達した歷史である』'The history of the Renaissance is not the history of arts, or of sciences, or of literature, or even of nations. It is the history of the attainment of self-conscious freedom by the human spirit manifested in the European races.'

—*The Age of the Despots.* P. 3.

基督教文明に對する異教文明の勝利、また靈に對する肉の復活、宗教に對する藝術の復興であつた
この新思潮は、先づ南方伊太利の沃野に派手やかな文藝の花を咲かせた。遠く先づ Dante（ダンテ）が『神曲』"Divine Comedy" はいふまでもなく、Petrarca（ペトラルカ）が情熱をこめた小曲（ソネット）や、Boccaccio（ボッカチオ）の美しい散

文の物語によつて、當時の伊太利文學は千古に誇るべき不朽の大作を得た。この三人は共に美しい戀愛をもとにしてそこに新しい人生の意味を求めようとした。また佛蘭西の方を見れば、Rabelais（ラブレイ）の諷刺諧謔も、Montaigne（モンテイヌ）の論集（エッセイズ）もこの時代の産物である。Ronsard（コンサアル）一派の抒情詩人が佛蘭西の新しい國語や文學のもとをなしたのも、同じくこの時である。西班牙文學では、このあひだ日本の文藝委員會が翻譯を企てた Cervantes（セルヴァンテス）の名作 "Don Quixote"（ドオンキホオテ）を出し、Calderon（カルデロン）の名高い戯曲もこの折に出來た。英吉利文學では豪放卓落の天才マアロオの劇詩となり、Spencer（スペンサア）の『仙女王』"Faerie Queene" となり、また遂に大沙翁の戯曲となつたのである。

更にこれを詩文以外、他の繪畫彫刻等に就いて考へて見ても、文藝復興（ルネッサンス）は實に歐洲近代藝術の黎明期であつた。十二世紀ごろから後になると、佛蘭西にも獨逸にも伊太利にも常に畫家や彫刻家が居つたが、その作品には古代希臘の藝術に見られるやうな美といふものが無かつた。むしろ幼稚な不完全な、怪異不可思議ともいふべき作ばかりであつた。顔面には隨分活氣もあり人を動かすやうな表情もあつたが、からだの方は全く均齊（シムメトリ）の美を缺いた、手足ばかり無闇に細長い、釣合の惡い實に變挺なものであつた。それにまた遠近法なども全く無茶苦茶であつた。（後になつて出た近代浪漫派の藝術は、却つて昔のかういふ奇拔な怪異な藝術を喜んだのであるが、それは別問題だ。）この風を一新して、眞に整つた美しい作品を出し、裸體にした本當の肉の美を研究するやうになつたのが、即ち文藝復興

以後の藝術である。

またさきにも述べた如く、中世は一切の學問藝術をして宗教信仰に服從せしめた時代である。だから繪畫なぞも全く神聖な、謂はば抹香くさい教訓的宗教的性質のものばかりで、美とか快樂とかいふ分子は毫も見られなかつた。それを一變したものが即ち當時の伊太利の畫聖 Raphael で、かれがまだ二十五歳の春に Vatican の宮殿に畫いた壁畫こそ、實にこの繪畫史上に一新時期を劃したものであつた。即ち在來の宗教趣味が一變して、ここに眞の藝術美を本位とした新畫風があらはれようとする其轉機を代表する者であつた。そして之を眞に自然に歸らしめたものは、かれと同時代の巨匠 Leonardo da Vinci が曠世の奇才であつた。かのペイタアの『文藝復興』には下のやうに言つてある（原文省略）。

『十五世紀の運動は二重になつてゐた、即ちなかばは復古、なかばは所謂『近代精神』の勃興で、それには現實主義と經驗に訴へることが伴つてゐる、古代に歸ることと自然に歸ることとの二つが含まれてゐる、ラファエルは前者を、レオナルドは後者を代表する。』

—*The Renaissance* (Macmillan's New Shilling Lib. edition,)p. 113.

當時伊太利のほか、西班牙には Velasquez, Ribera, Murillo などが出た。殊にヹラスケズの畫などは十九世紀の印象派にさへ影響を及ぼして、近頃では最も持囃される古名家の一人である。また弗

羅曼士（フラマンド）の方では Rubens（ルウベンス） 一派の名作がある。たとひ宗教や古代神話に題目を取つた畫であつても、顏面といひ身體といひ全く以前の宗教畫の風ではなく、肉附きのいい血色の美しい白皙紅顏の弗羅曼（フラマン）人特有の相貌をゑがくのが、此派の特色であつた。また此弗羅曼派に對して、和蘭派の方には Rembrandt（レンブラント） があつた、かれが近代の風景畫と風俗畫（ジャンル）との始祖であることは、今更いふまでもなからう。

彫刻では十五世紀のなかごろに Donatello（ドナテルロ） が出たが、次いでまた Michelangelo（ミケランゼロ） に至つて筋肉骨格の美を研究し、その大作に遺憾なく新時代の精神を發揮し、靈肉合一の思想が生んだ大藝術を完成したのである。

一口に文藝復興といつても、必ずしも歐洲各國に同時に起つた現象ではない。從つて嚴密にその年代を定めることは出來ないが、先づ十四世紀の中葉から十六世紀にわたつた色々の新運動の總稱と見てよからう。伊太利は最も早く、和蘭は最も遲れて、十七世紀にこの新精神の勃興を見た。そして北歐スカンディナヸアと獨逸北部とは遂にこの運動に與らずして、近頃まで蒙昧暗黑の別天地にあつたことは特に注意すべき現象である。

享樂耽美の風潮、靈と肉とを調和せんとする努力、人心の個人主義的覺醒、肉的本能生活の肯定、獨斷（ドグマ）と權威（オオソリテイ）とを排する批評的精神、――すべてこれらを一言にしていへば希臘主義（ヘレニズム）の復活が、この近代思想の黎明期を最もあざやかに色づけたものであつた。

（昨年の秋、京都の文藝講座で私が思潮論のこのあたりを說いてゐた時、ちやうどその二三日前に大阪の劇場近松座で、藝術座が演じたマアテルリンクの『モンナ・ヷンナ』Monna Vanna を見たので、それに就いて下のやうな事を語つた。おもへば十年の昔、まだ私が大學の學生であつたころ、英國の檢閱官がこの劇の上場を禁じたのに對して、當時あの國の第一流の詩人や作家が殆ど總出で、連署をしてその不當を詰つた抗議の文を、英國の或文學雜誌で見た。そしてその頃出來てゐた英譯を早速先輩から借りて讀んだ。いかにも因襲道德を無視した點に於て、英國の官憲には確かに shocking に思はれさうな作だと知つた。しかしそれよりも私の先づ感じたのは、此劇がマアテルリンク初期の作のやうな純然たる神祕劇ではなくて、氣分や情調よりも寧ろ一種の思想を暗示するものだといふ點である。先づ第一この作者の初期の劇には、人物にせよ事件にせよ、ただ漠然たる神祕の空氣に包まれて、何時どこの話だとも限定しないのが普通であつたが、此『モンナ・ヷンナ』は、明らかに十五世紀文藝復興期の伊太利で、フィレンツェ、ピイザの市府の戰であることが示してある。元來この劇は、マアテルリンクにしてはあまり人物事件が明瞭であり派手であるので、これは俗受を主にした所謂當て氣味のものか、乃至は作者の夫人である女優ルブランに演らせて引立つやうに、あんな物をわざと書いたのだといふ評もあるが、私は必ずしもさうばかりとは思はない。元來マアテルリンクには英文學の感化が著しいが、この一曲も、英國近代の大詩人ブラウニングが同じ時代のフィレンツェ、ピイザの話を材とした悲劇 "Luria" を學んだのだと言はれるほどで、マアテルリンクがこの一曲の狙ひどころは、全くルネッサンス時代の新精神新氣運を暗示しようとしたのだと私は思ふ。中世以來の因襲道德の羈絆を脫して、更に新しい美しい生活に赴かう、自由な天地を創造しようといふ當時の時代精神を、愛といふものによつて描かうとしたのが、この作の中心思想ではなからうか。最後の幕に、ヷンナが遂に夫グイドオを去つて、敵將で

あつたプリンチヴルレの方へ赴かうとするところ、彼女の言葉に『これから美しい夢がはじまるでせう』といふのは何を示すのであらう。美しい夢こそ、まさにこれから始まらうとする近代生活、自由清新の境地を暗示するものではなからうか。今までの暗い宗教や道德を離れて了つて、眞に解放された花やかな新人生がここから始まるといふ意味ではなからうか。私は近松座の觀劇によつて、よほど以前に讀んだ此名作の記憶が新にされたのを幸ひ、ルネッサンスの條に近代思想の黎明を說くに當つて、敢へて此一節の無駄話を加へた)。

二　近世史の波瀾

思想史上の波瀾――二大思潮の混淆時代――十七八世紀の思想界、(第一)宗教改革――(第二)主知的傾向――狂熱の反動――知識萬能主義――ベイコン、デカルトの哲學――啓蒙運動――循俗主義――(第三)古典主義の文學――古典の研究とその崇拜――藝術上の法則――文字の彫琢――佛蘭西路易十四世王朝の文學――英國の古典派文學――形式模倣と似而非古典主義

カントの哲學――ルソオの思想――浪漫主義――自然派時代――近世史上基督教思潮と異教思潮との混合とその消長――二十世紀現代の思潮――基督教思想の受けたる二つの打撃――(參考)二大勢力の衝突――懷疑思想對神祕思想

The Renaiscence is, in part, a return towards the pagan spirit,.......a return towards the life of the senses and the understanding. The Reformation, on the other hand, is the very opposite to this; in Luther there is nothing Greek or pagan; vehemently as he attacked the adoration of St. Francis, Luther had himself something of St. Francis in him; he was a thousand times more akin to St. Francis than to Theocritus or to Voltaire. The Reformation was a reaction of the moral and spiritual sense against the carnal and pagan sense.

—Matthew Arnold, *Essays in Criticism*, VI.

文藝復興は一部分は異教の精神に歸ること、また官能と智慧との生活に歸ることなり。然るに宗教改革は之と正反對にして、ルウテルには何等異教希臘の分子なし、かれは激烈に聖フランシス尊信を攻撃したれども、ルウテルかれ自ら聖フランシスの分子を有したりしなり。かれはシオクリタスやヴルテエルに似たるよりも、遙かによく聖フランシスに似たりき。宗教改革こそは實に肉的異教思想に對する精神的靈的思想の反動なりき。（アアノルド『批評論集』のうち『異教及び中世の宗教心』）

すべての生命の流は波動であり曲折である。一高一低、一張一弛、或は右し或は左してその進轉の徑路にさき〴〵な波狀をゑがいて進んで行く。かの人文發達のあと或は思潮變遷の歷史に、古きを繰返すと見ゆるは實は新しき創造であつて、波瀾曲折は即ちこの變化流轉に際して生ずる現象である。古代の花やかな希臘文明が羅馬に傳はつて、遂にその帝政の末年に廢（すた）れ、之に代つた基督教思想は宗教信仰の偉大なる力によつて、約一千年間中世の暗黑時代を通じてよく人心を統一し支配し得た。そ

の流が遂にまた一大轉機（グランドクライマクテリック）に到達してここに文藝復興（ルネッサンス）となつた。さすがは近世史の出發點であるだけに、この大波のうねりは驚くべきものであつた。それは最早單なる古代思想の復活ではなくして、それよりも遙かに複雑なる混亂し紛糾した新現象を生ずるに至つた。

これまで私は希臘思想と基督教思想との爭或は對立によつて、ともかく思潮の大勢だけは說く事を得たが、すでに文藝復興（ルネツサンス）によつて近代思想の幕が開かれた今となつては、最早さう簡單な說明を許さない多くの事情が新しく生じた。即ち十七八世紀から十九世紀にかけては、これを希臘思想と希伯來（ヒイブルウ）思想との混淆時代と見、二潮交流の複雑時代と名づけるのが至當であらうと思はれる。（そして十九世紀の末ごろから、二十世紀のはじめにかけての所謂『現代』と呼ばれる時代こそ、頓にまた希臘思潮が絕對優越の地位を占むるに至つた時期だ、と見るのが私の論の歸結である）。ここには先づ十七八世紀を一緒にして、その思潮の大勢を假に三つに分けて說くとしよう。

第一は、Luther（ルウテル）によつて起されたる宗教改革の思想史上の意義。

文藝復興によつて眞先に打擊をうけたものは、言ふまでもなく羅馬教會であつた。即ち一方に於て古典研究の結果は、今まで神聖であり絕對であると認められた羅馬教會の眞相を暴露し、他方に於ては、新しい人心の覺醒が生み出した自由主義個人主義の思想が、教權に反抗して之を破壞しようとした。かの聖書に次いで基督教國の人々に廣く讀まれた、十五世紀の Thomas à Kempis（トマス ア ケムピス）の名著『基

督の模倣』"Imitatio Christi" の如きは、即ち最もよく當時新人の胸に兆してゐた宗教心を示したもので、教會僧侶の干渉を離れて直接に基督の教を仰ぎ、聖書の説くところによつて眞に高く美しい信仰の彼岸に達しよう、といふのがその中心思想であつた。この點に於ては宗教改革は、文藝復興の一面たる自由の精神、また教權破壞主義の當然の結果であつた。

しかしまた他の點から言ふと、宗教改革は文藝復興(ルネツサンス)の風潮に對する反動の現象だとも見られる。即ち當時希臘思想復活の結果、あまりに本能的肉的現世主義が盛になり、敗徳亂倫の風が一世に瀰漫したのに對し、道心堅固な宗教信仰を以て之を抑制しようとしたのも、確かにまた宗教改革の一面に外ならなかつた。たとへばかの英國に於ける清教徒(ピユウリタン)の運動の如きは、その最も著しき一例であつた。文藝復興(ルネツサンス)の現世主義の餘波をうけて、肉の歡樂に沈湎して動もすれば驕慢放肆ならんとする一代の傾向に反抗し、殊に王侯の暴虐に向つて最も烈しい痛撃を加へたのが、即ち清教徒であつた。さきに沙翁の處女(イリザ)王朝以來發達して來た英國の劇場は、遂にこれら教徒のために敗徳の源泉を以て目せられ、一時は全く閉鎖せらるゝの運命にすらたちいたつた。さきに一たび解放された肉的藝術的生活が、更にその反動としてかくまでも酷(ひど)い壓迫をうけるに至つたことは、文藝史上最も注目すべき現象であつた。

第二には、文藝復興期の新精神たる希臘思潮の顯著な一方面であつた主知的傾向が、特にそれのみ

擴大されて十七八世紀思想界の中心勢力となつた事である。

道學先生を尻目にかけ、正義人道のごときを言ふに足らずと喝破し去つて、ひたすら國家と君權の萬能を說き、權謀術數を教へた Machiavelli（マキャヹリ）の『帝王論』(英譯 "The Prince" 一五三二年)は確かに一代の快著であつた。はるかに後に出たニイチェの絕叫と相呼應して、希臘思潮の一面たる現世主義の美的生活論を最も極端に最も痛快に叫んだもの、これがまたやがて文藝復興期の歐洲人心の傾向であつた。殘忍横暴を極めて貪婪飽くを知らなかつた者は、獨り王侯のみではない。肉慾に耽溺して一切を忘れ、あらゆる惡德を犯しても自我の滿足を得ようとする風潮は一世を蔽うた。そしてかういふ現世主義に反抗して、そこに別に敬虔な崇高な宗教信念を皷吹しようとしたのが、即ち宗教改革の一面であつたことは既に上に述べた。しかし人心動搖の時代の常として、ものは忽ち極端から極端へと走つて行く、即ちこの宗教改革はまた一種の狂熱（ファナティシズム）の傾向を生み出して、遂には中世の禁慾主義をまたも一度繰返すことかと怪しまれるに至つた。かの十七世紀前半の歐洲を全く戰塵の巷に化した一種の宗教戰爭たる三十年戰爭の如き、要するにこの狂熱的傾向が生み出したる慘劇に他ならなかつた。靈を忘れて肉に行かうとする者と、肉を忘れて靈に行かうとする者と、ひとしく共に聰明なる理知の支配を失つて、極端は極端と相戰つたのである。

猛烈なる自我主義者と極度の宗教道德論者と、兩方ともに久しからずしてその熱は冷めた。熱が冷

めたとき靜かに自己を振り返つて見て、そこで氣附くのは冷靜にして聰明なる理性と智力の難有味（ありがたみ）である。十七八世紀思想界の主知的唯理的（インテレクチュアリズム、ラショナリズム）の傾向は、卽ちかくの如き人心の要求あつたればこそ生れたのである。

この傾向は一轉して直ちに、さきの文藝復興期の客觀的、自然科學的、實驗的精神と相結び、またかの一切の權威を排せんとする知識萬能主義（Bacon（ベイコン）の所謂『知識は力なり』Ipsa scientia potestas est,—Bacon, *Meditationes Sacrae*）と相合した。かの近世哲學の二大源流とも云ふべきもの、一は英吉利のベイコンに發したる經驗論で、これは一切の偶像 idola を破壞して、飽くまでも事實に徵し實驗に徵して進まうといふ歸納的研究の態度、他の一つは佛蘭西の Descartes（デカルト）に發したる唯理哲學で、これはかの名高い『我は考ふ、故に我は存す』Cogito ergo sum といふ言葉にある通り、先づ一切を疑ふといふ懷疑的態度を以て、すべての正確なる知識の基なりとした說である。近代の自然科學の精神は、全くこの英佛の組織的哲學を源として發してゐる。更にまた之を推し進めて考へると、十八世紀英佛獨の思想界を代表する所謂啓蒙思潮といふものも、全くこの主知的傾向から生れたことは、理の極めて睹易きところであらう。

啓蒙運動卽ち Enlightenment は、一にまた智力の解放 émancipation intellectuelle を以て呼ばれる。傳來の偏見迷妄を打破して人智を啓發しよう、といふのが本來の主旨であつた。文藝復興より

このかた發達して來た自然科學と、又それに關聯して起つた哲學宗敎道德に關する硏究、殊にベイコンの經驗論などを平易通俗に說いて、之によつて一般文化の、進步に貢獻しようとつとめたのだ。その特色が唯理的でありまた理知萬能であつたことは今更いふまでもない。

さてかういふ唯理的主知的傾向は、一般の思想上に於て狂熱を忌み感情の奔放を避けようとする結果、何事にも道理が命ずる中庸の道を行かうとする。從つてまた如何なる場合に於ても冷靜な常識や分別を離れまいとする、循俗主義（コンヱンショナリズム）を生ずるに至つた。熱烈とか矯激とかいふ言葉で形容されるやうな一切の思想行爲を非認して、ひたすら法則を遵奉し慣習と先例に違はざらんとする傾向を生じた。これは人々の意志や感情を尊重する個人主義の思想と、全く正反對の行き方であることを注意せねばならぬ。

第三の問題は、上來述べたやうな思想界の主知的傾向が、十七八世紀の文藝上に果して如何なる傾向を生じたかである。この問に對しては、極めて概括的ではあるが先づ古典主義（クラシシズム）の文藝だと答へて不都合はない。

古典主義の文學は、平たく言へば理に落ちた文學である。感情の熱烈もなければ、想像の奔放をも許さない冷やかな理知の文學である。徒らに機智（ウヰット）の鋭きを誇つて文字の彫琢に耽り、單に美辭麗句を聯ねるのほか餘念なきものである。或者は詩の形を借りて實は枯淡の理を談じ、或者はまた之て以て

諷刺嘲謔の利器となすに過ぎない。一言にして言へば、眞の詩情に乏しい理窟つぽい散文的(プロゼイク)な文學を言ふのである。

さきの文藝復興期の古典學者(ヒユウマニスト)は、心血を灑いで希臘羅馬の詩文を研究した。そしてその結果は古文學を尊崇敬慕するの餘り、その典型に據つたものでなければ眞の文學ではないと考へるに至つた。内容と形式の調和、その統一、完美、莊嚴、均齊はすべての藝術が模範として仰ぐべき唯一最上のもので、そこには藝術上の法則 artistic canons も見出さるれば、また絶對美 beauté absolue の標準もある。この法則、この標準を守つて毫も亂るる事なきものこそ、眞に優秀なる藝術品であると彼等は考へた。この點に於て古典主義(クラシシズム)は、藝術上にあらはれたる敎權主義であり、また循俗主義(コンヹンシヨナリズム)である。一歩を轉ずれば、毫も潑溂たる生氣を有せざる月並の文學に墮するほか無きものである。

古典主義が奉ずる藝術上の法則の一例を言へば、劇に於ける三一致 Three Unities の說の如きその最も著しきものである。卽ち昔のアリストテレエスの說いた所では一篇の悲劇は必ず同一の事件と場所と時日とで成立たねばならぬ。卽ち希臘の古劇では、その舞臺となる場所は終始皆同じ處であり、劇中のすべての事件は同一日間の出來事であり、その劇中の色々の事件も主な一つの筋に關係の無いものを入れてはならぬ、といふことになつてゐる。かういふ八釜しい規則(カノン)を守つたことが、卽ち古典劇(クラシカルドラマ)の特色である。かの浪漫的な沙翁劇などは全然この三つの一致を無視したもので『あらし』

"Tempest" のやうな除外例はあるが)、從つて十七八世紀の古典派からは、粗笨破格の戲曲として三文の價値もないやうに言はれたのである。(序にいふが、近代のイブセン劇でこの三一致を嚴守した例があるが、それは勿論法則遵奉の精神から來たのではないので、あれは全くイブセンが作劇上の眞の實際的必要が然らしめたのである。)

また當時の古典派文學が如何に文字の末に腐心したかの一例としては、十八世紀文學の一特色である婉曲語法 Periphrasis のことを擧げよう。即ち當時の文人は貴族的であり技巧的であつて、何でも自然の情を露骨にありの儘に言ひ表はすことを下品だと思つた。直截に言ふことを避けて、わざわざ古代の文學を模倣した廻りくどい修飾語法を用ゐようとした。夕日といへば濟むのを reddening Phoebus といつて見たり、魚を scaly tribe だの、鳥を plumy form だのといつたのは、ちやうど以前の日本の和歌や漢詩などにあつた月並な言ひ廻はしと、全く同じやりかたであつた。

さてかういふ傾向の文學は、當時歐洲文學の中心勢力であつた佛蘭西によつて代表せられる。かの光芒燦爛たる路易十四世王朝の佛蘭西文學に、評壇の權威として仰がれ、殆ど藝術の法則を示す立法者のやうに貴ばれた Boileau こそ、實に古典主義の文學の指導者であつた。殊にかれが羅馬の古詩人 Horatius を模倣して作つた『詩論』"L'Art Poétique"(一六七四年)は、詩の技巧と形式とを說いた一代の名著で、整齊の美と明晰の美の重んずべきを敎へたその詩說は、實に當代の騷人をして

向ふところを知らしめたものである。なほこの路易王朝盛期の劇詩人として Racine（ラシイヌ）, Corneille（コルネイユ）, Molière（モリエエル）等の大名は、今さら私がここに擧げるまでも無からう。

また之を英吉利であると、古典派の詩歌を代表するものは十七世紀に於て Dryden（ドライデン）であり、十八世紀に於て Pope（ポオプ）である。二者ともにその詩材とするところは、當時事實の諷刺か或は教訓か、然らざれば律語を用ゐる談理の類であつて、毫も感情と想像の分子を交へざる乾燥無味のものであつた。ただ詩の形式美、文字の彫琢といふ點に於ては、殆ど英吉利文學の古今を通じてこの時代の詩歌に優るものなしと云つて差支ない。殊に英吉利の古典派（クラシック）詩人が專ら用ゐた五脚對聯の英雄體 heroic couplet といふ詩律は、このドライデンとポオプとの作によつて眞に美の極致を盡くしたのである。

ここに一つ注意すべき點は、この十七八世紀に於ける尙古の風潮は、眞に希臘古典の精神を傳へたものでは無くして、寧ろそれから流れ出たる羅馬文學卽ち羅甸の詩文を、それも眞に學んだのではなくて單に形骸を模倣したのである。だから此の風潮を眞の古典主義と云はずして、却つて似而非古典主義 pseudo-Classicism の名を以て呼ぶのである。元來希臘思潮の著しき特色は、物質と精神と、肉と靈と、或はまた理性と感情と、外形と內容と、これらのものの間に毫も不調和を見ることなく、總てが渾然たる一致をなしてゐるといふ點にある。それが羅馬の文學となると、既に希臘を學んでから出來たものだけに、そこにもういくらかの不調和が現はれてゐる。それを、また後の古典派は直接

に希臘へ行かず、主として羅馬を模倣したのであるから、遂に古典の眞精神を沒却するやうなことになつたのである。おもふに希臘、殊に雅典（アゼンス）盛期の藝術の貴ぶべきは、うちに燃ゆるやうな情熱を包んで而も亂れず騷がざる莊重沈靜の美にあつた。理想にあこがれ感情に醉うて、なほ之を抑ふる冷やかな理知の力を失はず、從つて內容と外形の美とが完全な一致を得てゐた點にある。そしてこの一致調和がまた極めて自然に無意識に、少しも斧鑿の痕をとどめずして成し遂げられた點に特色がある。十七八世紀の文藝は、畢竟その半面を學んで未だ到らざるものに過ぎなかつた。徒らに形式を學んで眞意を逸し、その結果は熱もなく情もない理に落ちた詩文を生じたのである。

以上の大勢に反抗して起つたものが、浪漫主義（ロマンテイシズム）である。

＊

十八世紀末から十九世紀の初にかけて、古典主義が浪漫主義となり、それが更に自然主義となつて千八百七十年前後の科學萬能の時期を劃し、次いで前世紀末からは、更に反自然主義の風潮が之に代つたのである。この最近百餘年間に於ける文藝思潮の變遷に就いては、さきに私が『近代文學十講』の方で稍詳しく論じた事であるから、ここでは一切の說明を省略して單に綱目と要點だけを擧げることにした。

さてかの啓蒙運動も漸くその本來の面目を失つて、遂には一種の權威（オオソリテイ）を以て社會に臨むが如き傾

向を生ずるに至つたので、この方面に於てそれに反抗して起つたのが、即ち批評的精神を以て根柢とした Kant(カント)の哲學であつた。しかし之に次いで文藝の方から見て最も大切であつのは、啓蒙運動の主知的人工的傾向に反對して、自然の儘なる感情生活を重しとした Rousseau(ルソオ)の說であつた。かれが十七八世紀の冷索なる循俗主義(コンヹンショナリズム)、形式主義(フオオマリズム)に對し、おもひ切つて『自然に歸れ』と叫んだ聲こそ、實に近代浪漫主義(ロマンティシズム)の曉鐘であつたのだ。過去幾千年の間人類が辿つて來た文化發達の徑路を振り返つて見るとき、人は果して今まで眞に蹈むべき道を蹈んで來たのであらうか。在來の因襲や法則を打ち破り、も一度最初から新しく出直して本當の fresh な人生を生きるべきではなからうか、とかう思ひかへしたとき、そこに近代思想の顯著な一方面ともいふべき原始生活追慕のこころが、先づルソオに起つたのである。これは獨り浪漫派ばかりでなく後の自然派に至つて更に一段の力を加へ、今に及んでなほ藝術思潮の根本をなしてゐる所の自由主義、偶像破壞(アイコノクラズム)、民主的精神(デモクラティク・スピリット)、自我解放思想の源である。

浪漫派の文藝は、極端なる主觀的性質のものであつた。冷やかな理知や形式を排して、熱烈の感情と奔放の空想を貴んだ抒情主義(リリシズム)の文藝である。從つて在來ありふれた題目を避け、珍奇怪異な變りものを材料とし、烈しい悲哀、不可思議、恐怖、戰慄、憧憬、すべてさういふものにばかり目を着けたのが此派の特色である。その結果、地上現在の生活に極めて疎い非現實的な超自然の藝術となつて了

つたのは當然の勢である（本全集第一卷『近代文學十講』第五講第一節參照）。

さてこの浪漫派がその極盛期を過ぎて稍老いんとする前世紀の中ごろ、之に代つて猛然として現はれたる科學萬能の思想は忽ち全歐を風靡して、茲に自然派の全盛時代を劃した。現實主義（リアリズム）、實驗主義（エピリアリズム）、客觀主義（オブゼクテイギズム）、懷疑主義（スケプテイシズム）、物質主義（マテイリアリズム）、すべてこれらの言葉が當時に於ける藝術思潮の種々な方面を代表するものであつたことは、既に讀者の熟知せらるる所である、（本全集第一卷『近代文學十講』第三講第四節、第五講第二節以下、第六講、第七講參照）。

ここまで論じて來て、さて私は本論の最初からの立場である基督教思潮と異教思潮との對立といふ點に立歸つて、一應考へなほして見たい。卽ちさきにも一度述べたやうに、文藝復興（ルネッサンス）以後すべての近世思潮は、全く古代の異教思想と中世の基督思想との會流交錯に他ならないが、かの古典主義（クラシシズム）以後自然主義に至るまでの約二世紀間の藝術も、無論この二大思潮の混淆から生れたのであることを、特に強めてここに繰返しておく必要がある。

十六世紀の文藝復興期は、いままで中世の基督教に抑壓されてゐた異教思潮の復活であつて、それ以後の所謂廣い意味の近代思想は、要するに皆文藝復興期の精神の繼續であると見るのが普通の說だ。しかしまた仔細に考察して見ると、その間には非常に複雜な混淆もあれば、また起伏消長の歷史も繰返されてゐる。先づかの宗教改革は、自由革新の運動であつた點に於ては異教的であるが、他の

一面から見れば、文藝復興期の異教思想があまりに肉的本能的なるに對して、靈的基督教生活を鼓吹するものであつた。それからあの頃新しく英吉利や佛蘭西に出た哲學は、その實驗科學的なる點に於て異教的であつたが、それも後に至つて漸く權威（オオソリティ）を以て社會に臨むに至つては、また著しく中世教の臭味を帶びたのである。だからそれに次いで出た啓蒙運動は、信仰や權威を排して希臘思想の知識本位の自由精神を鼓吹したのである。またかの十八世紀の古典主義は、その名の示す如く專ら希臘羅馬の文藝を模倣するものであつたが、それと同時に徒らに模倣を事として因襲を貴び、權威に盲從するの點からいへば、その半面は明らかに中世思想の分子を代表してゐる。さてかういふ風潮に反抗して起つたカントの哲學は、その批評的自由の精神に於て無論異教思潮の分子を有つてゐた。ところが、それに次いで出たものが即ち十九世紀劈頭の浪漫主義であるから、これはもつと烈しい自由思想個人主義を鼓吹した點に於て、言ふまでもなく異教的である。しかしここに注意すべきことは、classic といふ言葉が古代異教の文化を意味する如くに、romantic といふ言葉はその語源から見ても、中世の基督教時代を意味するもので ある。即ち浪漫主義の一面には熱烈なる中世思慕の精神、即ち Mediaevalism といふものがあつてその根柢をなしてゐたのである。浪漫主義のうちには、だから異教分子と共にこの中世の基督教分子が相混合してゐる狀態であつた。

次いで出た自然主義は固よりこの浪漫主義の繼續であつたが、その特色は極端なる唯物的機械的人

生觀にあつた。だからその實驗科學萬能主義の當然の歸結として、先づ神といふ超自然的な空疎な觀念を叩き壞してしまつた。さきの浪漫派では、その開祖のルソオのやうな猛烈な論客でさへ、まだ神といふ思想だけは棄てずに、その著書の隨處に信仰のことは說かれてゐた。さういふものを全然破壞し去つて地上眼前の現實生活のみを重しとし、ひたすらそれにのみ執着しようとする傾向、卽ち希臘思想の最も顯著な一面をあらはしたのが、自然主義であつたのだ。卽ちこの天國を否定し神を破壞する思想こそ、實に近代史の上に於て基督教思潮が受けたる最大打擊であつた。

さうだ、いかにも今にしておもへば、自然主義の功過は全くその破壞的方面にあつたのだ。浪漫派時代の空漠たる、夢のやうな理想を排し、徒らに天國にあこがれたる者をめざまして、最近の肉的異教的現世主義のために道を開いただけが自然主義の手柄で、その根柢たる唯物觀に至つては、到底行き詰つた悲哀の色を帶びたる消極的のものに過ぎなかつた。その唯物觀がやがて廢れて最近に於ける樂天的新理想主義となつたので、ここに眞の積極的建設的の努力時代が現はれた。靈肉合一の異教思潮が全勝を得たのが、卽ち最近の傾向であると私は信じてゐる。

回顧すればかの十七八世紀の啓蒙運動や古典主義より、權威服從因襲模倣の傾向を除き去つて、その知識理性本位の傾向を採り、浪漫主義よりはその空想的方面、特に中世思慕の態度を削り去つて、自由なる個人主義の思想をのみ傳へ、次いで起つた自然主義からはその現實主義のみを採つて決定

的唯物觀を棄て、かくの如くにして出來たものが即ち二十世紀現代の異教思想であると思ふ。古典主義、浪漫主義、自然主義、すべてさういふものの有してゐた長所ともいふべき希臘思想の分子だけを傳へて、文藝復興期以後ここにはじめて二十世紀の劈頭に、めざましき異教思潮勝利の時代が出現したのであると私はおもふ。

歐洲古來の基督教思想の勢力をして、近世に至つて著しく弱からしめたものが二つある。一は獨逸の大思想家大詩人ゲェテによつてひろめられた異教主義、他は十九世紀の中頃、科學が全盛を極めたころの自然主義であつた。前者によつて美と藝術とが人生の福音として說かれ、後者によつて物質的機械的人生觀が唯一の眞理として說かれたことは、たしかに基督教にとつては大打擊であつた。たとへばかのニイチェの反基督說の如きも、見かたによつては全くこの異教主義と自然主義との二つの流れから出たものだとも考へられる。かうして基督教が近代に至つて漸く衰勢を示し、本來の面目を失ふに至つたといふ現象は、西洋基督教國の學者によりは、却つて吾々異邦人にして彼方の思想や文藝を研究する者の目に、それが一層際立つて見えるのである。私は必ずしも現代の基督教が、中世修道院のそれや或は淸教徒の信仰のやうでないことをのみいふのではない。またそれが澎湃たる異教思潮の勢力の前に屈服して、色々の名の下に著しく異教化せんとしつつある現象を指すのでもない。今日眞に文藝思潮の根本を動かしてゐる活きたる力として、基督教の信仰——特にその靈的權威が驚くべ

く微弱であることを、私は誰が何と强辯しても、否定すべからざる事實だと信ずるのである。かの Maeterlinck の神祕思想の如きが、殆ど基督教的色彩を帶びず、所謂『無神の宿命論』un fatalisme sans Dieu だと呼ばれたといふやうな事實は、單に此趨勢の一端を語るものに過ぎない。殊に最近一部の文藝に現はれてゐる舊教復活（カソリック・リヴイヴアル）の現象の如き、歐洲の批評家にしてなほ且これを目して、異教化されたる基督教であると喝破してゐるではないか。

（參考）

　おもふに二つの勢力が衝突し爭鬪するところに人生の悲劇は生ずるので、この悲劇があればこそ思想界には進歩もあり展開もあるのである。若し常に一つの力のみが優越の地位に在つて動かなければ、人間の歷史はまことに太平無事ではあるが、驚くべく單調な固定沈滯の喜劇に終つて了ふのであらう。そこで個人の生活の上に肉と靈と、理想と現實と、感情と理性との分裂があり衝突があるやうに、歐羅巴の思想史には常に唯心論と唯物論と、羅甸民族の傾向と獨逸民族の傾向と、古典主義と浪漫主義と、これら二つのものの對立が、人文進化の歷史をつくつて來たのである（本書の序論參照）。ところが私は最初この論文の出發點を、異教思潮對基督教思潮の抗爭に置いて、現代を以て異教思潮勝利の時代、新異教主義 Neo-paganism の世界だとする結論に到達しようといふのである。が、また更に之を別な方面から論ずると、歐洲三千年の思潮史は懷疑主義（スケプティシズム）對神祕主義（ミスティシズム）の消長史だとも言はれ

るのである。先づ第一に希臘羅馬の古代を懐疑思想の時代とし、次いで中世を神祕信仰の時代だとする。それが文藝復興期（ルネッサンス）に入つて自然科學の勃興、人心の覺醒と共に再び懐疑の風潮を生じて、それが十八世紀末に及んだ。十九世紀勞頭の浪漫主義は、また情緒主觀を中心とした神祕思想時代、次いで起つた科學萬能の自然主義時代は、いふまでもなく無理想無解決を叫ぶ極端な破壊的懐疑時代であつた。ところが十九世紀の末年から今世紀に及んでは、實驗と共に直感（インテユイション）を、理知と共に情緒を重んずるまた全く新しい意味の神祕思想の時代が出來た、とかういふ風に見るのである。この最近の變遷の年代に就いては米國――實は瑞典の批評家 Bjorkman（ビエルクマン）といふ人が、その著『明日の聲』"Voices of To-morrow" のうちに下のやうな見解を述べてゐる。即ち千八百八十六年イブセンが "Rosmersholm"（ロスメルスホルム）を出した年に、文藝上の自然主義、哲學上の唯物論の最後は既に目前に迫つてゐた。それから後三年、即ち千八百八十九年に三つの書物――それは當時あまり世の注意を惹かなかつたが、今日からいへば實に新思想の曉鐘とも云はれるべき三つの書物が、この新時代を代表すべき三人の天才によつて書かれた。それは

第一、新神祕思想の詩人マアテルリンクの最初の劇『マレイヌ姫』"Princess Maleine"（これによつて彼は『白耳義の沙翁』の名を得た。）

第二、新神祕思想の哲學者 Bergson（ベルグソン）の最初の大著『時間と自由意志』"Time and Free Will,"

第三、新神秘思想の豫言者 Grierson（グリアソン）が、英人でありながら巴里で佛語を用ゐて書いた一小册子『理想主義の反抗』"La Révolte Idéaliste"で、それより以後に發達した現代新思潮の萌芽は、多くこれらの三大著のうちに現はれてゐるのを見れば、この千八百八十九年を以て先づ最近思潮の廻轉期だと見、現代思潮の特色を以てこの新神秘思想の勝利であると見做すのである。これも一種の見かたとして、とにかく參考までに擧げておく。

第五　希臘思潮の勝利

一　靈肉合一觀

ロバアトソンの希臘思想論——靈肉合一觀——歐洲最近の反物質主義——象徵主義——肉の讃美者ホヰットマン——肉の要求と靈の要求——千八百八十九年

Let us not always say
"Spite of this flesh to-day
I strove, made head, gained ground upon the whole!"
As the bird wings and sings,
Let us cry "All good things
Are ours, nor soul helps flesh more, now, than flesh helps soul!"

—Browning, *Rabbi Ben Ezra*, xii.

『今や吾等はこの肉を顧みずして努力し、概していへば向上し進歩したるなり』とは常に言ふ勿れ。鳥が飛び歌ふ如くに、先づ斯く言はしめよ、『すべての好きものは吾等のものなり、肉が靈を助くるより以上に靈は肉を助くるにはあらず』と。（ブラウニング『ベン・エズラ師』）

英國の名高い說教家 Frederick Robertson（フレドリック ロバアトソン）は希臘思想の特徵を數へて、第一には少時も休みなき努力、第二にはその現世界的なること、第三には美の崇拜、第四には神でない人間的なものを崇拜すること、この四つを數へた。これらは誰が考へても異議のない點ではあるが、私はここで希臘思想そのものに就いて論ずるよりは、寧ろそれが如何なる點に於て現代思潮の根柢をなしてゐるかを示したいのであるから、必ずしもこのロバアトソンの說には從はないで、別に異（ちが）つた四つの方面から說く事にした。

第一には希臘人の抱いてゐた物質論の思想は、決してかの自然主義的唯物觀の類ではなくて、寧ろ最近思潮の一面である物質即精神の思想、換言すれば靈肉合一觀であつた。

古代希臘の哲人はプラトオンにせよアリストテレエスにせよ、みな物質の實在を認めた。彼等はすべての物質を單に精神の顯現に過ぎない、と見るやうな唯心論的の思想は抱かなかつたが、またそれと同時に一方には、自然主義論者や或は科學萬能論の信者が言つたやうな、純粹の唯物論をも說かなかつたのである。希臘思想の特色は、飽くまで現在の肉的物質生活に執着しながら、同時にまたその基礎の上に建てられた靈的精神生活を否定しなかつた點にある。そしてこれがまた、歐洲現代の思潮と殆ど方向を同じうしてゐると見られる所以である。かの『詩歌的數學』の創始者なりといはれた故 Poincaré（ポアンカレエ）の所說、また物理學者の立場に在つて今しきりに神祕信仰を說く Oliver Lodge（オリヴァ ロッヂ）の宗教

論、實驗とともに直覺を重しとするBergson(ベルグソン)の哲學、そのほか故James(ウエイムズ)の實用主義(プラグマティズム)より、最近英米の新實在論(ニユウ・リアリズム)は言ふまでもなく、Eucken(オイケン)が精神生活の論に至るまでも、その間に程度と色調との相異こそあれ、みな悉く希臘思想の根柢たる靈肉一致觀と行きかたを同じうしたものではなからうか。少くとも、その間に一脈の相通ずる所なしとは言はれないであらう。

最近の反自然主義、非物質主義の傾向は、要するに肉に對する靈の覺醒 réveil de l'âme であつた。文藝の上では最も廣い意味で言つた新浪漫主義(ニオロマンティシズム)の思想、またその主要な傾向を言ひあらはした所謂象徴主義(シムボリズム)そのものも、畢竟ずるにこの靈肉一致の世界觀が生み出した文學に外ならないのである。客觀界と主觀界と、目に見える世界と目に見えざる世界と、物質界と靈界と、また有限の世界と無限の世界との間には、そこに互に相應じ相通ずるところの一致照應(コレスポンダンス)があるのだ、と言つた佛蘭西象徴派の詩人の如き、今にしておもへば即ちまた此最近思潮の曉鐘であつたと見られるであらう。

自然と人道と民主主義との詩人であつた米國のWhitman(ホヰツトマン)が、その死後、ことに最近數年、益々甚だしく西歐の文壇に持囃されるに至つたのは、彼の思想が靈肉の調和を根本として極めて大膽に肉の美を讃嘆したからである。『肉若し靈にあらずんば何をか靈といふ』と彼は言つたが、この態度こそ即ち毫も靈肉の不調和を感じなかつた希臘思想の特徴ではないか。その作『自己の歌』Song of Myselfは、此詩人の人生觀の最も完全なる告白であるが、そのなかに(第四十八節)、

I have said that the soul is not more than the body,
And I have said that the body is not more than the soul,
And nothing, not God, is greater to one than one's self is.

靈は肉に過ぎず、肉は靈に過ぎずと我言へり。また何者も、たとひ神といへども、人にとつて自己より大なる者なし。

また『われはエレキの肉體を歌ふ』"I Sing of the Body Electric" と題した詩の第九節には、殆ど三四十行にわたつて人體の各部を仔細に列擧し、さて最後にかう言つた。

O I say these are not the parts and poems of the body only, but of the soul,
O I say now these are the soul!

これはただに肉體の各部と詩には非ずして靈のそれなり、とわれは言ふ。ああ我は言ふ、これらは靈なりと。

肉體を歌ふに當つてホヰットマンの飾りなき大膽なる詩句は、卑猥の譏なしに之を日本語に移すことの到底不可能なものが尠くない位である。

人が肉の要求を感ずることと現代の如く痛切にまた激烈な時代は、未だ嘗てなかつた。もより今人の肉の要求は、それが强烈なだけそれだけ、また靈に對する强い要求をもその中に包含してゐるので、

ちやうど古代の原始的な希臘人がしたやうに、靈と肉との渾然たる一致合體の境地に、眞の生の充實を見出ださうとしてゐるのが、現代の特徴である。

さきの自然派時代の肉的た唯物主義が、前世紀末から起つた『靈の覺醒』に促されて、最近のこの靈肉一致觀に入つたことを、少しく精密な年代に就いて言はうとすれば、先づ千八百八十九年といふところを、この廻轉期と見做してよからう。既に前章の終にビエルクマンの説を紹介して言つた通り、この年にマアテルリンク、ベルグソン等の名著がはじめて世の視聽を聳てしめたといふ著しい事實のほかに、小説の方でも、佛蘭西の Bourget（ブウルゼエ） が精緻な心理描寫の筆を揮つて、佛蘭西青年の懷疑的傾向を戒めた名作『弟子』"Le Disciple" がこの年に出て、在來の唯物思想に代ふるに最近の新思想を以てしたことを、先づ注意せねばならぬ。なほまたこれとは稍時を隔てて、今ではもう故人になつた Rod（ロッド） が『生命感』"Le Sens de la Vie" を書き、また故 Melchior de Vogüé（メルシオル ドウ ヴオギュエ） が『露西亞小説』"Roman russe" を出したのも、今日からおもへば、皆、現代の新傾向に移らうとする世紀末の轉期を豫示したものに他ならなかつた。

二　聰明の智力

ランス——嚴正と明晰——希臘藝術の特色——クラシシズム——ニイチェの『悲劇發生論』——希臘人の運命觀——諦めと努力——人生全面の觀察

Who saw life steadily and saw it whole.

—M. Arnold, *To a Friend.*

しかと人生を見、その全部を見たる人、ソフォクリイズ。（マシュウ・アアノルド『友に寄す』）

Griechheit, was war sie? Verstand und Mass und Klarheit.

—Schiler, *Griechheit.*

希臘風とは何ぞや、明察と節度と明晰と是れなり。（シルレル『希臘風』）

次に最近の傾向はたとひ神祕を說き天地の一大靈氣を信じ、また不可知の世界に思を寄せてゐても、それはかの無知な中世の人や或は昔の浪漫派の詩人がしたのとは違つて、その根柢には極めて聰明にして慧敏なる理知の力を失つてゐない、といふ點に特色がある。現代の人は最早さきの自然主義時代のやうに直接經驗の萬能を信じ、自然科學が示し得る所を以て唯一最上のものだとは信じてゐないが、それともにまた科學的研究、批評的精神の重んずべきを忘れず、道理と知識とに對しては極めて冷靜に、謙讓な眞摯の態度を持してゐるのである。何事に限らず自分の智力が認めて然りとなす所でなくては承知しない。これがやがて異教思想の特色であり、また文藝復興期（ルネッサンス）の眞精神でもあつた。

（ここに理知といふのは最も廣い意味に於てである。それはもはや以前の自然派時代のやうに直接經驗と客觀の世界に閉ぢ籠められた窮屈な智力をいふのではない。時には想像の羽翼に駕し直感の力をも藉つて、人生の全域を透察してその眞を摑まうとする明敏なる心の作用(はたらき)を意味するので、たとへばマアテルリンクの言つた clairvoyante な智(サゼツス)の如きをも含めて言ふのである。）

智は眞を語るに在り、また意識して自然に應じて行動するに在り』'Wisdom is to speak truth and consciously to act according to nature' と言つたのは、Ephesus(エフイサス) の哲人 Heraclitus(ヘラクライタス) であつた。今日では眞の希臘思想の源流は、ソクラテスなどよりも却つて此ヘラクライタスに在りと見られてゐる位で、この言葉の如きは眞に希臘古代の人の中心思想を言ひあらはしたもので、それがまたやがて現代の精神に他ならない。かのプラトオンが純なる知識を愛する者、事物をありの儘に觀察する者——即ち φιλομαθής にしてはじめて神聖の生活に達し得べしと言つたのも、また同じ意味ではなからうか。古代の希臘人が如何に鋭く事物を觀察し、明晰なる想像力を有し、またそれを直截に言ひあらはすことを知つてゐたかは、今日希臘語——特にアテイカの語を研究する者の容易く首肯し得るところである。

英國近世の大批評家マシュウ・アアノルドはその名高い論文の一つに於て、希臘思想を希伯來思想と比較し、前者は後者の如く單に神の教を信じて教權に服從するものではない、自ら正しく又明らか

に事物の眞相を見、自己によつて理をさぐり、眞を求めようとするものであると論じて、さて下のやうに言つた。（原文省略）

無知を脱すること、事物をありの儘に見ること、ありの儘を見てその美を見ること、これ即ち希臘思想が有したる單純にして興味ある理想である。この理想の單純と妙味とあるがために、希臘思想と其思想に養はれた人の生活とが、空靈の安靜を得、明晰と光彩とを得るのである。吾人が呼んで sweetness と light と呼ぶものに滿つるのである。

——Culture and Anarchy, Chap. IV.

現代に於て英國の Bernard Shaw（バアナアド ショオ）の皮肉な嘲笑的態度の如き、畢竟非常に聰明なる理知を以て凡ての社會現象の奥の奥まで、裏の裏までを透察したる結果が、遂にあれほどまで冷やかな觀察者となり皮肉屋となり得たのである。彼の作物の如きは最も嚴密なる意味で言つた智の文學である。また之とは全く趣を異にしては居るが、佛蘭西の Anatole France（アナトオル フランス）などが書く物も、全く沈靜な智力の所産である。現にかれの近業『神は渇す』"Les Dieux ont soif"（近頃英譯が出來た）の如き、白刃の鋭さを以て古今に限りなき人情の機微を穿ちたる好適例である。

希臘人は如何に熱したる感情の高潮に達した場合でも、冷やかな理知の力を失はなかつた。情熱の奔放を智の冷靜によつて抑へることを忘れない民であつた。Pater（ペイタア）が Winckelmann（ヰンケルマン）を論じた文中

の語を借りて言へば、彼等の特性は『熱情ある冷靜』passionate coldness であつた。そして此傾向が著しく藝術の上に現はれて、整齊典雅の美となり、所謂古典(クラシック)の嚴正 severity と明晰 clearness とをなしたのである。Lessing(レッシング)が『ラオコオン』"Laocoon" の冒頭に引用したヸンケルマンの言葉に、希臘藝術の特色は『けだかき單純と靜かなる偉大』elle Einheit und stille Grösse なりといひ、大なる海が、たとひその面に波たち騷ぐとも深き底は靜かであるのに似てゐる、と評した意味も全くことに在る。

古典藝術の美として何よりも貴ばれる釣合(つりあひ)、即ち proportion なども、よく考へて見ると決して單なる法則(カノン)や規範ではなくて、つまり事物をありの儘に見て、その truth と reality を摑まうとする智力の顯現に外ならない。或事件にせよ或人物にせよ、それを描いてちやんと釣合が取れてゐないといふことは、つまり自然そのものの眞を逸してゐるからだと思ふ。かのアリストテレエスの哲學の基礎である『中庸』mean の說の如き、眞に希臘藝術の根本精神であるが、あれは單に兩極の中間といふだけの意味ではなくて、つまり究極(アルティメイト)の眞(トルウス)と實(リアリティ)とを、聰明怜悧な理知の力によつて捉へるの謂であらう。後の十七八世紀の古典主義(クラシシズム)の文藝の如きは、全く此眞精神を逸して單に古典の外形を學び、ことさらにそれを規矩準繩として模倣しようとした結果、かの生氣なき月並の藝術に墮したのである(本書七四頁――六七頁參照)。內容と外形と、理知と情熱と、すべての間に不調和の缺點を有

たなかつた古代希臘の天才は、その自然の儘な天賦の能力によつて、故意にではなく全く自發的に、冷やかな整つた、そして明晰な藝術品を作り得たのである。從つてその冷やかな所に情熱もあれば、整つたうちにも生氣の躍動が見られたのであつた。熱烈の眞情を端正の外形に包んだ古代藝術の神品は、かくの如くにして生れたのである。近頃になつて歐洲文壇の一角に新しく新古典主義の聲を聞くに至つたのも、畢竟私がここに言ふ所の異教思潮の一面を復活させるものでは無からうか。自然に親しむ原始的な氣分を失はず、表面は冷靜素朴にして、うちに複雜多趣の熱意を籠め、よく節制と統一とを全うしたる現代藝術の傾向を以て、私はたしかに希臘藝術の精神の復活だと見てゐるのだ。

ニイチェはその『悲劇發生論』"Die Geburt der Tragödie" の中に、希臘思潮の本質を二つに分けて、アポロ型 apollinische とディオニソス型 dionysische となした。前者は希臘の美の神、太陽の神、また赫耀たる光明の神になぞらへただけに冷やかなる眞と美とを貴び、明晰なる智の傾向を代表する。後者は酒と歡樂の神ディオニソスを思はせるやうな、陶醉と熱情と空想と夢幻とを代表する。從つて廣く之を人間生活の上から言へば、アポロ型の傾向は知識、義務、慣習、形式などの靜的方面に、ディオニソス型は自由、興奮、直覺、戀愛などの動的方面に現はれるのである。そしてこの二つのものがよく悲劇的調和を得てゐる事が、即ち希臘の思想と藝術が千古に卓拔せる所以に外ならない。換言すればディオニソス型の自由奔放な情熱と空想とを、抑制し限定し形成する所のアポロ型

の精神、卽ち智力の聰明を失はない所に、希臘思潮の眞面目が見られる。

さてこの冷靜な智力は、希臘人の人生觀をして希伯來人のそれとは全く異なつた特色を帶びしめたと共に、そこにまた一種の運命觀を生ずるに至つた。此點に於ても私は現代文學の思潮との間に再び明白な類似を見出すのである。

上にも述べた如く、希臘人はすべてありの儘の事實を極めて聰明な頭(あたま)で考察した。經濟上また科學上の現象を自然の儘に如實に見てゐた。だから希伯來人のやうに矢鱈に大きい馬鹿々々しい希望を抱いて、それが到底實現されないからといつて天國といふ一つの理想境を別につくつたり、現世を苦患の世界と見て了ふやうな事は決してなかつた。最初から、さきのさきまでよく見通しをつけて、ちやんと諦めてゐた。限りありと見た此現世に於て、出來るだけの幸福と光榮とを得ようとする努力が、異教思想の特色であつた。そこにまた希臘人特有の運命觀もあつたのだ。

希臘の古劇は一種の宗教觀に基づいたもので、一面からいへば運命の不可抗力を示したものだと見られる。たとへば Sophocles(ソフオクリイズ) の Œdipus Rex(イイデイパス王) でも、一天萬乘の英邁の君が一朝運命の數奇に弄ばれては、あはれな乞食とまでなつて了つた、すべてアポロの神託その儘に成り行く事を示した一種の運命劇である。人間がいくらじたばたしても、天地を貫く一大靈氣、一大偉力の前には當然の支配を甘受せねばならぬ事を示したものである。私は現代文藝にあらはれた Andreyev(アンドレイエフ) やマアテルリンク

や、その他新浪漫派の名のもとに呼ばれ得る多くの作家が、明らかにこの運命の不可抗力を認めた者の多いのを見て、そこに此異教思潮の意義を想はずにはゐられない。

はじめまだ智力の明敏でない時、人は情意の促すがままに色々の希望や欲求を抱く、これが即ち希伯來思想の時代で、その希望を理想境にして神や天國といふものを希伯來人は作つたのである。之を近世でいへば浪漫派の空想時代憧憬時代に相當するので、さていよ〳〵その欲求の實現されない事を知つた時、そこに所謂現實暴露の悲哀を感ずる自然主義時代が來る、行きつまつた決定論（デイタアミニズム）の人生觀も生ずるのである。しかしなほ更にそれが一歩を進めて現代のやうな、深い本當に聰明な理知の力が出來ると、希臘人のやうな運命に對する冷靜な諦めを得て了ふ。徒らに現在の人生を悲觀し煩悶することの代りに、限りありと知りつつなほも健氣（けなげ）に求めて止まざる努力と奮闘とを續けるのである。その限りある世界に在つて十分現在刹那の享樂を求めて止まない。これが即ち自然主義以後現代の思潮の著しき特徴ではないか。

なほ一つ言ひ添へたいのは、希臘人は眞に聰明な智力を以て事物のありの儘を觀察したるが故に、單に人生の悲しむべき半面をのみ見ることなく、光明善美な側をも併せ觀察し得た。從つて自然主義時代の人たちのやうに、事物の眞を見るといつて決して厭世的になることはなかつた。醜惡とともに善美を、暗黑と共に光明を見得る者にしてはじめて、明敏なる智力を有するものと云ふべきではなか

らうか。現代の人々が、自然主義者の悲觀より更に一歩を進めて光明歡喜の一面をみとめ、かくてよく人生の全面を透察するに至つたことは、確かにすぐれた深きに徹する智性のはたらきである事を思はねばならぬ。

三　現代生活の享樂

今人の現世主義——今日を享樂せよ——レミ・ドゥ・グウルモン——現代の宗教——オイケンの宗教觀——建築に於けるゴシック式とルネッサンス式——ラスキンの説——希臘人の現世思想——人間本位——神の思想——ヸイナス——ニイチェの美的個人主義——その超人説——ショオの『人と超人』——神と超人と——グウルモンの説——希臘のアンティアス——自我の解放——個人主義——希臘人の神——聖書——プロミイシユウスと約百との比較——政治上の自由——モオリス・バレスと『自己の崇拜』——その作品

Naître, paraître, disparaître : oubliez le dernier terme. La sagesse humaine est de vivre comme si l'on ne devait jamais mourir, et de cueillir la minute présente comme si elle devait être éternelle.

—Remy de Gourmont. *Une Nuit au Luxembourg*, p. 160.

生れ、現はれ、滅す、唯この最後の語を忘れよ。さながら人間は死せざるものの如くに生き、現在

の刹那をさながら永遠なるかの如くに味はへよ。是れ人間の智なり。（レミ・ドゥ・ウグウルモン『リュクサンブウルの一夜』）

次には異教思潮の現世主義、即ち天國や未來を祈願せずに、現在當面の生活を享樂して人生の歡樂に醉はうとする傾向、これが即ち現代思潮の一面であつて、また中世などの基督教思想と全く相反する點である。

基督は天國を地上に實現すべしと教へたにも拘はらず、中世以後の基督教徒はどこまでも現世を否定して惡魔の巢窟となし、苦患に滿ちたる穢土であると觀じた。地上のすべては空の空 vanitas vanitum（『傳道の書』）で、無上の幸福は之を來世に求むるの外なきものと信ずるに至つた。然るに現代に現はれてゐる異教思想は宗教の上にも道德の上にも、來世とか天國とかいふ考を一切放棄して了つて、ただこの現在の生活に滿足を得よう、充實を求めようとするので、從つてその結果が自我主義となり、本能主義となり、個人主義となり、現實主義となり、また享樂主義となり、或は倫理上にいふ所の功利說や快樂說を盛ならしむるに至つたのである。世に最近の思潮を呼ぶに新希臘主義（ニオヘレニズム）の名を以てする人のあるのは、恐らく此點に着眼したのであらうと思ふ。かの羅馬の詩人（ホラティウス）Horatiusが歌つた『未來をあてにはせず、唯今日を享樂せよ』Carpe diem, quam minimum credula postero といふ言葉は、これまたやがて僞らざる現代人の聲であらう。（ラスキンの著『野生の橄欖の冠』: Crown

of Wild Olives" の序詞參照。)

佛蘭西の文壇にいま、詩人として批評家としてまた小說家として雄視してゐるレミ・ドウ・グウルモンは、この異教思潮を代表する最も大膽なる壯快なる思想家の一人である。その肉的快樂說と自我中心の本能主義には、かのニイチェ等の所說とは稍方向を異にして更に深く新人の心を動かすに足るものがある。彼の名作『リュクサンブウルの一夜』Une Nuit au Luxembourg (近頃英譯も出來た) は、神人の對話をかりて巧みに作者の思想を書いたもので、ここにいふ現世主義は此一卷の隨處に現はれてゐる。

Il n'y a de nobles créatures humaines que celles gui s'adorent elles même et qui s'étudient à tirer de leur nature tout le vain bonheur qui y est contenu Vain, mais réel, et seule réalité. Savoir que l'on n'a qu'une vie et qu'elle est limitée ! Il est une heure, et une seule, pour vendager la vigne ; le matin, le raisin est âpre ; le soir, il est trop sucré. Ne perdez vos jours ni à pleurer vers le passé, ni à pleurer vers l'avenir. Vivez vos heures, vivez vos minutes. Les joies sont des fleurs que la pluie va ternir ou qui vont s'effeuiller au vent.

Une Nuit au Luxembourg, p. 100.

「貴き人間は先づ自己を愛し、自己の本性よりしてそのうちに在る凡ての空ないなる幸福を取出ださんとする者に外ならず。幸福は空なり、されどそは眞にしてまた唯一の眞にてあるなり。人はただ一

の生を有するのみにして而もその生は有限なり。思へ、かの葡萄の實を摘む時はただ一時あるのみ。朝には酸く夕には既に甘きに過ぎたり。過去のために嘆き未來のために嘆いて日を過ごすこと勿れ。なんぢの時を生きよ、爾の分秒を生きよ、歡樂は花なり、雨降らば色褪せん、また夜半に嵐の吹かぬものかは』

さてかういふ現世主義のために、直接最も烈しい變化を受けたるものは宗教である。人は多く現代に於ける信仰の衰退を說くが、それは寧ろ宗教そのものに對する人々の考へかたの變化、宗教の現世化と見做すのが至當ではなからうか。またかの宗教に對する懷疑の風潮なども、一方から言へば權威の打破であるが、實は近代人の人生觀があまりに現世的になつたために、舊信仰が力を失つたに過ぎないのではないか。此點に就いてはオイケンも同じやうに說いてゐる。卽ち現代人の考へでは、科學の進步、物質文明の力などによつて吾々は現實界に於ける十分な滿足を得ることが出來る。かの空漠たる天國を夢みるよりも、遙かに手近な確實な存在を有するこの眼前の生活にこそ努力すべきであつて、また他を顧みるの暇はないと人々は思ふのである。つまり現實感があまりに盛なために宗教的欲求がなくなり、その結果はやがて宗教を一種の幻覺(イリウジヨン)なりと見、anthropomorphism に過ぎないとさへ観ずるに至つたのだ。之を分り易い譬で言へば、人が老いて一方に智能が鈍り他方にまた體力が衰へて、すべての物的肉的願望が少くなると、自ら來世をたのみ神佛を信仰するが、之と反對に歳もわ

かく理知の力も盛に、またすべての自我の欲求が熾であつて、現世に對する希望や執着が強い間は、現在生活に忙殺されてお寺詣りの餘裕も無いわけである。

さてかうして出來たのが現代のオイケンなどの宗教觀である。即ち現在の人生に對して、以前の基督教のやうな消極否定の態度を取らずに、どこまでも人生を肯定（ベヤアエン）して現在に努力しようといふ熱意に根ざしたる、享樂と活動とを根本にしたる新宗教を鼓吹する人が多くなつたのである。オイケンは、固よりニイチェのやうな極端な自我主義に反對してはゐるが、それと共にまた自己を實現し自己に歸るといふ事を以て神の要求だとして説いて、さて下のやうに言つた。教會を維持して行かうといふならば、最早在來のやうに宗教を救濟所（アンビュランス）として見る浪漫的な靜寂な考へかたでは駄目である。眞の現世の享樂、充實生活の福音を説く者でなければならぬと彼は言つてゐる。

さてこの異教思潮の現世主義は先づ著しく藝術の上に現はれた。たとへば中世の基督教を代表するゴシック建築が、凡て高く天に冲する尖塔で成立つてゐるのは、いかにも地上生活を離れて天國にあこがれる心持を現はしてゐるに對し、かの重々しいどつしりした感じのある文藝復興（ルネサンス）式の建築は、飽くまで地上現世の生活に執着する希臘思想を表現するものであらう。この點に就いてラスキンは、『近代畫家論』第五卷第九篇に下のやうに言つた。

All the nobleness as well as the faults of the Greek art were dependent on its making the

most of this present life; its dominion was in this world. Florentine art was essentially Christian ascetic, expectant of a better world, and antagonistic, therefore, to the Greek temper. So that the Greek element, once forced upon it, destroyed it. There was absolute incompatibility between them.

——*Modern Painters*, V, Ch. iii. 1.

『希臘藝術の短所も、またその凡ての崇高も、皆現在の人生を重んずるのによるのだ。その領域は全く現世にある。フロレンスの藝術は、その本質に於て基督教的禁慾的で、よりよき來世を期待する、從つて希臘の精神とは反對である。だから一たび希臘風が之に强ひられては忽ちにして滅びた。二者には到底兩立すべからざる點があるのだ。』

すべて現在生活を中心にして考へられてゐた希臘では、幸福といふ觀念も希伯來人のそれとは異(ちが)つて、天上の樂園などは夢みなかつた。現世に於て富を得、健康を得、また美しきもの愛すべきものを得ることが彼等にとつて何よりの幸福であつた。Solon(ソロン)の言葉として傳へられてゐる幸福說に、『人もし四肢すこやかに、病なく不幸なく、兒孫榮え、自らも風采(みめ)よければ、またそのうへ臨終も事なければ、まことの幸福と呼ぶことを得ん』とある。また秀拔な人物といふ觀念も、基督敎でいふ聖者(セイント)のやうな超越的のものではなく、希臘人のは飽くまで肉的現世的の英雄であつた。ホオマアの詩にあるAchilles(アキレイス)の如きは、智と美と勇とを兼備した點に於て希臘人の理想的英雄であつた。

また希臘人はすべてを humanize した。かれらが神話に現はした思想も全く人間本位(ヒユウマン)であつた。かれらには神人の區別といふものが無かつた。Protagoras(プロタゴラス) の言つたやうに、『人間は萬物の尺度』ἄνθρωπος μέτον πάντων であつたが故に、その多くの神々には一として神様らしいのは居ない。外貌といひ性格といひ、凡てが地上の人間である。希臘の神々は嫉妬もすれば怒りもする、亂暴も働けば泥棒もやりかねない。それぞれ明らかな確かな個人性を具へた、謂はば地上の英雄に過ぎない。希伯來の宗教にあるやうな超自然的な靈性を具へた神さまとは、全く性質を異にしてゐる。希伯來人はすべてを唯一至上の神エホバに歸して考へたが故に、森羅萬象一として神意の外に現はれたるものに非ざるなしと見た。天地山川の美を觀じても美そのものを貴ぶにはあらずして、その背後にありと信じたる神の榮光を拜したのである。殊に大なる神の御前に在つては、蠢爾たる人間の如き殆どいふに足らずとして、ひたすらその至高至大の靈を拜した。『視よ、もろ〳〵の國民(くにびと)は桶のひとしづくの如く、權衡(はかり)のちりの如くに思ひ給ふ、島々はたちのぼる塵埃の如し、レバノンの柴にたらず、そのなかの獸(けもの)は燔祭にたらず、エホバの前にはもろもろの國民(くにびと)皆なきにひとし、エホバはかれらを無きものの如く空(むな)しきものの如く思ひたまふ』(以賽亞書四十章自十五節至十七節)とまで言つたが、此點に於て、希臘人が自然を自然そのもののために愛し、また飽くまでも人間性情の美を重んじたのとは、眞に好個の對照をなしてゐるではないか。

かくの如くにして希臘人は、何よりも先づ人間自然の本能と肉體生活の美を貴んだ。愛と美とを代表した女神ギイナスの讃美(ラウス)は、よく此方面の思想を現はしたものである。生命の強さを與へ人生の歡樂を與ふる力として、昔から多くの詩人は此女神に熱意をこめた讃美の歌を捧げた。

さて異教思潮のこの現世主義を、近代に於て最も大膽に露骨に宣傳し謳歌したる思想家は、獨逸の＝イチェであつた。かれが基督教思想に反抗して本能生活の滿足を唱へ、美的享樂に基礎を置いたる個人主義を絶叫した壯快の所説は、確かに近代の人心に最も痛切な反響を呼び起したものであるが、要するにそれは、三千年の昔の希臘思想を現代に復活したものに外ならないのであつた。かれの思想は既にいくたびか我が文壇に紹介せられたるもの、今更私がここに繰返すまでもなからうが、かれは希臘羅馬の、征服者勝利者の道德を以て主の道德なりとして之を唱道し、被征服者なる猶太人の基督教道德を以て奴隷の道德だと見做した。勝者勇者の道德には『生の喜び』la joie de vivre が溢れ、勇氣と力と誇とが充ちみちてゐるが、弱者敗者の道德に至つては全く屈從的で、そこには充實したる力といふものが見られないと考へた。かくしてかれは基督教の愛他主義、平等主義に反抗して自我主義、不平等主義を唱へ、Schopenhauer(ショオペンハウエル) 等が人生否定の厭世觀に對して、人生肯定の英雄主義を叫んだ。

しかし彼の所説のうちで、現代に於ける異教思潮の要素を最もよく現はしてゐる部分は、いふまでもなくその超人說である。かれは "Zarathustra"(ツアラトウストラ) に於て、超人は地の意義を代表する。同胞よ、願

はくは地に忠なれ、かの天上の希望を說くが如き空漠の言に耳を傾くる事勿れと敎へた。かれは人生に於ける不斷の向上と努力とを說き、自我を中心としたる進化發展に最上の意義を置いた。かの博愛といひ平等といふが如きは寧ろ一の罪惡であつて、自我の意力によつて我等は遂に、精神的人格的の意味でいふ貴族であらねばならぬ。さうして出來たのが卽ち超人である。おもへば近世の實驗科學と自然主義の思潮は、まさに基督教の神を破壞して了つたが、それに代つて現はれたものこそ、この地上現世を重んじた超人說に外ならないのである。もはや偉大と崇高を神の中に見出すことの出來なくなつた現代人は、ここに超人を信仰してそれを望むやうになつた。Darwin(ダアヰン) は吾人に向つて、人間は蟲から進化して遂に現在の所までやつて來たのだと敎へた。嘗て進化の道程に通つて來た猿といふ過渡時代があつたやうに、吾々は今この人間といふ一階段に在る。この人間の儘に吾人は向上し進轉して遂に『超人』の域に達すべく努力せねばならぬ。超人はかかる意味に於て嘗て昔の希臘人が考へてゐた地上の神であり、人間の英雄なる者に外ならぬではないか。

私は茲に至つて、またショオの『人と超人』"Man and Superman" に現はれた思想を想ひ起さざるを得ない。勿論英國の此戲曲家は、ニイチェのやうに明確に超人の理想を示してはゐなかつた。ショオの超人は、つまり現在の普通人よりも遙かに強い健康を有し、すぐれたる腦力を有する者の謂で、それはつまり人種改良(ユウゼニクス)によつて進化が齎す所の社會的所產であると彼は言つてゐる。が、かくの

如きは即ち異教（ペイガン）の所謂『神』と甚だしく類似したる觀念ではなからうか、と私は思ふ。ショオはまたイブセンの作『皇帝とガリレヤ人』（本書三三頁――三六頁參照）を批評して、あの戯曲にあらはれた『第三帝國』と、自我を神なりとする人――即ちここに云ふ超人――と兩方を結び付けて、下のやうに論じた。

"Emperor and Galilean might have been appropriately, if prosaically, named The Mistake of Maximus the Mystic. It is Maximus who forces the choice on Julian, not as between ambition and principle—between Paganism and Christianity—between "the old beauty that is no longer beautiful and the new truth that is no longer true," but between Christ and Julian himself. Maximus knows that there is no going back to "the first empire" of pagan sensualism. "The second empire," Christian or self-abnegatory idealism, is already rotten at heart. "The third empire" is what he looks for: the empire of Man asserting the eternal validity of his own will. He who can see that not on Olympus, not nailed to the cross, but in himself is God: he is the man to build Brand's bridge between the flesh and the spirit, establishing this third empire in which the spirit shall not be unknown, nor the flesh starved, nor the will tortured and baffled.

——Shaw, *Quintessence of Ibsenism*, pp. 65, 66.

『皇帝とガリレヤ人』は、殺風景な言ひ方だがしかし適切に、神秘家マクシマスの過誤（あやまり）だと名づけてよからう。野心と主義と、――異教主義と基督教主義と――『もはや美でない古い美と、もはや眞

でない新しい眞』と、これら二つの者のいづれを選ぶといふのではなく、基督とジュリアン自らとのいづれを取るかといふ選擇を、皇帝に强ひた者はマクシマスである。異敎の肉感主義の『第一帝國』に今更歸られもしない事はマクシマスも知つてゐた。さりとて『第二帝國』即ち基督敎的或は自己否定的の唯心論も、既に根本から駄目になつてゐる。そこで彼が求むる所のものは『第三帝國』――即ち自らの意志の永遠に正確な事を主張する『人』の帝國である。神はオリムパス山上に在るのでもなければ十字架上に在るのでもなくして、自我のうちに在るのだと考へる人、さういふ人こそ此『第三帝國』を建設して、ブランドの靈肉の間の橋梁を造る人である。第三帝國に於ては靈が知られずにあるといふ事もなく、肉が飢ゑる事もなく、また意志が苦しめられ敗られたる事もないであらう。

――『イブセン眞髓』六五――六六頁

靈肉一致の第三帝國は即ち超人の國を意味する。超人その者は即ち地上の神を意味するのである。またさきに言つてグウルモンも、此點に就いて下のやうに言つた。

Il ressemblerait beaucoup à un homme, il ressemblerait beaucoup à moi-même, qui suis un surhomme. Multipliez vous à l'infini et vous avez le seul Tout-Puissant réellement concevable. Les religions et les philosophies modestes qui ont imaginé Dieu sous la forme d'un homme parfait sont demeurées au moins dans les limites d'une analogie raisonnable. Moi, l'un des dieux qu'adorent les hommes, je vous le dis en toute humilité divine : je suis un homme et Dieu est un homme.

—— *Une Nuit au Luxembourg.* p. 99.

> 神は人の如く、我の如く、あるだらう。我は超人である。爾自らを無限に多からしめよ、さらばそこに唯一の、眞に考へられ得べき全能の神が出來る。神といふ者を完全な人間の形にして想像した宗教や控へ目な哲學は、今日まで尠くとも理窟にかなつた類似の範圍内に殘つた。我は、人々の崇拜する神々の一人であるが、十分神さまらしい謙遜をしてから言はう、我は人である、神は人であると。

かういふ風に神を地上に引きずりおろして、人間化して了ふといふ異教(ペイガン)の態度は、佛蘭西のこの新思想家の作品のいづれにも見られる。(メレジコウスキイの著 "Tolstoi as Man and Artist" 二六七頁—二六八頁をも參照せよ)。

私はいま現世主義を論ずるに當つて、はしなくも希臘神話にある巨人 Antaeus(アンテイイアス)の話を想ひ出した。『地の子』terrae filius と呼ばれたこの巨人は、足が地上に在る間は力まことに山を拔くばかりであるが、一たび地を離れて空中に上げられると全く力を失つて無能になる。此弱點を Hercules(ヘアキユリイズ)が看破して、遂に見ごと彼に打勝つたといふ話がある。思ふにアンテイイアスは心靈を意味するので、この一寓話は、物質界肉界を離れ地上現世を離れては、心靈の殆ど力なきものである事を示したのであらう。

異教のこの現世主義に聯關して、私はここに『自己の崇拜』といふことに就いて一言しよう。

自我の解放と個人の自由を強く烈しく主張する傾向は、遠く源を文藝復興期の異教思潮勃興の時に發したことは、既に上にも述べた。近代に及んでは先づルソオの呼號をはじめとして、前世紀の浪漫(ロマン)的(テイク)時代より自然主義時代に至つて、益々熱烈矯激の度を加へ、最近に至つてまた更に一段の力を増したるやの觀がある。今日すべての思想、すべての藝術は、益々あざやかに個人的色彩を帶びて來た。一切の權威を排し傳說を破壞し、そこに淸新强烈の自我を基礎とした新生活を創造しようと努むるに至つた。ただその個人主義が、さきの自然派時代のやうに虛無否定の一面にのみ偏せずして、今は肯定し建設せんとする努力の盛なことが、現代にあらはれた著しき變化である。(近代の個人主義に就いては、ほぼ『近代文學十講』第三講第三に述べた)。

さてこの權威を排し個人の自由を重んずる現代の傾向は、世間に既にいくたびか說かれた問題であるから、之に就いては私は今更言を費さない。唯これがまた希臘に發した異教思潮の著しき一面であつて、希伯來思想の流とは全く反對の傾向の現代に現はれたものである事を一言しておく。

私はさきに本書の序論で二大思潮を對照比較したとき、希臘のアポロの神殿にある『爾みづからを知れ』の語と相對して、聖書が說く神を知り神を畏れよといふ言葉を擧げて、一は個人的自由の主義、一は敎權服從の思想だと言つた。今この點を明らかにするために、二者の宗教に對する――寧ろ

神に對する思想の相異を考へるのが、何よりの捷徑であると思ふ。

ホオマアには、人々みな神を有たざるべからず（Odyssey III, 48. 參照）といふ語あるが、實際希臘人は決して無宗教無信仰の民ではなかつた。それはちやうど現代の人が決して無宗教でないのと同一の意味に於てである。ただ異教思潮にあらはれた神の思想は、人間が造り人間が考へた神であつて、希伯來の神のやうに唯一絶對の權威を以て人に臨むが如き性質のものではなかつた。希臘の方では人あつて後に神があるのだが、希伯來の方では神あつて後に人があつたのだ。前者にあつては神は人生の一部に過ぎないが、後者にあつては神がそのすべてであつた。これは Æschylus（イイスキラス）やホオマアの文學に現はれた神と、以賽亞の書にあらはれた神との思想を比較すれば、一見明瞭である。甚だしい例をいふと Aristophanes（アリストフアネエス）の喜劇、殊に『鳥』"The Birds" などを讀むと、盛に神樣を冷かしたり嘲弄したりした痛快な面白い文字を澤山に見るが、これなどは希伯來の方では藥にしたくも無いことである。第一、希臘には權威を以て神の法則を示すべき聖書といふ類のものが絶無である。固よりかのアポロの託宣などが無いではなかつたが、それも單に或特殊の事情の場合、一時的にその命を聽くだけであつて、謂はば人間の御都合主義から割り出されたものに過ぎない。決して之によつて希臘人の全生活を律し束縛しようといふ程の力はなかつたのである。要するに希臘人は勝手に神を拵へて勝手にそれを信仰してゐたので、そこに何等思想上の壓迫制肘を見なかつた。かれらは如何なる場合

にも、思想上絶對の自由を失はなかつた。

私は再びこの差別を明らかにせんために、讀者が希伯來文學にある約百(ヨブ)の話と、希臘神話にある Prometheus(プロミイシユウス) とを較べられん事を希望する。約百もプロミイシユウムも兩方とも正義の士でありながら、しかも神のために不相當な苦痛を與へられた。約百は『神を畏れ惡に遠ざかる』正しい人間であるのに、天は之に向つてあらゆる苦患を下し、財を奪ひ病を與へ、彼が一家をさへ滅ぼした。またプロミイシユウスの方は人權の擁護者とも云ふべき巨人、わざ／＼天の火を奪ひ來つてこれを人間に與へたが、それをも Zeus(ジユウス) の神は怒つて Caucasus(コオカサス) 山上の岩に縛り付け、鷲をして日毎にその肝臟を啄ましめたといふ。ここまでは兩方ともよく似寄つた話であるが、約百の方には、エホバの神からどんな目に合はされようとも、絶對無限の服從のほかはなかつたのである。天地の事がお前なぞに解るものかといふ神樣の一喝に遇へば、それ切り畏まつて引込む。何故あつての苦患だか、神の方でもそれは言はず、約百も聞かうとはしない、全く御無理御尤もで恐れ入つてゐるのだ。そこになると希臘のプロミイシユウスの方には、自覺もあれば自由もあつた。儼として權威に服しないだけの自我の主張があつた。イイスキラスの書いた『プロミイシユウス』を讀んで見ると、第一プロミイシユウスはジユウスの神が怪しからぬと言つて、平氣で神を呪つてゐる、決して無條件の服從なぞはしないで、どしどし神さまをやつつけてゐる。ハアキユリイズが來て、あの鷲は殺されてしまひ鎖も遂には放た

れてしまふと、いよ〱神樣との對決になつて、終結には作者自ら大に神の不當を攻擊するやうな具合にすらなつてゐる、その態度がすべて約百とは全然反對に出來てゐるから面白い。

以上は宗敎の方面から見たのであるが、政治上に於てまた希臘人が如何に個人の自由を重んじたかは、歐洲の古代史を繙いた人の何人も首肯する所であらう。たとへば希臘人が『自由』といふ意味に使つた *ἰσηγορίη* といふ言葉は、全く『言論の自由』の意であつたといふ如き、よくこの點を證してゐると思ふ。

さて目を轉じて、現代文藝に就いて自我の滿足と自由を主張する傾向を見ると、これは殆ど例證のあまりに多くあまりに煩はしきに堪へないのである。最近三四十年歐洲のすべての作家に、多少なりとも著しく此傾向のあらはれてゐないものは一人もない。が、私はここにその最も大膽なる壯快なる代表者として Maurice Barrès の名を擧げてこの一節を終らう。

かれは現代の佛蘭西文壇に於ける最も急激なる新派の先驅者であつた。一切の權威と傳說とを侮蔑し、自我の外なるすべての者を目して野人と呼んだ。それは以前耽美派の人たちが世の俗衆を嘲つて Philistine と云つたよりも、更に烈しい更に大きい意味に於てであつた。個人主義の人、快樂主義の人として、かれが一切の思想の根柢は、所謂『自己の崇拜』'Le Culte du Moi' にあつた。これは先づ彼の最初の小說『野人の眼前に』"Sous l'Œil des Barbares" にあらはれ、次いで『自由の人』

"L'Homme libre."『法の敵』"L' Ennemi des Lois" 等に至つて、益々露骨に鮮明に示された。殊にこの最初の作などは、主人公の名もなければ勿論職業もない、家も國も一定の住所も何もない。この男にとつて唯一の存在は何かといふと、それは自我即ち自分の心、唯それのみであつた。一切の外物と隔離して深く自己のどん底まで探つて行くと、そこにはじめて本當の內部生活が見出される。恰も土のなかの根の如く、粗鑛（あらがね）のなかの黃金の如く、或はまた鑛山のダイヤモンドのやうに、そこに眞の自我といふものが潜んでゐる、これこそ宇宙の根柢でありまた唯一の實在である、といふのがこの一篇の眼目だ。主人公が青春五ケ年の閲歷を叙して、歸するところに即ち自我の權威を說いたものに外ならないのであつた。（勿論最近數年、この作者の思想は初期の頃のと稍趣を異にした感はあるが、自我の權威を高調する點に於ては少しも變りはないのである。）

四　美の宗教

肉感美の崇拜——美と善の一致——希伯來思想との比較——肉體の美——男性美——ロダン——ペイタァ——ワイルド——ダンヌンチオ——ピエル・ルイ——レオン・バクストの藝術——參考書

'Beauty is truth, truth beauty;—that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.'

——Keats: *Ode on a Grecian Urn*

美は眞なり、眞は美なり、是れ爾が地上に於て知り、また知るを要するすべてなり。（キイツ）

'Art is the synthesis of beauty in Nature; and beauty is as serious as death itself.'

——Francis Grierson, *The Humour of the Underman* p. 189

藝術は自然に於ける美の綜合なり、美はその嚴肅なること死と異ならず。（フランシス・グリアソン）

美と藝術との宗教、ことに肉感美の崇拜、これがまた現代に現はれた異教思潮の顯著な一方面である。かの享樂主義といひ、快樂主義といひ、耽美主義といひ、藝術至上主義といひ、或は美的（イイスセテイク）・個人主義（インデイヴヰデュアリズム）といふ如き種々の名によつて呼ばれる傾向を今ここに總括して、すべて皆上に述べた希臘（ヘレニック）現世主義者の當然の歸結たる美の崇拜を根本にして考へるのは、必ずしも無理でなからうと信ずる。

希伯來思想の特色は、既に述べた如く、ことさらに肉的生活の美と快樂に面をそむける禁慾主義にあつた。ちやうど佛教の言葉で色相界の妄執とか煩惱とか云つたやうに、あらゆる物慾と肉情を否定した。之に反して希臘人の思想は全く現世の意を中心とし、美の極致はやがて自ら善と一致する事を疑はなかつたが故に、かれらはことさらに道を說き德を奬める事をしなかつた。私どもが古代希臘の天才が遺した作品を讀むに當つて、特に強く注意を惹かれるのはこの耽美主義（イイスセテイシズム）の傾向に在る。ホオマアの叙事詩にも、Sappho（サフオオ）の抒情詩にも、また Herodotus（ヘロドタス）の歴史にも、アリストファネエスの喜

劇にも、誰かそこに慈悲や正義の敎を聞く人があらうぞ。かの使徒保羅(パウロ)が自ら語り人に問ひ、聲を高くし涙を灑いで道を說いたのに較べると、哲人ソクラテエスやプラトオンにさへも、道學先生臭味は甚だ薄かつたやうに思はれる。かくの如くにして希臘が千古に誇るべき豐富なる藝術を遺したるに比して、古代の希伯來來民族のそれは此點に於て驚くべく貧弱であつた。第一先づ肉體美を寫した彫刻といふ物を、彼等は持たなかつた。唯文學の方で舊約書に詩歌も戲曲もあるが、それも皆宗敎的なものばかり、僅かに『雅歌』の一篇に肉體美の讚嘆を聞くに過ぎない（雅歌第五章自十節至十六節に男性美を、第四章自一節至七節に女性美を歌へる如き例）。元來美感の著しく發達してゐた希臘人は、美そのものによつておのづから自分の心の淸くせられ高められる事を知つてゐたが故に、彼等は人體美の極致 beau ideal を寫したる神像を造つて之を拜したのである。卽ちかの一切の偶像禮拜を嚴禁した希伯來人とは、此點に於て全く正反對であつた。希臘人の宗敎的禮拜は、決して神の力に向つて祈り求めたのではなくて、美そのものを崇拜し讚嘆し渴仰するものに外ならなかつた。ペイタアが名著『希臘研究』"Greek Studies"（二九五頁）に言つた言葉でいふと、希臘宗敎の中心動機は、全く『肉體の崇拜』the worship of the body にあつたのだ。何がゆゑに希臘人は神靈に人間の體(からだ)を與へたかといふ問に對して、希臘彫刻の祖 Phidias(フイディアス) は答へて、天地間に人體ほど整齊の美を盡くしたものは他に無いからであると言つた。とにかく人間の肉體は靜的美と動的美とを兼ね備へた最も完きものの一つであらうが、先づこの美に着目し之を一

切萬象の首位に置いて、神として肉體美を尊んだのは、全く希臘人を以て祖とする。

山水明媚の美郷に住まつてゐた希臘人は、自然美に對してそれを讃嘆するよりは、寧ろ親しみ馴れてゐた。從つて彼等が熱烈なる努力によつて求めんとしたる美は、主として人體の美であつたとラスキンは言つた（『近代畫家論』第三卷第四篇第十三章、自十二節至十四節。澤村氏譯「美術と文學」三〇三頁—三〇九頁參照）。そこでさきにも言つた如く全く靈肉の一致を信じてゐた彼等は、この肉體美を得んがために精神の修養をもその要素だと考へた。換言すれば肉の美を得ることは、やがてこれがまた靈の向上でもある事を疑はなつた彼等は、『王冠を得んよりは美しき肉體をこそ得まほしけれ』と言つた。また多くの點に於て普通の希臘風の物質的な考へかたと趣を異にしてゐたプラトオンでさへも、肉體美は精神美の表現だと說いて、哲學者の中でも詰らない奴は、先づその面貌が醜である、禿頭の侏儒であるなぞと書いてゐる。すべてかういふ考へかたを、かの中世基督教徒が、五體を臭骸と見做して極力それを蔑んだのに比すると、眞に萬里の差ではないか。

女性美はいふまでもないが、希臘人は、ギンケルマンの美術史に詳しく說かれたやうに、殊に男性美を貴んだ。それも顏面ばかりでなくて、四肢五體凡ての筋肉姿勢の美しさを貴んだ。かの五年に一度の *Olympia*（オリンピア）競技の如きも、今の世にいふ體育とやらの俗惡な動機からではなく、肉體の眞の訓練によつて身體各部の整つた美しい發達を見ようといふ催しに外ならなかつた。わけて男子が十五六歳

の頃、今漸く成熟期に入らうとする折の美しい血色や姿勢を、希臘の人は何よりも貴んで、美少年に關する多くの物語を後世に遺した。またスパルタ人の母は、自分の部屋にアポロや Narcissus（ナアシツサス） の美しい彫像を置いて、やがて生れようとする胎兒がそれに似て美しかれよと祈つた。かほどまで肉體の美を貴んだればこそ、男性の美はフィディアス、女性の美は Praxiteles（プラクシテレス） の作品に於て、希臘の彫刻は世界の藝術史上眞に千古の偉觀をとどめ得たのである。

さてこの肉の美を崇拜する異教思潮の特色が、如何に力强く現代藝術の根本を動かしてゐるかは、今更ここに說くまでもなからう。その幾多の實例に至つては到底一々之を擧ぐるの煩に堪へない。かつて自然派時代の人が醜を見た所にさへ、今の新しい藝術家は更に深くその奧に潜む內部の美を見ようとするではないか。自然のうち眞に全く醜なるものは一つも無いと言つた Rodin（ロダン） の如き、即ち固より此精神の人であつたらう。彼が彫刻は人體の各部に溢れたる生命の力をとらへて、先人の未だ曾て氣づかなかつた運動の美を、筋肉や關節のうちに表現しようとした。元來ロダンにとつては、生きてゐるといふ事それ自らが既に美なのだ。ところがこの生命の現はれてゐるのは單に顏面の表情ばかりでなく、全身すべての筋肉運動にその表現がある。だから彼はすべての肉の運動美を現はして、之によつて意志、思考、感激、興奮、情熱、想像等一切の精神活動を、自然のままに現はし得たのである。

またこれはずつと古い話になるが、吾々は如何にして、人生の脈搏のうちから最高の美の感覺を以て見られ得る凡てのものを見る可きだらうか、と云ふ問に對してそは藝術だ、と答へた英吉利のヲルタア・ペイタア（讀者は先づ彼が『文藝復興』の『結論』といふ一文を精讀せられよ。なほかれの自叙傳とも見らるべき"Marius the Epicurean"にも同様な思想が見られるが、この方は單に希臘風の美的快樂主義でないもつと複雜な思想が、殊にその結末の方に出てゐるから、また別の議論を要すると思ふ。）はいはずもがな、このペイタアの哲學をば實現し具體化したる Oscar Wilde の一生とその藝術も、ひろく讀者の知らるる通りかの耽美運動の源であつた。ワイルドはあらゆる肉感の美を漁り、刹那の享樂を追うた揚句、遂に獄中の告白録に、われは我が生命の眞珠を酒杯のうちに投じ、笛の音につれて花咲き亂るる道を歩んだのであると自ら語つたではないか。殊にかれの小說『ドオリアン・グレイ』"Dorian Gray"にあらはれた新希臘主義の思想のごときは、要するに官能を以て靈性の根本なりと見、本能そのものが即ち精神であり靈魂であつて、二者は全く合一したる存在を有することを示したものである。またかの D'Annunzio を見ても、彼は明らかに最も著しく靈肉の一致を信じた藝術家である。彼が純然たる生理の根柢から人生を解釋して、美を感受する人であることは『快樂兒』"The Child of Pleasure"や『死の勝利』"The Triumph of Death"のやうな作を繙いた人の誰しも首肯する所であらう。Arthur Symons（"Studies in Prose and Verse"のうちダンヌンチオ論參照）の評語を借りて言へば、ダンヌンチオにとつては、美は現實世界における最も現實的なもので、視たり觸れたり聽いたりする所に、また吾々の

情熱や渇仰のうちに、または個性の滿足を探求する執着のうちに、美を創造することが卽ち生の最も大切なる部分であるのだ。（ダンヌンチオの傑作で既に廣く日本の讀書界に行はれた石川戲庵氏譯『死の勝利』の如き、この耽美的肉的な希臘風の快樂主義をあらはした詞句は篇中の隨處に見られる。試みに石川氏の譯本五七一頁、六〇四頁より六〇七頁まで、六一六頁より六一七頁までなどの部分を飜し見られよ、思半ばに過ぐるものがあらう。）

なほ最近の例をいふならば、佛蘭西の詩壇にいま異教主義（ペイガニズム）の使徒だと呼ばれる Pierre Louys（ピエル ルイ）が、古代希臘の美的生活を追慕してその la grande sensualité をなつかしみ、希臘諸神を讃してその美と力と藝術とを頌する心も、卽ちみな此傾向の一面ではないか。また露西亞の猶太人で繪畫と舞臺裝飾に『色彩の抒情詩人』と呼ばれ、最近三四年西歐の藝苑を驚かしてゐる Leon Bakst（レオン バクスト）の藝術は、全く彼の希臘研究（特にホオマア研究）から出たものである。在來未だ嘗て見られなかつたやうな大膽な奇拔な色彩の配合に、躍動する生命の力を託し、觀者をしてその强烈な刺戟に醉はしめずんば已まないのが彼の作の特色である。衣裳や背景に使つた毒々しい色彩の絕叫が、一種の symphony をなして銳く官能に迫る特色は、かれが確かに最近藝術界に於ける色彩の革命者を以て目せられる所以である。

（參考）　希臘文明の近代に及ぼした影響を論じたものでは、下の書は一讀に値する。

"What Have the Greeks Done for Modern Civilization?" The Lowell Lecture of 1908—1909; By John Pentland Mahaffy. (G. P. Putnam's Sons, 1909)

これは詩と散文、建築彫刻、繪畫音樂、科學、政治法律哲學宗教等にわけて論じてある。また

"Heralds of Revolt, Studies in Modern Literature and Dogma". By William Barry. (Hoddes and Stoughton, 1909)

の終の三章　Chap. IX. Neo-Paganism. Chap. X. Later Day Pagans, Chap. X. Friedrich Nietzsche.

なども參考になるだらう。但し私の所論は、少しもこれらの書に負ふ所は無い。

第六　EPILOGUE

現代文學の新潮

現代藝術の思潮——生活の愛慕と享樂——ヒュウマニスト——最近の佛蘭西文學——過去の人ピエエル・ロティ——新傾向——懷疑厭世の舊思想——實行的努力——人生の實際的傾向と文藝の接觸——新傾向の代表作——家族主義——自我主義と共存主義——祖先の信念に歸ること——『人生派』の文藝——クロオデルの絶叫——その詩風——『この派』の諸家——ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』——加特力教復活——希臘戰士の生活

'Le sage n'a qu'une croyance : soi-même ; le sage n'a qu'une patrie : la vie.'

—Remy de Gourmont, *Une Nuit au Luxembourg*, p. 155.

賢人はただ一の信仰を有す、そは自己なり。賢人はただ一の祖國を有す、そは人生なり。（レミ・ドゥ・グウルモン）。

I tell you that as long as I can conceive something better than myself I cannot be easy unless I am striving to bring it into existence or clearing the way for it. That is the law of my life.

That is the working within me of Life's incessant aspiration to higher organization, wider, deeper, intenser self-consciousness, and clearer self-understanding.

——Shaw, *Man and Superman*, Act III. (p. 129)

元來僕は自分より好（よ）いものを考へ得られる間は、それを生み出すか、乃至はそれがために途を開拓（ひら）くやうにつとめなければ心の滿足は得られない。それが僕の一生の法則、『生』の絶えない渴望の、僕の心の中に働いてゐる姿なんだ、絶えず一層高い組織、一層廣い深い强い自己意識、一層明瞭な自己理解に到達しようと足掻いてゐる『生』の、僕の心の中に働いてゐる姿だ。

——ショオ『人と超人』（細田氏譯二九二頁）

現代藝術の特色は之を歷史的に考へれば、つまり基督教思潮に對する異敎思潮の勝利に他ならない。靈肉の間に何等の分裂不調和を見なかつた古代希臘の人がしたやうに、現在の人生に對する熱烈なる愛慕と執着とを以て、向上し精進しようとする自我の努力がその根柢をなしてゐる。さう考へて見ると、嘗てニイチェが說いた力の慾望（ヸルレ・ツウル・マハト）、いまのベルグソンがいふ生の躍進（エラン・ヸタル）、ショオのいふ生の力（ライフ・フォオス）、或はまたオイケンが精神生活のための奮鬪 Kampf um einen geitigen Lebensinhalt を說く活動說（アクテイヸスムス）、これらはみな所說の內容に多少の差こそあれ、その間互に一脈の相通ずるところあるは否定すべからざる事實であると思ふ。

現代人の心は、レミ・ドウ・グウルモンの言葉で言へば、人生そのものの爲に人生を愛するもの

l'amour de la vie pour la vie elle-même である。即ち彼等は飽くまでも人生を肯定せんとするヒユウマニストである。ヒユウマニストであるが故に個人主義者であり、自我主義者であり、享樂主義者である。殊に靈と肉との合一を信ずる彼等は、精神生活の充實を求むるがために肉の歡樂を求めてやまない。その鋭敏な官能の力によつて生活內容を豐富にすべく、絶えず强烈の刺戟を漁り瞬間の本能滿足を求めるのも畢竟これがためである。ペイタアの名高い言葉を借りて言へば、『常に硬い寶玉のやうな焰を以て燃燒し、歡喜を持續すること』'to burn always with this hard, gemlike flame, to maintain this ecstasy' これが即ち現代の人々の得んとする生活である。そしてかくの如くして出來た花やかな豐富な生活のリズムを、かつて原始時代の人が試みたやうな自然と無邪氣とを以て、之を言語に或は畫布の上に表現したものが即ち現代の藝術である。まだ血の燃えてゐる心臟をその儘畫布の上へ投げ出したやうなのが後印象派（ポスト・イムプレツシヨニスト）の繪畫だとすれば、ロダンの彫刻も、Strauss（シユトラウス） や Debussy（ドウビユツシイ） の音樂も、Craig（クレイグ） の舞臺裝飾も、Nijinsky（ニジンスキイ） 等の露西亞舞踊も、本然主義（ナチユラリズム）の詩人 Saint-Georges de Bouhélier（サン・ジヨルジユ・ドウ・ブウエリエ） が詩集『熱烈なる人生の歌』"Chants de la Vie Ardente" も、英雄讃美の詩も、ひとしく皆靈肉合一の生命力が產み出したる新藝術ではないか。またマアテルリンクでも、Verhaeren（ヹルハアレン） でも、H. G. Wells（エッチ・ジ・エルズ） でも、ゴルスワアジイでも、Régnier（レニエ） でも現代詩文界の巨匠は、色々の意味に於てみな先づ第一の眞のヒユウマニストではないか。三千年このかた歐洲文明の根柢をなしてゐた澎湃

たる希臘思潮の流が、前世紀末から今世紀にかけて急にまた力強く色あざやかに現はれて、そこにこれらの新異教主義(ニオペイガニズム)の藝術を出したのである。

私は現代文學のこの新潮を最もよく代表せる一例として、最近佛蘭西の文壇にあらはれた新傾向に就いて一言しよう。

故國の風物はいふまでもない、日本や支那や印度の景情を描いては、かの精緻でしかも花やかな、人を醉はさなければ止まない才筆の裏に、いつも限りなき憂愁の思を託してゐた Pierre(ピエエル) Loti(ロテイ) の如き人さへ、外國ではとにかく、佛蘭西ではいま既に過去の人となりつつある。歐洲最大の文豪として稱揚された昨日(きのふ)にくべらて、今は彼が稀世の名文も新時代の人の胸には何等の響を傳へなくなつた。今日佛蘭西の年わかい教育ある智的階級卽ち jeunesse intellectuelle を代表する思想は、もう少しも厭世とか悲哀とかの色を帶びてゐない純粹な optimism になつてゐる。熱烈な生の要求を基礎とし、强大な國民的民族的勢力を未來に對する理想として、勇往邁進しようといふ雄々しい態度である。懷疑の雲を拂ひのけて、自己を信じ人生を信じて進まうとする古代の希臘人の樂天觀である。歷史を辿つて考へて見ると、十九世紀の間こそ佛蘭西の思想は、いかにもあの Maupassant(モオパッサン) 時代の自然主義の餘毒とも云ふべき憂愁悲觀の雲に蔽はれ、『世紀病』と呼ばれた厭世思想の惡夢に魘はれてゐたが、あれは今日ではもう Taine(テイル) や Renan(ルナン) と共に遠い過去のものとなつて、二十世紀時代の佛蘭西の新

思想は、寧ろその以前卽ち十八世紀ごろのあの甚だしく貴族的な思想、花々しい勝利者の態度に歸らうとしつつあるのだ。佛蘭西文明の最も光榮あるクラシック時代の理想にあこがれ、彼等はいまこの貴い傳說に新しい生命を見出さうと努力しつつあるのだ。人生そのものを肯定し、實行的努力を生活の眞諦と考へるに至つた。今から二十年も前には殆ど痴人の囈語だと目された愛國(パトリオテイスム)の說さへ、今日ではかれらが滿腔の熱誠をこめたる絕叫となつてゐる。かういふ有樣で、先づ實行生活そのものに對する愛と享樂とから成立つ希臘的現世主義が、新時代の作品の中心動機 Leitmotiv であると見るべきだ。從つて文藝は今や益々人生の實際的方面に密接し來つて、政治軍備殖產工業などの當面の問題と聯關し、はては體育競技や航空機の競爭に至るまで、民族のあらゆる生命活動の現象に相卽不離の關係を持つに至つたのが最近の現象である。これといふのも畢竟、かの古來の基督教や或は哲學者が言つた、人生の目的とか意義とかいふ空疏な抽象的觀念には目もくれず、直接におのれの生命力の全部を提げて、眼前刹那の生活に侵入し執着し、享樂し翫味しようといふ希臘的のヒユウマニズムが、その基をなしてゐるのである。現在生活そのものに對する熱誠眞摯なる愛慕が、その根本動力である事は言ふまでもない。

勿論今日と雖もまだ、前代の遺孽を以て目すべき深い暗愁の色を帶びた作が、相當の名聲を博してゐる例も無いではない。たとへば昨年(一九一三年)五月に出た Octave(オクタアヴ) Mirbeau(ミルボオ) の『野犬』"Dingo"

などはその一例で、これなどは矢張り純粹の厭世主義、破壞主義また極端な個人主義の所產である。
しかしこれなどとは全く正反對の思想をあらはしたる下の如き最近の諸作を見よ、

Henry Bordeaux 作、『家』La Maison（一九一一年）
Maurice Barrès 作、『靈感の丘』La Colline inspirée（一九一三年）
Paul Adam 作、『ステファニイ』Stephanie（一九一三年）

これらは三つとも皆昨年あたり佛蘭西の文壇を賑はした名作で、また實際この新時代を代表する作家と作品とである。どれを見ても人生の實行的方面に對する熱愛と享樂の態度が明らかに見られると共に、歡喜と光明とが全篇に溢れてゐるのが特色だ。殊にボルドオの『家』などは、以前からこの作者獨特の主張である家族主義の思想を基としたもので、さきの自然派時代の暗澹たる個人主義の思想とはちやうど正反對を行つたものである。なほ家族主義と云へば、モオリス・バレスの『根引されたるもの』"Les Déracinés," ブウルゼエの『舍營』"L'Étapé," Estamnié の『酵母』"Le Ferment" など、これら近年の名作は個人の責任と義務とを重んじ、家族の連帶共存を中心思想としたものに他ならない。これらは上に述べた愛國主義と共に、現代新人の實生活に對する熱烈の愛が、具體的に顯現した當然の成果であると見るべきだらう。
茲に注意すべき事は、かの偏狹固陋な利己主義ならばいざ知らず、苟も眞の個人主義の自由な活動

ならば、それは決して社會的民族的共存主義(ソリダリテイ)と相容れないものではない、否な寧ろ積極的に自我中心の努力をしてこそ、それがまた自ら家族のためであり、國家のためであり、一般人類のためにもなるのだ。換言すれば己れの全力を發揮して自我の滿足を得ようとする事それ自身が、やがてまた熱情を以て同胞のために盡くす所以に他ならないので、眞の個人主義と利他主義との契合點は全く此處に存する事を思はねばならぬ。それは人間一般の天性が社會的(ソシアル)なものであり、狹い自己の小天地に立籠つて孤立した自己を守ることが、決して自我に滿足を與ふる所以でないといふ確固たる事實がある以上、一點の疑をさしはさむ餘地のないことである。にも拘はらず、さきの自然主義時代の人には、極めて睹易きこの論點を誤解した人が多かつたのである。

さてこの潑溂たる生氣に溢るる實行生活即ち活動の前には、一切の懷疑といふものが先づ一掃せられなければならぬ。始終疑惑の雲にとざされてばかりゐた Hamlet(ハムレット) のやうな男に、遂に何の強い實行(アクシヨン)が見られようぞ。即ち人には活動すべく先づ堅固なる何等かの信念がなくてはならぬ。勇ましく『我は信ず』credo と言ひ得る人にして、はじめて實行の人であり得るのだ。そこでさきの自然派の懷疑時代を去つて、今や新思想の時代に入つた佛蘭西の新人は、先づ第一に、彼等の祖先が千有餘年間それを基礎にして活動してゐた其信念に歸ること、retour aux croyances ancestrales を必要とした。この信念は實に單純である、まことに子供のやうに單純である。が、その單純なところにこそ強

い活動の力が籠つてゐるので、以前の懐疑時代の人たちのやうに、ただ屁理窟ばかりを列べてゐては疑惑を益々深くするばかりで、強い實行力の出やうがないのである。そしてかういふ信念を基礎として生れた藝術こそ、即ち最近文學の新潮を代表する人生派 L'Ecole de la Vie の作物で、新詩人 Charles Péguy(シャルル ペギイ)をして、一躍佛蘭西詩壇の一方に雄視せしめた『ジャヤヌ・ダルクが慈悲(めぐみ)の不可思議』"Le Mystére de la Charité de Jeanne d'Arc" と、『聖なる群童の不可思議』"Le Mystère des Saints innocents" の二大詩篇と、また最初から獨逸の方で頻りに持囃された Paul Claudel(ポオル クロオデル)が『新世紀を祝する五大頌詩』Cinq grandes Odes suivies d'un Processional pour saluer le Siéc'e nouveau" とは、共にこの壯烈の人生派の主張を宣言する獅子吼であつた。

クロオデルはこの詩篇に於て下のやうに叫んだ。

'O mon âme, il ne faut concerter aucun plan! O mon âme sauvage, il faut nous tenir libres et prêts, comme les immenses bandes fragiles d'hirondelles quand sans voix retentit l'appel automnal! O mon âme impatiente, pareille a l'aigle sans art! Comment ferions nous pour ajuster aucun vers? A l'aigle qui ne sait pas faire son nid même? Que mon vers ne soit rien d'esclave! Mais tel que l'aigle marin qui s'est jeté sur un grand poisson, et lon ne voit rien qu'un éclatant tourbillon d'ailes et l'eclaboussement de l'ecume!'

あゝわが精神(こゝろ)よ、何等の成案(プラン)に諮(はか)ることなかれ。あゝ粗野なるわが精神(こゝろ)よ、自由なれ、常に身構へ

せよ。さながら聲なき秋の招きの響くとき、碎け易き燕の大群の飛ぶが如くなれ。ああわが氣早なる精神よ、何の智巧もなき大鷲の如くなれ。或詩を製作せんため、吾等は如何にかすべき。おのが巣を營むすべさへ知らざる大鷲の如くに。わが詩は何者にも屈從することなし。されどかの海上の大鷲が、突如として大魚を拉し去るとき、人は輝ける翼の旋風と波のとばしりとを見るのみならず。

天空を行く猛鷲の自由なる生命力の迸發をその儘に詩にしよう、在來の型を破つて全く藝術的本能と直覺とで行かう、といふこの大膽な宣言は、よく人生派が製作の中心動力を喝破したものである。第一かれの verset といふ詩體が示すやうに、それは殆ど何等の拘束を受けない自由な散文であつて、ただ呼吸の切れ目に段落があるばかりである。さてかういふ主張は、クロオデルの詩と戯曲との外に、詩人ではまた Charles Le Goffic, Henry Bataille, Porto-Riche, Francis Jammes 等にあらはれ、散文では既に述べたモオリス・バレスをはじめ、André Gide, Alphonse de Chateaubriand, André Suarès, René Boylesve, Marguerite Audoux, Charles-Louis Philippe, Mme. Colette 等の作に、その著しき特徴を發揮してゐる。もとより十人十色、毫も模倣踏襲のあとなき銘々獨創の個性を發揮した天才ではあるが、とにかく彼等が原始的な希臘人の古へに歸つて人生を享樂し、之に向つて 'Yes' を唱へ、未來に希望を抱き意志の自由を信じ、自己の力を疑はず、訓練に服しながら而も自由に、勇猛精進しようといふ點に於てはみな一致してゐる。かれらは、さきの自然派の人々が人生

に對して客觀的傍觀的態度を執り、『人生の斷片』tranche de vie（『近代文學十講』三一〇頁參照）を描くと言つた、あのやうなまだるつこい行きかたをしない、直ちにこの流動し躍進せる絶えざる生命そのものの核心に突入して、さながら大鷲が海中の魚を拉し去るやうに、直ちに現實の中心生命に肉薄しようといふ熱烈な態度を執るものだ。Henri Franck の言葉でいへば、『われは生の激流に身を投じて泳がう』'Je nagerai dans l'eau violente de la vie' といふのが、まさに此派の根本的精神である。

私はまだここに現代歐洲最大の作家と仰がれてゐる Romain Rolland の名を擧げなかつたが、彼は言ふまでもなくこの佛蘭西人生派の最も顯著なる大立者の一人である。さきに書肆丸善がこの人の大作 'Jean Christophe' の英譯四冊を、二十世紀最大の小說として廣告してからは、わが國にも既に多數の愛讀者があらうと思ふが、あの小說に描かれた Beethoven の樂天觀こそ、實に希臘に發した異教思想の結晶であると私は見てゐる。悲痛なる運命に屈せずに、ひたすら雄々しい態度を以て現在人生の奮鬪を續けよう、人は說なぞと云つてゐては駄目、ただ運命に立ち向ふその態度——心構へが肝腎だ、悲しみに打勝つてのちの歡喜 Durch Leiden Freude, これが即ち本當の人生味のあるところで、Eroica, の音樂が即ちそれではないか。この作者の寫したベエトホオヱンは、飽くまで人生のありの儘を觀察して、その悲痛暗黑の相に雄々しくも面を向けながらなほ自己の信念を失はず、人生を肯定し正面から立ち向ふ戰士の態度を取らうとしたもので、『生』のための奮鬪といふことがこの

大作の中心思想である。（さきに述べたクロオデルの大鷲の比喩をはじめて讀んだとき、私はこの『ジャン・クリストフ』のなかの、下の言葉を想ひ出したことがある。L'art pour l'art! ....Une foi magnifique! Mais la foi seulement des forts. L'art! Etreindre la vie; comme l'aigle sa proie, et l'emporter dans l'air, s'élever avec elle dans l'espace serain! ....Pour cela, il faut des serres, de vastes ailes, en un coeur puissant.——*Jean Christophe a Paris'* p 134. これはほんの參考に書きつけておく）。

最後に私は、最近歐洲思想界の一隅にあらはれてゐる新加特力敎（また加特力復活とも云ふ）のことに就いて一言しておかねばならぬ。この現象は獨り人生派の諸家に於けるばかりでなく、さきの象徴派時代の Huysmans 等の時分から旣に著しかつたので。又これは佛蘭西のみならず、英吉利の方でも例へば故 Francis Thompson が神祕思想を歌つた詩篇が、近頃になつて非常に持囃されてゐるのも、一つはこの加特力敎の思想があるからだ。

ところがこれら新思想家、特にこの頃の佛蘭西文學に起つた加特力主義といふものは、昔からのとは甚だしく趣を異にした全く異敎化されたる基督敎である。極めて實際的な現世的な信仰であつて、つまりは人生の實際的方面に於けるかれらの信念の根柢をなしてゐるのだ。かれらの宗教信仰といふのは、或場合にはつまり一種の愛國心であり、神は祖國の擁護者だと見做されてゐるのだ。少しく極端に言ふとかれらの神と言つてゐるものは、彼等の實生活における力の慾望を神に寄せて、之を concrete にした希臘風のものに外ならないのだ。かういふことに關してはいつも現代に於ける最も

大膽な批評家であるレミ・ドゥ・グウルモンの論文集『思想研究』"La Culture des Idees" のうちに、私は嘗て下のやうな言葉を讀んだことを想ひ起すのである。

> Le catholicisme est le christianisme paganisé. Religion à la fois mystique et sensuelle, il peut satisfaire, et il a satisfait uniquement, pendant longs temps, les deux tendances primordiales et contradictoires de l'humanité, qui sont de vivre à la fois dans le fini et dans l'infini, ou, en termes plus acceptables, dans la sensation et dans l'intelligence.
>
> ——Gyurmont, *Culture des Idées*, p. 136.

加特力教は異教化されたる基督教である。神祕的なと共に感覺的な宗教であつて、從つて人生の二つの根本的な而も相背馳せる傾向を滿足させ得るし、また長いあひだ滿足させて來た。卽ちその二つとは、同時に有限と無限とのうちに生きること、或はまたもつと都合のいい言葉で言へば、感覺のうちにと智のうちにと兩方に生きることである。

由來加特力教の信仰は肉感的傾向を帶びてゐるために、近代人の鋭敏なる官能をそそり易い。ところが肉的なと共に濃厚な一種の神祕的傾向を帶びてゐるのが、また新異教主義の特色だから、二者がここに相一致して近頃の思想界の勢力となつた事は當然の結果である。

之を要するに二十世紀劈頭の文藝思想は、自然主義以後の反動の勢をうけて、今しきりに強烈なる自我の創造と現在生活の充實を要望してやまない。獨逸の言葉で所謂生命の火（レエベンスフオイエル）に燃ゆるもの、ベルグ

ソンが所謂創造的進化の世界に不斷の向上をはかり、勇猛なる不退轉の努力に自己の心境を置かうとするものである。肉的に偉大なる英雄が、やがてまた靈的生活の崇高を伴うて、二者の間に渾然たる一致あり調和ある生活を見出すに至つて、ここに眞にわれらをして希臘英雄時代の戰士のおもかげを偲ばしむるものがある。

あゝかくてまた藝術の新潮は、花やかな異教時代の昔に歸つて行くのである。

文藝思潮論終

苦悶の象徴

The colours of his mind seemed yet unworn,
For the wild language of his grief was high,
Such as in measure were called poetry.
And I remember one remark which then Maddalo
made.
He said: "Most wretched men are cradled into
poetry by wrong;
They learn in suffering what they teach in
song."

—Shelley. *Julian and Maddalo.*

『苦悶の象徴』目次

第一　創作論……一三五
一　二つの力……一三九
二　創造生活の欲求……一四〇
三　強制抑壓の力……一四三
四　精神分析學……一四九
五　人間苦と文藝……一五五
六　苦悶の象徴……一六一
第二　鑑賞論……一七六
一　生命の共感……一七六
二　自己發見の喜び……一八三
三　悲劇の淨化作用……一八九
四　有限の中の無限……一九三

五　文藝鑑賞の四階段……一九六
六　共鳴的創作……二〇三
第三　文藝の根本問題に關する考察……二〇七
一　豫言者としての詩人……二〇七
二　理想主義と現實主義……二一四
三　短篇「頸かざり」……二一五
四　白日の夢……二二〇
五　文藝と道德……二二六
六　酒と女と歌……二三〇
第四　文學の起源……二三一
一　祈禱と勞働……二三一
二　原始人の夢……二三四

第一　創作論

一　二つの力

鐵石相打つところに火色が散るごとく、奔流岩に堰かるるところに飛沫が紅霓をなすと同じく、二つの力の衝突するところに、美しく派手やかなる人生の萬華鏡、生活の種々相が展開せられる。"No struggle, no drama" とはブリュヌティエエルが戯曲を解釋して言つた言葉であるが、なにもそれは劇(ドラマ)とのみは限らない。方向を異にした二つの力が相觸れ相打つ葛藤(ストラッグル)が無ければ、吾等の生活、吾等の存在は根本に於て意義を失ふのである。生の苦悶あるが故に、また戰の苦痛あるが故に、人生には生き甲斐があるのだ。かの權威に服從し因襲に束縛せられて羊のごとく從順なる醉生夢死の徒や、利害の打算に眼(まなこ)くらみ物慾に頤使せられて、自己が『人』としての全的存在を忘れ果てた俗漢などが未だ曾て感得し味到し得ざる心境――人生の深き興趣は、要するに强大なる二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱の所産に外ならない。わたくしは文藝の基礎をこの點に置いて解釋して見たいと思ふ。さ

らば二つの力の衝突とは——

二　創造生活の欲求

電光の如く奔流のごとく、驀地（まつしぐら）に、殆ど盲目的に突進してやまざる、生命の力（ラ・フオルス・ド・ヸイヴル）を人間生活の根本なりと見ることは近代の思想家の多くが一致するところである。かの變化流動を現實そのものなりと觀じて創造的進化を說いたベルグソンの哲學は勿論、またショオペンハウエルの意志說にも、ニイチェの本能論超人說にも、バアナアド・ショオの戯曲『人と超人』に現はされた『生の力（ライフ・フオオス）』にも、エワアド・カアペンタァが人間生命の永遠不滅の創造性を認めた宇宙的自我の說にも、或はまた近くはバアトランド・ラッセルが『改造の根本義』に唱へた衝動（インパルス）の說にも、ひとしく皆かかる『生命の力』の意味が窺はれるではないか。

凝固停滯を厭ひ妥協降服を避け、自由と解放を求めてやまざる生命の力は意識的にもまた無意識的にも、絕えず內よりわれら人間の心胸を熱しつつ、その奧深くに烈火の如くに燃え上がつてゐる。この炎々たる焰を外から八重九重に蔽うて、巧みに全體を運轉させてゐるからくりが卽ちわれわれの外的生活であり、經濟生活であり、また社會と云ふ有機體の一員としてのメカニズムの生活である。これを譬ふれば、生命の力は機關車のぼいらあのなかに在つて、猛烈なる爆發性、危險性、破壞性、突

進性を有する蒸汽力のごときものだ。この力を外部から機械の各部分が制壓しつつ束縛しつつ、而もまた同時にその力によつて總ての車輪を廻轉させてゐるのである。かくして機關車は、要せられたる速度を以て一定の軌道の上を進轉して行く。蒸汽力そのものの本質は飽くまでも利害の關係を絕し、道德や法則の軌道を離れて、殆ど盲目的に突進し跳躍せんとする生命力に外ならぬ。換言すれば、此場合內部から出る蒸汽力の本質的要求は、機械の他の部分の本質的要求とは明らかに正反對の方向を取つてゐるのである。機關車の內部生命の力である蒸汽力は爆發せんとし突進せんとして、自由解放を求むる不斷の傾向あるに反し、機械の外的な部分は都合よくその力を利用し、之を制壓し拘束することによつて、本來は重力によつて停止せんとする車輪をも、この力によつて軌道の上を走らしてゐるのである。

われらの生命は天地萬象に普遍なる生命である。しかしこの生命の力が或個人に宿つて、その『人』を通じて現はされる時、それはやがて個性となつて活躍する。內に燃ゆる生命の力が個性として發揮せられるとき、即ち人々が自己の個性を表現しようと云ふ內的要求に迫られて動くとき、そこに本當の創造創作の生活がある。だから自己生命の表現はやがて個性の表現であり、個性の表現は即ち創造の生活であると言ひ得られよう。人間が眞の意味に於て『生きる』と云ふこと、換言すれば生の喜び（ジョイ・オヴ・ライフ）と云ふものは即ちこの個性の表現、創造創作の生活をするところに見出されるのである。若し個人が

皆銘々の個性を全然否定してこれを放棄し抑壓するならば、全く同じやうに造られた泥人形を列べたのも同然で、おなじやうなものをさういくつも生かしておく必要はないわけだ。社會全體から見ても個人が銘々自分の個性を充分に發揮するのでなければ眞の文化生活が成立しないことは、既に多くの人々が説きふるしたことである。

かくの如き意味に於ける生命力の發動、卽ち個性表現の內的欲求は、われわれの靈と肉との兩方面に於て、種々さまざまの生活現象となつて現はれる。卽ち時にそれは本能生活となり遊戲衝動となり或は强烈なる信念となり、高遠の理想となり、學徒の知識慾となり、また英雄的征服欲望ともなる。更にそれが哲人の思想活動となり詩人の情熱、感激、憧憬となつて現はれる如き場合には、最も强く最も深く人類を動かすのである。そしてかくの如き生命力の顯現は利害の念を超絕し、善惡正邪の價値判斷を離れ、道德の批判因襲の制縛を脫して、ひたすらに飛躍し突進せんとする傾向を持つところに特徵がある。

三　强制抑壓の力

然しながら人間の生活はさう單純に一本調子には行かない。自由不羈ならんとする生命力をして十分に飛躍せしむべく、また思ふ儘に個性を發揮せしむべく、われわれの社會生活は餘りに複雜であり

人間そのものの本性もまた餘りに多くの矛盾を内に藏してゐる。
　われわれが社會といふ大きい有機體の一員として生活するためには、必然的にその强大なる機制(メカニズム)に服從しなければならぬ。われわれは自己の内面より迫り來る個性の要求卽ち創造創作の欲望の上に、絕えず何等かの壓迫强制を甘受することを餘儀なくせられる。殊に近代社會の如く制度法律軍備警察等のあらゆる制壓機關が完備し、また一方には生活難といふ恐るべき威嚇が存在する以上、われわれは意識的にも無意識的にもこの抑壓から脫するわけには行かない。個人の自由を滅殺せんとする國家至上主義の前に首を垂れ、創造創作の生活を否定し去らんとする資本萬能主義の膝下に跪くくらゐは、尋常茶飯のことと心得て居らねば、一日も生きてはゐられないのが實狀だ。
　内に動かうとする個性表現の欲望があれば、これに對して外から絕えず社會生活の束縛强制が迫る。二つの力の間に苦しみ藻掻ける狀態が卽ち人間生活である。これは今日の勞働――單に筋肉勞働ばかりでなく、口舌勞働、精神勞働、何でも總ての勞働の狀態に就いて考へれば明白である。勞働を快樂だとしたのは遠い昔の話であつた。規則や法規に縛られず生活難に追はれず、資本主義、機械萬能主義の壓迫を受けずに、銘々が自由に個性を表現する創造生活の勞働を營むことを得たのは、過去の世か然らずんば一部の社會主義論者の夢想したユウトピアの話である。一個の花瓶にも一口(ふり)の短刀にも、自分の心血を注ぎ自己生命の力を捧げて、神に奉仕する如き敬虔な心持で造ることの出來た社

會狀態は、今日の實際に於て絶對に不可能なことだと見ねばならぬ。

今日の實際生活から言へば、勞働は卽ち苦患である。個人から自由な創造創作の欲望を奪ひ去つて、壓迫强制のもとに身動きならぬ生活をさせることが勞働である。生活難の脅威を武器とせる機械や法則や因襲の强力の前に、人間は先づその人間らしき個性生活を棄てて、多かれ少かれ法則や機械の奴隷となり、甚だしきに至つては自ら機械の化物とならなければ棲息し得られない狀態となつた。八字髯を貯へた教育家なぞと云ふ教育機械もあれば、銀行や會社には風采が頗るハイカラに出來上がつた計算機械も多い。見渡した所、勞働を享樂して居さうな人間は殆ど無いのが今日の有様だ。これでどうして『生の喜び』が見出されよう。

人間が外から迫る力によつてのみ動かされる機械の化物となることは、人間としての最大苦痛である。その反對に自らの個性の內的要求に迫られて勞働することは常に快樂であり愉悅である。同じく庭石を運び樹木を植ゑかへる庭造りの勞働も、傭主の命令や或は生活難の脅威に迫られて賃銀のために働く植木屋の職人に取つては苦痛である。しかし同じ仕事を、金持の御隱居が自己內心の要求のためにする場合に、それは明らかに快樂であり、道樂である。かくて勞働と快樂との間には、仕事そのものの本質的差異があるわけではない。換言すれば勞働そのものが苦患あるのではなくして、苦痛を與ふるものは畢竟外部からの要求卽ち强制抑壓に他ならないのである。

現代に生きるものの生活は、街頭に荷車を曳いて走る駄馬と同樣だ。外面的に考へれば、あれは確かに馬が車を曳いてゐるに相違なからう。馬の方でもまたいつぱし自分が車を曳いてゐる氣かも知れない。ところが實際はさうでない。あれは馬が車を曳いてゐるのではなく、實は車の方が馬を押して走らしてゐるのである。車や轅の制壓が無ければ、馬はあんなに汗水垂らして喘ぎながら走る必要は無いのである。今の世に朝から晩まで俥を驅つて飛び廻はり、一かど活動家の積りでゐる敏腕家なぞと云ふやからも、實はかの憐むべき駄馬と相距る一歩の生活を營んで、而も自分だけはそれに氣附かず得意でゐるのである。

シルレルがその有名な美的教育論に於て述べたところによれば、遊戯とは勞作者の意向（ナイグング）と義務（プリヒト）とがうまく一致調和した場合の活動である。『人間は遊ぶ場合に於てのみ完全に人間である』（第三卷『遊戯論』參照）。その意味は、人間が自己の内心の要求によつて動き、外的强制を受けない自由な創造生活を指して遊戯なりと見たのである。世俗が勞働を貴しとして遊戯を賤しむ如きは、絶えず强制に甘んずる奴隷生活に痲痺した人たちの謬見であるか、然らずんば專制主義者や資本家が自分等に都合のよい得手勝手な世迷言（よまひごと）に過ぎない。考へても見よ、人間として自己表現の創造生活より貴い生活がまたとあるだらうか。

創造の無いところに進化はない。いつも外的要求にのみ動かされ妥協降服の生活を繰返し、個性表

現の貴さを忘れたものは、千年萬年今もなほ昔と同じ生活を繰返してゐる禽獸の屬だ。自己そのものの生命力を發揮しようともせず、ただ因襲に縛られ傳統に囚はれ、先人の爲すところを模倣して平氣でゐる奴隷根性の人間は、此意味に於て畜生と同列のもので、さういふものを何千萬人集めて見たつて、文化生活は成立しない。

しかし以上の言は單に吾々と外界との關係からのみ言つたものだ。しかし二つの力の衝突は、單に自己の生命力と外部から來るところの強制抑壓との間に起るとのみは言はれない。人間は既に自己そのもののうちに、二つの矛盾した要求を持つてゐる。たとへばわれわれは飽くまで個人として生きたいといふ欲望を持つてゐながら、同時にまた人間が社會的存在物（ソオシャル・ビイング）である以上、家族とか社會とか國家とか云ふものに調和して行かうといふ欲望をも持つてゐる。一方には自由に自己の本能を滿足させたいといふ欲求があると共に、また人間の本性が道德的存在物（モラル・ビイング）である以上、他方にはさういふ本能を抑壓しようといふ欲求をも生ずるわけだ。たとひ外部からの法則や因襲には縛られずとも、自己の道德によつて自己の要求を抑へよう律しようとするのが人間である。われわれは獸性惡魔性とともに神性をも具へ、利己主義の要求と共に愛他主義の欲求をも持つてゐる。その一方を生命力であると云ふならば、他の一方もまたやはり生命力の發現に相違ない。かくの如くにして精神と物質と、靈と肉と、理想と現實との間には絶えざる不調和があり不斷の衝突葛藤がある。だから生命力が旺盛であればあ

るほど、この衝突この葛藤は激烈であらねばならぬ。一方が積極的に進まうとすれば、他の一方は消極的に之を阻止抑壓しようとする。そして進まうとする力はこれはやがてまた抑へようとする方の力と同一であることをも、玆に注意して置かねばならぬ。殊にまた抑壓が强ければ强きに比例して爆發性突進性は益々强烈となり熾熱の度を加へる。兩者は殆ど正比例を爲してゐると見ても可い。少しく極端に言へば、抑壓がなければ生命力の飛躍は無いと言つても差支ないのである。

かくの如き二つの力の衝突葛藤は、内的生活に於ても外的生活に於ても、古往今來すべての人間が經驗するところの苦痛である。たとひ時代の大勢、社會の組織、また個人の性情、境遇の相違などによつて大小强弱の差こそあれ、原始時代より今日に至るまでこの苦痛のために惱まされない人間は殆ど無いわけである。昔の人はそれを『人生不如意』といつて嘆いた。儘ならぬは浮世だともいつた。今の言葉で言へばそれは人間苦であり社會苦であり勞働苦である。獨逸の厭世詩人レエナウはこの苦悶を名づけて世界苦惱（ヱルト・シュメルツ）と云つたが、みな名こそ異なれ、その意味するところの内容は畢竟飛躍突進せんとする生命力が、これに反對した力によつて抑壓されるところに生ずる悶へであり惱みであるのだ。

この苦悶に堪へ得ず或は絶望の極、生を否定し去つて自殺するものの場合の外は、人間はすべて何とかしてこの苦境を脱しこの障碍を切り抜けて突進しようとする。かくてわれらの生命力はさながら

岩に堰かるる奔流の如くに、淵をなし瀬をなして紆餘曲折したる行路を取らねばならぬ。或は馬を陣頭に立てて幾百幾千の敵を切りまくりつつ勇往猛進する戰士の如き辛酸をも嘗めねばならぬ。そこに、生きんとするの努力があると共に、人生の興味も亦生ずるのである。より良き、より高き生活、より自由なる生活を創造すべく人は不斷の努力を續けてゐる。

だから生きるといふことは何等かの意味に於ての創造であり創作である。工場に働くのも、事務所で計算をするのも、野に耕すのも、市に賣るのも、みな等しく自己の生命力の發現である以上、それが勿論ある程度の創造生活であることは否定せられない。しかしながらそれは純粋な創造生活であるべく餘りに多くの抑壓制御を受けてゐる。利害關係に煩はされ、法則に左右せられて殆ど身動きの取れないやうな慘さをさへ見るからである。ところが人間の種々な生活活動のうちで茲にただ一つだけ、絶對無條件に、純一無雜な創造生活を營む世界がある。それは卽ち文藝の創作である。

文藝は純然たる生命の表現だ。外界の抑壓強制から全く離れて、絶對自由の心境に立つて個性を表現し得る唯一の世界である。名利を忘れ奴隸根性を去り、一切の覊絆制縛から放たれて、そこにはじめて文藝上の創作は成立するのである。新聞の月評を氣にしたり、原稿料を計算したりするのとは全く違つた心境に入つて、はじめて眞の文藝作品は出來あがる。ただそれ自己の心胸に燃ゆる感激と情熱とに動かされて、天地創造の朝、神が爲したのと同じ程度の自己表現を行ひ得る世界は、獨り文藝

あるのみだからだ。われわれが政治生活、勞働生活、社會生活等に於て到底見出し得ない生命力の無條件な發現が、茲にのみは完全に存在する。換言すれば人間が一切の束縛や固定化しを離れて、純眞に新鮮に生きることの出來る唯一の生活だ。文藝が人間の文化生活の最高位を占め得る所以もまたこの點に在る。これに較べると他の總ての人間活動は皆われわれの個性表現のはたらきを減殺し破壞し壓迫するものだといつても差支ない。

然らば、わたくしが幾に述べたやうな折衝から來るところの苦悶懊惱と、この絶對創造できるところの文藝とは果して如何なる關係に立つものか。また單に創作家ばかりでなく、その作品を鑑賞する讀者の側からいへば、人間苦と文藝との關係を如何に見るべきだらうか。わたしはこれらの問題に對する自分の管見を述ぶるに先だつて、先づその準備として茲に引用したいのは、最近の思想界に著しい勢力を得た一つの心理學說である。

四　精神分析學

試驗管や顯微鏡をのみ賴みにする研究が必ずしも眞理に到達する唯一の道でないことを知り、[illegible]萬能の夢から醒めようとしてゐる近時の學界には、しきりに神秘的な、思索的な、そしてまた[illegible]分[illegible]的な色彩を帶びた種々の學說が勢力を得るに至つた。わたくしが茲に引用しようとする精神分析

學の如き、科學者の所説としては餘程毛色の變つたものである。

墺多利の維納大學の精神病學教授ジグムンド・フロイドが、ブロイエルといふ醫者と共に、千八百九十五年に　ヒステリの研究』を公にし、次いで千九百年に名著『夢の解釋』を出してよりこのかた、この精神分析の學説は日を逐うて益々多く學界思想界の注意を喚起してゐる。新しい心理學に於けるこの一派の學説は、嘗てダアヰンの進化論が生物學に於て有した地位に等しいとまで言つた人がある(フロイド自身が、この說をコバアニカスの地動說以來の大發見のやうに吹き立ててゐるのは少少恐れ入るが)。それは兎に角として、この精神分析論が着想の極めて警拔なる點に於て、また多くの暗示に富める點に於て、變態心理、兒童心理、性慾學等の研究に一新境を拓いたことは事實であらう。殊に最近數年この學說は單に精神病學のみならず、教育學や社會問題の研究者に影響し、殊にまたフロイドが機智、夢、傳說、文藝創作の心理等に一種の解釋を與へたがため、今日でも文藝批評家の間にもこの學說を應用する人が甚だ多くなつた。そして Freudian Romanticism と云ふやうな奇拔な新語をさへ耳にするに至つた。

新しい學說はこれを無條件に受取るわけには行かない。精神分析學が學界の定說となるまでには、多くの修正を經べく今後なほ多くの歲月を要することであらう。實際わたくしのやうな門外漢の目から見ても、この學說には多くの不備缺陷があり、俄に首肯し難いものがある。殊にそれが文藝作品の

説明解釋に適用せられるとき、最も甚だしく牽强附會の迹を見出すからである。

　フロイドの所説はヒステリ患者の治療法から出發した。彼は希臘のヒッポクラテエス以來今日に至るまで、醫家を手古摺らせてゐるこの不可思議な疾患ヒステリの病源が、患者の閲歷のうちにある心的傷害 Psychische trauma にあることを發見した。卽ち强烈なる興奮性の欲望である性慾——それを彼は libido と呼んだ——が、嘗て患者自らの道德性とか或は周圍の事情などによつて抑壓阻止せられ、そのために患者の內的生活に酷い外傷を受けてゐた。而も患者自らは過去に於ても現在に於ても少しもそれを意識してゐない。さういふ過去の苦悶や痛手は今既に彼の記憶の圈外にさへも逸し去つて、自分にはさういふ苦痛を毫も意識してゐないのである。それにも拘はらず、患者の『無意識』或は『潜在意識』のなかには、この抑壓から受けた痛ましき傷害が內攻してゐて、さながら液中の沈滓の如くに殘つてゐる。この沈滓が現在患者の意識狀態を動かして病的ならしめ、甚だしくそれを擾き亂してゐるのがヒステリの症狀であることにフロイドは氣附いた。

　そこでこれに對する治療の法としては、精神分析法によつて、この病源であり禍根である傷害が患者の過去の閲歷の那邊に在るかを探索して、それを除去し根絕しなければならぬ。卽ち抑壓せられた欲望を自由に發露せしめ表現せしむることによつて『無意識』界の底に殘留せる沈滓を取り拂ふのである。それには催眠術を施して、患者をして過去の閲歷經驗の中これぞと思はれる事件を語らしめる

か、或は巧妙な問答法によつて苦悶の原因を出來るだけ自由に開放的に語り盡くさしめる。つまり今まで抑壓が加はつてゐたのが病源なのだから、その抑壓を取去つて、欲望を今の意識の世界に持出させる。これによつて抑壓が除去されると共に病は治療するといふのである。

わたくしは茲にフロイド教授が公にした一例を引用して見よう。

ひどいヒステリに罹つてゐる年わかい女があつた。その女の過去の閲歴を探ると下のやうなことがあつた。自分を非常に可愛がつて吳れた父親が死んで了つてのち間もなく、その女の姉が結婚した。ところがどうしたものか、この女は姉の夫に不思議ななつかしみを持つて、お互に親しくするやうになつた。固よりそれが戀だなぞとは毫も意識してゐないのである。そのうち姉は病氣に罹つて死んだ。母親と一緒に旅行してゐてこの事を知らなかつた女は、家に歸つてはじめて亡き姉の枕頭に立つた時、ふとかう思つた、姉上が死なれたのだから私は今はあの男(ひと)と結婚が出來るわけだ。

日本では弟妹が嫂(あによめ)や姉婿と結婚することはざらにあるが、西洋でこれは不倫だと見做されてゐる。現に、フロイド教授の國では知らないが、英吉利では近頃まで法律でこれを禁じてゐることが戯曲小說などに現はれてゐる。姉婿に懷かしみ親しみを持つてゐたこの女は、ふと結婚といふ觀念が胸に浮んだとき、社會的因襲の前に跪いて、この欲望を自ら抑壓阻止してしまつたのだ。もとより結婚といふ觀念がうかぶくらゐだから女は姉婿に想を懸けてゐたのだらう。（この派の學者は親子の愛をも性的欲望の變形と見なす。だからこの女は

異性の父の愛がなくなつて後それが姉の夫の方へ移つたのであらう。）。しかし明らかにそれが戀だとは自分にも思つてゐなかつた。そして時が經つと共に女はこのことを全く忘れて了つてゐた。後に激烈なヒステリ患者となつてフロイド教授の診察を受けに來た時には、嘗てさういふ欲望を抱いたことさへも想ひ出せない程であつた。それが教授の精神分析治療を受けてゐる間に、顯在意識の上に呼び返され、非常な情熱と興奮とを以て表現された時、この患者の病は癒えたさうだ。この派の學說では忘却といふことをも抑壓作用に歸してゐる。

フロイド教授の研究が公にされてから、この學說は獨り歐羅巴ばかりでなく、特に米國に於て最も多く學徒の注目を惹いた。佛蘭西ボルドオ大學の精神病學教授レジイ氏に『精神分析論』の著あり、瑞西ツユウリツヒ大學のユング教授は『無意識の心理、性慾の變形と象徵の研究、思想發達史に對する貢獻』を公にし、以前加奈陀トロント大學の敎授であつたアアネスト・ジョオンズ氏は『精神分析論集』（改訂版は一昨年出版）に、夢や臨床醫學や教育心理などに關する研究を集成し、また青年心理の研究で最も廣く我が國に知られてゐる米國のクラアク大學總長スタンレイ・ホオル教授や、或はフロイド氏と同じく維納の醫者であるアアドラア氏などによつて、この學說は更に多くの補足修正を經た。

しかしながら精神病學や心理學から見てこの學說の當否如何は、わたくしのやうな layman の知

るところではない。また精細なる研究に至つては、既に我邦にも久保ドクトルの『精神分析法』や、九州大學の榊教授の『性慾と精神分析學』の如き好著のあることとゆゑ、私は茲に多くを語ることを避けたい。ただ文藝の研究者として、最近に公にせられた[一]アルバアト・モオデル氏の新著『文學に於ける色情的動機』[二]や、ハアヴィ氏が此學說の見地から、米國近代文學に於ける寫實派の翹楚で今は故人となつたハウエルズ氏に加へた批評の書に接し、又昨年學生のために沙翁劇マクベスを講ずるに當つてコ[三]リアットの新論をよみ、そのほか[四]ストリンドベルヒ、ヱルズ等の近代文豪を同じ方法によつて研究した諸家の論文を讀むに及んで、わたくしはそれらの多くが甚だしく偏僻の所說であつたり、或はまた毫も文藝上の根本問題に觸れて居なかつたりすることを遺憾に思つた。そして私が平素考へてゐるところの文藝觀――即ち生命力が抑壓を受けるところに生ずる苦悶懊惱が文藝の根柢であり、そしてその表現法が廣義の象徵主義であることを、いまこの新しき學說を借りて明らかにして見たいと思ふのである。普通の文藝家の所論とちがつて、この心理學說が例の科學者一流の組織的體制を具へてゐるところが私の目の着けどころである。

註（一） The Erotic Motive in Literature. By Albert Mordell. New York, Boni and Liveright. 1919.

註（二） William Dean Howells: A Study of the Achievement of a Literary Artist. By Alxander Harvey. New York, B. W. Huebsch. 1917.

註（三） The Hysteria of Lady Macbeth. By I. H. Coriat. New York, Moffat, Yard and Co. 1912.

註（四） August Strindberg, a Psychoanalytic Study. By Axel Johan Uppvall. Poet Lore, Vol. XXXI, No. 1. Spring Number. 1920.

H. G. Wells and His Mental Hinterland. By Wilfrid Lay. The Bookman (New York), for July 1917.

五　人間苦と文藝

この學派の說に從へば、在來の心理學者がいふ意識と『無意識』(卽ち潛在意識）との外に、別に兩者の中間に位するところの『前意識』Preconscious, Vorbewusste がある。卽ち當人は今記憶してゐずまた意識してもゐないことでも、嘗てそれが自分の體驗の內にあつた以上、何時でも自發的に想ひ起し得るか、或は聯想法などによつて苦もなく意識界に持出すことの出來るものが前意識である。意識を舞臺に譬ふれば『無意識』は恰も奥の方にある樂屋である。その樂屋の中にゐる役者が舞臺へ出て來て藝をしてゐるやうに、無意識の中の內容が意識作用を左右してゐるのである。ただ吾々はそれを氣附かずに居る。氣附かずに居るのは、中間に『前意識』といふ仕切があつて、截然として兩者を區別してゐるからだ。『無意識』の內容をして『意識』の世界へ出でしめないやうに、監視作用をなす

目附役（Censor, Zensur）が儼として境界線上に立番をしてゐるのだ。道德とか因襲とか利害とかから生ずる抑壓作用はこの目附役あつてはじめて出來るので、二つの力の衝突葛藤から生ずる苦悶懊惱は、卽ち心的傷害となつて『無意識』界裡の奧ふかく葬り去られる。われわれの體驗の世界、生活內容のなかには、痛ましきまで多くの心的傷害が隱されてゐながら、而も意識的にはそれに氣附かずにゐるのだ。

然るに意外にもこの無意識心理は驚くべき力を以てわれわれを動かしてゐる。個人としては幼年時代の心理が大人になつてからも有意無意の間に作用して居り、また民族としては、その原始的神話時代の心理が今もなほその民族に影響してゐる。（思想や文學の方の傳統主義はこの心理から研究することが出來よう。ユング授教の所謂『集合的無意識』the Collective Unconscious, またスタンレイ・ホオル教授の『民族心』Folk-soul と稱するもの皆これだ）。フロイド說に從へば、性慾は決して春機發動期を以て現はれるのではなく、嬰兒が母親の乳房にしがみ附くのも、女兒が異性である父親に附纏ふのも皆旣に性慾が作用してゐるので、これが抑壓を受けると、記憶されてゐないその心的傷害は大人になつてから色々の形に變化して現はれる。フロイドが適例として引用するのは[一]レオナルド・ダ・ギンチである。かれの大作で藝術界に於ける千古の謎だと見做されてゐる『モナ・リザ』の女の微笑は、卽ち畫家レオナルドが五つの歲に別れた母親の記憶だとして考證された。かの露西亞のメレジコウス

キイが小說『先驅者(フオアランナア)』に描いたこの文藝復興期の大天才レオナルドの人格は、いま精神病學者によつて解剖せられた結果がこの無意識心理に歸せられ、彼が後年の科學研究慾、飛行機製作、同性愛、藝術創作等は、みな幼時の性慾の抑壓から來た『無意識』の潜勢的作用に歸せられてゐるのである。

註(一) Sigmund Freud, Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci. Leipzig u. Wien, Deutsche. 1910.

單にレオナルドばかりでなく、この派の學者は、沙翁のハムレット劇をも、ワグネルの樂劇をも、またトルストイやレエナウをも、この研究法で解釋を試みた。なほフロイドにはゲエテをも精神解剖に掛けようといふ計畫があつたさうだ。わたくしが前に擧げたアップヴル氏がクラアク大學に出した學位論文ストリンドベルヒ研究の如き、またその最近の一例である。

どこまでも欲望を滿足させようとする力と、これと反對に働く抑壓力との葛藤衝突から生ずる心的傷害が、『無意識』界裡に伏在すと說く點に於て、わたくしは少くとも文藝上の見地からは、フロイド說に異議をさし挿む餘地はないと思ふ。ただ私が最も慊焉たらざるを得ないのは、彼がすべてを單に『性的渴望(リビドオ)』にのみ歸せんとする偏見である。部分的に一方からのみ物を見ようとするその科學者癖である。勿論この點に就いては同じ派の多くの學徒の間にもさまざまな異論があるらしい。卽ち『性的渴望』に代ふるに興味(インテレスト)の語を用ゐるを可なりとした人もある。アアドラアは『自我衝動』Ichtrieb

なりと主張した。英吉利派の學者は、嘗てハミルトンがカントに倣つて造つた『意欲』conation の語を以てこれに代へようともしてゐる。しかし私一個としては、この文の冒頭に述べたやうに、これを最も廣い意味に於ていふ生命力の突進跳躍と見做すを以て妥當なりと信じてゐる。

常に自由を求め解放を求めてやまざる生命力、個性表現の欲望、人間の創造性を强調しようとする傾向は、さきにも述べたやうに、最近思想界の大勢である。これは前世紀以來の唯物觀決定論に對する反動だと見られる。卽ち人間は自然の大法に左右せられ機械的法則にのみ支配せられて身動きの取れないものだ、と考へたのが自然科學萬能時代の思想であつた。それが二十世紀に入つて著しく勢力を失墜したと共に、また一方には因襲や權威に反抗して自我と個性とを貴ぶ近代的精神は益々その勢を熾ならしめて、茲に人間の自由創造の力が認められた。

すでにこの生命力、この創造性を肯定する以上、わたくしどもは、この力がそれと反對の方向に働かうとする機械的法則、因襲道徳、法律的拘束、社會的生活難、その他色々の力との間に生ずる衝突を以て人間苦の根柢なりと見做さざるを得ない。

そこでよほどお芽出度い人間か、或は脈の上りかけた老人にあらざる限り、吾々は朝に夕にこの二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱を經驗せざるを得ないといふことになる。言を換へていへば、生きてゐるといふことは卽ちこの戰の苦惱を繰返してゐるといふことに他ならぬ。われわれの生活が上辷

りでなく深ければ深いほど、生命の力が籠つてゐればゐるほど、この苦しみこの惱みは益々烈しからざるを得ない。胸奥の深きに潛める內的生活卽ち『無意識』心理の底には、極めて痛烈にして深刻な多くの傷害が蓄積せられる。さういふ苦悶を經驗しつつ、多くの悲慘な戰を戰ひつつ人生の行路を進み行くとき、われわれは或は呻き或は叫び、怨嗟し號泣すると共に、時にまた戰勝の光榮を歌ふ歡樂と讃美とに自ら醉ふことさへ稀ではない。その放つ聲こそ卽ち文藝である。痛手を負ひ血みどろになつて、悶へつつも、また悲みつつも、諦めんとして諦め得ず、思ひ止まらうとしても止まることの出來ないほどに强い愛慕執着を人生に對して持つときに、人間が放つ呪詛、憤激、讃嘆、憧憬、歡呼の聲が卽ち文藝ではないか。かくの如き意味に於て、文藝は眞善美の理想に向つて向上の一路を辿り行く生命の行進曲であり、また進軍の喇叭である。朗々として響きわたれるその聲が、天地を貫き百代を動かす偉力を持つ所以は玆に在るのだ。

生は戰である。地上に生を享けたその第一日――否なその最初の第一瞬からして、旣にわれわれは戰の苦惱を經驗してゐる。嬰兒の肉體生活そのものが明らかに飢餓や黴菌や冷熱との不斷の戰ではないか。安らかに平和に母の胎內に眠り得る十個月はしばらく問はず、一たび母胎を離れて一つの個的存在物としての生を始むるや否や、この戰の苦痛は避け難きものとなる。母胎を出ると共におぎやあと叫ぶあの聲こそは、人間苦の叫びの第一聲ではないか。安らかな母胎の床を出てはじめて外界の

刺戟に觸れたその瞬時に放つ産聲が、はじめて馬を『生』の陣頭に立てたものの雄たけびの聲であるか、はた苦悶の第一聲であるか、或はまためでたく生を地上に享けたるものの歡呼の聲であるか、そはともかくも、かの呱々の聲はかかる意味に於て文藝と全く本質を同じくしたものだと見ることが出來る。やがて飢餓を免れんがために、嬰兒は更に母の乳房を求めて藻搔き、乳を與へられて後は天使(エンゼル)の如く眠れるその顏に美しい微笑(ほほゑみ)さへも見られるのである。この藻搔きとこの微笑(ほほゑみ)と、それは即ち人間の詩歌であり藝術である。生の力に溢れた强い子供ほど呱々の聲もまた大きい。その聲、その藝術の無いものには、ただ『死』があるばかりだ。

美の快感だの、趣味だのといふ極めて消極的な呑氣な考で文藝を解釋し得たのは過去のことであつた。文藝が若し俳茶の筵に過ぎないか、花鳥風月のたのしみであるか、或はお姫樣の慰みにする綺麗ごとであるならばいざ知らず、苟も文化生活の最高位に立てる人間活動であるならば、やはりその根柢を生命力の躍進といふところに置いて解釋するよりほか道は無いと思ふ。ダンテやミルトンやバイロンを讀み、或はブラウニング、トルストイ、イブセン、ゾラ、ボオドレエル、ドストイエフスキイ等の作品に接するとき、誰かまた、さういふ駄洒落的の呑氣千萬な遊戲氣分を容れる餘地があらうぞ。わたくしは、文藝上に、ただ美しいだの、面白いだのといふ快樂主義的藝術觀を飽くまでも排斥したい。殊に生の苦惱の劇しい近代に現はれた文學に於て、殊に痛切にこのことを感ずる。情話式の

遊蕩記錄、不良少年のいたづら日記、文士生活の樂屋落、若しそんなもののみが我が文壇を横行するならば、それは疑もなくわれらの文化生活の禍である。文藝は斷じて俗衆の玩弄物ではなく、嚴肅にしてまた沈痛なるべき人間苦の象徵であるからだ。

六　苦悶の象徵

ベルグソンと同じやうに精神生活の創造性を認めた伊太利のクロオチェの藝術論によれば、表現は藝術のすべてであると說かれてゐる。卽ち表現とはわれわれが單に外界からの感覺や印象を他動的に受入れるのではなく、內的生活のうちに取入れたさういふ印象や經驗を材料にして、新しい創造創作をすることとである。かういふ意味に於てわたくしは上に述べた絕對創造の生活卽ち藝術が、苦悶の表現であることを言ひたい。

ここに至つてわたくしは再びフロイド一派の學說に歸つて、それを引用することを便なりとする。それは彼の夢の說である。

夢といふ時ふと私の心頭には、ブラウニングが畫聖アンドレアを歌つた詩中の一句が浮ぶ。

— Dream ? strive to do, and agonize to do, And fail in doing. —*Andrea del Sarto.*

『夢むとや、爲さんと努め、爲さんと藻搔き、而も爲すを得ざるなり』。この句は最もよくフロイドの

欲望說に當て嵌まる。

フロイドに從へば、性的渴望(リビドオ)は人間が平生覺醒狀態にある時には、例の目附役の抑壓作用を受けてゐるためにそれが自由に意識の表面には現はれない。ところがこの目附役の張番が弛む時即ち抑壓作用が減ずるときは卽ち睡眠の時である。性的渴望はこの睡眠狀態の時を目がけて、意識の世界へ飛び出さうとする。それでもなほ目附役の目をくぐるためには、色々な出鱈目な變裝をしなければならぬ。夢の本當の內容――卽ちいつもは無意識の底に隱れてゐた欲望が、そこいらにありあはせの人物事件といふやうなものを變裝の道具に使つて、辻褄の合はないやうな扮裝をして出てくる。この變裝は夢の顯在內容(マニフェステ・トラウムインハルト)で、潜在的な無意識心理である欲望が卽ち夢の潜在內容(ラテンテ・トラウムインハルト)であり、また夢の思想(トラウムゲダンケン)である。變裝は卽ち象徵化することである。

南極探檢に出かけた一行が食料品の缺乏に惱むとき、その人たちの多數が夢に見るものは山海の珍味であつたさうだ。亞弗利加內地の荒漠たる沙漠を行く人の、夜な〳〵夢路に通ふものは、美しき故國の山河であるといふ。滿足せられない性慾衝動が夢の中には滿足させられて或病的狀態になることは、性慾學者の所說を俟たずとも普通世人の知るところであらう。これらはフロイド說が最も都合よく適用せられる場合で、夢としては甚だ單純なものである。プラトオンの『共和國』、モオアの『無可有郷(ユウトピア)』、さてはまた近代の社會問題に就いて書かれた色々のユウトピア文學の類が、思想家の欲求をその

儘に夢物語に托して表現したのと異ならない。潜在內容たる思想が極めて簡單な露骨な顯在內容（卽ち外形）を取つて現はれてゐる場合である。

爲さうと努め、爲さうと藻掻き、而も爲すを得ないその憧憬、その欲求がわれわれの大きい生命力の顯現たる精神的欲求であるときに、それが絕對の自由を以て表現せられたる夢、これを藝術だと見ることは出來ないであらうか。ベルグソンにも夢の論があるが、精神的活力（エネルジイ・スピリチュエル）が感覺的な色々な形を具へて現はれたものが夢だと見てゐる點に於て、たとひ欲望說とは全く趣を異にしてゐるとはいへ、二者の間に相通ずるところはあると思ふ。

しかし如何にして文藝が人間の苦悶の象徵となるのであるかこれに對する私の見解を更に明らかにするためには、精神分析學者の言ふ夢の說明からなほ少しく借用してくる必要がある。

夢の根源をなしてゐる思想卽ちその潜在內容は、甚だしく複雜多方面なものである。まだ物心も知らない幼年時代からの經驗が、多くの心的傷害となつて『無意識』の圈內に蓄積し伏在してゐる。そのうちの幾つかが夢となつて現はれるのであるが、顯在內容の方はこれに比して遙かに簡單なものに縮小されてしまふ。一場の夢の舞臺にあらはれる背景や人物や事件を分析して、その一々の緒（いとぐち）をたよりに潜在內容の方を探つて行くと、そこには非常に複雜な根本のあることが見出される。夢のなかには途方もない人物や事件が組合はされて居たり、甚だしいアナクロニズムの配合が出來て居たりする

のはこの壓縮作用（フェルディヒトゥングス・アルバイト）あるがためだといふ。ちやうど演劇に於ては三四十年に亙れる事象が、わづかに三四時間の演出によつて表現せられると同じく、またロゼッティの詩『白船』（ホワイト・シップ）にあるやうに、人が溺れて死せんとする一刹那、おのれの長い遠い過去の經驗を瞬時に夢みるのも、皆この作用である。花山院の御製に

　長き夜のはじめをはりも知らぬ間に
　　いく世の事を夢に見つらん　（續拾遺集十八）

とあるのは夢のこの表現法に相當して居る。

また夢の世界は藝術の境地のやうに、ニイチェが謂ゆる價値顚倒の世界である。そこには轉移作用（フェルシイブングス・アルバイト）があつて、夢の外形である顯在內容には、つまらぬ事柄として現はれてゐる事件も、根本は非常に重大な思想に基づいてゐる。新聞の社會面を賑はしてゐる市井の雜事も、近所の夫婦の痴話喧嘩も、それが沙翁やイブセンの筆に描かれて舞臺面に演ぜられる時、その根柢にある人生の一大事實一大思想を暗示してゐるのと同樣である。夢は藝術と同じく、利害や道德やすべての價値判斷を超越した世界である。尋常茶飯の小事件を、夢の中では天下國家の大事の如くに取扱ひ、或はそれとは正反對に、驚天動地の大事件をも、夢では平々凡々の些事として取扱ふことが出來る。

かくの如くにして夢には、また戲曲や小說と同じやうな表現の技巧がある。事件が展開したり人物

の性格が現はれたりする。或シチュエイションを寫し、動作を描く。(一)フロイドはこの作用を描寫（ダルシュテルング）と名づけた。

註(一) 以上の作用に就いて、詳しくは Sigm. Freud, Die Traumdeutung, S. 222—272 參照。

だから夢の思想と外形との關係は、フロイド自身の言葉を以て言へば、『同一の內容を二つの別々な國語で言ひ現はしたやうなものだ。換言すれば夢の顯在內容は夢の思想を他の表現法に移したものに他ならぬ。その記號と連結とは、われわれが原文と譯文とを比較することによつて知ることが出來る』。(op. cit. S. 222)。これは卽ち明らかに一般文藝の表現法であるところの象徵主義（シンボリズム）ではないか。

或抽象的な思想や觀念は決して藝術を成さない。藝術の最大要件はその具象性にある。卽ち或思想內容が、具象的な人物とか事件とか風景とかいふ生きた儘のものを通して表現せられるとき、換言すれば夢の潛在內容が變裝し扮飾して出てくる時と同一の徑路を取るものが藝術である。そしてこの具象性を賦與するものが卽ち象徵（シンボル）と呼ばれる。象徵主義とは決して前世紀末に佛蘭西詩壇の一派が標榜した主義ばかりではなく、すべての文藝は古往今來、みなかかる意味に於て象徵主義の表現法を用ゐて居るのだ。

象徵にはいつも外形と內容との間に價値の差がある。卽ち象徵それ自體と、象徵によつて現はされてゐる內容との間に輕重の差があるのは、上に言つた夢の轉移作用と全く同一である。色でいへば白

が純潔清淨を、黒が死や悲哀を、黄金色が權力や光榮を表はすやうに、また宗教に最も多い象徴の如く十字架、蓮華、火焔などが意味する內容が、それぞれ大きい神祕的な潜在內容を包んでゐるのと同樣だ。近代の文學に就いて言つても、イブセンの『建築師(マスタア・ビルダア)』の主人公が高塔の上にかかげようとした旗は理想を象徴化したもの、また彼の『幽靈(ゴオスツ)』のうちにある太陽は、個人主義の自由と美とを表象してゐると解釋される。即ち皆簡單な具象的の外形(顯在內容)を借りて、その中味には複雜な精神的のもの理想的のもの、或は思想感情等を表はしてゐる。この思想感情は即ち夢の場合の潜在內容に相當する。

かくて(一)象徴の外形のやや複雜になつたものが、諷喩(アレゴリ)、寓話(フェイブル)、喩話(パラブル)の類で、それらはある眞理、ある教訓をその儘露骨に、動物譚や人物事件に當てはめて表現したものである。しかしその外形が更に一層複雜な事象となつて、强い情緒的效果を具へ刺戟的性質を帶ぶるに及んで、それは立派な文藝上の作品となる。ダンテの『神曲』が中世の宗教思想を表はし、ミルトンの『失樂園』が文藝復興期(ルネッサンス)以後の新教思想を內容とし、沙翁の『ハムレット』が懷疑の煩悶を暗示し表象するに及んでここに眞の藝術品に成る。

註(一) 本全集第一卷『近代文學十講』第十講第三節參照。

Silberer, Problems of Mysticism and Its Symbolism. (New York, Moffat, Yard and Co, 1917) 此書

も精神分析學の見地から書かれたもので、象徴と喩話と夢との關係に就いては、同書 Part I. Sections I, II; Part II, Section　　を參照

かくの如くにしてフロイド教授一派の學者は、希臘のソフォクリイズの大作、悲劇『イイディパス王』を解釋して、有名なる ŒDIPUS COMPLEX の說を立て、また民族心理の方面から見て、古代の神話傳說のすべてを以て民族の美しき夢なりとする結論に到達した。

內心にあつて燃ゆるが如き欲望が抑壓作用の目附役によつて阻止せられ、そこに生ずる衝突葛藤が人間苦をなしてゐる。然るにこの欲望の力が目附役の抑壓から免れて絶對の自由を以て表現せられる唯一の場合が夢でありとするならば、吾々の生活のあらゆる他の活動卽ち社會生活、政治生活、經濟生活、家族生活等に於て、われわれが常に受ける內的及び外的の强制抑壓から解放せられ、絶對の自由を以て純粹創造をなし得る唯一の生活はこれ卽ち藝術である。生命の根柢から動き出る個性の力を、さながら間歇泉(ガイザア)の噴出するが如くに發揮し得るものは、人生に於てただ藝術活動あるのみである。春が來て草が芽を吹くごとく、鳥が歌ふごとく、唯それ抑へがたき止み難き內的生命(インナア・ライフ)の力に迫られて、自由な自己表現をなすものは藝術家の創作である。科學的にのみ物を見る習ひの心理學者の眼には、それが『無意識』と見ゆるほどまでに大きい深い有意識な苦悶苦惱が實は心靈の奥ふかき聖殿に潜んでゐるのである。自由な絶對創造に於てのみそれが象徴化せられて、ここに文藝作品は成る。

人生の大苦悶、大苦惱、それは夢の場合に欲望が扮裝し變裝して出てくると同じやうに、文藝作品に於ては自然人生の色々な事象な身に纏うて象徴化して現はされる。これを以て單に外的事象の忠實なる描寫であり再現に過ぎないと見るが如きは、謬れる皮相の見だ。だから極端なる寫實主義や平面描寫論は、空理空論としてはとにかく、實際の藝術作品に於ては無意義のことである。ゾラのやうに極端な唯物主義の描寫論を唱へた人ですら、その作『勞働』、『木の芽だち』等に現はれた理想主義は明らかに彼自らの議論を裏切つてゐるではないか。かれは自分の欲望の歸着點である理想を、その作品に於て暗示してゐるではないか。また近頃獨逸で唱へられる表現主義(エクスプレシオニズム)と稱するものの如き、その主張は要するに、文藝作品を以て單に外界の事象から受入れる印象の再現に非ずとなし、作家の內心に宿れるものを外に向つて表現するに在りといふに歸着する。それが從來の客觀的態度の印象主義(インプレッシオニズム)に反抗して、作家主觀の表現(エクスプレシオン)を强調せることは、輓近の思想界が生命の創造性を確認するに至つた大勢と一致したものだと見るべきだらう。藝術は飽くまでも表現であり創造である、自然の再現でもなく模寫でもない。

潜在意識の海の底の深い〳〵ところに伏在してゐる苦悶、卽ち心的傷害が象徴化せられたものでなければ、大藝術ではない。淺い上つら(うはつら)の描寫は、如何にそれが巧妙な技巧に秀でてゐても眞の生命の藝術のやうに人を動かさないのだ。突込んだ描寫とは風俗壞亂の事象なぞを、事も細かにただ外面的

に精寫するの謂ではない。作家が自己の胸奥を深く、またより深く掘り下げて行つて、自己の内容の底の底にある苦悶に達して、そこから藝術を生み出すと云ふ意味である。自己を探ること深ければ深いほど、その作はより高く、より大に、より強くあらねばならぬ。描かれたる客觀的事象の底まで突込んで書いてゐると見えるのは、實は何ぞ知らん、それは作家が自己そのものの心胸を深くゑぐり深く探つてゐるに他ならない。クロォチェが精神活動の創造性を認めた所以も、矢張りかういふ意味からだと私は解釋してゐる。

誤解してはならぬ。作品に現はれる個性とは、決して作家の小我でもなく小主觀でもない。また筆を執る最初から意識して表現しようとした觀念とか概念とかであつてはならない。さういふ風にして出來たものならば、その作物は淺薄なる拵へ物となつて、そこに無理があり、不自然が生ずるために眞の生命の普遍性を具へず、從つてまた讀者の生命を動かすだけの偉力をも缺くのである。日常生活に於て我儘と自由とが區別せられなければならぬやうに、藝術に於て小主觀と個性とは截然として區別せられなければならぬ。創作家が飽くまでも忠實に客觀の相をありの儘に再現しようといふ態度に出てこそ、そこに始めて作家の無意識心理の底から、その自我や個性が無理をせずに渾然として自然の儘に表現せられる。換言すれば、かくてこそ生の苦悶が發しておのづからに象徴化せられ『心』は『形』となつて現はれる。描かれた客觀界の事象そのもののうちに、作家の眞生命がこもるのである。

玆に至つて客觀主義の極致は主觀主義と一致し、理想主義の極致はまた現實主義と合一して、そこに眞の生命の表現たる創作が出來あがる。主觀と客觀とか、理想と現實とかを峻別してゐる間は、まだ神の創造と同じ程度の創造にまでは到達し徹底して居ないのである。大自然大生命の眞髓は、そんな態度で摑み得られるものではないと思ふ。

如何に馬鹿々々しい空想的な取りとめの無い夢であつても、それは必ずやその人の經驗の內容に存する事物が、色々に組合はされて再現せられたものに他ならない。その幻想その夢幻は、畢竟するに自己の胸奧に宿れる心象を寫生し描寫してゐるのである。單なる模寫でもなければ模倣でもない。創造創作の根本意義はこの點に存する。

文藝に於て樂天觀と厭世觀とか、或は現實主義と理想主義とかの別を立てるのは、要するにまだ生命の藝術として根柢に觸れて居ない表面的皮相的な論議である。現實の苦しみ惱みがあればこそ、われわれは樂しい夢を見ると共に、苦しい夢をも見るのではないか。現在に滿たされざる不斷の欲求があればこそ、天國といふ具足圓滿の境を夢みる理想家ともなれば、また地獄といふ大苦患大懊惱の世界をも夢想するのではないか。才人往くとして可ならざるなく、政治科學文藝のすべてに於て超凡の才能を發揮し、他人目(ひとめ)には極めて幸福な得意の生涯だと見えたゲエテの閱歷にも、苦悶は絕えなかつたのだ。彼はみづから言つた『世人は私のことを幸福(しあはせ)な人間だといふが、私は苦惱の一生を送つた

のだ。私の生涯は永久の礎を一つづつ積み上げることに捧げられた』。この苦惱からして、彼の大作『ファウスト』も『ヱルテルのわづらひ』も『ギルヘルム・マイステル』も皆夢となつて現はれたのであつた。政爭の混亂に身を投じ、いくたびか妻に別れ、自らは遂に盲目となる悲運に悶へたミルトンは、『失樂園（パラダイス・ロスト）』と共に『復樂園（パラダイス・リゲインド）』を書いた。ベアトリチェの戀に破れ、また流竄の身となつたダンテは『神曲』に地獄界、淨罪界、天堂界の幻想（ヸジヨン）を夢みたのである。戀になやみ妻に先だたれたブラウニングの剛健な樂天詩觀を、誰かまたその苦悶の變形轉換でないといはうぞ。若しそれ大陸近代の文學に於て、ゾラやドストイエフスキイの小說、ストリンドベルヒ、イブセンの戲曲の如きに至つては、世界苦惱（ヱルト・シュメルツ）の惡夢に魘（うな）される人の呻きの聲として聞くべきではなからうか、夢魔が叫ばせる恐ろしい呪詛の聲ではなからうか。

佛蘭西のラマルティィイスがミルトンの大作を說明して、『失樂園』は淸敎徒（ピュウリタン）が聖書（バイブル）の上で眠つた時に見た夢であると言つたのは、單に形容の語として見る可きではない。『失樂園』といふ大敍事詩は、聖書卷頭の天地創造の傳說を夢の顯在內容としてはゐるが、その根柢には、苦悶の人ミルトンの淸敎（ピュウリタニズム）思想が潛在內容となつてゐる。大魔王（セイタン）と神との戰や、エデンの樂園の敍述などがわれわれの心を動かすのではない。さういふ外形を通して讀者の心胸に傳はり來る詩人の痛烈なる苦悶が、われらを動かすのだ。

この點に於ては萬葉集も古今集も、蕪村芭蕉の俳句も、また西洋の近代文學も、その發生の根本に於て本質的の差異はないのである。昔の和歌俳句の詩人——櫻かざして今日も暮しつの大宮人には、無意識心理の苦悶が現代に於けるほど痛烈でなく、從つて心的傷害もまた淺かつただけの差である。人間として生きてゐる以上、人間苦が大宮人にも、北歐の思想家にも、また旅行脚の俳人にも、同樣に皆『無意識』界裡に潜在してゐて、そこから文藝の創作は生み出されたのだ。

われわれの生活力が、體內に侵入した黴菌と戰ふ。その戰は病苦となつて現はれるとともに、そこに體溫が異常の昻騰をなして發熱する。ちやうどそれと同じやうに、動いて止まざらんとする生命力が抑壓强制を受くる狀態は、苦悶であるとともにそこには熱を生ずる。熱は抑壓に對する反應作用である、action に對する reaction である。だから生命力が强ければ强いほど、また盛なれば盛なるほど、この熱度もまた高からざるを得ない。昔から多くの人は文藝の根本に色々の名を附けた。ペイクアはこれに名づけて『情熱ある觀照』impassioned contemplation と云ひ、メレジコウスキイはこれを『情想』passionate thought と呼び、またシェリイの『雲雀の歌』の末節の句を借りて、『調和ある狂亂』harmonious madness と名づけた評家もある。古への羅馬人は『情的奮激』furor poeticus の語を以てこれを言ひ現はした。言葉こそ異なれ、その意味するところの內容は畢竟この熱を指すものに外ならない。沙翁はこれを更に一步進めて次の如くに歌つた。これは創作心理の過程を最も詩的に

言ひ現はした言葉として、昔から人口に膾炙せるものである。

The poet's eye, in a fine frenzy rolling,
Doth glance from heaven to earth, from earth to heaven;
And, as imagination bodies forth
The forms of things unknown, the poet's pen
Turns them to shapes, and gives to airy nothing
A local habitation and a name.

—*Midsummer Night's Dream*, Act. v. Sc. i.

一種微妙な想ひに驅られて、狂ほしく廻轉する詩人の眼は、いま天を見るかとすれば地を見、地を見るかとすれば天を見る。さうして想像が、未だ曾て世に知られざる事物の形を具體化するに隨れて、詩人の筆はそれに定形あらしめ、空然として虚なるものに居處を與へ名を與ふ。

(『眞夏の夜の夢』——坪内氏譯)

此句の第一行にある fine frenzy は、同じくまた私の言ふ意味の『熱』を指したものだ。

しかしながら熱そのものは無意識心理の底に潜める潜熱である。それが藝術品となるには象徴化せ

られて或具象的の表現とならねばならぬ。沙翁の右の句の第三行以下は卽ちこの象徵化具象化を指したものだと見るべきである。詳しくいへば目に見、耳に聞くことの出來る感覺的事象、卽ち自然人生の現象を通してそれが客觀的に放射せられる。常人の目には見えなかつたやうな人生の或姿を『想像が、未だ曾て世に知られざる事物の形を具體化する』のである。空漠たる捕捉すべからざる自然人生の眞實を掴んで、これに『處と名と』を與ふるものが創作家である。そこに極めて強き的確なる實在性を有する『夢』が出來上るのである。今の詩人 poet と云ふ言葉は、その語源が希臘語の poiein＝to make から出てゐる。『造る』卽ち創作するとは卽ちこの象徵化具象化であつて、沙翁がここに言ふところの『知られざる事物の形を具體化するに隨れて定形あらしめる』ことに外ならないのである。

最初先づこの具象化されたる心像(イメイヂ)が作家の胸中に宿る。それは恰も懷姙の場合と同じやうに最初は胎兒の如き心像で、conceived image に過ぎない。西洋の美學者が言ふ『不成形の胎生物』abortive conception である。旣に孕まれたるものは必ずや外に生れ出でねばならぬ。そこに作家の自己表現(self-expression 或は self-externalization)の止み難き內的要求は迫り來つて、やがてすべての母が經驗するのと同じ『生みの苦痛』は生ずる。作家の生みの苦痛は、卽ち如何にして胸裡に宿れるものを自然人生の感覺的事象に纏め上げて客觀界に放射すべきか、また理趣情景兼ね備はれる一つの新しき完全なる統一ある小天地となし、人物事象となして表現すべきかのための苦痛に外ならない。そして

それはまた母親がすると同じやうに、作家自らの血を分ち靈と肉とを創つて、一つの新しき創造物として產み出すことである。

『生みの苦痛』を經てのち、出產を終つた母に歡喜があると同じく、自己生命の自由な表現を全うした創作家には、抑壓作用を離れて到達し得たる創造的勝利の歡喜がある。原稿料とか評判とかいふ、實際的な外的な滿足から得られるものは單なる快感（プレジュア）に過ぎないが、それとはまた別に、更に大きく更に高きに位する歡喜（ジョイ）が必ずや創造創作には伴はれるのである。

第二　鑑賞論

一　生命の共感

以上わたくしは創作家の側からのみ文藝を論じた。然らばこれを鑑賞者即ち讀者觀客の方から見るとき、『無意識』心理の奥ふかく潜める苦悶の夢或は象徴が文藝であると云ふことは、如何に說明せられるだらうか。

わたくしはこの點を解釋するために、先づ藝術の鑑賞者もまた一種の創作家であることを說いて、創作と鑑賞との關係を明らかにせねばならぬ。

文藝の創作はその本質に於て、上に述べたやうな夢と同一なものであるが、その或種のものは夢よりは遙かに多くの現實性を具へ合理性を持つてゐると共に、夢のやうに支離滅裂な散漫なものではなくして、立派に統一せられた事象であり、また現實の再現であらねばならぬ。夢が『無意識』心理の底に潜む心的傷害に根ざせると同じく、文藝作品は作家の生活内容の奥深きに潜める人間苦に根ざ

してゐる。だから作品に描かれた感覺的具象的な事象を通して表出せられてゐるものは、更にその内面に在る作家の個性生命であり、心であり、思想であり、情調であり、氣分であるのだ。換言すれば、さういふ茫漠として捕捉すべからざる無形無色無臭無聲のものが、形や色や匂や聲ある具象的な人物事件風景、その他色々の物を材料に使つて表出せられてゐる。その具象的感覺的なものが卽ち象徵と呼ばれる。だから象徵とは暗示であり刺戟である。また作家の内部生命(インナアライフ)の底の底に沈める或ものを鑑賞者に傳へる媒介物に他ならぬ。

生命は宇宙人生に遍在せる大なる生命である。それが個人を通して藝術的個性となつて表現せられてゐるのだから、その個性の他の半面にはまた大きな普遍性があらねばならぬ。卽ち苟も橫目竪鼻の人間である以上、時の古今、地の東西を問はず、誰にも共通の人性があるとか、或は同じ時代に生きて同じく苦しい現代の生活を送つてゐる以上、西洋人も日本人も社會政治上の同じ問題に心を惱まされてゐるとか、或は同じ國同じ時代に同じ民族として生活してゐる以上、誰の心にも共通な思想や感情があるとかいふ風に、生命の内容そのものには、人間としての普遍性共通性がある。換言すれば、人と人との間に生命の共感を呼び起すだけの共通内容が存在してゐる。かの心理學者が『無意識』『前意識』『意識』と名づけてゐるものの總量は、わたくしの言葉を以てすれば、それは生命の内容であるが、作家と讀者との生命の内容に共通性共感性あるがために、それが象徵といふ刺戟性暗示性ある媒

介物の作用によつて共鳴作用を起す。そこに藝術の鑑賞は成立するのである。

生命の內容、それを更に別言すれば體驗の世界である。ここに體驗(エルレエブニス)とは、その人が身に沁みて感じたり考へたり、或は見たり聞いたり行(おこな)つたりしたことのすべてを指すのである。外的にもまた內的にもその人の經驗したことの總量をいふのである。だから藝術の鑑賞といふことは、作家と讀者との間の體驗の共通性共感性を土臺として成立する。卽ち作家と讀者との『無意識』『前意識』『意識』の內には、兩方に共通同感し得べきものが存在する。作家が象徵といふ媒介物の强き刺戟力によつて讀者に暗示をさへ與へれば、忽ちにしてこれに應じこれに共鳴して、讀者の心胸にもまた同じ生命の火が燃えあがるのだ。その刺戟をうけただけで、讀者みづからもまた燃えあがるのである。作家の胸奥深くも沈んでゐた苦悶は、かつて矢張り讀者の方の心胸にもあつた經驗であつたからだ。これを譬ふれば、薪に可燃性あるが故に、象徵といふ燐寸(マッチ)をさへ使へば、他からこれに點火することが出來るのと同樣である。全く可燃性のない石に火を移すことの出來ないと同樣に、作家と共通共感すべき生命を有しない俗惡、沒趣味、無理解の低級讀者に對しては、たとひ如何なる大作傑作と雖も何等の感銘を與へず、また如何なる大天才大作家と雖もこの種の俗漢に對しては手も足も出ないので、さういふ俗漢は要するに、藝術上から言へば緣なき衆生度し難き輩である。かかる場合、鑑賞は全く成立しない。

これはよほど以前の古い話であるが、嘗て文教の要路に當つてゐた男があつた。頭腦(あたま)がよほど古ぼ

けて脈が上りかけてゐたのだらうが、當時文壇を風靡してゐた新文藝の作品を讀んで見て彼の言ふことが如何にも馬鹿げてゐた。あんな面白くもない話を長々と書いて、結末の所は何だかすつぽかされたやうな詰らないものだ。今の青年は何が面白くてあんな小說を讀むのだらう、と怪しんださうだ。即ちかういふ老人――たとひ年齢は若くてもこんな老人は世間にいくらも居るが――と青年とでは、たとひ同一時代同一社會に生きて居ても、體驗の內容が全然相違してゐるために、その間に共通共感すべき生活內容が全く無いのである。鑑賞の成立す可きその根本が缺けてゐるのである。

いふまでもなく體驗の世界は人によつて違ふ。だから文藝の鑑賞は讀者と作家と雙方の體驗が近似してゐること、またその深さに於て廣さに於て大きさに於て高さに於て、兩方が類似してゐることを唯一最大の要件として成立する。換言すれば二者の生活內容が、質的にも量的にも近似してゐればゐるほど、作物は完全に味はれるわけで、その反對の場合には鑑賞は全く成立しないことになる。

大藝術家の持つてゐる生活內容は、その包含するところのものが非常に大きくまた廣汎である。コオルリッヂが沙翁を評して "our myriad-minded Shakespeare" と言つた所以は即ち茲に在るので、時代に於て三百年以前のイリザベス朝の作家であり、場所に於て遠い英吉利と云ふ異邦の人の作であるにも拘はらず、彼の作品には時處の別を超越して、百代の人を動かし千里の外に響くあるものを包含してゐる。たとへば彼が描いた女性にしても、ジュリエットとかオフィリアとかポオシアとかロザ

リンドとかクレオパトラとか云ふ女は、シェリダンが描いた十八世紀式の女や、或はディケンズ、サッカレイの小說に出て來る女たちよりは、遙かに多く近代的な『新しい女』である。ベン・ジョンソンは彼を讃美して"He was not of an age but for all time"と言つた。まこと沙翁のやうに自由な大きい創造創作の生活をやれるやうになると、それは全く天地自然の創造者たる神に最も近い域に達した者だと言へる。同じ言葉は或程度に於てゲエテにもダンテにも當て嵌まるだらう。

しかし非常に飛び離れた特異の天才の場合には、その人の生活内容が同時代の他の人々のとは全く類を絕して、遙か向ふの方に進んで行つてゐる場合さへ往々にして見られる。十八世紀に出たヰリアム・ブレイクの神祕思想は、その詩集が出た後殆ど一世紀を隔て、漸く前世紀末、歐洲の思想界に神祕象徵主義の潮流が現はれるに至つて、はじめて人心に反響を喚び起した。初期のブラウニングや或はスヰンバアンなどが少しも世に認められず、當時の聲望が群小詩人にすらも及ばなかつたのは、彼等がその頃の同時代の人と生活内容に共通共感すべき何物をも有しなかつたほどに進んでゐたからだ。所謂時代意識を越えて、十年二十年、否なブレイクの場合のやうに百年も前へと進んでゐたためだ。當時の人々がまだ内生活に感じて居なかつた生の苦痛に悶へ、早くも、既に遠き世の夢を見てゐたからであつた。

共同の體驗さへあれば、遠い諸威の國人であつたイブセンの書いた物でも、同じく近代生活の經驗

からの所産であるが故に、强く吾等の胸奥にも響くのである。幾千年前の希臘人ホオマアの書いたトロイの戰や、ヘレン、アキリイズの話は、そこに共通の人間味あるが故に、二十世紀の日本人が讀んでも矢張り心を動かされるのである。ただ餘りに多く時處を異にして製作せられた藝術品を鑑賞する場合には、旅行學問などの力によつて、作者の環境閲歴、その時代の風俗習慣などを調べて、讀者が自分の體驗の足らない部分を補つたり、或は自分の努力によつてたとひ幾分たりともその時代の雰圍氣の中に生き得るだけの用意を必要とする。だから、さういふ特殊の努力、たとへば研究なぞといふことをしない人にとつては、ホオマア、ダンテよりは、たとひそれらより劣つて居ようとも、やはり近代の作家の方が面白く、同じく近代でも外國のよりは日本の作家の方のが興味を引くのは、この理由あるがためだ。また比較的多くの人々に共通な淺い平凡な經驗を書いた作家の方が、高遠な複雜な冥想的な深い經驗を表出した作家に比して、遙かに多數の讀者を動かすのも同じ理由に基づく。ロングフェロオやバアンズの詩歌が、ブラウニングやブレイクなどよりも多くの人に讀まれ、俗だといはれた白樂天の作品が、氣韻の高い高靑邱なぞよりは遙かに多數者に appeal する所以もまた此點に在る。

ミルトンは男性によつて讀まれ、ダンテは女性によつて喜ばれると云ふのも、靑年にしてバイロンを讀み、中年にしてワアズワスを讀むと云ふのも、またお伽噺、武勇譚、冒險小說の類が多く幼年者

少年者によつてのみ喜ばれ大人の感興を惹かないのも、それはみな内生活の體驗の世界の差に基づくのだ。これは人々の年齢によつても性によつても異り、國土によつてもまた人種によつても異る。未だ曾て日本の櫻の花を見た經驗を全く持たない西洋人には、櫻を詠じた日本詩人の名歌を讀んでも、われらがその歌から得る詩興の十分の一をすらも得ることは難いであらう。未だ曾て雪を見た事のない熱帶國の人にとつては、雪の歌は寧ろ感興少き索漠たる文字として終るであらう。旣に體驗の內容が異なつてゐるからには、そこに描かれた雪とか櫻とか云ふ象徵は、鑑賞者の內生命圈の深さに潛める感情や思想や情調を喚び起すだけの刺戟的暗示性を全く有しない結果に終るか、或は甚だしく微弱なものとならざるを得ない。沙翁は大作家に相違ない。しかし沙翁と同じ浪漫的な生活內容を有しなかつた十八世紀以前の英國批評家は、毫も彼の作を顧みなかつた。おなじく近代でも杜翁やショオは少しも浪漫的な體驗の世界を有しなかつたがために、沙翁を攻擊し、また反對に浪漫的なマアテルリンクの如きは遠く時代と國とを異にしたにも拘はらず、沙翁の戲曲に深くも心を動かされたのであつた。

二　自己發見の喜び

爰に至つて私は少しく自分の用語を補訂して置かなければならない。わたくしは上來體驗とか生活

內容とか經驗とか云ふ言葉を使用してゐたが、生命には普遍性がある限り、廣い意味の生命そのものが直ちに讀者と作家との間の共通共感性を構成し得るものであることはいふまでもない。たとへば生命の最も著しき特徴の一つである律動(リズム)の如き、それは如何なる場合にも必ず一人より他人へと傳はる性質を持つてゐる。一方でピアノを彈ずれば、聾者にあらざる限りは、聽者の方でも不知不識その音を聞いて手拍子足拍子を取る。たとひそれを動作に現はさずとも心の中で踊る。卽ちピアノの鍵盤をたたく音は、聽者の生命の中心を動かして、そこに新しき振動を喚び起す刺戟的暗示性を有してゐるからである。生命そのものの共鳴であり共感である。

かくの如くにして讀者と作家との心境がぴつたり行き合つたところに生命の共鳴共感がある時、そこに藝術の鑑賞は成立つ。だから讀者觀客聽衆が作家から受けるところのものは、他の科學者や歴史家哲學者などの所說に對する場合とちがつて、それは知識を得るのではない。象徵卽ち作品に現はれた事象の刺戟力によつて、自分の生活內容を發見するのである。藝術鑑賞の三昧境、又その法悅は、卽ちこの自己發見の喜びに他ならない。象徵といふ刺戟性暗示性の媒介物を借りて作者が表現しようとした自己の內生活を、讀者はまた自分の胸奧にもこれと共鳴するものを見出した歡喜である。ちやうど睡魔に襲はれた時、我とわが手に自分の膝をつねつて自分の生きて居ることを發見するのと同じやうに、人は文藝作品に接して自分の生きてゐることを感ずるのである。詳しく言へば、讀者みづか

ら自己の『無意識』心理（精神分析學派の人たちの言ふ意味に於ての）の中味を發見するのである。自分の魂の姿を、詩人や藝術家が掲げた鏡の中に見出すのである。この鏡あることによつて、人は自分の生活内容をまざまざと見ることが出來るのだ。同時にそれはまた、自分の生活内容を深くし大きくし豐かならしむる最好の機會を得るものである。

描かれたる事象は象徵に過ぎない、夢の外形に過ぎない。この象徵の刺戟あるによつて、はじめて讀者と作家と兩方の『無意識』心理の內容、卽ち夢の潜在內容が共鳴し共感する。そこに文藝作品から滲み出で湧き出るところの實感味があるのだ。夢の潜在內容、それは旣に上にも述べた如く人生の苦悶ではないか、世界苦惱ではないか。

だから文藝作品の與ふるところのものは、知識 information ではなくして喚起作用 evocation である。讀者を刺戟して自己體驗の內容を自ら喚起せしめるのである。讀者がこの刺戟を受けて自ら燃えるのは、卽ちまた一種の創作にほかならないのである。作家が自分の生命を象徵によつて表現したとすれば、この象徵を通して讀者もまた自分の胸中に創作をしてゐるのである。作者の方が產出的創作 productive creation をしてゐるとすれば、讀者はこれを受入れて自らまた共鳴的創作 responsive creation を爲すものである。二重の創作あつてはじめて文藝の鑑賞は成るのだ。

かるが故に抑壓を免れた絕對自由の創造生活を享有し得るものは、獨り作家ばかりではない。ただ

『人』として生きてゐる他の幾千萬幾億萬の普通人もまた、作品の鑑賞によつて作家と同じ創造生活の境地に完全に味到してゐるのである。この點からいへば作家と讀者との差は、自らこれを象徴化して表現すると然らざるとの別に過ぎない。換言すれば文藝家は表現によつての創作をなし、讀者は喚起によつての創作をなす。われら讀者が大詩篇大戯曲を鑑賞してゐる際の心状は、ちやうど他人の踊るのを見、歌ふのを聽いてゐる時に、われらみづからは踊らずとも歌はずとも、心の中で別に踊りもすれば歌ひもしてゐるのと全く同樣だ。その時それは既う他人の踊りや歌ではなく、われらみづからの踊りであり歌であるのだ。詩歌を味はふ時、われらみづからもまた既に詩人であり歌びとである。作家と同じ創造創作の生活を營んで、抑壓作用から脱却した夢幻幻覺の境地に引入れられてゐるわけだ。引入れるだけの暗示作用をしたものが即ち象徴である。

かくて鑑賞もまた一種の創作であるからには、そこに個性のはたらきが根柢となつてゐることは言ふまでもない。即ち同一の作品から受ける感銘や印象もまた、個人々々によつて異なるわけである。換言すれば一つの象徴を通してそれから受入れる思想感情氣分などは、鑑賞者みづからの個性や體驗や生活内容によつて人々の間に相異があらねばならぬ。批評を以て一種の創作なりとし、創造的解釋 creative interpretation なりと見做す印象批評は、即ちこの見地に立てるものである。嘗てこの點に就いて、佛蘭西でブリュヌティエエルの客觀批評説と、アナトオル・フランスの印象批評説との間に

起つた有名な論爭は、近代の藝術批評史上に一新時期を劃したものであつた。ブリュヌティエエルは元來テイヌやサント•ブウヴと同じやうに、科學的批評の見地に立つて、傳統主義の思想を抱いた人だけに、批評の標準を客觀的法則に置き、毫も個性の尊威を認めなかつた。これと反對にアナトオル•フランスは、ルメエトルや、或は英吉利の方のヲルタア•ペイタァ等と共に、批評とは作品を通して自己を見ることだと說き、評家の主觀的印象に重きを置いた。飽くまでも鑑賞者の個性と創造性とを認めて、鑑賞とは『傑作のうちにあつて自己の精神の冒險をする』ことだとまで言つた。ルメエトルに至つては更に極端に批評の客觀的標準を排斥して、鑑賞者の主觀にのみ重きを置き、自我(モア)を以て批評の根柢となし、ペイタァもまたその論集『文藝復興(ルネッサンス)』の序文に於て、批評とは自分が作品から受ける印象の解剖であると說いた。ブリュヌティエエル一派の客觀批評說は、今日では既に科學萬能思想時代の遺物として古びた。何事にも個性と創造性との重んじられる今日の思想傾向から言へば、少くとも文藝鑑賞の上に於て、わたくしどもはフランス、ルメエトル等の主觀說に一致せざるを得ないのである。ワイルドが『最高の批評は創作よりもより多く創作的なり』"The highest criticism is more creative than creation" と言つた意味も玆に在ると思ふ。(ワイルドの論集『意向(インテンションズ)』のうち『藝術家としての批評家』の項參照)。

談おもはず岐路に入つたが、作家が描いた事象は象徵であるが故に、それから受ける感銘によつて

讀者は自分の內的生命に火を點じて自ら燃燒するのである。換言すれば、自分の體驗の內容をこれによつて發見し、創作家と同一の心境に味到することを得るのである。その體驗の內容を成してゐるものは、作家の場合と同じく、人間苦であり社會苦であらねばならぬ。この苦悶、この心的傷害は鑑賞者の無意識心理の中にも同じく沈滓として伏在して居たが故に、完全なる鑑賞卽ち生命の共鳴共感がそこに成立するのである。

ここに至つて私は嘗て讀んだボオドレエルの散文詩に、わたくしの言はんとするところを巧みに譬喩した『窓』と題する一篇のあつたことを想ひ起す。

Celui qui regarde du dehors à travers une fenêtre ouverte ne voit jamais autant de choses que celui qui regarde une fenêtre fermée. Il n'est pas d'objet plus profond, plus mystérieux, plus fécond, plus ténébreux, plus éblouissant qu'une fenêtre éclairée d'une chandelle. Ce qu'on peut voir au soleil est toujours moins intéressant que ce qui se pass derrière une vitre. Dans ce trou noir ou lumineux vit la vie, rêve la vie, souffre la vie.

Par delà des vagues de toits, j'aperçois une femme mûre, ridée déjà, pauvre, toujours penchée sur quelque chose, et qui ne sort jamais. Avec son visage, avec son

vêtement, avec son geste, avec presque rien, j'ai refait l'histoire de cette femme, ou plutôt sa légende, et quelquefois je me la raconte à moi-même en pleurant.

Si c'eût été un pauvre vieux homme, j'aurais refait la sienne tout aussi aisément. Et je me couche, fier d'avoir vécu et souffert dans d'autres que moi-même.

Peut-être me direz-vous : 《Es-tu sûr que cette légende soit la vraie ?》 Qu'importe ce que peut être la réalité placée hors de moi, si elle m'a aidé à vivre, à sentir que je suis et ce que je suis ?

(大意)開けた窓の內部を外から見てゐる人は、閉ぢた窓を見てゐる人ほど多くのものを見ることは出來ない。蠟燭で明るくなつてゐる窓、それにも增して深みがあり、神祕的であり夢幻的であり、陰暗であり眩惑的であるものがまたとあらうか。皎々たる白日のもとに見られ得るものは、窓硝子の後に在るものよりは、いつも興味の少いものである。あの黑くて明るい穴のなかに、生は生き、生は夢み、生は惱んでゐるのだ。

波うてる屋根の彼方に中年の女が一人ゐる。もう皺が寄つて貧乏で、いつも俯向いて何かしてゐる。そとへも出ては行かない。その顏つき、着物、身振から、また何といふ事はなしに、私はあの女の身の上、その來歷を想像して居た。そして時々それを自分で繰返して見ては泣くのであ

ゐる。

あれが若し女でなく貧乏な老男(としより)であつても、私は矢張りその男の來歴を容易(たやす)く想像したであらう。

そして私は寢に就く、自己以外の他人に於て私は生きもし、惱みもしたことを得意に思つて。君は恐らく言ふだらう、『そんな來歴が眞であると君は信じてゐるのか』と。わたくし以外の現實が何(ど)うあらうと構ひはしない。ただ私はこれによつて生き、自分が存在すると云ふこと、自分が如何なるものであるかと云ふこと、それを感じさへすれば可(よ)い。

蠟燭の光に照らされた閉ぢた窓は作品である。そのなかに居る女の姿をちらと見て、讀者は自分の胸中に色々な創作をするのである。その窓、その女を通して實は自分を發見してゐるのだ。自己以外の他人に於て自分は生きもし、惱みもしてゐるのだ。そして自分の存在と生活とを感じもし、味はひもしてゐる。鑑賞とは卽ち彼のうちに我を發見し、我のうちに彼を見出すことである。

三　悲劇の淨化作用

私は如上の所說を最も適切に例證するものとして、悲劇の快感に就いて語らう。卽ち人間が泣くことは苦痛である。然るにわざわざ金まで拂つて悲しい芝居を見に行つて淚を流すことが、何故(なぜ)快感を

與へるものであらうか。この問題に就いては昔から多くの學說があるが、わたくしはかのアリストテレエスが『詩學』のなかに說いた有名な淨化作用(カタルシス)の說を、下のやうに解釋することを以て最も妥當なりと信じてゐる。

アリストテレエスが『詩學』に說くところによれば、悲劇とは『憐み』pity と『恐れ』fear といふ二つの感情を起させるものだ。觀客は芝居といふ媒介物を通して泣くことによつて、自分の胸裡に欝積し結ぼれてゐたこの悲痛な感情を洗ひ去り淨め去ること (Catharsis) が、悲劇の與ふる快感の基である。今までの緊張(シュパンネン)した心の狀態が涙を流すことによつて緩和(レエゼン)されるところに、悲劇の快感は生ずる。自分の內生活の奧ふかく潜める心的傷害卽ち生の苦悶を、舞臺上の悲劇といふ媒介物によつて意識の表面に發露せしめる。ちやうど前に述べたヒステリの患者を治療するとき、無意識心理の底に沈める心的傷害を探し出して、十分これを表現せしめ、談話せしめ『無意識』界裡にあるものを『意識』界へ持出さしめる療法と全く同一のものである。精神分析學者はこれを談話治療法(トオキング・キュウア)と呼ぶさうだが、それは要するに淨化作用(カタルシス)であつて、悲劇の快感の場合と全く同一だと私は觀てゐる。平素は抑壓作用を加へられて胸中に結ぼれてゐた苦悶の感情が、藝術鑑賞といふ絕對自由の創造生活を營み得る瞬間に、解放せられて意識の表面に出るのである。昔から文藝は人生に慰安を與へると言ふのは畢竟俗說に過ぎないが、それは要するに抑壓から放たれたこの心境を指したものだと觀るべきだ。

たとへば冷酷無情な高利貸の親爺のやうな奴が、芝居で親子別れの場を見てそつと涙を流す。わたくしたちはこれを側から見て、あの冷血漢の腹の何處を捜すとあのやうな涙があつたのだらうかと怪しむ。しかしそれは、平生利息の計算をして我利々々亡者になつてゐる時はいつも抑壓作用を受けてゐた感情が、芝居といふ象徴の刺戟性によつて、無意識心理の底から喚び出された一滴の涙に外ならなかつた。高利貸と雖も人である。人であるからには人間として普遍な生活內容を持つては居るのだが、平生はそれが黄金慾のために抑壓を受けて居たに過ぎない。涙を流して彼が快感を得た刹那の心境は、卽ち藝術鑑賞の三昧境に入つて、舞臺のうちに自己を見出し、自己のうちに舞臺を見出し得た喜びであつたのだ。

文藝は象徵の暗示性刺戟性によつて、巧みに讀者を一種の催眠狀態に導き幻想幻覺の境に入らしめる。夢の世界に、また純粹創造の絕對境に誘ひ來つて、これによつて讀者觀客自らをしておのれの生活內容を意識せしむるものである。讀者みづからの心の底にもまた苦悶がなければ、この夢この幻覺は成立しない。

旣に苦悶と云ふ、苦悶が『無意識』のうちに潜むといふのは理窟に合はないなどと言ふのは、三百代言か論理的遊戲者の口吻に過ぎない。ユング等が『無意識』と稱するもの、實はそれは絕大なる意識であり、また宇宙人生の大きな生命なのである。たとへばわれわれが小我を守つてゐる間こそ『我』

と云ふ意識を有するが、それがやがて宇宙天地と渾融冥合する程の大我の域に進めば、そはやがて無我の境に入るのと同じい。われわれが眞に宇宙の大生命の流のうちに生きてゐる時、その生命を意識してゐないことは、ちやうどわれわれが空氣のうちに在りながら空氣を意識しないと同様だ。空氣に何等かの刺戟動搖を與ふることによつて、はじめてわれわれは空氣を感ずると同じやうに、われわれは藝術作品の象徴の刺戟をうけて、はじめて深く自己の內生命を意識する。これによつて自己の生命感を強くし、生活內容を豐かにするのだ。そはまたやがて無限の大生命に觸れ、自然と人間との眞實に到達し、その核心に觸れることである。

四　有限の中の無限

上にも述べたやうに、個性の根柢となつてゐる生命そのものは、全實在全宇宙に遍在せる永遠の大生命の流である。だから個性の他の半面にはまた普遍性があり、共通性があらねばならぬ。これをたとふれば一本の樹の花や實や葉の如く、その一つ一つは飽くまでも個性を保持して存在の意義を持つてゐる。一つ一つの葉や花は各々獨自の存在を續け、それが了れば凋落する。しかしそれは根本であるところの一本の樹そのものの生命が個性となつて現はれてゐるのであるから、一枚づつの葉にも、また花にも實にも、みな共通普遍の生命があるのだ。その普遍性共通性永久性を土臺として、一切の

藝術的鑑賞即ち共鳴共感は成立するのである。このことを白耳義の詩人シャルル・ヴン・レルベルグ（第四巻『詩人ヴン・レルベルグ』參照）の作の下に歌つたのがある。

Ne Suis-Je Vous........

Ne suis-je vous, n'êtes-vous moi,
O choses que de mes doigts
Je touche, et de la lumière
De mes yeux éblouis ?
Fleurs où je respire, soleil où je luis,
Ame qui penses,
Qui peut me dire où je finis,
Où je commence ?

Ah ! que mon cœur infiniment
Partout se retrouve ! Que votre sève
C'est mon sang !
Comme un beau fleuve,

En toutes choses la même vie coule,
Et nous rêvons le même rêve (*La Chanson d'Ève.*)

おお指先で私がふれるものよ、
おおまばゆき瞳にうつる光よ、
私は君たちであり、
君たちは私でないのか知ら？
私が匂をかぐ花、私を照らす太陽、
もの思ふ私の魂、
何處(どこ)で私は終り、何處で私は始まるかを、
誰が私に言ひ得よう？

ああ！ 限なく私の心の
到る所に見出さるること！
おお樹木よ、お前の樹液は私の血であるよ！

美しい河流のやうに
ものみなのうちに同じき生命の流れ
われ等みな同じき夢を見る。

（堀口大學氏譯）

個性の半面には又生命の普遍性あるが故に『われ等みな同じき夢を見る』ことが出來るので、かの聖フランシスが動物に說教したのも、佛家が狗子に佛性ありと見たのも、皆そこに生命の普遍性を認めたからであらう。だから單に讀者と作品との間に於ける生命の共感ばかりではなく、一切の萬象に對してかくの如き享樂的鑑賞的態度を以て臨むことが、即ちわれわれの藝術生活である。日常生活に於ける理窟や法則や利害や道德などの抑壓から全く放たれた『夢』の境地に入つて、自由な純粹創造の生活態度を以て一切の萬象に對するとき、そこに始めてわれわれは眞に自己の生命を味識すると共に、また宇宙の大生命の鼓動に耳を澄ますことも出來るのである。それは湖上の氷辷りをするやうに、內部の深い水に少しも觸れないで、ただ表面外面を上辷りして行く俗物生活ではない。自我の根柢にある眞生命が、宇宙の大生命と交感(コンミユウン)し交流するに至つて、そこに眞の藝術鑑賞が成立する。それは單に事象を認識するばかりでなくして、一切を自己の體驗のうちに受入れて味はふことである。その時に得るところのものは、knowledge ではなくして wisdom であり、fact ではなくして truth

であり、また有限 finite のうちに無限 infinite を『物』のうちに『心』を見ることである。それは卽ち對象のうちに自ら生きることでもあり、自己を發見することでもある。リップス一派の美學者が美感の根柢なりとして說ける感情移入 Einfühlung の學說も、亦この心境を謂へるものに他ならぬ。卽ち讀者も作家と共に同じく營める創造生活の境地である。私は嘗てこのことを廣く人間生活の問題として、他の小著に於て論じて置いた。（第三卷『象牙の塔を出て』中の『觀照享樂の生活』參照）

五　文藝鑑賞の四階段

更に文藝鑑賞者の心理過程を今少しく秩序だてて分解して見ると、先づ下のやうな四つの階段に分けることが出來ようと思ふ。

第一、理知の作用

先づ文句の意味を理解するとか、その內容の筋道を逐うてそれに興味を持つとかいふことが第一階段であつて、この場合、主として働いてゐるものは理知（インテレクト）の作用である。しかしこれだけでは眞に藝術としての文學にはならない。他の歷史や科學的の叙述でも何でも、凡て言語で言ひ現はされたものには理知の力で理解するといふことが先きに立つのは無論である。しかし文學作品と稱せられる物のうちにも、專ら或は主として理知の興味にのみ訴ふる種類のものは甚だ多い。

通俗的な淺薄な、そして到底深くわれわれの內生命に觸れ得ないやうな種類の低級文學の多くは、讀者の理知の作用にのみ訴へてゐる物が多い。たとへば筋を逐ふだけの興味を目的に作られた探偵小說、冒險譚、講談、下等な活動寫眞劇、新聞の通俗小說などの類は、多く理知的(インテレクチユアル・)好奇心(キユウリオシテイ)を滿足させればそれで濟むものである。所謂『明晩のお樂しみ』で、次は話が如何なるかといふ好奇心で讀者を釣つて行く。或はまた描かれたる事象そのものに對する興味に基づくものもこの種類に屬する。獨逸の學徒が名づけて『材料興味(シユトフ・インテレセ)』Stoffinteresse と云ふものがそれだ。卽ち讀者が見たり聞いたりして居る人物、事件が描かれて居るとか、或は何か內幕話の素破抜きであるとか、また例へば中村吉藏氏の脚本『井伊大老の死』が水戶浪士の事件のため新聞の社會面を賑はした結果、多くの人はその方の興味からこの作を讀みこの芝居を見た場合の如く、作中の事象そのものに關係ある興味を感ずるのである。

眞の藝術品たる文學作品に對しても、低級な讀者は動もすればこの第一階段より以上には進まない。何(ど)の小說を讀んでも、何の芝居を見ても、單に話の筋などにばかり興味を惹かれたり、或は言葉の意味の穿鑿にのみ沒頭したりする人は甚だ多い。『井伊大老の死』の作者は勿論藝術品としてあの戲曲を書いた事は言ふまでもないが、世間一般の俗衆はその內容たる事件にのみ注意を惹かれた。だから如何に立派な作品でも、讀者の種類如何によつてその藝術的價値を無視せられ

る場合は甚だ多いのである。

第二、感覺の作用

五感の中でも、文學に於ては特に多く音樂色彩などの聽覺視覺に訴へる。英詩の中で最も官能的（センシュアス）だといはれるキイツの作のやうに、味覺や嗅覺を刺戟しようとするのもある。また神經の感性が異常に鋭くなつた近代の頽廢（デカダンス）の詩人、即ちボオドレエル等と同一系統に屬する諸詩人の作物は、單に視覺聽覺（即ち色や音）だけで滿足しないで、不快な嗅覺にさへも訴へようとするものがある。しかしこれらは寧ろ異常の場合で、古今東西の文學に最も重きをなす感覺的要素は、言ふまでもなく耳に訴ふる音樂的要素である。

詩歌に於ける律脚（ミイタア）、平仄、押韻等はこの最も重要なるものであるが、また一般に詩人の聲調は藝術品として非常に大切な地位を占めて居る。一般に抒情詩はこの音樂的要素に重きを置くもので、たとへばポオの『鐘（ベルズ）』の歌、コオルリッヂが夢のうちに作つて自分さへいつ書いたか知らなかつたといふ『クブラ・カアン』の如きは、詩句の意味（即ち上述の理知に訴ふる分子）などを殆ど有しないで、純然たる言語の音樂をその作の生命としてゐる。佛蘭西近代の象徴派詩人のごとき特にこの點を强調したもので、なかには(一)美女の名前ばかりを五十行以上も列擧しただけで、

それで詩の音樂を作つたものさへある。

（註一） Catulle Mendès, Récapitulation. 1892

日本の三味線、琴などの音樂が極めて簡單であるやうに、日本人が樂聲に對する耳の感覺が發達してゐないためであらう、日本の詩歌には嚴密な意味でいふ押韻を缺いてゐる（多少の除外例はあるにもせよ）。しかし韻文でも散文でも苟もそれが藝術品である以上は、聲調の美を要素として居ないものはない。たとへば

　　ほととぎす東雲（しののめ）どきの亂聲（らんじやう）に
　　湖水は白き波たつらしも　（與謝野夫人）

のごとき、耳に受けた感じが既にみごとな音樂的調和を得た聲調の美を持つて居る。叙景詩として成功して居る所以である。

第三、感覺的の心像（イメイヂ）

これは直ちに感覺そのものに訴ふるにあらずして、想像的作用に訴へて或感覺的な（センシュアス）心像（イメイヂ）を喚び起

すのである。即ち第一の理知、第二の感覺等の作用を經來つて、ここにはじめて姿態、景狀、音響等を、心裡に活躍せしめ眼前に髣髴たらしむるに至る。いま便宜のため俳句を以て例とせば

鱗散る雜魚場（ざこば）の跡や夏の月　　子規

晝間（ひるま）の魚市の雜踏が濟んだあと、雜魚場は全く靜寂である。そして往來（ゆきき）する人の影もまばらな通路のあちこちには、銀のやうに白い鱗が散らばつて晝間の名殘を留めてゐる。その銀鱗がきらきらと月光に映ずる夏の夕など、ぶらぶら散策する折などの情景を讀者の眼前に浮ばしめる。唯それだけでこの十七字詩は藝術として立派に成功して居る。また

五月雨にかくれぬものや瀨田の橋　　芭蕉

近江八景の一、瀨田の唐橋がさみだれの頃煙霧模糊たるなかに、くつきり黑く見えてゐる。さながら一幅の墨繪の山水畫のやうな趣を暗示するものである。殊に第一第二の句の調子でぼんやりしておいて、第三句『瀨田の橋』で強く重くしたこの句の聲調が、既に巧みにこの暗示力を助けてゐる。即ち第二の感覺の作用がこの俳句の鑑賞には重大な助けをなしてゐるので、心像（イメイヂ）そのものが聲調を完全に調和してゐることは常に必要條件の一つである。

しかし以上の理知作用、感覺作用及び感覺的心像（センシュアスイメイヂ）は、主として作物の技巧的方面から受けるもので、それだけではまだ意識の世界の比較的表面的な部分を動かし得たに過ぎない。換言すれ

ば、以上は寧ろ象徴の外形に屬し、また讀者の胸裡に起させた幻想夢幻の顯在内容（即ち夢の外形）を形造るに過ぎない。まだ理窟や物質や感覺の世界を超越してはゐないからだ。これを超越して更に深く讀者胸奥の無意識心理に肉迫し突入して、刺戟的暗示力が生命の内容に觸れるとき、そこに共鳴共感を喚び起すに至つて、はじめて文藝の鑑賞は成る。それは即ち讀者の情緒、思想、精神、氣分を動かすといふ意味で、これが即ち作品鑑賞の最後の過程である。

第四、情緒、思想、精神、氣分

ここに至つて、遂に作者の無意識心理の内容が、讀者のそれに傳はつて、胸奥の琴線に反響を喚び起すのである。暗示は玆にその最後の目的を達するのである。作品を通して現はされた作家の人生觀も社會觀も自然觀もまた或は宗教信念も、この第四階段に入つて遂に讀者の體驗の世界に觸れる。

この第四のものの内容は人間にとつて意義ある一切のものを包含するが故に、それは人間生命の複雜なるが如くに複雜であり、また多種多様である。餘蘊なくこれを説明し盡くさんとすることは、わたくしどもの企て及ばざるところである。かの美學者が說くところの美的感情――即ち鑑賞者の胸奥の琴線に喚び起される震動の強弱大小の差によつて、これを崇高（サブライム）と優美（ビユウテイフル）とに分

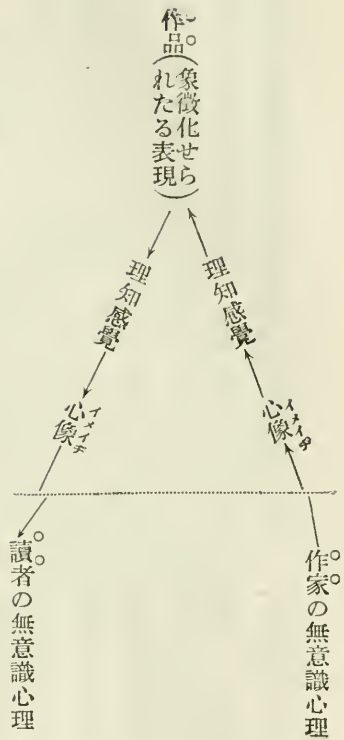
ち、或は質の變化から見て、これを悲壯と有情滑稽(ヒユウマア)とに分けて論ずる如きは、卽ちこの第四の階段を分解し說明せんとする一つの企てに過ぎない。

藝術としてのすべての文學作品の鑑賞には、以上の如き四つの階段が必ずあると私は信じてゐる。しかしこの四つのものは作品の性質によつて輕重の差を生ずる。たとへば散文小說、殊に客觀的描寫の自然派小說或は純粹の叙景詩（卽ち上に引用した和歌俳句の如き）などに於ては、第三までの作用が非常に重きをなす。また抒情詩、殊に近代象徴派の作品の如きに於ては、第一、第三は甚だ輕くして、第二の感覺的作用が直ちに第四の情緒主觀の震動(ヴイブレイシヨン)を喚び起す。またイブセン一流の社會劇、問題劇、思想劇などの類に於ては、第二の作用寧ろ輕く、英吉利のショオ、佛蘭西のブリュウの戲曲の如き、第三の感覺的心像を充分讀者觀客の心に喚び起さずして、餘りに露骨に直截に第四の思想をのみ傳へんとするがために、純藝術品としては寧ろ不完全なる一種の宣傳(プロパガンダ)と化することすら稀ではない。また浪漫派の作物は第一の理知作用に訴ふること最も少く、これに反して古典派の如き自然派の如き、讀者の理知を動かすこと最も大なるものである。

更にまた同一の作物に對しても、讀者銘々によつて、この四つの間に輕重の差を生ずる。卽ち上にも述べたやうに、低級な讀者觀客が戲曲小說に對する場合の如く、第一の理知作用にのみ重きを置いて話の筋なぞばかり見ようとするのもある。またあるものは第二第三をのみ働かせてその作品の背後

にある思想や人生觀に留意すること尠き人さへある。これらのものは何れも作品を完全に味はつたとは言はれないのである。

六　共鳴的創作

わたくしは玆に至つて、さきに述べた創作家の心理過程と鑑賞者のそれとを比較しておく必要がある。卽ち詩人や作家の產出的表現的創作と、讀者の方の共鳴的創作（鑑賞）とはその心理狀態の經過が正反對の順序を取つて居る。作家の胸裡の無意識心理の底から湧き出でたものが、更に想像作用によつて或心像（イメイヂ）となり、それが感覺や理知の構成作用を經て、象徵の外形を具へて表現せられたものが文學作品である。然るに鑑賞者の場合に於ては、最初先づ理知や感覺の作用によつて、作中の人物事象を讀者の胸中で一つの心像（イメイヂ）として受入れる。その心像（イメイヂ）の刺戟的暗示性が更に深く讀者の無意識心理の底に喰ひ入つて、右に述べた第四の思想、情緒、氣分など無意識心理の底にある生命の火に點火するのだ。故に前者は根柢たる生命の核心から發して、それが花となり實となつたもの、後者の方は、その花であり實である作品から、理知感覺の作用で自己の腦裡に一つの心像を浮べ、それによつて根柢に在る無意識心理卽ち自己生命の內容に到達して行く。これを圖示すれば、

作家の心的徑路は、だから綜合的でまた能動的であり、讀者のは分解的でまた受動的である。右に述べた鑑賞心理の四つの階段を顚倒して、第四より起つて第一の方面に向つて進むものと見れば、それは即ち創作家の心理過程となるわけである。換言すれば、生命の內容より突出して意識心理の表面へ出るのが作家の產出的創作であり、また意識心理の表面から這入つて生命の內容へと突入して行くのが共鳴的創作即ち鑑賞である。かるがゆゑに作家と讀者と兩方で、これだけのぴつたりと同じ心的過程が繰返さるるならば、そこに作品の全き鑑賞は成立する。

トルストイはその『藝術論』に於て、單に美とか快感とかで藝術の本質を說明しようとした古來の

諸說を排して、下の如き斷案を下してゐる。

"To evoke in oneself a feeling one has once experienced, and having evoked it in oneself, then, by means of movements, lines, colours, sounds, or forms expressed in words, so to transmit that feeling that others may experience the same feeling—this is the activity of art.

"Art is a human activity, consisting in this, that one man consciously, by means of certain external signs, hands on to others feelings he has lived through, and that other people are infected by these feelings, and also experience them."

—Tolstoy, *What is Art?*, p. 50.

先づおのれが嘗つて經驗した感情を自己の胸中に喚び起す。それを喚び起してから、更に運動や線や色彩や音響や、或はまた言語によつて現はされた形象などによつて、他人もまた同じくその感情を經驗し得るやうにこれを傳へること――これが藝術活動である。

人がある外的の記號によつて、自己の體驗した感情を意識的に他人に傳へ、他人がこれらの感情のために動かされて、また同じくそれを經驗する。かくの如き人間活動が卽ち藝術である。

トルストイのこの說は藝術一般に就いて立言したものであるが、これを單に文學に就いてのみ考へ、更にもつと深く細かく分析して行くならば、結論に於て上來私の述べたところとほぼ一致するものである。

ここに至つて前述の印象批評の意義もまたおのづから明らかであらう。即ち文藝が飽くまでも個性の表現である以上、單にそれを客觀的な理知的法則によつて批判しようとすることは無意味である。批評の根柢もまた創作の場合と同じく、讀者の無意識心理の內容に存在せることは言ふまでもない。即ち理知や感覺の作用を過ぎて、なほ更に深く自己の無意識心理にまで到達し、その無意識界のあるものを意識界に喚び起し得て、そこに始めて作品の批評は成立つのである。即ち作家の方ではもともと無意識心理の方から出立してゐるのだから、自分の心的徑路に就いて、明瞭に意識しては居ない。これに反して評家の方は自己の無意識界裡にあつたもの（たとへば悲劇を見た時の涙）を新に作品によつて喚び起され、意識界に持出したのだから、その意識（即ち印象）を充分に分析し解剖し得るのである。マシュウ・アアノルドは文藝を以て『人生の批評』"a criticism of life"なりと言つたが、文藝批評は即ち評者がある作品を通して、また評家自らの『人生の批評』を語るものであらねばならぬ。

第三　文藝の根本問題に關する考察

一　豫言者としての詩人

わたくしは以上の所論を基礎とし、これを實際に適用することによつて、一般文藝上の根本問題を解決し得ると信じてゐる。そこでいま多くの問題を一々ここに列擧するの煩を避けて、今まで文藝の研究者が疑問としてゐるいくつかの問題に就いて、私の所說の適用の實例を示し、他は讀者自らの考察批判に任せようと思ふ。本章に於て說くところは、すべて以上述べ來つた私の創作論、鑑賞論から當然引き出される系論(コロラリイ)であり、また註疏であると見らるべきものである。

文藝は生命力が絕對の自由を以て表現せられた唯一の場合だ。より高く、より大なる、より深き生活に向つて躍進せんとする創造の欲求が、何等の抑壓拘束を受けずに表現せられてゐるために、そこにはいつも大きな未來が暗示せられてゐる。過去より現在に續いてゐる生命の流が、文藝作品に於てのみは、他に見出すべからざる自由な飛躍を爲すことを得るが故に、人間の他の活動——それは皆周

圍から色々の抑壓を受けてゐる――よりは、十歩も二十歩も前に突出して、所謂『心の冒險』spiritual adventure をやることが出來るのだ。常識や物質や法則や因襲や形式の拘束を超越して、そこには常に新しい世界が發見され創造される。いまだ政治上經濟上社會上の現象に現はれて來ないものが、早く既に文藝上の作品のうちに暗示し啓示せられるのは全くこれがためである。

かつてカアライルはその『英雄崇拜論』や『バアンズ論』のうちに、羅甸語の vates と云ふ言葉が最初豫言者を意味し、後にそれが轉じてまた詩人の義にも用ゐらるるに至つたことを指摘してゐる。詩人とは先づ靈感に觸れて豫言者の如く歌ふ人の意であつた。卽ち神託を傳へ、常人の未だ感じ得ざるところを感得して、これを一代の民衆に示す人に外ならなかつた。イスラヱルの民草に神のみこころを傳へた古への豫言者と同じものだと考へたのであつた。羅馬人が更にこの語を轉用して、敎師の意にも用ゐた例は殊に興味深きものがある。詩人――豫言者――敎師、この三つのものが vates の一語で言ひ現はされたところに、文藝家の大なる使命が見られる。

文藝上の天才は飛躍し突進する『心の冒險者』である。しかしながら一人の英雄の事業の背後には幾多の無名の英雄の努力があると同じく、大藝術家の背後には其『時代』があり『社會』があり『思潮』があることをも否む譯には行かない。文藝は飽くまでも個性の表現であると共に、その個性の他の半面には普遍性をも伴つてゐる。普遍の生命が同時代或は同一社會、或は同一民族に屬する總ての

人々に遍在するからには、詩人が自ら先驅者となつて表現したものが一代民心の歸趨を示し、時代精神の那邊にあるかを暗示すべきものたるは當然の結果である。かくしてより高き、より大なる生活の可能を暗示する點に於て、文藝家はペイタアの言つた如く『文化の先驅者』であらねばならぬ。

一つの時代一つの社會には、その時代の生命があり、その社會の生命があつて、不斷の流動變化を續けてゐる。それがやがて思潮の流であり、時代精神の變遷である。これは時運の大勢に促されて、何處からともなく動き出る力だ。その初に當つては、殆ど何等の纏まつた形もなければ體系をも具へてゐない、ただ茫漠として捕捉すべからざる生命力そのものである。藝術家が表現するところのものはこの生命力そのものであつて、決して固定し凝固した思想でもなく、概念でもない。纏まつた主義などと稱すべき性質のものでは勿論ないのである。いくら抑壓作用を加へても抑制し禁壓し得べからざる、行くべきところまで行かなければ止まない生命力そのものの具象的表現が文藝作品である。一代の民衆の胸の奥には潜みながら、またその『無意識』心理のかげには隱れて居ながらも、ただ不安焦躁のおもひに驅られつつも、何人もこれを捕捉し表現し得ざるあるものを、藝術家はその特異の天才の力によつてこれに表現を與へ、夢の形に象徴化し得るのである。逸早くもこれを把握し表現し反映したものが文藝作品である。既にそれが一つの體系ある思想とか觀念とかに纏め上げられて了へば、哲學となり學說となり、更にまたその思想や學說が實行の世界に實現せられる時には、政治運

動、社會運動となつて、もう藝術の圏外に逸し去つてしまふ。かくの如き現象は過去の文藝史が屡例證せる事實で、佛蘭西革命以前にルソオ等の浪漫主義の文學がその先驅をなし、さらに手近なところではヸクトオリア朝の保守的貴族的英國が今日の民主的社會主義的英國に轉化する前、すでに前世紀の末ごろからショオやヱルズの因襲打破の文藝が起り、またそれらよりも早く佛蘭西頽廢派(デカダンス)の文學が頑固な英國に輸入せられ、近代英國の激變は最も早くから鮮やかにその詩文の上に現はれてゐた。日本の例で見ても、頼山陽の純然たる文藝作品である『日本外史』といふ叙事詩が明治維新の先驅をなし、日露戰爭以後に起つた自然主義文學の運動が、早く既に最近のデモクラシイ運動や、因襲打破社會改造の運動の先驅あつたことは疑ふべからざる文明史的事實であつた。また文藝作品としては最も原始的で簡單な童謠、流行唄の類が民衆の自然の儘な聲として、能く時勢を穿ち大勢の暗遷默移を暗示したことは、獨り外國の古代に於てのみならず日本の歴史上にも屢見られる現象であつた。古くは、日本紀に出てゐる『わざうた』(童謠)と云ふのは卽ち純粹の民謠で、國民の禍福吉凶を豫言したものが多かつた。ずつと近代になつても、徳川の末年から明治の初年へかけての民族生活の動揺時代に於て、流行唄(はやりうた)の類が如何に痛切なる時代生活の批評であり豫言であり警告であつたかは、今なほわれわれの記憶に新なるところではないか。

米國の或詩人の句に

First from the people's heart must spring
The passions which he learns to sing;
They are the wind, the harp is he,
To voice their fitful melody.

—B. Taylor, *Amran's Wooing.*

情熱、それは先づ民衆の胸の奥に萌す、これに表現を與ふるものが文藝家である。いづくからともなく吹く風を絃(いと)にとらへて、いみじき妙音をかなで出でる AEolian lyre のやうに、詩人は一代民心の動く機微を捉へて、これに藝術的表現を與ふるものである。『目にはさやかに見え』ない民衆の無意識心理の內容を、天才の鋭敏なる感性(サンシビリテ)が逸早くもそれを摑んで表現するのである。かかる意味に於て、十九世紀初期の浪漫的時代に於て、シェリイやバイロンに現はれた革命思想は、すべての近代史の豫言であり、またそれらより後のカアライルもトルストイもイブセンもマアテルリンクもブラウニングも、皆新しき時代の豫言者であつたのだ。

因襲道徳や法則や常識などの立場から見れば、だから文藝作品は甚だしく亂暴な不都合な危險なものとも見られる場合があらう。さういふ一切のものを超越した純・無雜なる創造生活の所產であるところに、文藝の本質があるのだ。天馬(ペガサス) Pegasus の如き天才の飛躍に大なる意義が見出されるのだ。

豫言者ややもすれば故國に容れられないと同じく、詩人もまた餘りに多くその時代よりも先んじた先驅者であつたがために、迫害せられ冷遇せられた例は甚だ多い。ブレイクが百年後に於てはじめて世界に認められるに至つた如き例は、その最も著しきものであるが、シェリイの如きスヰンバアンの如きブラウニングの如き、またイブセンの如き革命的反抗的態度の詩人的豫言者は、多くその前半生に於てか或は時にその全生涯をすらも、轗軻不遇のうちに終つた例は枚擧に遑なきほどである。フロオベエルですらも生前には全く歡迎せられなかつたといふ事實の如き、或は樂聖ワグネルが、バイエルン王ルウドギッヒの知遇を得るまでは長く流離落魄の生を送つてゐた如き、今日にしておもへば寧ろ不思議なくらゐだ。

昔の人は、民の聲は神の聲だ 'Vox populi, vox Dei' と言つた。神の聲を傳ふるもの、神に代つて叫ぶもの、それが豫言者であり詩人であつた。しかし神とかインスピレイションとかいふものが、人間以外に存在するのではない。實はそれは民衆の內部生命の欲求に他ならないのである。『無意識』心理のかげに潛んで居る生の要求であるのだ。經濟生活、勞働生活、社會生活、政治生活などの場合には、物質主義や利害關係や常識主義や道德主義や因襲法則などの抑壓制縛を受けてゐる內部生命の要求――換言すれば『無意識』心理の欲望が、絕對自由な創造性を發揮して美しい夢の形を取つた『詩』となり藝術となつて表現せられる。

無神論を唱へて大學を逐はれ、矯激なる革命論のためには戀にやぶれ、はてはスペッチアの海に溺れて迫敢なき三十歳の短生涯を終つた抒情詩人シェリイが、吹きすさぶ西風に托して思を抒べた有名な大作の激調を見よ。

> Drive my dead thoughts over the universe
>   Like withered leaves to quicken a new birth!
> And, by the incantation of this verse,
> Scatter, as from an unextinguished hearth
>   Ashes and sparks, my words among mankind!
> Be through my lips to unawakened earth
> The trumpet of a prophecy! O Wind,
>   If winter comes, can spring be far behind?
>
> —Shelley, *Ode to the West Wind.*

革命詩人シェリイが『醒めざる世界に向つて、豫言の喇叭たれ』と叫んだこの歌が出來てから約百

年を經た今日、ボルシェギズムは世界を戰慄せしめ、改造を叫び自由を求むる聲は地球の隅々にまでも及んでゐる。世界の最大の抒情詩人であつた彼は、同時にまた大なる豫言者の一人であつたのだ。

二　理想主義と現實主義

或人は言ふ、文藝の社會的使命には二方面がある。一つはその時代や社會の忠實なる反映であり、他はその未來に對する豫言的使命である。前者は主として現實主義（リアリズム）の作物であり、後者は理想主義（アイテイアリズム）或は浪漫主義（ロウマンテイシズム）の作品であると。しかし私の創作論の立場から言へば、かくの如き區別は殆ど問題とするに足らないと思ふ。文藝がその時代その社會を飽くまでも深く突込んで描寫し、時代意識、社會意識の底の底に潜める無意識心理をまでも把握するところに達すれば、そこにおのづから未來に對する要求や欲望が暗示せられなければならぬ。現在を離れて未來は存在しない。現在を描いて深くその核心に透徹し、常人凡俗の目の屆かない深さにまで到達し得るならば、そは同時にまた未來に對する大なる啓示であり、豫言であらねばならぬ。フロイド一派の學徒が唱へる夢の解釋である欲望說、象徵說からいへば、夢によつて未來を知らうとする夢占（夢判斷）の如きもまた必ずしも痴人の迷妄とのみは考へられない。それと同じく過去現在を通して未來を夢みるものは文藝である。眞に現在の生命の中心にまでも突込むならば、生命そのものに永久性普遍性がある以上、過去現在を通して未來が

暗示せられねばならぬ。これを譬へていへば、名醫が人體を診察して眞にその病源を看破し病苦のあるところを知るならば、これに對する治療法、患者の要求もまたおのづから明らかであらねばならぬ。患者の未來のためにする治療法を知らないのは、畢竟患者現在の病狀に對して診斷を誤れる藪醫者であるからだ。このことは私がさきに創作を論じて、ゾラの作品を引合に出した一節(本書一六八參照)によつても明瞭であらう。ただ現實をのみ寫して、しかも未來に對する豫言的使命を果し得ないやうな作物は、畢竟それが藝術品として偉大ならざるを證するものだといつても、必ずしも過言ではなからうと思ふ。

三　短篇『頸かざり』

モオパッサンの短篇で、その傑作の一つだといふ定評あるものに『頸かざり』と云ふのがある。話は極めて簡單だ。

或腰辨の細君が夜會へ行くのに、金剛石(ダイヤ)の頸飾を知人から借りて出かけた。その晩、家への歸りがけにそれを遺失して了つた。そこで已むを得ず夫と相談して幾千金の借財をして、同じやうな頸飾を買つてこれを辨償した。それから十年間といふものこの負債償却のために一生懸命に儉約して働いた。全く面白くもない長い月日を送つた。いよいよ負債全部を償却した時、よく調べて

見ると先年借りた頸飾は贋玉で、わづか百圓位の價しきやないものだといふことがわかつた。

若し夢の外形たる事象だけを見るならば、この小話の如きは實に、極めて詰らない一篇の落し話に過ぎないだらう。詩歌戯曲小説の凡てを通じて、それが藝術的創作たる價値を有する所以のものは、描かれたる事象の如何によるのではない。それが造りごとであらうと事實であらうと、作家の直接經驗であらうと、間接經驗であらうと、また複雜であらうが簡單であらうが、現實的であらうが夢幻的であらうが、文藝の本質からいへばそれは問題ではない。問題とすべきは、それが象徴としてどれだけの刺戟的暗示力を持つてゐるかと云ふ點にある。作者はこの事象を材料とし、如何に之を取扱つてその夢を創造したか、作者の『無意識』心理の底には果して如何なるものが潜在してゐたか、さういふ點こそ先づ吾々の着目すべきところである。モオパッサンはこの頸飾の話を他人(ひと)から聞いたのか、或は想像で拵へたのか、或は直接經驗をもぢつたのか、其邊は先づ第二の問題として吾等は先づ、この作家が驚くべき現實性をその描寫に與へ、巧みに讀者を幻覺の境に引き入れて、その刹那生命現象の眞を暗示し得た技倆に敬服させられる。人生の極めて皮肉(アイロニカル)な悲劇的な姿を少しも概念的哲理に墮しないやうに吾人に暗示し、直感的に端的に、生けるが儘に、われわれがこれを受入れて生命現象の眞に觸れ、曩に述べた鑑賞の第四階段にまで到達し得るやうに、仕向けて呉れた鮮やかなその手際に驚かされるのである。この落し話は畢竟暗示の道具に使はれた象徴に過ぎない。沙翁がその三十七篇

の戯曲には、嘘八百の歴史談や、昔話や、井戸端評定か新聞の社會面の記事に過ぎないやうな世間話を材料に用ゐて、縦横無盡に彼の創造創作の生活をやつたのであつた。

しかしモオパッサンにして若し最初から『人生の痛ましい皮肉(アイロニイ)』とでも名づくべき抽象的概念を意識的に表現すべくこの『頸かざり』を書いたのならば、それは藝術品として遙かに簡單にして低級なアレゴリイ式のものに墮して、あれだけのつよい現實性、實感味が出ないために、生命の表現としては失敗したに相違ない。痛々しいあの官吏の夫婦者を生けるが儘に、まざまざと吾人の眼前に活躍せしむることは出來なかつたであらう。モオパッサンの『無意識』心理に在つた苦悶が、夢の如くここに象徴化されたればこそ、『頸かざり』一篇は立派な生きた藝術品として讀者の胸奥に生命の振動を傳へ得るのである。讀者は誘ふてまた同じ悲痛な夢を見させることが出來るのである。

或小說家は、自分の直接經驗でなければ藝術品の材料にはならないとでも心得てるらしい。馬鹿馬鹿しい謬見だ。若しさうであるならば、泥棒を描くために作家は自分で泥棒をしなければならぬ、人殺しを寫すために作家自ら人殺しをせねばならぬ。沙翁のやうに王侯から卑人に至るまで、弑逆から戀愛から幽靈見物から戰爭から高利貸から何から何まで描いた男は、それを一々自分の直接經驗で行(や)つて居ては、人生五十年はおろか、百年千年生きて居たつて出來る話ではなからう。姦通を描いた作家があれば、あの小說家はたしかに自分で姦通をやつたに相違ないと言はれ得るだらうか。描かれた

事象が立派に象徴として成功して居るならば、また間接經驗と雖もそれが直接經驗と同じやうに描かれてゐるならば、嘘八百の拵へ物でもそれが嘘八百の拵へ物でないやうに寫されてゐるならば、その作品は偉大なる藝術的價値を持つてゐる。文藝は夢と同じく象徴的表現法を取つてゐるからだ。

直接經驗のことに就いて想ひ起す話がある。昔から道心堅固に行ひすまして極端な禁慾生活を送つた坊さんが、立派な戀の歌を詠んでゐる。それを見て、この坊さんの私行を疑つた人々が多い。坊さんと雖も人の子である。たとひ直接經驗に戀はしなくとも、彼の體驗の世界には美女もあつたらう、戀愛もあつたらう。殊に性慾に抑壓作用を加へた心的傷害は無論あつたであらう。それが歌といふ夢の形に現はれたと見ることは、決して無理からぬことだと私は思ふ。

坊さんの戀歌のことを考へて見ると、心理學者の說く二重人格とか、人格の分裂とかいふことがまた思ひ合はされる。かのスティヴンソンの傑作として名高い小說 "Dr. Jekyll and Mr. Hyde" の場合のやうに、同一人格にして、善人たるジイキルと惡人たるハイドとの二つの精神狀態が見られるのである。これは卽ち私が最初に述べた二つの力の衝突を具象化したものだと見て可い。元來人間の性格に矛盾があると言はれるのも、畢竟この人格の分裂、二重人格(ダブル・パアスナリテイ)の行方で解釋せらる可きものだと思ふ。卽ち一方に罪惡性があつても、それは平素は抑壓作用のために無意識の中に押込められて、意識の表面には現はれない。然るに一朝催眠狀態に入るとか、或は歌を詠むやうな自由創造の境地に

入る時、この罪惡性や性的渇望は突如として意識の表面に躍り出でて、其善人、其高僧の平素の意識狀態とは似ても似つかぬ行をしたり、或は歌を詠んだりするのである。佛教に『降魔』と云ひ、或はフロオベエルの小說『聖(サント)アントアヌの誘惑』のやうな場合の如きも、心的傷害の苦悶が無意識から意識へ躍り出でる精神狀態の具象化であらう。或はまた平素は非常に陰氣な憎人(ミザンスロピック)的な人に滑稽作家が多く、例へば夏目漱石氏のやうな生眞面目(きまじめ)な陰鬱な人が『坊ちやん』や『吾輩は猫である』を書くユウモリストであり、ジョナサン・スヰフトのやうな男が『桶物語(テエル・オブ・エ・タブ)』を書き、また最近の研究によれば『膝栗毛』の作者十返舍一九が極めて陰氣な人であつたといふ如き、みな私はまたこの人格分裂說を以て解釋し得ると信ずる。平素は抑壓せられて無意識の圈内に伏在してゐるあるものが、純粹創造の文藝創作の場合にのみは、それが表面へ躍り出して自己意識と結び付くからでは無からうか。精神分析學派の人には、皮肉(シニシズム)などをもこれで解釋してゐる學者がある。

藝術創作の場合を譬へていへば、酒に醉つたときと同一である。血氣盛な社員が會社銀行の事務室に居る時は、重役や支店長に頭を下げてゐる。それは利害の及ぶところ年末の賞與金にまで影響するから、自分で抑壓作用を加へてゐるのだ。ところが往々にして酒宴の席などで重役の老人や課長などに喰つて掛るのは、酩酊の結果、利害關係や善惡批判の抑壓作用が除去されたので、その眞生命が猛然として躍り出でた狀態である。翌日になつてまた重役の勝手口から奧さんへ詫を入れたり執り成し

を頼みに行つたりする時は、また再び抑壓作用が蓋をし栓をしてゐるために、前晩とは似ても似つかぬ別人間に出來上つてゐる。羅馬人は『酒のうちに眞(まこと)あり』In vino veritas と言つた。酩酊の時と同じやうに、藝術家はその創作の場合に於て最も純眞なる僞らざる自我を表現してゐるのである。御用新聞の主筆が社說を書いて居る心理狀態とは正反對である。

四　白日の夢

昔から詩人や藝術家などのインスピレイションといふことが屢說かれた。譯して『神來の靈興』とでもいはうか、そんなものが突如として天外から天降つて來るわけは無いので、それはつまり作家自身の無意識心理の底から湧き出でる生命の跳躍そのものに名づけられた別名だ。本當の自我であり本當の個性である。ただそれ『無意識』心理の所產なればこそ貴いのだ。若し顯在意識のやうな上つつらな表面的な精神作用で出來あがつたものならば、その作品は拵へ物となり、造り事となつて、眞に讀者の方の中心生命にも強い振動を傳へることは不可能になるわけだ。わたくしはかの所謂制作(シャフェンス・)感興(シュティンムンク)が、深い無意識心理の底から出るものであることを信じてゐる。

作品が眞に作家の創造生活の所產であるならば、對象として作中に描かれてゐる事象はつまり作家その人の生活內容なのである。『我』以外の人物事件を描いて、實は『我』をそこに描き出したのだ

（鑑賞者もまたこの作を『味はふ』ことによつて、鑑賞者みづからの『我』を發見する）。だから或作品を研究するためにはその作家の閲歴體驗を知る必要があると共に、また作品を通して作家その人を知ることが出來る。かのフランク・ハリスは古文書舊記等に據らず、ただ沙翁の戯曲を通して『人』としての沙翁を論斷しようと試みた。これは在來の考證一點張りの學究を驚かすに足る大膽な態度であるが、私は此種の研究法にも亦十分の意義があると信ずる。ゲエテの『ヱエルテルのわづらひ』と共に彼の自傳と見るべき『詩と眞實』を繙き、ルソオの『新エロイズ』の戀物語と共に彼の『告白錄』第九卷を讀むときは、實生活に於て戀に敗れたこれら大天才の胸奥の苦悶が、如何に『夢』としてこれらの作品に象徴化されてゐるかが明らかに知られよう。

文藝創作の心境を一種の夢なりと解釋するわたくしの以上の所說を見てのち、讀者は古來多くの詩人や作家が夢の經驗に就いて如何に考へて居るかを檢せられるならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらうと思ふ。わたくしは最近に讀んだ與謝野夫人の隨筆集『愛、理性及び勇氣』の一卷から、下の一節を引用して參考の便に供しよう。

古人のやうに夢の中で好い歌を感得したやうな經驗は持ちませんが、小說やお伽噺の構想を夢の中で捉へることは屢ありま す。それには空想的なものもありますが、夢の中では意識が一方に集つて照り輝くためでせう。微妙な心理や複雜な生活狀態を目が覺めて居る時よりも一層よく寫實

的に觀察することの出來るばかりで無く、それにおのづから明暗の度が適度に附いて、ちやんと一つの藝術品として立體的に浮き上つて構圖されて居る場合があります。さういふ場合に、人が夢を見てゐるといふことは眠つてゐるのでなくて藝術家としての最も純粹な活動をして居ることに當ると思ひます。

それから、また、平生ぼんやりと考へて居ることや、どうして解釋して好いか解らないで行き惱んで居る問題などが、はつきりと夢の中で判斷のつくこともあります。さう云ふ場合に夢と現實との間に境目といふものが無いやうな氣がします。と云つて、私は夢を少しも當てにして居るのでは無いのですが、小野小町が夢を愛したといふ氣持は私にも想像することが出來るやうに思ひます。（與謝野夫人著『愛、理性及び勇氣』一四七頁）

單に創作ばかりでなく、鑑賞もまたわれら日常の實際生活から離れた『夢』の境地に引き入れられて、はじめて可能となる。昔から文藝の快感には、無關心 disinterestedness といふことが要素であると言はれるのもこの點を指したのだ。即ち實際生活の利害を離れてこそ、はじめて現實を凝視し靜觀し觀照し、また批評し味識することを得るので、たとへば動物園のライオンの雄姿を見て、山野に咆哮するその生活をまでも想ふといふやうな場合、もしそこに鐵柵といふ隔てがなかつたならば、われわれは猛獸の危險が身に迫るといふ恐怖のために、ライオンの眞の姿を凝視し靜觀することは到底

不可能である。そこに檻の鐵柵が我と彼とを隔てて無關心の狀態にわれわれを置いて吳れるが故に、この藝術的觀照は成立つのである。ハイカラな氣障な服裝をした男が石に躓いて倒れたとする。それは確かに滑稽な場面だ。しかしその男が若し自分の親兄弟か何かであつて直接自分との間に利害關係や實際上のインテレストがあるならば、われわれはそれを一場の痛快な滑稽味として受取ることは出來ないではないか。そこに自分の實際生活との間に或餘裕と距離が存すればこそ、深く現實としてこの場面を感じ味はふことが出來るのである。卽ち右の與謝野夫人の言葉でいへば『夢』の中に於て一層寫實的に觀察することが出來、藝術家としての活動が爲され得るのである。ある人が言つた、五感のうち藝術の根本となるのは視覺と聽覺とだけだ。卽ちこの二つの感覺は他の味覺、嗅覺、觸覺の如くに直接的實際的でなく、そこに距離が存在する。卽ち視覺や聽覺は距離を隔てて觸れることである。如何に肌ざはりの好い天鵞絨でも美味い料理でも、それは決して完全な詩でもなく藝術品でもない。料理人を藝術家だとはいはれまい。觸覺や味覺には此『隔たり』がないために、それ自らでは文藝の領域には這入らない感覺である。それは藝術的たるべく餘りに肉感的であり實際的であるからだ。ライオンの檻の鐵柵が無い場合と同じいからだ。（以上『夢』と云ふのは『實際的』の生活を離れてゐると云ふ意味である。更に適切にいへば『醒めたる者の白日の夢』詩人が所謂 "waking dream" に他ならない。）

この『非實際的』であるといふことが、われわれをして利己的情慾そのほか色々の雜念の煩ひから離脱せしめることによつて、絶對自由の囚はれない創造生活を營ましめる。卽ちあらゆる抑壓から放たれ淨化せられた藝術生活、批評生活、思想生活はこの『非實際的』『非實利的』と云ふことを、最大要件の一として成立する。美女を見てはこれを己が妻とせんとし、黄金を見ては自ら富まんことを思ふのが吾人の實際生活に於ける心境で、若しそれだけで終始するならば、それは動物生活であつて靈的精神的方面を有する眞の人間生活ではない。われわれの生活が『實利』『實際』と云ふものから淨化せられて醇化せられて、『離れて見る』ことを得る『夢』の境地に入つてこそ、そこにはじめてわれわれの生命は高められ深められ、强調せられ擴大せられるのである。渾沌として無秩序無統一なるが如きこの世界が一つの纏まつた、秩序あり統一ある世界として觀照せられるのは、ただそれ『夢の生活』に於てのみである。『實際的』と云ふことから生ずる雜念の曇を拂うて淸朗一碧、さながら明鏡止水のごとき心境に入るとき、そこに藝術的觀照生活の極致は到る。（第三卷『觀照享樂の生活』のうち『觀照とは』參照）

かくて『白日の夢』に於て、われらの肉眼は閉ぢて心眼が見開く。それは卽ち靜思觀照の三昧境に入つた時である。實行を離れ欲念を脱し、外圍の紛々擾々を逃れて到れる自由の美鄕、寂智の靈光はさながら天心に懸れる月の如くにその一切を照らしてゐる。この幻像この情景は、これを象徵によつ

て表現するのほか道なきものである。

すべて文學に限らず一切の藝術創作は、渾沌として不統一なるかの如くに見ゆる日常生活の事象に統一を認め纏まりを見出すことである。卽ち無意識心理の作用によつて、作家も鑑賞者も皆ともに自己の選擇作用を働かしてゐる。その人銘々の選擇作用によつて、色々の立場から色々の態度で、統一ある創造創作がこの渾沌たる事象の中から纏め上げられるのである。卑近の例を以ていへば、たとへば私の書齋には原稿や紙片や文具や書籍や雜誌や新聞などが紛然雜然として混亂の狀態に置かれてゐる。他人の目から見れば、確かにそれは渾沌たるものである。しかし私は他人がこの室に入つて一指をだにそれに觸れることを迷惑に思ふ。そこに私みづからの目から見れば、立派な秩序もあれば統一もあるのだ。もし女中の手でそれが片付けられるならば、また別の個人の立場からの選擇作用が行はれるが故に、大切の原稿が紙屑と間違へられたり、書物排列の順序が違つて手近に在るべきものが遠くに在つたりして、私にとつては非常な不便を感じなければならぬ。立場と態度とを變へて物を見るといふことになれば、個人々々によつて差異あるは勿論、同一人に於てもまた異なれる統一が見出される。文藝の創作が飽くまでも個性を土臺としてゐる所以はここに在る。たとへば一つの景色に對しても、Aの人が見るのとBの人が見るのとでは、そこから摑み出すものが非常に違つてゐる。また東から見るのと西から見るのと、或は左右上下、各その立場の差によつて、それぞれ異なつた選擇作用

が行はれるのだ。同一人が同一の對象を見るにも、股ぐらから倒に見た景色は普通に直立して見た景色と全然趣を異にしてゐるのと同じだ。(序ながら、自然人生を藝術的に見ることを知らない形式法則萬能主義者或は道學先生の徒は、これを譬ふれば私の書齋を片付ける女中の如きものだ。何も解らないでただ書籍の寸法や色合によつて、或は單に因襲的な考へ方から硯箱や煙草盆の位置を定めることによつて、わたくしと云ふ個人の書齋の眞味を破壞し了るものである。)

五　文藝と道德

最後にわたくしは文藝と世間並みの道德との關係に就いて言つて置かう。文藝が罪惡を描き不健全の思想を鼓吹するのは怪しからぬ、崇高の道念、健全の思想を書いたものでなければ大作とはいへないではないかと。これは文藝と人生との關係を徹底的に考へて見ない人のいつもいふ言ひ草だが、上來私が述べたところによつてこの問題は既に明らかであると思ふ。卽ち文藝は生命そのものの絕對自由な表現である。われわれが社會生活、經濟生活、勞働生活、政治生活等の場合に見る善惡利害など一切の價値判斷を離れ、何等の抑壓作用を受けない純眞な生命表現である。だから道德的であると罪惡的であると、美であると醜であると、利益であると不利益であると、そは皆文藝の世界に於て問ふところではないのである。人間そのものが神性を具へてゐるとともに獸性惡魔性をもそなへ、われわ

れの生活にも從つて美な一面とともに醜な一面の存在することをも否定することは出來ない。文藝の世界に於ては、醜に對して特に美を强調し、惡に對して特に善を高唱する作家の貴きと同じく、近代の文學などに特に多い惡魔主義の詩人、——たとへばボオドレエルのやうな『惡の華』の讃美者も、自然派のやうな獸慾描寫の作家も、また皆それぞれ充分な存在の意義を持つてゐる。ただ文學は moral であることを必要條件とはしないやうに、また immoral であることをも固より必要とはして居ない。それは上にも述べたやうに『實際的』の世界に通用してゐる一切の價値判斷から全然離れた立場に立てる non-moral なものだからだ。（第三卷『觀照享樂の生活』のうち『觀照とは』參照）

問者は或は言ふだらう、然らば昔からの文學に殺人、淫猥、貪慾などを材料にした罪惡的のものが特に多いのは何故だと。これは作家の方から言へば、いつも最も多く抑壓作用を加へられてゐる生命の危險性、罪惡性、爆發性の一面が純粹創造の文藝の世界に於てのみ、自由に表現せられようとする傾向あるがためだ。またこれを讀者鑑賞者の側から言へば、文藝の作品に接する場合に於てのみは、人間性の中に存在する惡魔性、罪惡性が抑壓を離れて、そこに作品との間に共鳴共感を起すことによつて、また一種の生命表現をなしてゐるからだ。人間の生命の存する限り、また解放を求むる欲望のあらん限り、抑壓作用を突破した罪惡と云ふものに對する人間の興味は、とこしへに絕つべからざるものである。これは文藝以外のものに於ても、たとへば活動寫眞、新聞の社會面記事などにある强

盜、殺人、姦通などの事件が永久に人々の興味を惹く所以ではないか。佛蘭西のグウルモンの言葉に、『多くの人は醜聞(スキャンダル)を愛する。他人の醜行の暴露に、隱れてゐる自己の醜をまざまざと見せて呉れるからだ』と。それは卽ちわたくしが上に述べた自己の發見の喜びであるところの共鳴共感に他ならないのだ。

かくの如くにして、文藝の內容には人間生命の一切のものがある。ただに善と惡と、美と醜とのみでない、喜びとともに悲しみを、愛慾とともに憎惡をも見出す。心靈の叫びとともに、また抑へがたき慾情の叫びをも聞くことが出來る。換言すれば人間生命の飛躍そのものに接してゐるので、ここに道德や法則によつて律するを得べからざる流動無礙の新天地が存在する。深き自己省察も眞の實在觀照も、何等囚はるるところなき『離れて見る』此境地に入つて、はじめて可能となるのではあるまいか。この點に於ては科學も文藝も同じである。卽ち科學もまた『實際的』『實用的』と云ふことから離れて見るものだ。二點間の最短距離は直線なり、惡貨は良貨を驅逐す、と科學の理論はいふ。然しそれが道德的であるか否か、善であるか惡であるかは科學に於て問ふところではない。理論 theory と云ふ言葉の語源たる希臘語の theōria が靜觀凝視觀照を意味し、それがまた芝居卽ち觀劇場 Theatron と同一語源に出づることは、かかる點から見て興味あることである。

六 酒と女と歌

以上の如き意味に於て、『藝術の爲の藝術』l'art pour l'art といふ主張は正當なものである。藝術が藝術それ自らのために存在して、自由な個人の創造を營み得るといふ點にこそ、藝術が眞に『人生の爲の藝術』たるの意義も存するわけだ。若しも藝術を人生の他の何等かの目的に隷屬せしめようとするならば、その刹那、既に藝術の絕對自由な創造性が、たとひ一部分でも、否定せられ毀損せられたのである。從つてそれでは「藝術の爲の藝術」でないと同時に、また『人生の爲の藝術』にも成らないのである。

希臘古代のアナクレオンの抒情詩も、波斯の古詩人オオマア・カイヤアマの四行詩も、酒と女に得られる刹那の歡樂を歌にしたものであつた。また中世の歐洲大學の若い學徒は『酒と女と歌』Wein, Weib, und Gesang と、この三つの享樂を一つにして讃美した。いかにもこの三者には、古往今來いつも道學先生をして顰蹙せしめる共通性がある。即ち酒と女とは主として肉感的に、また歌(即ち文學)は精神的に、いづれも皆生命の自由解放・昂奮跳躍を得るところに、愉悅と歡樂を與ふるものである。もとを尋ぬれば、日常生活に於ける抑壓作用を離れ、これによつて意識的にも無意識的にもしばしたりとも人間苦を離脫しようとする痛切なる欲求から出たものだ。アルコオル陶醉と性慾

滿足とはともに、文藝の創作鑑賞と同じく、人をして抑壓から離れしむることによつて、暢然たる『生の喜び』を味はしめ、『夢』の心的狀態を經驗せしむるものに他ならぬ。ただそれが甚だしく生活の肉感的感覺的方面にのみ偏し、また單に一時的瞬間的の果敢ない淺薄な昂奮に過ぎない點に於て、『歌』卽ち文藝とは全く性質を異にしてゐるのである。（本卷『文藝思潮論』第三『思潮史の回顧』末尾參照）

第四　文學の起源

一　祈禱と勞働

すべてのものの發達は單純より複雜に向つて進むことである。だから或事物の本質を明らかにしようとすれば、先づその起源に溯り、それが最も純眞にして簡單な原始時代にあつた狀態を回顧しなければならぬ。

生きるといふことは求めることである。人間の生活には必ず何等かの缺陷があり不滿がある。如何にかしてこの缺陷をこの不滿を充たしたいといふ欲求は、やがてまた生命の創造性だと見られる。僧院に入つて禁慾生活を送れるかの修道の士の如き、一見すれば一切の欲望とを斷つもののごとくに考へられてゐるが、實はさうではない。彼等は現世的な肉慾とか物慾とかを離脫することによつて眞の自由と解放とを求め、靈的に具足圓滿な超然たる新生活境に入らうといふ別な大きい欲望に動かされてゐるのである。すべて極端と極端とは相似たもので、生の欲求の極度に强烈なるものに至つては、

生命そのものを絶つところの自殺行爲を以てしてすらも、その欲求を滿足させようとする場合があるではないか。

缺陷と不滿とは、卽ち生命の力が內的にも外的にも抑壓せられ阻止せられてゐる狀態で、それがまた人間の懊惱であり苦悶である。個人の生活が欲望と滿足との無限の連續であり、一つの滿足は更に次の新しい欲望を生じて、それが次から次へと果しもなく續いて行くと同じやうに、人類の歷史もまた原始時代から今日に至るまで、否な更に未來永劫に向つても永久にこの狀態を繰返すのである。

抑壓から生ずる苦悶を解脫し、暢然として自由なる生命の表現を求めて『生の喜び』を得べく、原始時代の人類は何を爲したか。文明の進步と共にわれわれの生活は精神的にも物質的にも複雜の度を加ふるが故に、現代に於て更にまた未來に於て、變化を加ふると共にその複雜性は益々加はつて行く。しかも人間生命の本來の要求に變化なき限り、換言すれば根本に於て不變なる人間性の儼として存在する限り、原始人類の單純な生活に見られた現象は、現在未來に於ても永久に繰返されるのである。

歐洲中世のベネディクト派僧院の生活を示す言葉に『祈禱と勞働』orare et laborare といふのがある。これは日本の禪寺で托鉢の僧が坐禪や勤行と共に、衣食住の萬事をも同じく宗教的の修行として敬虔な心持で自ら處理して行くのと同じ生活をいつたものである。それと似寄つたことが、人間と

して極めて單純な生活をしてゐた原始人類に就いても考へられる。卽ち原始時代の人は、さし當り手近な日常生活に於ける衣食住の物的欲求を滿たさんがために、山に獵り野に耕す勞働に從事すると共に、また一方には怪しげなる異教の神々の前に跪き、木や石で拵へた偶像の前にぬかづいた。この時代に於て、生命宇宙の發現として最も著しく彼等の目を惹いたものが二つあつた。換言すれば彼等はこの二つのものを對象としてその『夢』を描いた。それは日月星辰と、性慾の表象としての生殖器とであつた。露天の下に起臥して日となく夜となく彼等は天體を眺めて、そこに宇宙を支配せる不變の法則と無始無終悠久の世界を夢みた。人間が如何ともする能はざる絶大の無限力をも認めた。更にまた目を轉じて自己を顧みれば、身內に燃ゆる烈火の如き欲望が、性慾を中心としてそこに白熱點に達してゐることをも考へたのである。人間の生活意志の最も强烈なる表現である食慾と性慾とのうちで、前者を彼等は不完全ながらも勞働によつて滿たし得ると共に、後者の欲求の更に力强きものであることを知つた。兩性相交はつて新しき一つの生命を創造し、これによつて種を保存するといふ事實の前に、彼等は最も大なる驚嘆を禁じ得なかつたからだ。

二　原始人の夢

この二つの現象を兩極端に置いて、その中間に彼等は森羅萬象を『夢み』て、これを禮讃しまた禮

拜した。讃美歌を歌ひ、呪文を唱へ、祈禱を捧げて自己生命の要求欲望を、それら客觀界の具象的な事物に向つて放射しつつ、極めて幼稚な簡單な表現をしたのであつた。生の躍動は彼等をして有限界にあつて無限にあこがれしめ、絕大なる欲望の充足を願はしめたとき、そこに原始宗教の最も普通な形である天然神教と生殖器崇拜教とが生れた。欲求が制限抑壓を受くるところに生ずる人間苦と原始宗教と、それから夢と象徵と、かういふ風に連絡を附けて考へるならば、聰明なる讀者は文藝の起源が果して何處に在るかを覺られるであらう。まことに原始時代に於ける宗教の祭式と文藝との關係は、姉妹であり兄弟であつたのだ。『すべての藝術は宗教の祭壇に生れる』といふ言葉の意味も、またこの點に存することを知られるだらう。日本に於て支那に於てまた埃及、希臘に於ても印度、パレスタインに於ても、或は今日なほ原始狀態にある蠻民の國に於ても、この現象は等しく皆指摘し得られる事實である。

原始狀態に於て人間の欲求は極めて簡單であると共に、その表現もまた單純であつた。先づ日常生活に於ける實利的な欲求から出發して、そこに簡單な夢が成立つ。たとへば旱魃に苦しめられ雨をもふこと切なるとき、たまたま雲霓を望めば彼等は天に祈る。天に祈つて雨降れば、彼等はまた感謝と讃美とを捧げる。水災や風害のために穀物や家畜を奪はるれば、かれらはこの自然現象を呪詛するとともに、甚たしくそれを恐怖し畏敬するに至るであらう。彼等は自然力に抵抗する力が甚だ弱いた

めに、地水火風に對しても日月星辰に對しても、ひたすら感謝や讃嘆や或は呪詛恐怖の感情を以てこれに向ふ。是に於てか星々空も風も雨も、皆それらは詩化せられ象徴化せられた夢として表現せられた。殊に原始人類の幼稚な頭腦には、自分と外界自然物との差別が甚だ明瞭でないために、森羅萬象皆おのれと同じく生けりと觀て、萬物に喜怒哀樂の情をさへも見出さうとする。殷殷たる雷鳴を神の怒の聲なりとおもひ、鳥歌ひ花咲くをながめて春の女神のおとづれなりと見る。かくの如き感情、かくの如き想像を一つの搖籃として、そこに詩と宗教と云ふ雙生兒は生ひ立つたのである。

この原始狀態よりして更に一歩を進むれば、ここに智力の作用は加はつて好奇心も起り模倣慾も出來る。更にまた前の畏敬や恐怖は、一轉して無限の信仰となり信頼ともなる。火を見ても生殖器を見ても、猿の尻の赤いのを見ても皆それぞれの由來を考へて見たり理窟を附けたりして、はてはそれを禮讃し渇仰し崇拜する。もとを尋ぬれば皆生命の自由な飛躍が阻止せられ抑壓せられる苦悶、即ち心的傷害から生ずる象徴の夢に他ならない。滿たされざる欲求、そのまま直ちに實行の世界に移すを得ざる生の要求が、形態を變じて表現せられたものだ。詩は個人の夢であり、神話は民族の夢であつた。

その最も單純な原始狀態に就いて見れば、かくの如くにして祈禱禮拜の折の心もちと、文藝の創作鑑賞に於ける心境とには、明らかに一致があり共通性が見られるのである。

（未定稿）

苦悶の象徴 終

最近英詩概論

『最近英詩概論』目次

第一章　英國近代詩壇の革新……二四五

第一節　佛國革命前後の英詩概觀……二四五

詩文の傳統——熱情の歌——革新の曙光——クウパア——ブレイク——クラッブ——バアンズ——自由民權の近世的大思想——大革命と英詩——湖畔詩社——コウルリッヂ——サウジ——スコットの史詩——バイロン——十八世紀詩風の破壞——シェリイの抒情詩——キイツの特色——ランダア——第二流の革命詩人——千八百三十年代の詩界——新來の詩人は誰ぞ

第二節　詩界の新潮……二六〇

典雅主義（クラシシズム）と羅曼底格主義——羅曼底格主義の歐洲文學——此主義の特色——田園自然の淸興——俗歌民謠の復活——處女王朝文學の情熱ここに再現す——古代神話と中世傳説——詩歌の題材——以上の內容を歌ふに用ゐられたる詩形——其缺點——和歌との比較——二大潮流の融和になれる近英詩歌

第二章　最近英文學の後景……二六六

人文一般の趨勢——大革命の民主主義——詩文に於ける其影響——社會主義と文學——大革命の國民主義——自然科學の發達——其影響——物質的文明——近世の生活——これに對する近英詩人の態度

第三章　新時代の代表的詩人……二七六

第一節　テニソン……二七六

文學史上の地位——少壯時代——千八百三十年の詩集——第二の詩集——千八百四十二年の詩集——その學殖造詣——推敲改竄——『プリンセス』——桂冠詩人——『イン・メモリアム』——『モオド』——一代の大作『アアサア王の歌』——アアサア傳說の由來——傳說の梗概——全篇の次第——其思想——海洋に關する詩歌——テニソンの戲曲——晚年の作品——臨終——時勢とテニソン——科學の感化——テニソンの思想——その技巧の美——その用語——兄なる二詩人の作品

第二節　ブラウニング……三四五

序說——幼少時代の素養——シェリイの感化——大陸觀光——『パラセルサス』——『ソル

デロ』――エリザベス・バレット・ブラウニング――相思と二人の詩歌――夫妻詩人相携へて南歐に奔る――南歐生活――當時の詩作――夫人の死――佛國漫遊――詩界の一大勢力――晩年の作品――其死――アソランドオの跋歌――その信仰――善惡の衝突――その人生觀――『降誕祭前夜』――剛健の精神――戲曲的透察の詩才――沙翁との比較――近英戲曲の特徵――心靈の解剖――モノログ――大作『環と書』――物語の梗概――其序歌――全篇の次第――短篇の名作――繪畫音樂に於ける造詣――描寫の詩筆――晦澁難解――テニソンとブラウニング――その對立

第四章　懷疑厭世の詩派……………………………………三九〇

千八百五十年ごろの詩壇――大勢の一轉機――哲學的傾向――詩人としてのマシウ・アアノルド――其詩人的生涯――懷疑厭世の思潮――慰安を自然界に求む――その厭世悲觀の眞相――ヲルヅヲルス崇拜及び二詩人の比較――『ドオヴアの濱』――輓歌體――長篇の名作――『ソオラブとラスタム』の名作――短篇の諸作――彼の典雅主義（クラシシズム）――厭世詩人クラフ――閲歷の概略――短篇の抒情詩――『旅路の戀』――詩人ジエームズ・トムソン――彼は英國のポオ――純然たる厭世悲觀の詩人――『恐ろしき夜の都』

第五章　スパズモディック派の詩人……………………………四一二

此派の特質――内容と外形――懷疑哲學の傾向――バイロンの感化――其名稱の由來――
此派の詩人――ベイレイ――『フェスタス』――シドニイ・ドベル――『羅馬人』――『ボオ
ルダア』――その戰爭詩――アレクサンダア・スミス――ゼラルド・マッセイ――勞働者の
詩人――愛國の歌――ブラウニング夫人――『葡萄牙ソネット集』――女性詩人の特質――
女詩人と伊太利亞

第六章　ラファエル前派(P・R・B・)

第六章　ラファエル前派(P・R・B・)……四三〇
第一節　詩人ロセッティ兄妹……四三〇

序說――ラファエル前派の起源――ラスキンの所說――此派の特質――中世尊崇――文藝
史上ロセッティの地位――南歐の血統――ダンテの名――幼時の素養――ラファエル前派創
立――こひ妻――その死――急激の神經性――詩集發掘――『肉感詩派』の攻擊――晚年
――南歐中世――超世高蹈の詩人――『驚異の復活』――繪畫と詩歌――ソネット體――
『生命の家』――その中心思想――其序歌――戀愛詩――此集の特色――畫賛のソネット
――バラッド體――此體の名作――『在天聖女の歌』――其抒情詩――哲理冥想の詩篇――
伊太利詩歌の飜譯――佛蘭西詩歌の飜譯――古語の復活――聲調の美――ダンテの感化
――戀愛觀――ビイアズ氏の說――散文の著『手と靈』――女詩人クリスティナ・ロセッティ

の閲歴——シモンズの批評——其宗教詩——叙事詩——象徴詩——詩人兄妹

第二節　この詩派の諸詩人……四四七

ロセッティとモリス——モリスの幼少時代——處女作はP・R・B・の先鋒——此作の內容——美術工藝品の製作——『ジェイソンの生涯』——『地上樂園』——北歐傳說の研究——北歐の古代趣味——社會主義者——チョオサアの感化——中世思慕——ロセッティとの比較——スヰンバアン——素養——悲曲『アタランタ』——聲調の美——『ポエムズ・エンド・バラッヅ』第一卷——其特色——佛蘭西詩歌の影響——古典文學の素養——急激の自由主義——海洋の愛——其バラッド體——戲曲——ケルト傳說——其散文——反抗的革命的精神——シェリイ——此派の諸詩人の關係——少數の讀者

索　引……五一五

第一章　英國近代詩壇の革新

第一節　佛國革命前後の英詩概論

詩文の傳統——熱情の歌——革新の曙光——クウパア——ブレイク——クラッブ——バアンズ——自由民權の近世的大思想——大革命と英詩——湖畔詩社——コワルリツヂ——サウジ——スコットの史詩——バイロン——十八世紀詩風の破壞——シエリイの抒情詩——キイツの特色——ランダア——第二流の革命詩人——千八百三十年代の詩界——新來の詩人は誰ぞ

一日にして成らざりしは、あに羅馬のみかは。げに文藝は大業なり。文星高照、光芒燦爛たる一代の詩文が其極りなき隆運を示して、之を萬邦の古今に比して匹儔なしといふものあらば、そは決して突如として現はれたるにあらず。幾多の波瀾と曲折とを經、滔々として絕ゆる事なかりし一大潮流が、はからずも絕大の氣運に際會して、茲に遂に澎湃として天に冲するの勢を得たるもの に外ならず。言を換へて之をいへば、詩文の發達には常に連綿たる傳統なくんばあらず。われいま本書に於て

英國最近の詩歌を說かんとするに當りて、先づ少しくその以前に溯り、十九世紀初期の詩歌に就いて概觀を試み、一代の傾向が歸趨するところを尋ねんと欲するも、近代詩の由つて來る所を明らかにせんとすればなり。

そのむかし、處女王朝の御宇に空前の發達をなしたりし英詩の琴の音しばしば絕えて、人の胸奧に湧き出でたる血あたたかき熱情の歌きこえずなりしより殆ど百五十年。この間、聲調形式の美を競ひて眞情をうたふこと稀なりし詩歌は、バアンズ、クウパアの作品によりて、根柢より一大變化を蒙むるに至りぬ。これぞ近世英詩の淵源と見做すべき最も重要なる革新の時期にして、自然と人生とに對する詩人の態度は、ここに全くその趣を異にするに至れり。

英詩の晨星チョオサアにはじまりて、スペンサア、シェイクスピアなど曠世の天才によりて大成せられたる詩界の風潮は、佛蘭西の影響をうけたるアン女王朝の詩歌に於てまた見るべからざるに至りぬ。ドライデンと之に次いで起りしポープなど、皆自然を忘れ、想像をすてて、情熱を疎んじたる詩歌を以て一代を風靡したれども、やがて起りし古典研究の風は、グレイ(一七一六――七六)、コリンズ(一七二一――五九)等の詩人を生み、沙翁と同代の作家の名什に精緻なる討究を試みて、いにしへを忍ばんとする者多く、有名なるパアシイの『古歌拾遺』(Dr. Percy's Reliques of Ancient English Poetry, 1765)あらはれて、はやく旣に後のスコット等の素をなしぬ。マクファアソンの『オシ

アン』(Macpherson's Ossian 1760…63)また殆ど時を同うして出でたるは、英國のみならで大陸の文學にも多大の影響を與へぬ。詩界に於ける革新の氣運いまや鬱勃として、新時代の曉色すでに東天にあらはれ、過去詩壇の明星漸く光なからんとす。

この時に於て最も顯著なる現象と見做すべきは詩體の變化なり。彫琢の末技に走りて生命なく熱情なき在來の詩風を破壞したるものは、まごころ厚き詩人クウパアの抒情詩にして、之を大成せしものはバアンズの詩集なりき。更に之を自然と人生とに對する詩人の態度に見んか、人類の自然界に於ける關係漸くあきらかならんとし、ポープ一派の作に於ては、人間を主題として僅にその背景(バックグラウンド)に用ゐられたる天地山川は、いまや一轉して詩歌の最も主要なる題材となりて現出し、蘇蘭土のひとトムソンが四季折々の樂しき田園の風光を敍したる名作(一七二六—三〇)は此方面に一新時期を劃したりき。コリンズ、グレイの諸作のほか、ひろく邦人の間に知られたるゴールドスミスの『旅人』(一七六四)『荒村行』(一七七〇)また此新思潮の代表にあらずや。また更に之を人間に就いて見るも、從來の偏狹なりし風潮は去つて、詩人の同情はひろく異邦の俗、ならびに下層社會の民衆にも及びぬ。

上來のぶる所の詩界革命の大業を起し、前代のあとを承けて後の詩人をつくりしものはクウパア、クラッブ、バアンズの三詩人なれどわれ等は先づここにヰリアム・ブレエク(一七五七—一八二七)の大名を逸すべからず。かれはエリザ王朝の詩風を追慕して之を復活したるひと、『エドワアド三世』の

斷片には明らかにマアロウの豪壯なる遺韻を聞くことを得べく、『詩神に寄する歌』は、在來の詩歌に稀なりし熱情あふるゝが如くにして、バラッド體の諸作には、『オシアン』や、パアシイの『古歌拾遺』の風致を寓せて、その影響、後のヲルヅヲルス等を起ししのみか、またラファエル前派の作品に影響を與へ、今なほ二十世紀初期の英國現存の詞人イーツの歌に神祕幽奧の遺韻を傳へたる、まことに驚くべきにあらずや。

キリアム・クウパア(一七三一—一八〇〇)がホオマア共他古典の飜譯、ならびに諷刺の歌などは、寧ろ前代の傾向を代表したる者なれど、そのすべての詩篇に見えたる一種の宗教思想こそ、實に後の大詩人テニソンやブラウニングにあらはれたる同じ要素の源泉とも見做すべきものなれ。『ジョン・ギルピン』などの輕妙なる滑稽は、更に新趣味を英詩の歴史に加へ、かの母のうつしゑを得たる折の歌などは、エリザ王朝以後ながく前代の詩歌に絕えたりし人間の眞情を流露せる點に於て最も注目すべきもの。またブレイクとおなじく動物を詠じて、之が人間との關係を歌へるが如きは、その後代に大なる影響ありし點にして、大作『タスク』(一七八五)のごとき、みづからが田園の生活を歌ひて結ぶにその宗教思想を以てし、自然と人生とに對する新詩人の態度ここに益々あきらかなるを見るべし。『貧者の詩人』と呼ばるるジョージ・クラッブ(一七五四—一八三二)の作は、クウパアに見ゆるが如き『ユウモア』を缺きたれど、そのまづしき村びとの生活に溫き同情を寄せたるまごころの歌こ

そ、新詩界の傾向を代表したる者なれ。されどここに注目すべきは、戀愛の至情を歌へる詩歌の絶えて久しく英詩に見られざりし事にして、今やこの方面に於て、處女王朝のいにしへの趣を復興し得たるものは、ロバアト・バアンズ（一七五九―一七九六）の作に外ならず。かれが最初の成功こそ、其かぎりなき清新なる戀愛詩にてありしなれ。みづからも貧しかりしこの田園の詩人は、貧者に對する同情のあつきもおのづからなれど、クウパア、クラッブを合はせて此三詩人が、殆ど時を同うして同一方面に留意したるも奇ならずや。

さはいへど、詩歌の發達は常に時代思潮の暗遷默移に伴ふ。余が以上に說きたる諸詩人を動かして、殆ど時を同うして、同一傾向を帶ぶるに至らしめたる當時の思想界は如何なりしぞ。自由民權の思想、はやく既に歐洲の天地に彌漫して、『自然に歸れ』と叫びしルソオの聲は時人の耳をそばだてぬ。都門を去つて田園の風致に興趣を覺え、過去文學の中心たりし貴族社會を顧みずして、素朴なる農夫や貧人の生活に、詩人が多大の同情を催ほしたるも、皆一にこの近世的大思想の反影に外ならざるなり。おもふに近世文明の淵源なる文藝復興期(ルネッサンス)の時代に其萠芽を發して、漸次發達し來れる自由(リベルテ)、悌愛(フラテルニテ)、平等(エガリテ)の思想は、人類の間に設けられたるすべての差別を打破し去つて、眼中また階級、國家的境界の類をおかず、政治、宗教、道德など、人文のあらゆる方面に著るしき影響をあたへぬ。詩文の界、豈獨りこの餘波の圏外に脫することを得んや。しかれども思想はながく內に沈滯せず、やがて

佛國に於て有形の行爲となりて現はれしもの、即ちかの大革命にして、千七百八十九年のバスティーユ破壞は、まさに其最高頂點に達したるものなりき。

近世人文史上のこの大なる事件は、また英國の詩歌に一新時期を劃したるものにして、實に千七百九十年より千八百三十年代に及べる四十有餘年間の英詩は、殆どすべて同様の傾向を以てあらはれ、十八世紀晩期の風潮を完成して、更にここに未曾有の大發達をなしたる十九世紀英詩の基礎をつくりぬ。かのヲルヅヲルス、コウルリッヂ、サウヂ等湖畔詩人の一派まづ所謂"pantisocratic"の同情を以て此大革命の氣運に呼應して叫びたれど、やがて腥風血雨その悲慘の極を盡すに及んで遂にこれを去り、スコットまた之に背きて、革命が破壞したるいにしへの世にあこがれ、バイロン、シェリイは熱情の筆を揮うて俗習に反抗し、革命の思想を歌ひ出でぬ。キイツ、ローヂャアズの二人のみは此氣運に與らざりしかど、その熱情を人心に鼓吹したる偉功はた沒すべからざるものあるなり。

湖畔詩社(レークスクール)(この名稱は固より嚴密なる文藝批判の許すところにあらねど)の一派が詩界に貢獻したる偉業は、われ等の最大の注意を促すべきものなり。先づ千七百九十八年を以て、ヲルヅヲルス(一七七〇―一八五〇)とコウルリッヂ(一七七二―一八三四)との合作に成りたる『抒情詩歌集(リリカルバラッツ)』出でたり。此詩集を以て、直に詩界發達の一轉機となすは、文學史家往々にして異説を挿めども、自然と人生に對する舊來詩人の態度を一變して、別に新生面を拓きたるは毫も疑ふべからず。さきにこの二

詩人、共に杖をソマァセットの阜（をか）に曳き、或はデヴォンの濱邊をさすらひて、かなた、茜さす夕べの空を望み日と共に沈みゆく帆かげを眺めて、自然の靜境に詩思を養ひしもの、やがてこの新韻をなして騒壇にあらはれたるなり。而して二大詩人は此集に於てひとしく想像（イマジネテイヴ）的寫實主義（リアリズム）をとりたるなれども、兩者おのづから其方面を異にしたり。ヲルヅヲルスは尋常一様、卑近の生活を描き、その富贍なる詩才よく之を醇化したるもの。コウルリッヂに至つては材を超自然的なる說話の類にとりて、精緻なる寫實の印象を讀者に與へんとしたるなり。（こはコウルリッヂみづからもその著 "Biographia Literaria" の第十四章に於て告白せるところなり）

ヲルヅヲルスが觀じたる自然はこれ活きたる自然にして、山川草木すべてを一貫したる一の至大至高の靈が、人間の精神と常に調和を保ちて、兩者互に相通ずるものなるを信じ、自然に對するあこがれのおもひは、彼が妹に對する愛情と毫も異なれるを見ず。されど自然に對するこの愛は、更に一歩を進めて人類に及びぬ。湖畔の夕まぐれ、牧笛の聲かすかなるを耳にしては、牧童野人は直に自然界の一部なるを感じ、歌ふところはかれ等の眞情にてありしなり。げに『愛をかれは賤が伏屋に見出でぬ。日ごとの師と仰ぎしは森といさゝ川、また星あかき大空の靜默（しじま）、さみしき山かげの眠なりき』。かくの如きはあきらかに前代の詩人と正反對の思想にして、倫敦の熱鬧のちまたを歩める折も、大陸諸邦に杖を曳いてしばし自然界の美に背きたる折も、この根本思想に何等ことなる所あるなし。退いてひそかにライダル山下の居に靜思せるかれが、人類に對する愛は自由平等の思想をして益々ふかきを

加へしめ、那翁の暴戾を憤ること最も大なりしも宜なるかな。

コウルリッヂの詩篇が節奏の美に於て英詩の古今に比なく、後代の騷人ここに學ぶところ頗る大なるは言ふを待たざれど、彼が過去の夢幻的なる說話を材として、たくみに幽玄の趣致を寓せたるは、ながく後人の讚嘆を値すべきなり。ことにその自然を描くや簡潔の筆致神に入りて、光景のあきらかに目前に生動するを覺ゆるは、われ等をしてダンテが神曲の筆を想ひ起さしむ。そのすべての特色が最もよくあらはれたる『エンシェント。マリナア』の篇を誦したるものは、この詩人が同情のいかに深厚なるやを知るべく、ひとたびは謳歌したる佛國革命が遂に殘暴を極むるに至つてや、服從なき自由を惡みたる彼の思想に至つては、他の諸作にもこれを窺ふことを得べし。（コウルリッヂとヲルヅヲルスとの評論は世間もとよりその書に乏しからねども、全般の傾向を知るに於ては余は特にシャープの著『自然詩論』と、近英散文の大家ペイタアが『アップグレシエイシヤン』に收めたる論文の精讀を薦む）。

詩人としてサウジ（一七七四―一八四三）の價値は、かみの二詩人に劣りたるの觀なきにあらずと雖も、時人の尊崇はむしろ却て其上にありしを以て、熱情あり滑稽(ユーモア)ある其豐富の述作が、時代に與へたる感化決して尠少なりとせず。殊にその二大作『サラバ』と『ケハアマ』とは材を遠く異域の說話にとりて、自然人生に對する其深き洞察を、壯麗の詩筆によせたる雄篇なり。

コウルリッヂ、ヲルヅヲルスの『抒情詩集』サウジの名作、出でて後ここに暫く寂寞なりし詩界は、

やがて『最後樂人の歌』（一八〇五）の作者スコットに、皆ひとしく其視線をあつむるに至れり。小說の方面に於けるかれの偉業はしばらくここに論ぜず。詩人として其作品に後代の非難を招きたる幾多の缺點はあれども、文學史上の地位に至つては既に牢乎として動かす可からざるものあるなり。中世の騎士時代を詩材として、巧に自然の風光を叙したるその物語詩（メトリカイロマンス）は、いかばかり時代の思潮を動かしたりしぞ。バイロンこれが爲に起り、シェリイ、キイツ亦時人の注目を惹くに至りしもかれがためのみ。なべてスコットの詩篇には神祕幽奧の趣すくなけれど、その極めて明快にして生氣躍るが如き叙事の筆は、當代に殆ど其比を見ざりき。かれは獨逸文學の影響をうくること甚だ多く、ことに其國の歌謠（バラッド）に眞摯の研鑽をかさね、十八世紀の詩人ビュルゲルの作『レノオレ』（Burger's Lenore）のごときは、みづから筆をとりて之を英譯するに至れり。ゲーテがライン河畔の中世を歌ひしと同じ態度を以て、かれは蘇蘭土の生活を描かんと欲したりしなり。おなじく革新期の詩人なれど、ヲルヅヲルスは目前卑近の生活をのみ寫したるに反して、スコットは直に現代を超越して過去の時代に讀者の同情を喚び起さんと試み、またシェリイは多く未來の代にあこがれぬ。

ひとしく革命的の時代精神にはぐくまれたる詩人なれど、バイロンとシェリイとは上述の諸詩人に比して少しく趣を異にせるものなきにあらず。蓋しヲルヅヲルス、コウルリッヂの如きは、對岸佛國の民衆が自由を叫びたる活動の初期に於て之に呼應したるものなれど、遂に腥風血雨の慘を見るに及

びて、自由を名とせる罪惡のいかに大なるやに驚き、ただ詩壇の革新を鼓吹したるに止まり、いまだ社會道德に對して何等の反抗を試みざりき。これあるに至りしは、卽ちバイロン、シェリイの一流が所謂英人の『僞善』に對して絕叫し、道學先生をして顏色なからしめしにはじまる。

バイロン（一七八八―一八二四）が初期の述作には、過渡時代の詩人の常として、猶十八世紀舊派のおもかげをとどむるもあれど、また熱烈なる破壞的勢力が詩壇に與へたる一大革命は、他の騷人の企て及ばざるところなり。革命詩人としての其特色ことに著るしき『ドン・ジュアン』に見よ。在來の政治宗教道德など、人文のすべての方面に對してその反抗の氣焰たる所謂バイロニズムの猛勢、ほとんど面を向く可からざるものあるなり。篇中に『詩は情熱（パッシ）に過ぎず』と喝破したる、言ふところは本能を重んじて意志を棄て個人的想像を恣にすると共に、道義慣習等の覊絆を脫するに在り。かつてカアライルが評して言ひけんごとく、猛鷲の肉に餓ゑたるが如き彼がさけびは、壯烈いふ可からざる詞章の美と相待ちて、詩界に新らしき光明を齎らしたり。熱烈奔放なる彼が詩想ひとたび筆端にあらはるるに及んでは、そのすべての豪放なる作品は叙事詩戲曲のわかちなく、常にかれみづからを主人公としたる純然たる主觀詩と化し了りて、所謂『世紀病』Le Mal du Siècle の體現にあらざるなし。げに彼を以て詩界の大那翁（ナポレオン）なりとするは、自我の傾向あくまで强うして、其作品に現はれたる彼が個人性は、さながら烈火天を燬くの槪あればなり。ゲーテが評して、詩文界また斯くの如き拔群の性格

を有する者なしと言ひたるは宜なるかな。

さはいへど、かみに述べたる諸詩人はおほかた新舊の二大潮流が互に衝突せる時期にありしを以て、未だなほ或程度に於て過去の風潮を脱却せざるの觀なきにあらざりしも、今やセイタニツク派詩人の領袖バイロンが最後の猛擊に會して、十八世紀の詩風また毫も名殘をとどめざるに及んで、ここに純然たる新世紀を代表せる二詩人の現出を見るに至れり。シェリイ（一七九二―一八二二）とキイツ（一七九五―一八二一）とこそは、げに新しき十九世紀の詩人なりき。

『告天子の歌』『雲』など珠玉の名篇によりてひろく邦人の間に知られたるシェリイ詩篇は、全く枯淡なる批評によりて傳へ得べからざるもの。げにや『地上を去り、焰の雲をさながらに、あまがけり行きて、高くまたいやたかく、飛ぶや碧空を歌ひてはのぼり、のぼりては歌ふ』この ethereal の詩人こそは、われ等みづからが現代生活を超越して、直に其作者に向つて深厚の同情をそそぐに非ずんば、味ふことを得べからざるものなり。宇宙の至上なる美を感受することの敏きは、彼をしてさしも豐麗なる英詩の古今を通じて、抒情詩人として殆ど匹儔なからしめんとす。奔放なる熱情と、一種の神祕なる幽致とを具へて自然界に對するや、ヲルヅヲルスが冷靜なる哲理を根柢とせるに反して、かれは常に愛をもて原動力となしたりしなり。

『アドネイス』の悲歌あるがために、また共に年わかうして世を去りたる薄倖の詩人なればにや、キ

イツの名は常にシェリイと共に相併びて稱せらるれど、美に對し、人生に對するふたりの態度はいたく趣を異にしたり。シェリイの現世に對する詩觀がむしろ超然として、朦朧捕捉すべからざる如きものあるに比して、キイツのは微細なる事物のうちにも、過去の時代を通じて能く現實界を洞觀し得たりき。青春の熱血湧くが如き抒情詩人としては、バイロンが奔放なる不滿のさけび、シェリイの夢想憧憬のおもひに比して、キイツのは常に感官の美を重んじたる淸新の氣あるを特色となす。

キイツはげにも宗教信仰の態度を以て美を崇拜しぬ。先づ其大作『エンディミオン』(一八一八)のはじめに見よ、『美なるものこそ、とはに歡喜なれ。その愛くしきはいや增してまた何の時か無に歸すべきぞ』といひ、また名だかき『希臘古瓶の歌』の終に『美は眞なり、眞は美なり、地上にありて知るべきは唯だこれのみ』と言ひたるは、みづからの信條を明らかにしたる語ならずや。而してまたこの美を感受するに當りて、かれが世の常の詩人にすぐれたるは五感の官能によりて外界の印象を受くるに敏き事にして、試に『セント・アグネスの夕』(一八二〇)の作に見んも、觸覺味覺聽覺等のすべての感能に著るしき印象あるを知るべし。更にまたその絢爛たる詩風に至つては、かれは直にエリザベス王朝の詩歌に範をとりて、スペンサアのごときに最も深く私淑したるなり。

前代の思潮を味ひてこれを移植するの技は、キイツに於て吾人の最も注意すべきところなり。千八百十二年エルギン卿がいにしへのアクロポリスに得て更に大英博物館に納めたる希臘の彫刻は、近英

の藝術に多大の影響を與へたるものにして、キイツ先づ深くここに參して古代希臘の思潮を感得し、更にまた一方に於て豐麗なる中世傳説に美の眞髓をとらへては、かの『あはれみ無きたをやめ（ラベル ダアム サン メルシ）』のごとき名篇を出し、題材をこの二方面に得たるなり。もとより深遠の學殖を缺きたれど、その稀世の天才よく幾多の名什を作りいだしぬ。後のテニソンかれが爲に動き、スヰンバアンここに學び、ラファエル前派の風潮その源をかれに發しぬ。げに振古その比を見ざる十九世紀後半の英國詩歌に最大の影響を及ぼしたるものは、此詩人が二十六歳の短生涯なりき。詩界刷新の大業ここに至りて完成を告ぐるに至りぬ。

キイツは、天才なり、必ずしも深く古代思潮を研究したるにあらざれども、ここに深遠の學殖を以て能く古典の美をさぐり、近英の詩歌に古代藝術の趣致を移してギクトリア朝の英詩に尙古の風を促したる大才は、ヲルタア・サヴェーヂ・ランダア（一七七五―一八六四）に外ならず。もとより彼の名聲の由つて來れるは散文の名著『想像の會談（イマジナリ コンヴァセイション）』にあれども、音調と色彩の美を兼ね備へたる敍事詩『ジイバア』Gebir（一七八九）をはじめとして、其他の諸篇はいかばかり後の詩人を動かしたりしぞ。ことに彼が晩期の詩集『希臘風』Hellen　一八四七）に見えたる作は、ホオマアの造語を摸し、兼ねて羅甸文學に見ゆる牧歌の微韻幽趣を傳へたる妙いふ可からず。またその無韻詩律は後のテニソンが學びたりしもの、殊にスヰンバアンに至つては影響をうくる事最も多く、南歐觀光の程に

のぼり、親しくこの老詩聖に會してより尊崇敬慕の情極めて切なりき。

以上說くところの諸詩人は前代の詩風を刷掃して更に新潮を起したるもの、即ち romantic sentimentalism はバイロンに於て、沈靜の哲理派は湖畔詩人に於て、理想界の妙境にあこがるる一派はシェリイ、キイツに於て、皆ともに有力なる代表者を得て、次代の詩歌に偉大の影響感化を及ぼしたるなり。而してかみに擧ぐるところは皆此革新期に於て光芒最も燦爛たる偉才なれども、吾人はここにおなじく詩界革新の大業に與りて多大の勢力ありし第二流に屬すべき多くの詩人あることを忘るべからず。先づその主なるものを擧げんに、バイロン傳を編みたるかれが友ムーアは、樂人なりき。英國はいふまでもなく遠く南歐の俗樂を精査してみづから詩篇を之に合はせたるほか、常に詩題を異域にもとめたるは新詩の發達に力ありし所以なり。大作『ララ・ルーク』"Lalla Rookh" には東邦印度の說話をとりて、みづから樂耳を有する詩人にあらずんば能はざる聲調の美を恣にしぬ。トマス・カメル亦過渡時代の詩人なり。『希望の快樂』"The Pleasure of Hope" のごときは明らかにポープ一派の詩風にして、後代の顧みざるところなれど、新詩風盛に起るに及んであらはれし小詩篇やバラッドのたぐひは、ながく英詩の珠玉たるを失はず。このほか、散文の大家マコウレイの詩歌は寧ろ天才の餘技なれど詩人の讃稱を博し、ムーア、ロージャーズなどが巧なる無韻詩律の美を以て珍奇の題目を歌ひしもの、滑稽の詩歌に於て殆ど英詩に比なきトマス・フッド、巾幗の詩人ヒイマンズの短篇、または

ペッドーズが處女王朝盛期の戯曲をまねびたる作、十八世紀詩歌の特色たる典雅の趣を更に新時代の色彩にうつしたる詩人ピーコックなどは、皆當代の詩壇に重きをなしたるものなれど、最近の詩歌を說かんとする本書の序論におては余はこれ等の詳說に及ぶ能はざるを憾む。

以上われは十八世紀の末尾よりの英國詩歌を通覽してほぼ十九世紀のはじめ卽ち千八百三十年代のころに及びぬ。いまや佛國革命以前に起りたる詩風革新の大業全く成りて、新潮勃興の氣運その頂點に達し、詩壇はしばらくゲーテが所謂 Ueber allen Gipfeln ist Ruh のさまとなりぬ。先づ當時の詩界を一瞥すれば、ヲルヅヲルス、コールリッヂ、サウジ等湖畔詩人の老大家なほ存すれども、雄篇大作一世の耳目を驚かしたる時代は、すでに其以前に屬す（ヲルヅヲルスは千八百五十年まで壽を全うしたれど、その秀拔の作ありし盛期は一七九八―一八〇八の十年間なり）。キイツ、バイロン、シェリイ皆世を去りて時代反抗のさけびまた聞えずなりぬ。スコットはその晩年負債の窮困に苦みて營々として述作に從事したれども、今や旣に心身の衰弱に堪へずして、彼が多作の生涯はかなくも千八百三十二年（これ後段に至りて說く可き議院改善案通過の年にして、功利の說を唱へたるベンザム、さきの革新時代の詩人クラッブ、また獨逸のゲーテなどのみまかりたるを以て、ながく人文史上に記憶せらるべき年なり）を以て終りぬ。殘月中空にかかりて光なく、曉星僅に夜のおもかげをとどむれど

も、曙光はやく既に東天にしらみぬ。見よ吾人が後章に於て說く可き十九世紀後半の英國人文の大勢、漸く此時においてあらはれんとするにあらずや。宗教科學政治のすべての方面にわたりて千八百三十年は實に一大轉機なりき。鷄鳴曉を告ぐる詩壇の新聲、これをいづれの詞客にか聞くことを得べき。あたらしき氣運は新しき詩人によりて歌はれざる可からず、誰ぞやこの新來の詩人とは。

第二節　詩界の新潮

典雅主義(クラシシズム)と羅曼底格主義――羅曼底格主義の歐洲文學――此主義の特色――田園自然の清興――俗歌民謠の復活――處女王朝文學の情熱ここに再現す――古代神話と中世傳說――詩歌の題材――以上の內容を歌ふに用ゐられたる詩形――其缺點――和歌との比較――二大潮流の融和になれる近英詩歌

佛國大革命の前後に於ける英詩發達のあとを歷觀してその歸趣するところを考ふれば、此詩壇新革の大業は詩文界に於ける二大潮流の衝突に外ならざるを知らん。詩界は理の冷靜を去つて情の熱烈に走らんとし、單調を忌みて多趣をよろこび都會生活を捨てて田園自然の清興にふけり、模倣を事とせしもの今や更に獨創を尊ぶに至りぬ。一語之を盡くせば、十八世紀の典雅主義(クラシシズム)が羅曼底格主義(ロマンテシズム)の洪濤に會して、半世紀の間におほかた其破壞を見るに至りしものなり。げにこの詩文界の二大潮流は歐洲

近代の詩文を貫通せる偉大の勢力にして、そが常にいかなる性質を帶びて開展せるやを詳說せんは、固より此一章の論述が盡くし得る所にあらざれど、ただ此英詩革新の時代における傾向として、及び後代ギクトリア朝盛期の詩歌に及ぼせる絶大の影響に就いて、粗枝大葉の論を試み、ここにそが發展のあとを尋ぬるの要あり。

十八世紀後期より十九世紀のはじめに到る歐洲の詩文は、ひとしく皆典雅主義(クラシシズム)に對する羅曼底格主義(ロマンティシズム)の反抗にして、おほかた後者の勝利に歸したるものなり。獨逸に於て、常理主義(アウフクレルング)の傾向勢衰へて、『シュトゥルム・ウント・ドラング』"Sturm und Drang" (Storm and Stress) 一派の運動先づ羅曼底格主義(ロマンティシズム)の魁をなし、英詩に及ぼせる影響最も大なるビュルゲルをはじめとし、ゲーテ、シルレル、ティイク、ノヴリス、ホフマン、クライストなど枚擧に遑なき稀世の大才みな此主義のために萬丈の氣焰をあげ、洪濤更に大英の詩壇を動かし、また南歐伊太利亞の地にうつりてはマンゾォニ、レオパルデイの名篇を起し、佛蘭西に於けるルソオの呼號はスタエル夫人の二大著、『獨逸論』"L'allemagne"（佛蘭西文學に於て littérature romantique, romantisme たとの語がはじめて現はれたるは此書に於てなり）および『文學論』"De la Littérature"

（原稿拾四頁分脫落）

更に一步をすすめて、歌には通俗日用の語を用ふべく、かざりなく偽りなきこころを歌ふべしと唱へたるは、人をして湖畔の詩聖が『抒情詩集（リリカルバラッヅ）』卷頭の自序を想ひ起さしむ。更に香川景樹の說、古語を排して音と意との調和を奬說するに至れるは時流を拔ける卓見よく藝術の眞諦を體したるものと言ふべし。まさにこれ羅曼底格派の最高潮バイロン、シェリイ等の時代に比すべからずや。

しかれどもわれ等は、此點に於て常に粗大の論議を以て詩文の評隲を試み、ひたぶるに典雅派の形式偏重の風を排斥せんとする一派の人々に同ずべきにあらず。まづ一般的傾向に就いて言へば、羅曼底格派は確かに詩形の美に於て未だ至らざるもの多きを知らざる可からず。熱情あふるるが如きものおのづから筆端にあらはれたるが此派の詞章なれば、詩想の絢爛ややもすれば外形と相伴はざるの憾み多く、眞正の藝術品として內容外形の調和に於て遺憾なしとすべからざるもの多し（わが萬葉集に於ても確かに此缺點あり）。之に反してかの十七八世紀の典雅派（クラシック）に至つては、ことさらに枯淡無味の哲理或は諷刺を內容として、之を典麗の辭句にうつし、巧に短長五綴音のヒロイック・カプレットのごとき詩律を用ゐて、推敲洗煉の極致をつくし朗々誦すべき珠玉の篇をなしたるを誇れるもの、英詩發達のあとより考察すれば、詩歌形式の完美まことに此派の盛衰のごときはあらず（わが新古今集の如きも即ち然り）。おもふに詩文界における羅曼底格（ロマンテイック）と典雅（クラシック）とは、政治上に於ける專制主義と民主主義との關係に相似たるものあり（ユーゴオ曰く、羅曼底格主義は文學に於ける自由主義にして、文學の自

由は政治の自由の見なりと)。個人の權威を重んずる民主的傾向が其極端に走るに及んでや、遂に政權を無視し國法を輕んじ、あらゆる形式の束縛を脱せんとして、やがてここに大革命以後の佛國のごとき騷亂を生ず。さればとて形式の束縛が峻嚴に失するに當つては民衆は遂に專制政治の弊竇に堪へざるに至るは明らかなり。これと同じく、十八世紀文學の形式主義偏理主義その弊の極まるところ遂に詩情を沒却して藝術の本位を失し、ここに遂に其反動として極端なる羅曼底格(ロマンティック)の狂浪怒濤を起しぬ。而して古今の史上、この二大傾向は常に各々其盛衰興亡を爭へるを見るなり、卽ち政治上に於てかのバスティイユ牢獄の破壞が貴族專制の政を倒せしと同じく、詩文界に於ても亦羅曼底格派(ロマンティック)は十八世紀の詩文を打破して奔放の情熱をのみ恣にし、遂に其極端に走らんとして形式美を閑却するに至れるなり。然れども民衆の福祉は、秩序あり制裁ある自由を享有するに在ると同じく、詩文界に於ても內容形式の完美はまたまさに此二大傾向の一致調和に待たざるべからざるなり。而して余が後段に說かんとするギクトリア朝の英詩こそは、此正反對なる二潮流の後を承け、羅曼底格(ロマンティック)と典雅派(クラシック)との長所をあはせてここに遂に詩歌が絕大の發達をなしたるに外ならざるなり。而して此二流が融和して內容外形ともに完美なる詩篇を作りたるは、余が前節の終に述べたるキイツとランダアとの作品に於て、既に明らかに之を知り得べきなり。

いまここに、最近の英詩が羅曼底格の思想を歌ふに當り、十七八世紀典雅派の形式美に負ふ所極め

て著るしき二三の例證を擧げん。即ちかのドライデン、ポープ等によりて驚くべき發達をなしたる五脚對聯の英雄體（heroic couplet）の詩律は、十九世紀に入りてキイツ之を用ゐて『レミヤ』『エンデイミオン』の大作に成功し、後のテニソン、モリスはまた更に巧に之を用ゐて、眞に此律の特色たる優麗高雅の趣を盡くしたり。而してまた聲調の美を以て殆ど最近英詩に一大革命を起したるスヰンバアンの鬼才は、同じ律を用ゐてケルト傳說を歌ひ『トリストラム・オヴ・ライオネス』の名作にめざましき新調を創むるに至れるなり。なほ更に顯著なる適例を擧ぐれば、テニソン一代の大作たる『アアサア王の歌』は、後段に述ぶるが如く、其內容は純然たる羅曼底格の詩想に外ならざれども、詩形に於ては實に典雅派の體をとりたるもの、即ち南歐の詩體若しくはスコットの八綴音（オクトミラビック）の形などを用ゐずして、ミルトンが其大叙事詩に用ゐたる無韻詩律の詩形を採れるにあらずや。世の徒に典雅派の詩風を輕んずる人、先づ深くこれ等の點に想ひ到らざる可からず。

　近代の英詩發達がこの二大潮流の合一に基づける事は、別にまた之を思想の方面より觀察せんことを要す。おもふに眞理の討究は十九世紀思想界の最も著るしき特徴にして、科等の發達、國家興亡のあと、殊に文藝に於ては心理解剖に長じたる小說家の輩出、みな能く之を證す。こは即ち革命期の極端なる羅曼底格主義（ロマンティチズム）が、ただ是感情をのみ尊重せるにあきたらずして、遂に反動の勢を現出したるものなり。故にギクトリア朝の傾向は理を重んじたると共に、また情を尊ぶ革命期の風潮を失はず。二

者は互に相俟ちて、共に兩立して詩歌に現はれたり。言を換へて之を言へば、シェリイ、バイロン一派の極端なる感情至上主義は更に緩和せられて、ポープ等の精確明晰なる偏理の傾向と相合し、十八世紀の風潮の一部更に面目を一新して復活し來り、十九世紀初期のそれと合し、ここに詩歌の絶大なる發達を見るに至れるなり。吾人はこの思想の變遷によりて促されたる詩歌發達の傳統を明らかにせんがため、まづ其後景なる一般人文の推移を究めざる可からず。乞ふ章を改めて次に之を說かん。

第二章　最近英文學の後景

人文一般の趨勢——大革命の民主主義——詩文に於ける其影響——社會主義と文學——大革命の國民主義——自然科學の發達——其影響——物質的文明——近世の生活——これに對する近英詩人の態度

さきに述べたるが如く千八百三十年は最近英文學の起源にしてギクトリア朝の詩文はこの頃に於て既にその萠芽をあらはしたると共に、周圍の光景また時を同うしてその面目を改めつ、一代民衆の生活に大なる變化を現じたり。おもふに現代精神の反影たる文藝は常に世運の遷移と聯關せるを以て、ほぼ其時代の人文一般の趨勢を解するにあらずんば、詩文の研究はいまだ到れりとなす可からず。これわれの本論に入るに先だちて、玆に一般の思想界および政治界等に於て文藝に多大の影響ありし特徴のあらましを說かんとする所以なり。

近世史における絕大の事件たる佛國大革命が理想とせるもの、一は民主々義にして他は國民主義なりき。先づ前者に就いて言はんに、政治上の民主々義ははやく既に文藝のうへに現はれて、かの偏理

的形式的の十八世紀風潮を斥け、自由を重んじ自然をよろこばんとする中世主義を起すに至りぬ。かの墺太利の宰相メッテルニッヒが反動政策はしばし歐洲に保守の傾向を起したれども、全世紀を貫流せる革命の潮流は一の維納會議の能く制し得るところにあらず。千八百三十年のころに至つては更に革命的大思想の捲土重來の勢すさまじく、ブルボン家のチャアルズ十世この年を以て王位を逐はるるや、反響は直に歐洲の全部に及びて民主主義の運動は更に勢を增しぬ。遂に此傾向は一衣帶水のよく隔て得るところにあらずして英國に及び、他の諸邦における如く、民權の歷史に新しき時期を劃しぬ。なべて近世の英國史は固より革命の歷史なれど、之を大陸に比すれば、すべての改善が劍と血とを見ずして、全く言論によりてなされたるを異れりとす。政權は久しく富の程度と宗教の信仰とによりて區別せられたる一部の社會が專有するところなりしが、この頃に至りて幾多の改正案議會を通過して、民權の伸張漸く全からんとするに至れり。先づ舊教徒自由法案(カソリックエマンシペイションビル)の議は(一八二九)國會を通過して、舊敎信者もひとしく參政權を與へらるるに至り、かのマコウレイ卿が大演說を試みし議院改善案(リフオムビル)(一八三二)は更に地主富豪の專橫を抑へて、商工業の發達に力ありし中流社會(ブルジョアイ)の手に政權を移しぬ。後また千八百六十七年および千八百八十五年に同樣の改革成りてより、政權は更に分たれて下層の勞働社會にも與へらるるに至りぬ。斯くの如くして前代に於て殆ど少數政治(オリガアキイ)の狀態にありたる英國政治は、半世紀を經ずして、國母王朝の御宇に於て最も完全なる民主政治を起し、階級の制は

一滴の血を流さずして打破せらるるに至りしなり。而して之を文學に見んか、かの十八世紀の貴族的傾向を破壊してあたたかき同情をひろく人類のあらゆる階級に及ぼし、田夫農人の生活に清興をおぼえ、貧しき下層勞働者の勞役に詩情をよび起したるトムソン、バアンズよりしてシェリイに至る諸詩人の態度は、ギクトリア朝の文學に於て、如上說くところの民權の發達と共に益々著るしき現象を呈するに至れるなり。

この民主々義の運動に聯關して、なほ社會組織の根本的改革を要求せんとする社會主義の一派は、對岸の佛國に於てオオギュスト・コムトの哲學と共に起りたるブルウドンが有名なる『財産私有は强奪なり』"La Propriété c'est le Vol" といへる斷定に至りて其極端を示しぬ。英國に於ても同じく『社會新說』の著者ロバアト・オウエン等の主張となり、博愛平等の思想に根柢をおきて民心を動かしぬ。これ佛のサン・シモン等とおなじく、財産の私有・相續・自由競爭等に起因せる現制度の宿幣を痛論して、下層社會の窮苦を救はんと欲したるものなり。後更に世紀の中葉に至りて、キングズレイ、モウリス二氏が奬說したる基督教的社會主義（クリスティアンソシアリズム）となり、またトルストイの論とよく似かよひたるラスキンの社會改革說となりて、皆貧富の隔絶を打破せんとしたるものなり。この現象は詩文にあらはれて夙に先づキリアム・ゴドヰンの小說 "Caleb Willams" を起し、後のキングズレイ、ハムフリイ・ワアド女史、ヲルタア・ベザントなどの社會小說の源をなしぬ。またカアライルの諸作がこの民主

主義の運動に影響せられたること著るしき、或はジョン・スチュアート・ミルの論議が社會組織の問題と密接の關係あるがごときは言を俟たざるなり。更にまた方面を異にして此傾向をフッドの "Song of the Shirt" ブラウニング夫人の "Cry of Children" エベニイザ・エリオットの "Corn Law Rhymes," 其他スパズモディック詩派の諸作など詩歌の類に求むれば殆ど枚擧に遑あらざるべし。固より社會問題が英詩にあらはれたるは單に此時代に限らずして、遠くチョオサアの『カンタァベリイ物語』にも社會階級の狀態を窺ふべく、沙翁の『リィア王』に人道主義あらはれ、降つてクラッブ、バアンズみなここに着眼したるはあれど、なべて貧富のごとき問題の鮮明にあらはれたるは、當代詩歌の一大特徴なりといふ可きなり。

佛蘭西革命が第二の理想となしたる國民主義は、歐洲中世の統一なき封建制を變じて國民的基礎を明らかにし、人種の團結を鞏固にせんとするものにして、これ亦十九世紀の大精神たるを失はず。この影響としては、諸邦の人文は科學といはず哲學といはず詩文といはず、各々その國民的特色を帶ぶるに至れり。而してこの國民主義が更に一歩を進めて、各國が勢力範圍と利益關係との增進をつとむること大なるに及んでは、乃ち更に帝國主義（インピリアリズム）を現じたるなり。而して之が先驅をなせるものは即ち日沒を見ずと誇れる大領土をつくり得たるアングロ・サクソン民族にして、テニソンの作中に

"Fear not, isle of blowing woodland, isle of silvery parapets!

Tho' the Roman eagle shadow thee, tho' the gathering enemy narrow thee,
Thou shalt wax and he shall dwindle, thou shalt be the mighty one yet!
Thine the liberty, thine the glory, thine the deeds to be celebrated,
Thine the myriad-rolling ocean, light and shadow illimitable,
Thine the lands of lasting summer, many blossoming Paradises,
Thine the North and thine the South and thine the battle thunder of God.

——*Tennyson, Boadicea.*

と言へるは詩聖が愛國の至情を海岸に寄せ、將來の英國を歌うて、意氣宇大を呑まんとする國民の光榮を其壯麗の律語にうたひたるもの。後のキップリングの詩歌のごときも、まさに純然たる此現象の反影に外ならざるなり。

十九世紀の政治界における民主的傾向は更にポジティギズムとなりて、(一)人類の智的方面にあらはれては自然科學の空前の發達となり、また(二)情意の方面に於て、物質文明の旺盛を致し、近世の思想界を一變するに至れり。今これを英國に就いて見んか、近世英文學がまさに其萠芽を發せんとせること即ち千八百三十年を以て、地學者ライエル（Sir Charles Lyell 1797—1875）の大著『地學原理』（プリンシプルスオヴジオロジイ）先づ世に出で、地球の過去現在の狀態を明らかにして在來の妄說を破り、後の進化論のために道

を開きたるは近英科學の大發達の先驅をなせるものにほかならず。爾後あらはれたる斯界の大家は殆ど枚擧に遑あらざれども、ファラデイ Michael Faraday (1791—1867) は科學物理學の研究に不朽の偉業を傳へ、ジュール (James Prescott Joule 1818—1889) は近世物理學の大發見たる energy 不滅の說を證し、またダルトン (John Dalton 1766—1844) が原子說を明らかにしたるごときは、近世科學の面目を一新したるものなり。このほかハムフリイ・デヸイ (Humphry Davy 1778—1829) ヰリアム・トムソン (William Thomson 1824—) トマス・ハクスレイ(Thomas Huxley 1825—1895) 等の研究は、近英の科學を以て大陸のそれに比して毫も遜色なきものとなしぬ。然れども、ここに歐洲近世の科學的思想を一變し、文學宗教哲學等のすべてにわたりて多大の影響を及ぼし、學藝界全般に一大革命を起したるは、ダアヰン (Charles Robert Darwin 1809—1882) が、其稀世の大著『自然淘汰による種の起源』"Origin of Species by Means of Natural Selection" を千八百五十九年に於て世に公にせる事なり。さきにライエルは、地球が急激の變化によらずして漸次の發達を遂げたるものなるを明らかにして、生物の發達また之にひとしきを說きたれば、當時の學界に進化のことは既にあまねく知られたれども、進化の理法を說きて之を自然淘汰の論に歸したるは實にダアヰンにはじまる。ウォレス (Alfred Russel Wallace) またこの大發見に與つて力ありしが、のちハァバアト・スペンサアが適者生存（サアヴァイバル オヴ ジ フィテスト）の說に至つて完全の域に達しぬ。げにもわれ等人類が存在の根本的觀念に就

いて至大の變化を起したるものこそ、ダアヰンがこの驚心駭目の新說なりけれ。
この科學の大發達こそは、革命期の後を承けてやや萎靡倦怠の傾ありし民心に一大興奮を促せしものにして、哲學神學の媒介によりて詩文のうへにも著るしき影響感化ありしこと疑ふ可からず。おもふに星學上および地學上の新說はいふまでもなく、生物學上の新發見も亦至大の動搖を民心に起したるが故に、思想界は今やこの新現象を迎へんがために多大の勞力を注ぐに至れり。かの名僧ニウマン一派の士が批評的神學に反抗して教權の尊威を主張したる牛津運動、繪畫詩歌の二界に跨れるラフワエル前派の主張、またカアライルの冷嘲、ブラウニングの理想的樂天主義、マシウ・アァノルドの基督教のごとき、みなこれ智的・道德的・藝術的の諸方面に於て近代の要求を滿足せんとするものにして、科學が時代思潮に及ぼせる影響に外ならざるなり。
おなじポジティヴィズムの傾向が、更に人の情意の方面に現はれたるものを物質文明の旺盛となす。これ即ち絕大の發達をなせる自然科學が吾人の生活のうへに適用せられたる近世の大發明、その基礎をなすや固より論なし。此點に於ても千八百三十年は最も史家の注目す可きところにして、かのリヴアプウル、マンチェスタア間に鐵道の開通を見たる年にして、まことに近代の交通發達史の第一頁をなせるがゆゑなり。後七年ギクトリア女王卽位の年を以て電信ははじめられ、翌年更に北米紐育との間に汽船航路の開かるるあり。三十八年また現今の郵便制度を創始するの議、議會にあらはれ、交通

機關の整備漸く全きを得んとせり。これより先き紡績・織物・紙等諸種の製造機械は既に英國に於て發明せられたる外、歐洲諸邦に起りし電氣採鑛火藥等の大發明これより後に相踵ぎて、殆ど枚擧に遑あらず。その結果は工業の發達と人間快樂の增進との二方面に著るしき現象をなして現はれぬ。

斯くの如き趨勢は、時人の生活にいかなる影響を及ぼしたりしぞ。交通機關の發達は一面に於てすべて地理的分界を破壞し去り、在來の地方的偏見のごとき殆ど見るべからざるに至り、下層社會における教育の普及は、當時日を逐ふて益々その數を增したる新聞雜誌と相俟ちて、共に皆知識の普及に驚く可き效果を齎らし、國民が物質文明の恩澤に浴する能力をして益々大ならしめぬ。更に他の方面に於ては、國民の生活狀態は益々繁劇複雜となりて功利唯物の傾向盛に、山村水廓いたるところ鐵道と工場とを見ざるなきに至れり。千八百四十四年ヲルヅヲルスが靜に晩年の餘生を樂める湖畔の地に鐵道敷設のことあるや、老詩聖は田園の淸境ために俗衆のけがすところならんを恐れて之を非議したれども功なかりき。詩人のこの一小話は、能く近世生活狀態の半面を示したらずや。

教育・出版物・交通機關の增加に伴ひて人智の發達あまねく四民に及ぶや、物資文明の方法材料は益益ゆたかにして、同時に諸般の發明を運用する能力は著ろしく增大しぬ。かくの如くにして近代國民の生活は、その客觀的若しくは社會的方面に於て、劇烈なる生存競爭の狀態を起し、更に主觀的または精神的方面に於ては、煩悶となり神經過敏となりて、軈て十九世紀の終に近づくに及んで、西歐に

あまねき世紀末(ファンドウシエクル)の氣風を現じたるなり。かの北米の詩人ポウの怪奇悽愴の作が頻に英佛の詩人を感化し、或は象徴詩の旺盛を見るに至れる皆この傾向に基づけるのみ。さきにはカアライルの呪詛を蒙り、のちにノルダウの冷嘲トルストイの非議を招きたる近世の思潮は、劇甚なる刺戟を絶ゆることなく人心に與へ、現實主義は心的生活の諸方面にあらはれて、神秘主義となり僞善の傾向となり懷疑的となりて、近代想海の潮流うたた急なるの勢を呈し、その紛糾錯雜また前代に比なからんとす。おもふに無邪氣なるわらはの物のあはれも知らで戯はむるるにも似たらんチヨオサアの代にもあらず、青春の血うちに燃えて活氣横溢、いさみたちたる沙翁時代の英國にもあらず、紈袴の子等が典麗優雅の風致をまねまびて才藻を競へるやうなるポープの時代は既に夢のごとく去つて名残をとどめず。社會・宗教・科學等あらゆる方面に於て常に新しき問題と觸接し、匆忙繁劇なる民衆の生活を反映したる詩文は最近の英國に起りたるなり。此現象は、ギクトリア朝に廣濶なる舞臺を得て前古比なき發達をなしたる小說が客觀的に忠實なる描寫を盡したるところなれど、その詩歌にあらはれたる影響に至つてはおのづから之と趣を異にせるものなきに非ざるなり。

上來說くところの近世文明が最近の英詩といかなる關係あるやは、後段に章を重ぬるに及んでおのづから明らかなるべけれど、今ただ要を摘みて言はば、近英の詩人が民主主義と科學主義との二大傾向に對する態度は、ほぼ分ちて二様となすことを得べし。先づ(一)身は紛々擾々たる功利唯物の界に在

第三章　新時代の代表的詩人

第一節　テニソン

文學史上の地位――少壯時代――千八百三十年の詩集――第二の詩集――千八百四十二年の詩集――その學殖造詣――推敲改竄――『プリンセス』――桂冠詩人――『イン・メモリアム』――『モオド』――一代の大作『アアサア王の歌』――アアサア傳說の由來――傳說の梗概――全篇の次第――共思想――海洋に關する詩歌――テニソンの戯曲――晩年の作品――臨終――時勢とテニソン――科學の感化――テニソンの思想――その技巧の美――その用語――兄なる二詩人の作品

羅曼底格（ロマンティック）の想を典雅（クラシック）の技巧にうつして、內容と外形と倂せて發達しきたれるキイツの詩篇が文藝史上に有する地位は竟に牢乎として動かすべからざるものにして、流星の光にも似たる其短生涯の製作はながく後代の騷客を動かして、ギクトリア朝盛期の詩歌をつくりたるなり。而して直にかれの後を紹ぎて共感化を蒙り、十九世紀の大半を通じて英國の騷壇に君臨し、つねに詩國の王冠を戴きたる稀

世の大詩人はテニソンなりき。

げにやさきの羅曼底格主義（ロマンティシズム）勃興の特徴は殆どすべてテニソンの詩歌に集められて、遺憾なく綜合せられ大成せられたるのみか、更にこの天才が特得の麗筆によりて、前代に見るを得ざりし新しき精彩を加ふるに至れり。テニソンの作には、バイロンの壯烈とスコットの清新を缺きたるを憾みとすれども、自然界の觀察は湖畔詩社の精緻に劣らず、流水のよどみなきにも似たる共聲調の美にはコウルリツヂの遺響を傳へ、シェエリイが漂渺たる神韻更にその幽婉を加へ、豊麗の色彩さながら紅霞紫雲の美を望むがごときは之をキイツにうけたりと覺ぼし。さりながらこの傳統を紹ぎて起りたるテニソンの作品には、さきの諸詩人に見られざりし二つの主（おも）なる特徴を有す。希臘古代の彫塑または南歐藝術の靈趣を傳へたる裝飾の美にして、圓滿流暢なる共詩風はながく英文學の光榮たるべく、更に思想の方面に於て一種の哲學を含蓄して當代の紛糾錯雜せる思潮を反映し、宗教政治科學社會等の方面に一代の注目を促したる新しき問題に廣濶なる同情あまねく、時代精神の暗潮に不斷の留意を忘らざりしも彼の特色なり。處女王朝の御宇におけるスペンサア、クロムヱル時代のミルトン、アン女王朝のポープとひとしく、テニソンは此點に於てヰクトリア朝の代表的詩人なりと謂ふべき也。

アルフレッド・テニソン（Alfred Tennyson 1809—1892）は、千八百九年の夏リンコオンシア州の孤村ソマアスビイに生る。ここにかれの父は牧師の聖職をとりたりしが、一帶の幽境すべて靜なる自

然の清趣ゆたかに、その風光は幼き詩人の胸に終生忘るる能はざりし深き印象をとどめたるもうべなり。こやまの下り坂やうやくゆるく、森のこだちをぐらき山かげの潺湲たる流のゆかしさは、後年の回想を呼び起し、千八百三十年の詩集にも故里の景情を懷うて、

.........the woods that belt the gray hill-side,
The seven elms, the poplars four
That stand beside my fath r's door,
And chiefly from the brook that loves
To purl o'er matted cress and ribbed sand,
Or dimple in the dark of rushy coves,
Drawing into his narrow earthern urn,
In every elbow and turn,
The filter'd tribute of the rough woodland.

——*Ode to Memory.*

と歌ひたるも其一例にして、かれの詩篇には故山の敍景なりとおぼしき辭句ははなはだ多かり。一家の系統すでに天賦の詩才を傳へたればにや。二人の兄フレデリック（一八〇七―一八九八）、チャアルズ

（一八〇八―一八七九）と共にわがテニソンは十二歳の幼きころより既に詩作に長じ、千八百二十七年に出でたる『二人兄弟の歌』"Poems by Two Brothers"に、まことは三人の作を集めたるなり。郷里にありて初等の教育を終へ、千八百二十八年を以て劍橋大學に入る。ここにまた無韻詩一篇を作つて賞を得、詩才すでに同窓を驚かしぬ。かのベイコンの研究に名あるジェイムズ・スペディング、有名なる『言語研究』の著者トレンチ、詩人としてまた政治家として種々の方面に異彩ある才人ロード・ホウトン、その他知名の士にして當時その學友たりしもの甚だ尠からず。かれは固よりひろく交友を求めざりしかど、これ等の人々との友情はことに濃かなりき。なかにも最も吾人の注目すべきは、かの歴史家ハラムの長子アアサア・ヘンリイ・ハラムにして、温良の質を以て才藻すぐれたる人、テニソンがこの大學時代に刎頸の友なりしが、少壯はやく墺都維納に逝き、好望の將來を殘してむなしく異郷の露と消えぬ。詩人ふかく哀悼のおもひに堪へずして、のち遂に輓歌『イン・メモリアム』の大作あり。

千八百三十年詩集『おもに抒情の歌』"Poems, chiefly Lyrical"を公にす。かれが詩人としての生涯ここに初まる。この集は多く交友の間に行はれたるほか、いまだひろく讀書界の注目を惹かざりしかど、コウルリッヂのごときは既に詩才の凡ならざるを認めたりき。しかれども今日に於て考ふればこはげに新詩風の曉鐘を以て目すべきものにして、この青年詩人が聲調律格に苦心したる痕歴々たる

は、ポープの遺風を蟬脱して詩形の美に新様を創めんとしたればなり。そのキイツに學べるところは固より大なれども、彼の唯美主義の傾向を脫して別に眞と善とを以て之に加へ、美感は更に道義の感念と相伴ふを以てまことの詩人なりとする其思想は、この時すでに集中の『詩人』『詩人の心』等の諸篇に窺ふことを得べし。

千八百三十年父みまかりぬ。翌年テニソンは業を卒へずして劍橋（ケンブリッヂ）の大學を去りて家に歸り、のち六年の間は故山の清境にとどまりぬ。このころ健康すぐれ詩才は旣に圓熟の域に入りたれば營々として述作に從事し、無二の親友ハラムとの交情いよいよこまやかに、詩人は妹エミリイを以て之にめあはせぬ。この樂しき靜平の生活幾月にわたり、その結果としてあらはれたるを第二の詩集（一八三三）となす。さきの處女作に見えたる浮華の弊を脫して、思想と聲調との融和やうやく全く、わが邦人の間にもひろく知られたる『美女の夢』"A Dream of Fair Women"『イノウニ』"Œnone"『美術殿』"The Palace of Art"『シヤロットの姬』"The Lady of Shalott"『食蓮國人』"The Lotus Eaters"等の秀什を收めたれど、高調いまだ凡俗の耳に遠くして、徒らに評壇の冷嘲を招きたるに過ぎざりき。精苦の作世に迎へられずして、詩人の心は怏々として樂まず、秋九月また刎頸の友ハラムが墺都の客舍に逝くや、憂愁更に加りて健康これより衰へ、且いたく眼を患ひて、しばしがほどは詩筆をも捨つるに至りぬ。この當時の苦悶その極に達して遂に自殺せんとまでも思ひつめたる胸奥の聲は

『二つの聲』"The Two Voices" の篇となりてあらはれたり。のち一家相携へて故里ソマアズビイを去りて居を倫敦にトし、文界の名士カアライル、ランダア、サッカレイ等と往來し、此間沈默十年しづかに詩思を養ふ、遂に千八百四十二年詩集二卷を公にす。舊作はテニソンに常なる細心の推敲改竄を加へられて其第一卷に收められ、更に新作幾十篇を以て第二卷となす。詩材をひろく諸方面に採り古典に "Ulysses" の如きを得、また中世基督教の精神に "Sir Galahad," "Stylites" 等の題目を選びたると共に、また近代の風致をも遠ざからずして牧歌 "The Gardener's Daughter" のたぐひをここに加へたり。近世の物語風の詩篇おほかたは無韻詩律を用ゐたるものの起りしは、此詩集にかれが『アイディルズ』と稱したるものにはじまる。ヲルヅヲルスめきたる簡朴の詩體 "Dora" のごときも共一例なり。アアサア王の最後を詠じたる歌は集中の白眉なれど、殊に注意すべきは『ロックスレイ館』"Locksley Hall" の名篇に近英の思潮を反映したるもの、こは科學の發達に激したる當代の靑年が胸奥の聲なりと見るべし。おもふに此集に至つてはテニソンの詩風は、少時の絢爛の弊を脫して益益圓熟の域に入り、雄勁の體を得て、高俊の調やうやく時人の耳をそばだてしめぬ。評家がさきの冷嘲いまや變じて讃美の聲となり、茲に詩人の名聲ながく動きなきに至りぬ。湖畔の詩聖はこの頃テニソンを以て現存第一流の詩客なりといひ、また『ドウラ』の作を誦して『かくのごとき牧歌をつくらんはわが終生の願なりしが遂に果さざりき』と嘆じぬ。また或評家のごときは此千八百四十二年

を以てテニソン一代の作品の大轉機（グランドクリマクテリック）となし、以後の諸作を以て遥にこの著に劣れりと斷じたるもあり。

靜平の生涯にして若し詩才の發達に利あらば、世にテニソンばかり羨むべきはあらじ。親しき友がきの睦まじかりしは素よりなれど、神經するどく常に沈みがちなる彼は多く交遊を求めず、閑居獨り讀書に耽り、または靜に自然の清趣をたのしみぬ。おもふにかれ亦ヲルヅヲルスの同じく田園に人となりし自然の友にして、物質文明が致せる匆忙繁劇なる近世の都會生活はその好むところにあらざりき。されど彼はまた同時に、精勵なる讀書家なりしなり。これヲルヅヲルスと全く趣を異にしたるところにして、この點に於ては、自然趣味を悉く書卷にのみ得たるミルトンと相似たるものあり。おもふに、近代に至りて古典の研究が空前の發達をなしたる結果、近英の詩人多くはここに造詣すること深く、われ等學あさき者は表面の詞章をたどりて其美を翫賞すとも、典據のあるところを知らずして眞趣を逸するの憾み甚だ多し。テニソンのごとき辭句はむしろ平明なるがごときも、希臘羅馬の古文に參することの深き、おのづから彼が詩篇にあらはれたるもの多きを見る。その深くホオマアの美を感得したるは、精妙かぎりなき無韻詩律の譯詩すでに明らかに之を證すれども、テニソンに最も大なる影響を與へし古詩人はセオクリタスなり。碧海の風あたたかに、草青く空ほがらかなる南歐の孤島に、エトナの壯麗の氣を仰いで起りたる『牧歌（アイデール）』の師祖は、此十九世紀の大詩人に著るしき感化を及

ぼし、その詞句聲調をまなび、題材結構を摸したるあと歴然たるもの尠からず。羅句文學にあつてはヴァアジル、カトゥルラス、ルクティウスの遺響またテニソンの詞章の間に散見す。これ等に就いてことごとく例證を擧げんは限なけれども、ホオマアが用ひたる προτὶ Ἴλιον ἠνεμόεσσαν の語（スキンバアンのアタランタ・イン・カリドン』中、有名の合唱に The shadows and windy places といひしも同じ用語なり）はテニソンの『ユリシス』にその儘に用ゐられ、『ドウラ』のごとき素朴の語を用ゐたる詩篇にありても

And the reapers reap'd,
And the sun fell, and all the land was dark.

のごときは明らかにホオマアが

Δύσετό τ' ἠέλιος, σκιόωντό τε πᾶσαι ἀγυιαί

をまねびたるものなり。また『エドキン・モリス』の篇に

Shall not Love to me
As in the Latin song I learnt at school,
Sneeze out a full God-bless-you right and left?

とあるはカトゥルラスが

Hoc ut dixit, amor, sinistra ut ante

Dextra sternuit ad probationem.

のことを指したるものに外ならず。かのアアサア王の最後を詠みたる歌は、結構をホオマアに取りたれど、

This way and that dividing the swift mind

の句は殆どヴァジルのイイニイド第八章二十行なる

Atque animum nunc huc celerem, nunc dividitillue.

を飜譯したるものにあらずや。（プリムレイ論集（ルウトレッヂ版）三十三頁參照）またテニソンがセオクリタスの牧歌體を模倣したるは『イノウニ』の作を以て最初となす。毎節のはじめに『母アイダの山よ、いまはのわが言葉を聞きね』といへる『リフレイン』を繰返へしたるは、セオクリタスがダフニスの悲愁に『はじめよ、詩神、森の歌を』の調を重ねたるを學び、なほ

For now the noonday quiet holds the hill:
The grasshopper is silent in the grass:
The lizard, with his shadow on the stone,
Rests like a shadow, and the cicada sleeps.
The purple flowers droop: the golden bee

Is lily-cradled: I alone awake.
My eyes are full of tears, my heart of love,
My heart is breaking, and my eyes are dim,
And I am all aweary of my life.

—*Œnone*, 24—32.

Lo, now the sea is silent, and the winds
Are hushed. Not silent is the wretchedness
Within my breast; but I am all aflame
With love for him who made me thus forlorn,
A thing of evil, neither maid nor wife.

—*The Enchantress* (*Theocritus*, II. 38—41)

のごとき酷肖は篇中に甚だ多し。(テニソンとセオクリタスの關係に就きては、北米のステッドマン氏の所說最も精緻を極む)。かくの如きはおほかた余が既に前段に述べたる千八百三十三年および四十二年の諸集に就いて摘出したる例證なれど、後の大作『プリンセス』『イン・メモリアム』等に至つては其例益々多くして、殆ど枚擧の煩に堪へず。

靜寧の生活がこの大詩人に自然界の精緻なる透察と深邃の學殖とを與へし事は、研究者の觀過すべ

からざるところなれど、更に其篇の推敲に多大の勞力を割くを得せしめたる事をも忘るべからず。げにや天才は努力に基づくと說きたる哲人の教はわがテニソンに於て最も眞なるを見るべく、ふかく詩人の天職を自覺して熱誠眞摯、詩歌の大業に身を委したる點に於て、英國古來の詩人中テニソンと比すべきものは、ミルトン、ラルヅヲルス、ブラウニング等の少數あるのみ。細心熟慮、精緻の觀察を怠らずして胸裡に湧きくる感興遂にとどめがたきに及んで初めて筆を呵し、作成るや、斧正改竄幾十回を重ねて乃ち之を世に問ふ。而して後しづかに評家の說に耳を傾け、退いて深く精思を凝らし、ここになほ韻を正し語を更むる、苦心の慘澹たる想ふべきなり。はじめ其處女作出でて評家の冷嘲を招くや、のち沈思十年また一作を出さず。傍ら詩思を養ふと共に、舊作の推敲をかさねて後これを以て世に問ふに及んで令名一時に高かりき。はじめ三十年の詩集にあらはれ、のちの集には全く刪り去られたる "The Skipping Rope" の小品のごときは其平凡にして散文的なる、今日に於て之を讀むわれ等をして果して詩聖の作なるやを疑はしめんとす。またかのチョオサアの麗媛の賦をよみて夢みたる作、いまはテニソン一代の絕唱にして、全章さながら珠玉の燦爛たるを見るの想あれども、さきの三十三年の集に出でたるものと、それより十年後のとを比較對照して硏究せば、改竄のあと歷々として詩人が精苦を見るを得べし。一例を擧ぐれば、篇中イフィゲニアの最後を叙したる一節

The high masts flicker'd as they lay afloat;

The crowds, the temples, waver'd, and the shore;
The bright death quiver'd at the victim's throat;
Touch'd; and I knew no more.

は前の詩集に於ては、

The tall masts flicker'd as they lay afloat;
The temples, and the people, and the shore;
One drew a sharp knife thro' my tender throat,
Slowly,——and nothing more.

とあり、この第三行と四行とは最も多く評家の嘲笑を招きたるもの、當時ロックハアト氏のごときは"What touching simplicity,——what pathetic resignation!——he cut my throat, nothing more!"の痛切なる反語を以て冷罵を試みたりき。またかの戀にやつるるあはれの少女のことを詠みたる『マリアナ』の後篇第一節をとりて、さきの集のと四十二年の改作とを對照せんか、

(1832)	(1842)
"Behind the barren hills upspring	"With one black shadow at its feet,

With pointed rocks against the light,
The crag sharpshadowed overhung
Each glaring creek and inlet bright.
Far, far, one light blue ridge was seen,
Looming like baseless fairyland
Eastward a strip of burning sand,
Dark rimmed with sea, and bare of green.
Down in the dry salt-marshes stood
That house dark latticed. Not a breath
Swayed the rich vineyard underneath,
Or moved the dusty southernwood.
Madonna, with melodious moan,
Sang Mariana, night and morn—
Madonna, lo! I am all alone,
Love-forgotten and love-forlorn."

The house thro' all the level shines,
Close-latticed to the brooding heat,
And silent in its dusty vines:
A faint-blue ridge upon the right,
An empty river-bed before,
And shallows on a distant shore,
In glaring sand and inlets bright.
But 'Ave Mary,' made she moan,
And 'Ave Mary,' night and morn,
And 'Ah,' she sang, 'to be all alone,
To live forgotten, and love forlorn.'"

これ殆ど全部を改作し、さきの緊縮して及ぶべきかぎり僅少の語を以て精緻なる一幅の活畫を現ぜん

と試みたるもの、後の『アアサア王の歌』などに至りて此風益々著るしく、此詩人が大なる光景を縮寫（スケッチ）する特得の技を見るべし。かれのすべての詩篇に就いてこれ等斧正のあとを尋ねんは、まことに興味ある研究なれど、斯の如きは誠實なる學者が尠くとも半世の苦心を必要とす可し。

四十二年以後その死に至るまで、なべて平靜なる詩人の生涯にも俗事のわづらひ時に之を侵して、波瀾なきこと能はず。ある企業者に誘はれ、テニソンはその世襲の產を傾けてある會社創業の資に投じたりしが、企圖遂に成らずして、詩人はここに貧困の窮態に陷り、ためにいたくその健康を害したりしかば、サア・ロバアト・ピイル二百磅の年金を以て急を救ふに至れり。この頃詩才漸く老熟の境に入りて筆路益々暢達なるにいたり、またルソオ以後の社會問題とにベンザムの功利說などを考究して、みづから固より政界に入らざりしかど、多年の精思をここに致し、その結果は千八百四十七年"The Princess"の大作となり一あらはれぬ。當時世人が注目したる女子のエマンシペイションに關する詩人の見地を、羅曼底格なる戀愛の物語に寓（よ）せ、自然の法則に背きてことさらに女性本來の情性を抑へんとするの無用なるを示し、智的方面に男子と拮抗してその獨立を主張するの妄を辯じたるもの、われ等をして日本における近時の同じ問題を想ひ起さしむ。主人公なる『プリンセス』アイダ(Ida)は共幼時に結ばれたる王子との婚約を斥け、進んでその身を女子高等教育の事業に委ねんとす。王子はここに於て二人の友と共に身を女性に扮し、學生としてこの女子大學に入りたれど、事た

ちまちに發覺して校を逐はる。王子の父は强ひてこの婚約を成就せしめんとて、プリンセスの父に向ひて戰を宣したれども、遂に雙方五十人の戰士を選びてその勝敗によりて事を決せんとするの協議なる、しかるに王子この決鬪に敗れて傷つきければ、さきの大學は變じて病舍となり、プリンセスみづからは王子に侍して看護のことに從ひ、枕頭に歌の卷を讀みきかせぬ。かくて漸く

From all a closer interest flourish'd up,
Tenderness touch by touch, and last, to these,
Love, like an Alpine harebell hung with tears
By some cold morning glacier; frail at first
And feeble, all unconscious itself,
But such as gather'd color day by day.

——*The Princess, Canto VII.*

王女(プリンセス)が胸に萠え出でしおのづからなる愛はおさへがたくて、遂に王子に嫁すといふ物語なり。全篇みな無韻詩律を用ゐて、詞章の裝飾(デコラティイヴ)美(ビュウティイ)に伴ふ聲調音律の妙を以てす。殊にうちに挿みたる抒情詩の小品、たとへば漁夫の妻が歌ふ兒守歌、討死にしたるもののふの妻のなげきを詠(よ)みたる短篇、或は『野邊を夕まぐれわれ等たどりて』といふ歌などは、近英詩歌の絶唱にして多くの讀者を醉はしめ

たるものなり。此作に見えたる女子問題の旨はたとへ時代を異にせるわれら異邦の讀者に興あさしとするも、その戯曲的構想と詞章の絶美とに至つては、能く限りなき靈興を促してやまず、否な更に全篇の美を顧みずして、單にここに挿入せられたる短篇抒情詩の珠玉のみを以てするとも、その燦爛の光彩なほ能くわれを眩せしむるに足るものあるなり。

この詩人の無事平穩なる閲歷に於て、千八百五十年は最も記憶せらるべき時にして、この歲の夏六月エミリイ・セルウッド孃と華燭の典を擧げしが、伉儷の極めて多幸なりしは『われかの君を娶りしとき、聖壇のおん前に、神の平和はこの身にぞ來れる』とて、のち詩人みづからのよろこびを語れるに徵すべし。また老詩隱ヲルヅヲルスこの年を以て逝きければ、テニソンは其後を承けて桂冠詩人の榮職にのぼりぬ。はじめ宰相は四人の候補者を選んで之を女王に薦む、リイ・ハント、セリダン・ノウルズ、ヘンリイ・テイラア而して最後にテニソンあり。されど皇配アルバアト親王は日ごろテニソンの作を愛誦したまひければ、桂冠は遂にわれ等の詩人の手に歸したるなり。おもふに詩職にのぼれるもの古來かならずしも大詩人にあらざれども、ヲルヅヲルスに繼ぐにテニソンを以てしたるは、嚴密なる批評も亦首肯するところなり。かれが女王に奉れる歌に湖畔詩人を稱へて曰く、

“Victoria, since your royal grace
To one of less desert allows

This laurel greener from the brows
Of him that uttered nothing base;"

されど此年に於て最も注目すべきは、多年かれが心血を濺ぎたる輓歌『イン・メモリアム』"In Memoriam"の名作が世に公にせられし事なり。さきに述べたるごとく、千八百三十三年その『はらからよりもなほうつくしうしたる』友アアサア・ハラム

My Arthur, whom I shall not see
Till all my widow'd race be run;
Dear as the mother to the son,
More than my brothers are to me.

——*In Memoriam* IX.

の夭逝を哭してより、詩人はここに端なく人間生死の大問題と接觸し、沈思冥想年をかさねてその限りなき悲愁を歌ひし百三十二篇の麗章いま漸く稿成りぬ。毎節八綴音(オクトシラビック)の四行(クオットレン)より成りてa b b aの押韻を用ゐたる此詩形は、極めて稀にエリザベス朝の英詩たとへばベン・ジョンソンなどに見ゆるものにして、なべて謹嚴莊重の詩風に適すれど、『イン・メモリアム』の高調に響くが如き悲壯の音律はテニソン以前に於て決して聞くことを得ざりしものなり。ハラムのなきがらを英國に送りて葬りた

るはクリイヴドン・チャアチの墓地なり、詩人ここに亡友のあとを弔し、俯仰徘徊去るに忍びず、満目蕭條としてあたり物さびしさ更に一段の悲哀を添ふ。

The Danube to the Severn gave
  The darken'd heart that beat no more;
  They laid him by the pleasant shore,
And in the hearing of the wave.

There twice a day the Severn fills;
  The salt sea-water passes by,
  And hushes half the babbling Wye,
And makes a silence in the hills.

The Wye is hush'd nor moved along,
  And hush'd my deepest grief of all,
  When fill'd with tears that cannot fall,
I brim with sorrow drowning song.

The tide flows down, the wave again
Is vocal in its wooded walls:
My deeper anguish also falls,
And I can speak a little then.

—*In Memoriam*, XIX.

かくも胸裡に溢るるばかりの愁思、やがておのづから彼をして深く人生を觀ずるの機を得せしめたるものなれば、科學の發達が宗教信念の根蒂に動搖を來して懷疑の暗潮に悶ふる當代の民心に、切實なる影響を與へたるもうべなり。おもふに當時は基督教が自由信仰と高等批評との爲に原始時代の教儀を失はんとして、人心に確固たる信仰なく歸趣するところを知らざらんとするの時、これを救濟せんとしてかのニュウマン等の牛津(オックスフォード)運動(ムーヴメント)ありし頃なり。まことや人心が "There lives more faith in honest doubt, Believe me, than in half the creeds" (In Memoriam XCVI) といふがごとき狀態に陷りたるとき、われ等の詩人が此雄篇は、げにも不安と絶望との域を解脱して更に超自然の至大なる勢力に信頼すべきを教へたる福音に外ならざりき。詩中の語を以ていへば『暗黑を過ぎて神のみ國へとのぼり行く大世界の神壇のきざはしの上に』科學が民衆の心靈的生活の領域を侵さんとするに對して、詩人の信念を示し、人間の運命と天の攝理との間には解くべからざる關係あるを説示

したるものなり。

結構の上よりいへば、千八百三十三年の秋ハラムの訃音に接してより、以後二年有半の間にわたりて、絶望より信仰に、暗黑より光明にむかへる心靈の行路を歌へるひとつづきの物語を爲したり。悲嘆の嵐まづ吹き起りて、やがて風は少しなぎたれど海なほ荒く、新しき問題に觸るるごとに舟は懷疑煩悶の暗潮に漂ひて波間にゆられつ。遂に海しづかなるに及びて、心靈やうやくやすらかに、うららかなる碧空のもと、輕風に帆をあげて平和の湊を指してぞ行く、これ即ち聖書のことばもて言へば、『かれら天(あめ)にのぼりまた淵にくだり患難(なやみ)によりてその靈魂(たましひ)とけさり、こなたかなたに傾き、醉ひたる者の如く蹌踉(よろぼひ)てなす所を知らず。かくて其困苦(くるしみ)のうちにてエホバをよばふ。エホバこれを患難(なやみ)よりたづさへ出で、狂風(あらし)をしづめて浪をおだやかになし給へり。かれ等はおのが靜なるをよろこび、かくてエホバはかれ等をその望むところの湊にみちびきたまふ』(詩篇第百七篇二六—三〇)といふものに外ならざるなり。

詩人が人生問題に對する冥想思索をこの雄篇に味ふべきは言ふまでもなけれど、哲理そのものは固より文藝にあらず、故に秀抜なる詩歌として之を研究せんひとは、この作に於て詩人が自然の景情を寫して、胸奥の感想と之と相照應せしめたる妙趣のごときに、深く意を留めざるべからず(前にも述べたるが如く、テニソンが常に情緻の自然觀察を怠らざりし事は、そのすべての作品に徴して著るし

けれども)、詩人この大作のためにおもひを凝らすこと實に前後十七年、そのあひだ居を移して耳目に觸るる自然のさまも折々に異なりたれば、作中またおのづから光景の變遷を見るべし。或は小山のほとりに遠く海潮の音を耳にし、また林間に小川のさざめきを聞き、百花繚亂の園生、鬱蒼たる樹下の芝生を逍遥しては、四圍の景みな詩人の胸奥に入つて靈化せられ、折々の心情の變化に伴うて之を反映し、二者の間に緊密の關係を存したり。おもふに『イン・メモリアム』はテェソンみづから言へるが如く『輓歌の斷片集』なるが故に、毎節その內容に於て殆ど獨立したる詩歌の集合と見做すべく、さながら數多き鐘の音相合して一の和諧の調をなすに似たり。從つていま其各部分に就きて自然叙景法の例證を擧ぐるに難からず。例へば第八十五歌の如き、自然はここに青春歡樂のおもひと相合したるを窺ふべく、或は第百二十一歌に星を詠じて『うましあか星ゆふづつ(ヘスパアフオスフア)は始め終りの一つなるにつけし二つ名。わが靈のむかしと現在(いま)をさながらに、みましは所をこそ更ゆれ、おなじきものぞ』と歌ひたるが如し。また初めに叙景を試みてのち、詩人の心もちを之に寄せたるものには、壯麗いふべからざる秀什殊に多し。たとへば第十一歌に朝景色のしづけさを描き、之と對照して直に第十五歌に、嵐吹きすさぶ夕景色に詩人胸奥の不安絶望をうつしたる妙所あり。また第百十五の歌に、

Now fades the last long streak of snow,
  Now bourgeons every maze of quick

About the flowering squares, and thick
By ashen roots the violets blow.

Now rings the woodland loud and long,
The distance takes a lovelier hue,
And drown'd in yonder living blue
The lark becomes a sightless song.

Now dance the lights on lawn and lea,
The flocks are whiter down the vale,
And milkier every milky sail
On winding stream or distant sea;

Where now the seamew pipes, or dives
In yonder gleaming green, and fly
The happy birds that change their sky
To build and brood; that live their lives

From land to land; and in my breast
Spring wakens too; and my regret
Becomes an April violet,
And buds and blossoms like the rest.

といへるは、かの『ロックスレイ館』に「春の日にわかうどのこころ、戀のおもひに向ふ」といへる秀句と併せてわが最も愛誦するところ、春を詠じたる英詩の最も秀抜なるものなりかし。『イン・メモリアム』の出でし翌年を以て、詩人夫妻は南歐觀光の程にのぼりしが、途上巴里に於てブラウニングと會しぬ。かの "The Daisy" の篇は、卽ちこの旅を歌ひたるなり。その翌年ウェリントン公の死に臨みて作れる哀悼の歌は、桂冠詩人として最初の成功なりき。次いでテニソンはワイトの島に家を購うてながくここに居をトせしが、遠く連れる草靑きまきばのほとり、松籟潮聲と相和して詩人が幽思を養ひぬ。わが邦語にも譯せられたる輕騎進行曲（一八五四）の雷霆の轟くがごとき壯調は、クライミア陣中の將士之を誦じて滿腔の讃辭を捧げたるもこの頃なり。

南英の幽里ワイトの閑居に人を避け、しづかに詩思を凝らして成りたる作を先づ『モオド』 Maud（一八五五）となす。さきの沈靜に比してこの熱烈を見、輓歌體の悲哀あとなく去つて戀愛の熱情もゆるが如きを誦しては、讀詩界はげに詩想の激變に驚嘆なき能はじ。蓋し深沈の哲學は今や移りて濃

艶なる戀愛の悲劇となり、之に托して功利唯物の時世を難じたるものなればなり。この一篇は獨唱曲(モノドラマ)にして、女主人公モォドを戀ふる青年がみづからの身の上を語れるなり。彼の父は投機に失敗して産を失ひ、その結果モォドの父富を致しければ、青年のこころ甚だ平かならず。しきりに市人の不正と貪婪を難ずれど、振分髪のむかしのモォド今は別に戀人あるをとめのおもかげは忘じがたくて、心中の不滿竟に思慕の情に克つ能はず。おもふにあまる胸裡の熱愛を告げてはやがて燃ゆる相思の情日を逐ひてこまやかに、人しれぬ逢瀬のちぎり、さてはまた舞踏はてし夜の園生にかをれる薔薇のにほひゆかしう、セレネードの歌、聲もかすかに人待つおもひ、精緻の詩筆に描かれてここに艶麗かぎりなき一聯の戀愛抒情詩をなしたるもうれし。また事遂に露はれて決鬪の慘劇を現じ、主人公は國を逐はれて、絶望と悔恨に心ちぢに亂るる深酷の幾章に至つては、殊に近代詩の絶唱なりかし。作者みづから言へる如く、此曲ややハムレツトに似たるところあれど、沙翁の大作に見ゆる深遠の想あることなく、殊にまた全篇の結構は完全なる一の物語をなさずして、支離滅裂の譏あるを免れず。其美は全部としてにはあらずして、寧ろ各部分に存するなり。これ抒情詩人の傾向すぐれたる羅曼底格の作家の常にして、テニソンの如きも常に結構統一(アアキテクトニツク)を缺きたる短所あるを免れず。『イン・メモリアム』や次に述べんとする『アアサア物語』等の大作亦皆この弊を免れず。

『モオド』出でてより後の數年は、またテニソンが沈默の時なり。特に此頃よりして以後は、彼が在

來いまだ多く試みざりし叙事詩と戯曲とに筆を染めたるに注意すべし。先づ千八百五十九年を以て、その最も力をそそぎたる一代の傑作アアサア物語“Idylls of the King”の最初の四卷あらはれぬ。爾後時を隔てて折々に出版せられたるこの物語の續篇は、千八百八十五年の詩集“Tiresias and other Poems”のうちに收められたる『バリンとバラン』の篇に至りて大成せられたり。かの好んで文藝の批判にこちたき談理を交へ、詞章の美をだに鑑賞するの眼なくして、猥りに詩人の世界觀を論ずるやうなる大言壯語をよろこぶ人々は、『イン・メモリアム』の哲學的なるをこよなき名篇のやうにいひなし、ヴァアジルの『イイニイド』ゲエテの『ファウスト』ダンテの『神曲』などと共に、時代思想の反影たる大詩篇とたたふれども、われ等は典麗優雅なる叙事の技巧最も著るしき『プリンセス』と、この『アアサア物語』とを以て、詩聖一代の作品の最もすぐれたるものなりと信ずるなり。おもふに戀愛俠勇など詩情ゆたかなる事蹟を材として、內容と外形の調和歪き麗章をなすは、わがテニソンの長所とする所にして『イン・メモリアム』に深奧の哲學思想を求め『モオド』に熱烈の戀愛をのみ賞せんとするは、稍々批判の正鵠をあやまりたるものか。こはテニソンがブラウニングと大に趣を異にしたる點の一なりかし。かの有名なる評家フレデリック・ハリソン氏のテニソン攻擊說は、いつもわれの首肯する能はざる所なれど、嘗て『ハムレットの獨白は“To be, or not to be”以下三十二行に過ぎず。しかも其思想の量に至つては、イン・メモリアム三千行とひとしくして、人を動かす事また

毫も遜色なし』（『北米評論』千九百〇三年、八六〇頁）と言ひたる、固より誇張の誣言に過ぎざれど、なほ半面の眞理なきにしもあらず。蓋し精巧なる詩趣を帶びたる如きテニソンの詩筆は、哲學的の題目を歌ふに當つて、冗長に失するの嫌なきにしもあらざればなり。

既に前章に述べたるごとく、中世傳説の復活は、近代の詩歌における羅曼底格主義の極盛に伴ひたる著るしき現象にして、就中アアサア王の傳説は、封建の騎士が禮節を重んじ義理を貴び、敬虔の宗敎思想に戀愛の至情をあはせたる詩趣ことに深き物語にして、英國民の思想を古に溯りて繹ねんと欲する者の深く留意すべきところ、從つてそを詩材としたる者、獨りテニソンにとどまらず。モリス、スヰンバアンの如き大詩人も亦その傑作の題材をここに求めたるが故に、特にこの傳説の由來に就いていま概略を記述するの要あり。

輓近の學者は中世傳説に精緻の研究を試みて、ここに重要なる三個の系統を見出でぬ。(1)第一は佛蘭西系統の物語にして、卽ち所謂 Carlovingian Cycle of Romance または『佛人行事（ビスタ・フランコルム）』といふもの是なり。シャアルマン帝の事蹟を中心として、武士ロオランドの歌のごときあり。(2)次なるは羅馬系統に屬し、希臘羅馬ならびに廣く東洋をも含み、ヴァアジルの大作『イイニイド』中の事蹟、トロイの物語、アレクサンダア王の古説等を傳ふ。而して之と共に吾人の最も注意すべきは卽ち、(3)英國系統に屬したる Arthurian Cycle of Romance にして、ケルト民族の幽玄なる思想を表はしたるもの

なり。以上のうち、シャアルマン傳說の單調はここに複雜の近世思想を托するに難く、羅馬傳說また素より文藝上の珍たるを失はざれども、移して直ちに近代の詩文となすに足らず。獨りアアサア王の物語に至つては、當時の武人の愛情節義の徵を穿ち、こまかく其生活を描きたれば、羅曼底格の詩材に豐富なること、他に之と比すべきものを見ざるなり。

この傳說の由來を尋ねて中世詩文の詳密なる論議に入らんは興味ふかき研究なれど、今はそを詳說するの遑なければ、唯要を摘みて言はんに、先づ其起源に就いては、セインツベリイ教授のごときアングロサクソン民族の古說に基づくとの異論を唱ふれど、近時の學說は殆どすべてケルト起源說に一致す。紀元後五六世紀のころ、ケルト民族はウェイルズの南方より大陸のブリタニイに移住し、此地にアアサア物語を殘したりしを、之に隣れるノルマン人そを拾集して、更に幾多の潤色を施ししが、かのノルマン・コンクェストのとき此傳說は再び英國に逆行して、後遂にマロリイが曠世の奇文『モルト・ダアサア』となりてその完成を見るに至りしなり。いま詩文に現はれたる方面に於て、この傳說發展のあとを尋ぬれば、ウェイルズの僧モンマスのジェフリ(Geoffrey of Monmouth)この物語を集成して『ブリトン實錄』(Historia Britonum 或は Historia Regum Britanniae 千百三十年より其死千百五十年のあひだに成れりと覺ぼし)の傑著あり。後代の英文學この書に負ふところ甚だ大にして、たとへば沙翁の『リイア王』、『シムベリン』の如き大作も、題材をここに得たるなり。されど此書中に見えたるアアサア傳說には、なほ未だ聖杯(ホオリイ・グレイル)、トリスタ

ン、ランスロットなどの物語を交へず。千百五十年のころ、ジェフリ・ガイマア (Geoffrey Gainar) 之をノルマン語に譯して、おなじく "Etorie des Bretons" と題し大陸にひろめられ、またウェイルズの人ウォタア・マップ (Walter Mapes) の散文にあらはれて、ランスロットの事蹟など新に加へられぬ。されど最も注目すべきは十二世紀の後半に佛蘭西のクレティアン・ドゥ・トロア (Chrétien de Troyes) が五篇の物語にして、從來の傳說の次序を正し敍述を明らかにし、歐洲近代詩文に多大の影響をあたへたる偉功ながく沒す可からず。その(一)「小車のもののふ」"Le Chevalier de la Charrette" に於て吾人ははじめてランスロットと王妃ギネヸイアとの戀を見、(二)『獅子に助けられし武士の物語』"Le Chevalier au Lyon" (三)『エレクとエニイド』"Erec et Enide" (これはウェイルズの物語集『マビノギオン』Mabinogion より出で、テニソンのアアサア物語のうち "Geraint and Enid" となれり)。(四)『クリゼエ』"Cligés" にはロメオとジュリエットのやうなる戀物語などありて、(五)最後には、ワグネルの樂劇によりて近時わが邦にひろく知られたる『ペルシヴァル』"Percevale" に、聖杯(ホオリイ・グレイル)傳說のもとを窺ふ可し。されど憾むらくは此篇のなかばにして作者は世を去りたれば、今や聖杯の行衞を說かんとする條にて物語は終れり。これより後、千二百五十年の頃に至るまで佛蘭西に出でし多くの散文の物語は、また再び英國に移りて、ケルト傳說に著るしき變化を與へぬ。

後殆ど二世紀を經て、英國における最初の印刷業者カクストンあらはれぬ。古書を上木して英國文

獄の湮滅を防ぎし偉功もとより大なれども、千四百八十五年マロリイの名著『モルト・ダアサア』(Sir Thomas Malory's Morte d'Arthur) の上梓に於て、彼は實に千古に沒す可からざる記念を史乘にのこししなり。蓋しマロリイの此奇書は英國中世に於ける傳奇（ロマンス）發達の最後の時期を劃したるものにして、從來すでに幾多の變遷を遂げたるアアサア物語は、マロリイの詩趣ゆたかなる暢達簡雅の散文にあらはれて其完成を見るに至りしなり。中世武人が俠勇の氣と崇高の節と、皆沈靜の調を帶びて極めて音樂的なる辭章に描かれたるめでたさは、遂に代を隔てて十九世紀の大詩人を動かしたるも怪むに足らず。

圓卓（ラウンド・テイブル）の武士に圍まれたる中心の人物アアサア王は、のちエリザベス朝の英文學に於て、スペンサアが『仙女王（フエアリ・クキイン）』の大作に、十二の德を代表せる勇士の物語にそのおもかげを忍ぶほか、爾後ながく偏理沒情のクラシック派の勢力に壓せられて、この豐麗なる傳說は詩文界にあらはれざりき。(ミルトンはじめ一大叙事詩を作らんとてアアサア物語を材とせんとしたれど、遂に之を捨てて『失樂園』をとり、ブラックモオア、ドライデン等に至つて『アアサア王』の曲あれども、これ等は多く言ふに足らず)。しかるに十九世紀のはじめ、羅曼底格文學が冲天の勢は古書堆裡にマロリイの古書を探つて、再び之を梓に上ぼすに至りぬ。テニソンはここに於てスペンサアの遺風を追慕して、マロリイ(テニソンがいへる Mallory) の奇書を材とし、更にこれを近世化し、この中世の美談は面目を一新して十

九世紀の英文學に出現するに至りぬ。

『王者の花アァサア』Flos Regum Arturrs とたたへられたる此英雄王の事蹟は、もとより史籍に徵して確かめ得べきものに非ずして、國民の理想とするところを傳說に托せて作りたる英明の君主なり。古へブリトン人の王 Uther の子にして、寶劍を妖術者 Merlin より得、當時王化地を拂うて、麻のごとく亂れにみだれし國土を平定し、アングロ・サクソン民族の跋扈を抑へ、蘇蘭愛蘭に轉戰して之を服し、基督教的君主として上帝の命をかしこみて、異教徒の跳梁を防ぎたるなり。はじめカメリアァドの王レオドグラン(Leodlgran, King of Cameliard)の請によりて其國を平定せしが、事成りて遂に王女ギネヴィア Guenever, Guinevere と婚す。アァサアが宮廷にこの新后を迎ふるに當りて護衞の任にあたりたるものは、即ちランスロット Lancelot にして、此析すでに二人が道ならぬ戀ははじまり、他日王國滅亡の因はやくここに胚胎したりしなり。かくて名だかき十二回の戰に一も敗をとらず、連勝の榮を重ねて經國の大業漸く成らんとするに當り、王妃と通じたるランスロットを討たんとて、アァサアは膺懲の師をブリタニイに向けし其間、攝政たりし Modred また叛旗をかかげぬ。王は歸りて再び之を伐ち、モドレッドを殺せしが、身また致命のいたでを負ふに至れり。王の理想は遂にかくて空しきに終り、圓卓の武士みな散じて、國土は再び四分五裂のさまにかへりぬ。

この物語に關聯してまた別に聖杯搜索(La Queste del Saint Graal)の傳說あり。聖杯とは基督

が最後の聖餐の折に用ゐたる杯（"The cup, the cup itself, from which our Lord/Drank at the last sad supper with his own.,,—Tennyson, *The Holy Grail*）にして、そのありかに就きては衆說紛々、遂に行衞を知らず。此器ときに光明を放ちて出現することあれども、潔白純正ならざる人の之に近づくあれば、忽ちにしてそのすがたを沒すといふ。アアサア王配下の所謂圓卓の武士競うてこの神祕の器を求めん事に力を致し、うちの一人遂に之を發見すと傳ふ。

この傳說を用ゐたるテニソンの諸作を合はせ、題して『牧歌（アイテイルズ）』といふは、おもふに idyl（また idyll に作る）の語は此體を創めたるセオクリタスの古詩に繪畫的詩歌を意味し、牧人の戀を歌ひ、漁夫の生をゑがき、後代の詩人これを摸して多くは田園素朴の生活を寫したるものなり。テニソンはこれを稍廣義に解して、題目の如何にかかはらず、すべて一幅畫圖の觀をなしたる作となし、少壯すでに此種の作多かりしは前にも述べたれど、このアアサア王の歌は特にこの性質を帶び、各篇みな獨立したる物語にして、一連續をなしたる眞正の敍事詩とは稍その體を異にしたり。ただ其中心たる人物と思想感情とは、すべて十二篇を一貫したれば、一の罪惡が漸次その勢を逞うして、最後の悲劇を現ずるに至るまでの發展の行徑をたどることを得べし。なほ全篇結構の統一を保たんため、物語の敍述を四季折々の景情に配して、春夏秋冬の卷に、おの／＼移り行く自然の風致を背景におきたり。先づアアサアの生れたるを歲のはじめとし、ギネヸイアとの結婚を春の卷とし、エニイドに至つて夏に入

る。次いでエレインの悲しき戀を叙したるは『著さに窓うち開きたる』九夏三伏の候にして、かの圓卓の武士が聖杯(ホリイ・グレール)のかげをみとめたるも夏なり。而してトリストラムの戀を說くに至つては、金風梢を渡り黃葉凋落の物淋しさをこの悲哀の一曲に配したる妙あり。更に進んで、ギネヸイアの悲劇には、木枯ふきすさび初霜しろき晩秋初冬の景を添へ、最後『アアサア王去る』の篇には、寒月そらに凍るとおぼしき夜半の悽愴、うたた讀者の悲痛感慨を深からしむ。

今その題目を、著作年代の次序によりて列記すれば、

1859: The Marriage of Geraint. } Enid
Geraint and Enid. }
Merlin and Vivien.
Lancelot and Elaine.
Guinevere

1869: The Coming of Arthur.
The Holy Grail.
Pelleas and Ettarre.
The Passing of Arthur.

1871: The Last Tournament.

1872: Gareth and Lynette.
1885: Balin and Balan.

このうち Geraint and Enid, Marriage of Geraint の二篇を除きて、他は皆マロリイの書に材を取りたるのみならず、辭句のうへに於てもそを踏襲したるあと多かれど、一篇の貫隨に至つては全く此詩人の獨創に出で、古書の趣を去り、從つて事實の上にも尠からざる變更を加へたり。而してその詞藻聲調の美は讀者の視聽を動かして、さながら色彩ゆたかなる畫幅に對して瀏喨の樂聲を耳にするの想あらしむ。もとより辭句の洗煉に於てすぐれたるテニソンの作中にも、わきてたぐひ稀なる秀什なることは、研究者の第一に注目す可きところなれども、われ等はここにまた、全篇にあまねき道徳思想が其背後に存することを忘るべからず。此作中にあらはれたるアアサア王は獨り王者の德たかきを寫したるにあらず、圓卓の將士の事蹟はまた中世武人の戀愛冒險俠勇の氣をのみ示したるに止まらずして、人生における善と惡との衝突、吾人の心靈と肉體との爭を描きたるなり。全篇の終に附したる跋歌(エピロオグ)『女王に捧ぐ』の篇、

......Accept this old imperfect tale,
New-old, and sh dowing Sense at war with Soul
Rather than that gray king, whose name, a ghost,

Streams like a cloud, man-shaped, from mountain peak,
And cleaves to cairn and cromlech still; or him
Of Geoffrey's book, or him of Malleor's one
Touch'd by the adulterous finger of a time
That hover'd between war and wantonness,
And crownings and dethronements:

と言へるは、詩人みづから能く此作の性質をいひ顯はしたる語なり。

王國興廢のあとに就きて考ふれば、先づ "The Coming of Arthur" の篇これが發端をなし、アアサアは王位にのぼりて異端を征伏し、"Gareth and Lynette" に於ては旭日沖天の隆運をなして、圓卓の將士みな智勇ならびなく、アアサア其人はさながら地上に基督を代表したる王者の概あり。この一卷にのみ王妃ギネヸイアのこと全く見えずして、敗德亂倫のあと毫も現はれず。"Enid" の卷に至つて漸く、この王國滅亡の因をなしたる不德の分子その兆をあらはし、先づギネヸイアより初まりたる不信嫉妬のやうやく朝臣の間に瀰漫せんとす。圓卓の將士のなかにもすぐれたる一人ジレイントは、その妻エニイドに此風の感染せんことを恐れて宮廷を去る。或時、半醒半睡の間にエニイドの言ひたる語を耳にしてより、ジレイントは漸く妻の愛を疑ひて之を酷遇したりしが、身は創痍になやむ

に及んで、妻がやさしき看護に初めて其誠實をさとり、ここにみづからの誤解を悔いて伉儷ふたたび睦まじく、二人は樂しく世を終りぬ。次で "Elaire" の一段に至つては實に後の悲劇の序幕を開きたるものにして、清淨無垢なるこの『アストラットの百合をとめ』が、ランスロットをおもふあはれなる戀の物語は、幽婉の悲調を帶びて篇中の白眉たり。はじめランスロットは晴れの試合に列せざる由を王に告げしが、王妃ギネヸイアの言もだしがたく、遂に其名を匿くして演武の會に臨まんとす。途にアストラットに立ち寄りて他人の楯を借りおのれのを預けて去りぬ。かれの楯をあづかりて護れるものにこそ、ひそかに清き胸をなやまし、此勇士に切なるおもひを運べるエレインなりけれ。さるほどに、ランスロットは演武の庭にめざましき武功を樹てたれど、身にいたでを負ひければ、退てさる隱者のもとにひそみぬ。少女ここに勇士をたづねて看護に力を盡くし、やがて包むにあまるおもひのたけを語れば、ランスロットの意すでに王妃にあり、彼は空しく獨り去つて王宮にかへりぬ。少女はかなはぬ戀にいや增す胸のなやみ積りつもりてあはれ遂に世を去りけるが、死に臨みて萬斛の愁思を哀歌に寄せたるもの悲調ことに深し。

"Sweet is true love, tho' given in vain, in vain;
And sweet is death who puts an end to pain:

I know not which is sweeter, no, not I.

"Love, art thou sweet? then bitter death must be:
Love, thou art bitter; sweet is death to me.
O Love, if death be sweeter, let me die.

"Sweet Love, that seems not made to fade away,
Sweet death that seems to make us loveless clay,
I know not which is sweeter, no, not I.

"I fain would follow love, if that could be;
I needs must follow death, who calls for me;
Call and I follow, I follow! let me die."

遺言により、白衣につつまれしをとめのむくろを一葉の小舟に托し、右手(めて)に白百合、左手(ゆんで)におもひぶみ持たせて、唖の老翁、河を溯りて、カエレオン（caerleon upon Usk）なるアアサアの王宮に至りぬ。王はこのふみを見て深くその最後を憐み、さきに少女のことを聞きていたくも怒れる王妃ギネボ

イアの疑も今は全く解けて、むくろを厚く葬られぬ。

ひとたび兆したる頽勢は之を遏めんに由なく、巻を逐うて悖徳亂倫のさま益々甚しうして"The Last Tournament"の篇には、マアク王の妃イシュルトが騎士トリストラムと、ひそかなる逢瀬のかたらひ睦まじう、戀愛の高潮に危機その身に迫れるを知らず、朱唇インシュルトのうなじに觸ると見れば

"But while he bow'd to kiss the jewell'd throat,
Out of the dark, just as the lips h.d touch'd,
Behind him rose a shadow and a shriek—
'Mark's way,' said Mark, and clove him through the brain."

かくの如くにして節義貞操漸くすたれ、遂に『ギネヸイアの巻』の悲劇を見るに及びては、さしも濟濟たる多士を擁して威武を中外にふるひしアアサアの王國、はかなくここに土崩瓦解の悲運に陥りぬ。常に王位簒奪をはかりたりし皇甥モドレッドは、その悪めるランスロットと王妃ギネヸイアとの道ならぬ戀をあばきければ、ここに相思の二人はあかぬ別れを惜しみつつも、直に馬に鞭うちて遠く逃れ、ギネヸイアは其名を告げずしてアアムズベリイの精舎に入り、ただ一人の尼にかしづかれて憂愁に日を送りぬ。既にしてアアサアは北にランスロットを討ちてより、更にモドレッドを攻めんとて西に

向ふ途すがら、ひとり精舍に皇后を訪ふ。此時愛情いまなほかはらずして『われ爾を赦さん、永遠の神が赦し給ふごとくに』と言へる數十行にわたれる王の言葉は、人情の機微をつくして片言隻句も皆ふかくわれ等の肺肝に徹するおもひあり、王は過ぎし日をおもうて王妃を責めていはく、

And all this throve until I wedded thee!
Believing "lo mine helpmate, one to feel
My purpose and rejoicing in my joy."
Then came thy shameful sin with Lancelot;
Then came the sin of Tristram and Isolt;
Then others, following these my mightiest knights,
And drawing foul ensample from fair names,
Sinn'd also, till the loathsome opposite
Of all my heart had destined did obtain,
And all thro' thee!

王妃ギネヸイアは伏して語なし。既にして王ここを辭し去りて後、彼女は過去の罪を告白し、『王の大業を敗りし邪惡のわれ』なるを衆尼に告げ、これより持戒潔齋遂にこの精舍のをさとなり、三年の後

にして身まかりぬ。次に全篇の總收たる "The Passing of Arthur" の卷は、王がモドレッド討伐の最後の激戰を叙しその末路を歌ひたるもの、悲壯沈痛なる英雄物語の結尾をなす。亂世に出現して正義と人道とのためにおのが理想を實現せんとしたりしアアサアの志今むなしく、偉業なかばならずして、王妃うちに操をやぶり、股肱の老臣ほかに叛旗をかかげて王位を危うせんとす。危惧憂慮のうち王は遂にその最後の戰に出陣す。

For I, being simple, thought to work His will,
And have but stricken with the sword in vain;
And all whereon I lean'd in wife and friend
Is traitor to my peace, and all my realm
Reels back into the beast, and is no more.
My God, thou hast forgotten me in my death;
Nay—God my Christ—I pass but shall not die.

狹霧ふかくもとざせる濱邊に兩軍は相會しぬ。『悲しき日のゆうべとなれば、たそがれの物凄さは更に加はりて、北より吹く烈しき風狹霧を拂ひ、風に伴ひて潮はまた高まりぬ。王はおもて色を失ひて戰場を見渡したまへば隻影なし』。やがてモドレッドに遇ひて一擊これを斃し、みづからも亦致命の

いたでを負ひたまひぬ。この時ひとり生き殘りし圓卓の武士ベディヸイアに命じ寶劍『エクスカリバア』を水に投ぜしめ身は助けられて湖畔にいたり、ここに王は麗人をのせたる小舟(バアジ)に迎へられ、何處ともなく去つて遂にまたその行衛を知らず。末段の數節はげに辭章の壯麗をつくして、自然の叙景と事實の配合とが精妙を極めたるは、古今の英詩にたぐひ稀なる高調なり。滿目蕭條として人影かすかなるところ、ベディヸイアは獨り湖畔に立ち、傷を負ひたるアアサアは寺院に近く身を橫たへて、この勇士が劍を水中に投じて歸り來るを待てり。

So saying, from the ruin'd shrine he stept.
And in the moon athwart the place of tombs,
Where lay the mighty bones of ancient men,
Old knights, and over them the sea wind sang
Shrill, chill, with flakes of foam. He, stepping down
By zigzag paths, and juts of pointed rock,
Came on the shining levels of the lake.

アアサアをして多年の武功を樹てしめたるこの靈劍を今さすがに捨てかねつ、ベディヸイアは二度までも之を匿くさんと試みぬ。王は爾わが命を果したる折なにをか見し何をか聞きしと問へば、武士は

じめは

'I heard the ripple washing in the reeds,
And the wild water lapping on the crag.'

次の折には、

'I heard the water lapping on the crag,
And the long ripple washing in the reeds.'

その聲調すでに能く落莫の光景をうつしたらずや。武士遂に命を奉じて之を水に投ず、劍影燦として月光にきらめきては、

The great brand
Made lightnings in the splendour of the moon,
And flashing round and round, and whirl'd in an arch
Shot like a streamer of the northern morn,
Seen where the moving isles of winter shock
By night, with noises of the Northern Sea.

かくて王の驍勇を代表したる靈劍すでに捨てられたるは武力盡きたるを示し、王を擁してアボリオン

の谷に隱れたる麗人は、英魂を淸淨界裡に誘ふ天使の象徵なりと見るべし。
王アアサア、股肱の臣ランスロット、王妃ギネヸイア、また叛逆の將モドレッドなど、みなその個々の性格に於ては、ホオマアのむかしよりこのかた東西古今の詩文にたぐひ多く、必ずしも奇拔なるにはあらざれど、かかる古代傳說の人物を起してその思想感情を變じ、更に十九世紀の舞臺に活躍せしめ神祕の趣を失はずして能く近代民衆の最も高き美感に訴へ、その道德心を動かしたるは、テニソンのごとき大才に非ずんば能はず。殊に其中心の人物たるアアサア王は、王妃の言へる如く、げにも"the faultless king" にして、また "the highest and most human too" なるもの、ここに極めて崇高なる淸き人格を現じて、その寬厚、慈仁、勇武の德を遺憾なく發揮せしめたるは、詩聖が理想とするところを體現したるものに外ならず。之に配するにギネヸイア、エレイン、ランスロット等を以てして、人間の誘惑慾情ならびに聖愛等の分子を交へ、ここにまた圓卓を圍める一團の勇士を描きて、巧に紛糾錯雜せる近代思想を中世騎士のすがたに寓したるなり。地上に基督の王國を建設せんとてアアサアが最も信賴したるこの圓卓の武士は、王が『神と人とのため』に盡くせる大業を輔けたる智勇兼備の猛將にして、Gawain, Modred, Gareth,（以上の三人は王の甥なり）Pedivere, Lancelot, Kay, Geraint, Balin, Tristram, Galahad, Percival, Pelleas 等はその最も精銳なるものなり。この一團の勇士が如何なる性質のものなるやは、『ギネヸイア』の卷中、精舍に王妃と會したる折のアアサ

アみづからの話に明らかなり。いはく

But I was first of all the kings who drew
The knighthood-errant of this realm, and all
The realms, together under me, their Head,
In that fair order of my Table Round,
A glorious company, the flower of men,
To serve as model for the mighty world,
And be the fair beginning of a time
I made them lay their hands in mine and swear
To reverence the King, as if he were
Their conscience, and their conscience as their king,
To break the heathen and uphold the Christ,
To ride abroad redressing human wrongs,
To speak no slander, no, nor listen to it,
To lead sweet lives in purest chastity,
To love one maiden only, cleave to her,
And worship her by years of noble deeds

Until they won her; for, indeed, I knew
Of no more subtle master under heaven
Than is the maiden passion for a maid,
Not only to keep down the base in man
But teach high thought and amiable words
And courtliness and the desire of fame
And love of truth and all that makes a man.

千八百五十九年最初の四卷を公にせしより時を費すこと前後二十年、われ等の詩人が畢生の技を揮ひたる鏤心刻骨の作『アアサア王の歌』すべて十二卷の麗章は、獨り十九世紀英詩の光榮たるのみならず、直にミルトンの『失樂園』とその光芒を爭はんとする一大叙事詩なりと言ふも、あながち過褒にあらざるべし。物語の布置結構に統一を缺き、また後部の諸卷に至つて漸く羅曼底格の趣味うすく、道德の寓意に偏したるが如き非難はあれども、かのゲエテの『ファウスト』におけるが如くに、詩人が長年月を費したる大作には、作者その人の複雜多趣なる思想の變遷おのづからここにあらはれたれば、傳記の方面より之れを觀察せんも亦興味ある硏究なり。

之に次いで千八百六十四年を以て出でたるは『イノック・アァデン』にしてわが邦にも既に數種の飜

譯ありてひろく世に行はる。こはさきの『アアサア王の歌』が大英雄の事蹟を題目とせると全く其揆を異にし、現代の素朴なる平民生活に材をとりたるものにして、眞に近世的牧歌（アイディル）の體を具へ、從つてさきの大作と異なり、眞情のゆたかなると叙事の平明簡潔なるを賞すべし。なべて此たぐひの詩風は近代英國の詩歌にクラッフ先づ之を創めて、後ヲルヅヲルスの詩才によりて大成せられ、テニソン亦早く『ドウラ』のごときにこの體をまなびて、別に新様の趣を添へたるは前に述べたるが如し。イノック・アアデンは、舟人の子にして、其友フィリップ・レイと、幼時より共にアンニイといへるむすめを戀ひけるが、イノック遂にそを娶り、二男一女をあげて樂しき家庭の生活ひとも羨むばかりなりしが、或日帆柱より落ちて傷き、已むなく業を廢して商船に傭はれ、引き止むる妻子を家に殘して、身は遠く故國を去りぬ。フィリップは貧になやめる此母子を助けけるが、十二年を經てイノック歸らざりければ、アンニイ遂にフィリップと婚しぬ。この間にイノックは南海の孤島に漂流して、獨り望郷のおもひに堪へざりしが、遂に便船に救はれて故國に歸りぬ。されどわが子とアンニイとがフィリップを父とし夫とせる樂しき生活を妨げざらんとて、胸も裂けん切なるおもひを抑へて、おのが家には入らず。或夜ひそかに彼が家庭團欒のさまを垣間見て苦悶やるせなく、ひそかに天に祈りていふ。

'Too hard to bear! Why did they take me thence?
O God Almighty, blessed Saviour, Thou

That didst uphold me on my lonely isle,
Uphold me, Father, in my loneliness
A little longer! aid me, give me strength
Not to tell her, never to let her know.
Help me not to break in upon her peace.
My children too! Must I not speak to these?
They know me not. I should betray myself.
Never: No father's kiss for me—the girl
So like her mother, and the boy, my son.'

斯くしてしばしの後イノックは身まかりしが、フィリップと妻子とはのちに之を知りて厚く葬りぬ。

結構の均整、前後の照應など、叙述の妙を盡くしたるは、かかる簡單の梗概が能く傳ふる所にあらざれど、殊に末段深醋なる悲哀を盡くしたる幾章は、十年の昔われの未だ中學に在りし頃讀みて、今なほ其妙趣を忘るる能はざるところなり。物語の筋は海邊の漁村などにありがちの寧ろ平凡なるものにして、わが邦の文學にては、西鶴の作中『懷硯』卷一『案内知つて昔の寢所』の一篇これと酷肖し（アストン氏著日本文學史二六九頁參照）たるも面白し。テニソンはワイトの嶋に其居をなして詩思

を養ひたれば、おのづから共あたりの漁民舟夫の生活に目なれて、海洋を詠じ、ことに舟びとを題目としたる作この外にも多かり。(此種の歌はテニソンの作中、別に一分科をなせるものといふべく、研究者の深く注意すべきところ "The Revenge," "The Sailor Boy," "The Voyage" 等の小篇にも此詩人が海洋を愛したる事の深きを知る可し)。此イノックの篇は屢々劇に仕組まれて英米に讃賞の聲たかく、歐洲七ケ國の語に譯せられしのみか、佛國巴里大學のベルヂャーム教授のごとき、此一篇に關して詳密なる論文を草したるさへあり。

千八百七十五年 "Queen Mary" の曲を公にせしより、ここにテニソンは更に新しき方面に其詩才を試み、戲曲に筆を染むるに至れり。おもふに、近英戲曲の眞の發達は遠くゴウルドスミスの作を以て中絕し、爾後十九世紀の英文學は斷じて戲曲の時代にあらず。最近六七年スティヴン・フィリプス、アアサア・キング・ピネロの如き大才の成功を見るに至りし以前の英國戲曲は、その詩的價値の大なるはあれども、多くは單に讀體戲曲に過ぎずして場にのぼすに適せず。さきにコウルリッヂ、シェリイ、バイロン等前代の大家は『チェンチ』『マンフレッド』等詩情ゆたかなる幾多の戲曲をものして、既に舞臺に不適當なるの點に於て失敗し、後のブラウニング、スヰンバアンも亦その轍をふむ。テニソン豈ひとり然らざるを得んや。かるが故にこれ等諸詩人の戲曲を研究せんとするものは、本來の戲曲としてよりも、寧ろ叙事詩または抒情詩の秀拔なるものとして、そを觀察せんことを要するなり。

然れども革命期諸詩人の戯曲は、題材を祖國の歴史にとりたるものなかりき。テニソンは今や沙翁史劇の古に溯りて之に傚ひ、先づ國史に注目し、後の諸詩人も亦之に傚ふに至りしなり。詩聖は夙に英吉利建國の三大時期をとりて歴史的悲劇を編むの意ありしが、『女王メリイ』を最初として翌年『ハロルド』"Harold"を公にし、また名優ヘンリイ・アアギングの校訂を經て舞臺にも相當の成功を收めたりし『ベッケット』"Becket"の作、千八百八十四年にあらはれて、この史的三悲劇(ヒストリカル・トリロジイ)は完成せられぬ。かの最後のサクソン王ハロルドは英明の君なりしが、はかなくもヘスティングスの一戰に敗れて、英國の王位はノルマンディ公ヰリアムの掌中に歸し、英國は遂に大陸の勢力範圍に入りぬ。テニソンは即ち國史上の此重要時期を取つて『ハロルド』の曲の題材となし、古代史の常として幾分傳奇(ロマンス)の趣味を帶びたるこの事實を、一篇の悲劇に作りなしぬ。また教界の英雄ベッケットの事を材として、ヘンリイ二世の人物を描き、宗門とノルマン王家との間に起れる多年の衝突漸く英國近世政治の基をなしたる危機を寫したり。またメリイ・テュドア治世の事蹟に至つては、大陸外邦の詩人も之を用ゐて劇となしたれども、主人公たるメリイの人物には女性的の分子能く人を動かすものなきが故に、悲劇の詩材としては寧ろ不適當の感なき能はず。テニソンは忠實に史的事實を逐うて之を詩化し、法王權と新教の王政とが一英國を爭へる當時紛爭の面目を寫すに遺憾なく、特に此篇に於ては文辭の修飾少くして、簡潔の詞章を用ゐたりと雖も、戯曲としては人物性格の描寫に明瞭を缺きた

るがため、寧ろ失敗に過ぎざりき。おもふにテニソンは戲曲詩人たらんにはあまりに主觀詩人の傾向を帶びたれば、客觀的たりインパアソナルたるべき戲曲は、遂に却て抒情詩の傾向を脫せざるなり。故にこれ等の諸作のうちより其數節若しくは數行をのみ取らば、悲壯よく人を動かし、熱情あふるるが如き詞句數ふるに遑あらざるなり。なほこの外、"The Promise of May"（一八八二）は牧歌體（パストラル・ドラマ）の戲曲にして、農人の美しきむすめが浮華なる一靑年紳士にかどわかされて身を亡ぼすあはれなる筋なり。また"The Falcon"（一八七九）の曲は、ボッカチオの『十日物語』（デカメロン）に見えたる中世の戀愛談を取り、"The Foresters"（一八九二）には、いにしへ英國內地の森林に武勇のほまれ高きやからの者ども立て籠りて、ノルマン人の政治に抵抗したる折の物語をとりたるもの、さきの諸作と種類を同じうしたる史劇なり。要するにテニソンの戲曲は、その量に於て彼の家集の四分の一以上にのぼれども、文學史上の意義に至つては、さまで重きを置くべきにあらず。

千八百八十三年女王より授爵の恩命あり、詩神に仕ふる聖なる使命を帶びたる身の、人爵を意とせざるはもとよりなれば、躊躇逡巡これを久しうしたれども、虞翁（グラッドストン）の勸遂にもだし難くて之を受けぬ。獨り女王の恩寵あつきのみならずして、一代の尊崇敬慕の情を一身にあつめたる詩聖、ここに於て上院の一議席を占むるに至りしが、斯くのごときは前代未だ曾て其例なきところなりき。老來、想益々ゆたかに、筆いよいよ健にして、會心の友と共に、好んで宗教を談じ政治を論じまた詩文を說

く。かたはら營々として詩作に從事し、成りたるもの幾篇ながく詩壇の珍たるを失はず。なかにも『ロックスレイ館』の後篇のごときは最も秀でたるものにして、この詩人が前後六十年間における時代觀察の變遷をここに窺ふべく、前篇の主人公が燃ゆるが如き青春の熱情今は去つて、冷灰のごとき老紳士が沈靜なる悲觀と變じたるもゆかし。而して四十年の間隙を隔てて出でたる此詩篇前後二篇の相異は、是やがて時勢の遷移にして、さきのは女王朝初期の科學主義民主主義に對する情熱の聲と見るべく、後篇のは保守主義が抱ける不信懷疑の思想の反影に外ならざるなり。なべてテニソンが晩年の諸作は壯年時代のに比して劣れるにはあらざれど、深沈の想まさりて筆たらざるの憾あるのみか、綺だくみのことさらに強き色彩を用ゐたるが如き態あり。さきのを彌生の花の眞盛色も香もゆかしきに比すれば、晩期のは、さながら花よりも紅なるもみぢの色こそすぐれたれ、金風梢を渡り、萬木すでに枯稿凋落のすがたあはれに、沈鬱の氣萬象を蔽へるにも似たらんか。而してわれ等の詩人晩年の瞑想沈思は、かくも悲愁の色を帶びたれど、おもひは遠く高上の界に在りて、雲暗澹たる天の一角つねに一道の光明を望み、希望と信仰としばらくも胸奥を去らずして心やすらかなりしはテニソンの特色なりといふ可し。試に之をその最後の作 "The Dreamer" に見よ。眠れる人、虛空をめぐり行くこの世界の慟哭の聲を、夢寐の間に聞く、これぞ罪と禍とに壓せられ、行衞も知らず運命に役せられたる億兆民衆のあはれなる叫びなり。詩人乃ちこの世界を激勵して曰く『終りよきもの皆よし、日を

めぐりてぞ隨ひゆけ』と。また"The Silent Voices"の歌には死者の靜寂の聲かれを呼びて、

"Forward to the starry track,
Glimmering up the height beyond me,
On, and always on."

と。そのほか同じく千八百九十二年に出でたる詩卷に『疑と祈』『信仰』などの小篇を味はば、詩聖晩年の思想ここに其一斑をうかがひ得べからずや。

千八百九十二年秋九月、テニソンふと病の床に就きしが、なほ枕頭に坐したる國手と共に、グレイが墳上の哀歌を論じて餘念なかりしといふ。後數日病益々篤きに至り、家人をして沙翁の集を取りて之を讀ましむ。翌朝、日うららかなりければ詩人は身の床上に横たへ『窓の扉をかゝげよ、われ空と光とを仰がん』と言ひて、窓外の景を望み、傍になほ沙翁の『シムベリン』の曲を放たず、開かれたるは此曲のをはり

"Hang thou like fruit, my soul,
Till the tree die."
——*Cymbeline*, *Act* V. *Sc.* 5

といふくだりなり。越えて十月六日の夜半すぎて、詩人は春の海のやうなるその靜けき生涯を終り、遂に白玉の樓にのぼりぬ。げに偉人が臨終のさまこそ、往々にして其生涯を語るものなれ。是より先

テニソン八十一歳の折、未來永劫の界を碧海の渺茫たるに寄せたる絶唱『水門(みと)をよぎりて』"Crossing the Bar" といふ辭世の歌あり。曰く、『日は落ちて夕づつきらめく、ほがらかに呼ぶ聲すなり、われ海に出でん其時、水門(みと)のなみ音しづかなれ。はてもなきかなたのわたつみゆ、來しものの、またもとへ歸らん折は、うしほ滿ちて波は靜に、泡たたず、動ける潮は眠るがやうに。たそがれほの暗く、やがて晩鐘ひびきて、遂には闇の夜ぞ。船出の折に願はくば、別れの悲なかれかし。うしほのままに『時(タイム)』と『處(プレース)』の境こえて遠くわれは行くとも、水門(みと)を出でたらん其時は、導きの神にまのあたり會はんとぞおもふ』と。西寺院(エストミンスタア・アベイ)の葬の折にも唱へられたるこの名高き悲歌のこころは、如何に時人の胸に響きしぞや。げに詩聖のこのねがひはかなひていとも靜なる臨終なりけり。

　テニソンは近代英國の代表的詩人なり。佛のテインの學說もし一面の眞理ありとせば、われ等は milieu を離れてこの絕大の天才を解すること能はず。舊思想すたれて新思想いまだ起らざる時代に於て、相踵で起り來れるもろ〳〵の新しき現象に接觸して、或は『イン・メモリアム』に人生と信仰とを說き、『プリンセス』に女子問題の旨を寓(よ)せ、『アアサア王の歌』に道義の失墜を說き、『ロックスレイ館』前後二篇に進步保守の時代傾向を反映したるが如きは、余が旣に上に述べたるところ、其述作の一々に就きてわれ等若し深く其裏面に伏在せる意義を尋ぬれば、近英人文のあらゆる問題に多少の聯關あらざるなく、殊に冷索なる思想家の談理の文を讀むよりも、興多く感更に深きものあり。ま

た殊に近代の科學的精神がこの詩聖の作品に與へたる影響として、觀察の精緻なること前代に比なく、燃犀の詩眼よく微細の事物をも逸せざる妙趣いふべからず。而して凡庸の詩人に在つては精密の觀察却て往々にして詩趣を沒却するの憾なきにしもあらざれども、テニソンは之によりて却て一段の裝飾美を增したる觀あるを偉なりとす。その暗喩（メタフオア）を用ゆるに當りても既に單なる修飾法の域を脫して、直に銳敏なる感覺を强めんとしたるものあり。その極端なるものの一例としては、

> Break, thou deep vase of chilling tears
> That grief has shaken into frost.
>
> (*In Memoriam*)

これ或低溫度に於ける水が震動によりて氷結し、遂にその器を破るといふ實驗物理學の一現象を借り來りて情の激越にたとへたるなり。また土星は非常の速度を以てその軸に回轉すれども、周圍の環は毫も動く事なき星學上の觀察をとりて、

> Still as, while Saturn whirls, his steadfast shade
> Sleeps on his luminous ring.
>
> (*The Palace of Art*)

參考書 Tennyson as a Student and Poet of Nature by Lockyer. (Macm.) 1910.

朱書

のごとき形容をなしたる、其例尠からず。また殊に風景動植物等自然界の萬象に對する精細の筆は、英詩に殆ど其比を見ざるところ、

> Now thrice that morning Guinevere had climb'd
> The giant tower, from whose high crest, they say,
> Men saw the godly hills of Somerset,
> *And white sails flying on the yellow sea;*
>
> (*The Marriage of Geraint*)

この第四行目は英國東方海岸の實景としてスヰンバアンも嘆賞措かざりしものなり。またさながら精細の畫筆を用ゐたるが如きは、

> A stump of oak half-dead,
> From roots like some black coil of carven snakes,
> Clutch'd at the crag.
>
> (*The Last Tournament*)

片言隻句をもゆるかせにせざるテニソンが謹嚴の詩筆は、此精緻の觀察によりて常人の見ざるところを見て之を譬喩に用ゐ、ここにつとめて陳腐平凡に陥らざらんとせる深き用意の存するは、研究者の

觀過すべからざる特徴なり。イノックが遠く國を去らんとするや、

So now that shadow of mischance appear'd
No graver than as when some little cloud
Cuts off the fiery highway of the sun,
And isles a light in the offing.

(*Enoch Arden*)

またこの種の精巧なる明喩(シミリイ)の例としては、

Then, as the white and glittering star of morn
Parts from a bank of snow and by and by
Slips into golden cloud, the maiden rose,
And left her maiden couch, and robed herself,

(*Marriage of Geraint*)

佛國革命騷亂のあとを承けてのち、那翁の戰爭となりまた革新保守の二大傾向の衝突起りて、紛々擾々いくたびか流血の慘劇を演じて、血なまぐさき風、全歐に吹きすさびし時代に出でたる諸詩人はシェリイ、バイロンの壯烈はいふ迄もなく、コウルリッヂ、ヲルヅヲルスの如きすら、雷霆電撃疾風

に駕して萬軍を叱咤するの激調、おのづから其作品にあらはれたるもの多かり。然れどもテニソンの時代には騒擾あとなく去りて、千八百三十二年その處女作を公にせし頃は、議院改善案議會を通過して民權の伸張漸く完きに近く、世紀中葉の平和時代まさにここに其序を開かんとせる折なり。西歐の天地漸く平穩に歸して、英國國運の隆盛前古その比なからんとす。詩聖の作は從つて激越狂奔の態なく、沈靜にして神祕なる天地こそ其詩眼に映じたるなれ。政治上の極端説すたれて文教大に興り、科學の進步は宗教上の自由主義を生じたると共に、また信仰を危くせんとするの恐なきに非ず。社會は古法の猥に棄て難きをおもひ、國家が民衆に對する責務益々重く、貧者に寄する同情は著るしく深厚の度を加へぬ。すべて斯くの如き平靜なる新時代の精神は、テニソンの詩歌に明瞭なる反響を聞くことを得べきのみならず、更にそを助長し鼓吹したるものまた甚だ尠しとせざるなり。殊に女王御宇の後半に於て英國の領土は殆ど全世界にあまねく、國民をして其强大を自覺せしめ、此一大王國を統一せる中心たる王位に對する尊崇敬愛の至情を助長したるはテニソンの偉業にして、これ後日に至りて帝國主義の名目のもとに、大英民族が雄飛の根本的大精神を爲したるものに外ならず。『アアサア王の歌』の跋、女王に奉るの歌に曰く、

The loyal to their crown
Are loyal to their own far sons, who love

Our ocean-empire with her boundless homes
For ever-broadening England, and her throne
In our vast Orient, and one isle, one isle,
That knows not her own greatness: if she knows
And dreads it we are fall'n.

上に述ぶるが如く、詩人テニソンは既に亂世の產物にあらず、國民が共隆運と平和とを謳歌したる時代に出でて一代民衆の精神を反映し指導したる詞客なり。この故を以てさきの革命時代の諸詩人が不羈奔放の風あるに反して、彼が時代精神に對する態度は、極端を避けて中庸をとりたる自由的保守（リベラル・コンサァヴァテイヴ）のそれなり。彼は喜んで新思潮を容れたれども、また同時に、父祖より傳へられたる宗教的信仰と道德思想とを棄つることあらざりき。またおのが性格の極めて沈靜なるは勿論、詩人としては、自然と人生とに於ける法則を重んじ秩序を貴び、萬有の根柢に伏在せる不變の規律に深き注意を怠らざりき。いはく『われは自然をも死をも呪はず。蓋し何物といへども法則に背きたるものなければなり』と。而してこの法則こそは萬有の裏面に活動せる神の絕大なる勢力が外に顯現せるものとなし、一種の汎神論（パンセイズム）を以てその思索の根柢におけり。"The Higher Pantheism" の一小篇よく此思想を歌ひたるあり、『日月星辰、海洋山野、——あゝ靈よ、これ等は主なる神のおもかげに非ずや。＊＊＊

神は法則なり。＊＊＊人はまなこ見るを得ず耳聞くことを得ず、若しわれ等見る事を得、聞くことを得ば、このおもかげ、そは神にあらざらんや』。また詩中の人物の口を藉りて、テニソンみづからの思想を語れる有名の一節あり、曰く『自尊と自知と自制と、この三者のみ能く人に王者の力を與ふ。しかれども人生の目的は力のみにあらず、（そは求めずとも得られん）。まことの智は法則に從ひ、義務に服して恐るることなきなり。且はその成り行きを顧みず、正しきを正しきとして行はんこそ、まことの智なりといふべけれ』ど。斯くの如くにして、自然の大法を重んじ狂奔を戒めたるテニソンは、自然の風景を叙するに於ても穩雅なる田園の靜寧を愛し、戀愛を描くに當つてまた義務敬重の念を逸せず。ギネギイアの道ならぬ戀を寫してなほ且肉感の細事にわたらずして、精神的方面より悖德の恐るべきを說きたるにとどまる。殊に政治上の自由に對しては、急激の手段を用ふる事なくして靜に自然の法則によれる漸進的發達に待つべき事を主張し、かの佛國革命に、千古の慘劇を演じたるセイヌ河畔熱狂の徒を忌むこと甚しかりき。ああこれ實に、一滴の血を見ずして圓滿の自由を得たる近英國民の代表的詩人に非ずや。

　然れども半世紀間の間、テニソンが詩界に覇を稱して、一代民心の敬仰を得たる所以は、獨りこの時代精神との關係あるが故のみに非ずして、純然たる一藝術家として、其技巧に慘憺たる苦心を重ねたるものあればなり。ジョージ・エリオットかつて謂へらく、英語の話さるる間は、テニソンの詞調

は人の耳を樂ますべし。また若し英語が死語（デアド・ランゲエージ）となるの日あらば、その思想をうつせる燦爛たる言語、および思索感情空想のあらゆる色彩を交へたるいみじき畵幅は、今人が讀むホオマア、ピングア、ホレースの如くなるべしと。げにも其詞章の美は、眞珠碧玉紅玉の數を盡くして連ねし寶珠の燦爛たるを望むに比すべく、『すべての詩神の妙趣は一語のうちにも咲き匂ひたり』。テニソンが譬喩を用ふる事の精巧なるは、われさきに之を言へるを以て、今その技巧の他の特徴に就いて著るしきものを擧ぐれば、先づ其聲調の美が内容と一致調和したる點に類ひなき妙趣あるを見るべし。こゝに二三の例證を擧ぐれば、

(一)音色（クラングファルベ）（若しくは『ねいろ』Timbre）に關する例

the slender stream
Along the cliff to fall and pause and fall did seem.

——*The Lotos Eaters*

詩人ローデン・ノウエル此一行を評して曰く、ああこれ實に精巧なる一幅の畵圖にあらずや。言語と聲調とを以て其意義の反響となし輔助となすこの詩人の著るしき手腕をこゝに見る可し。各々 fall, pause, fall のあとに二三個の段落 cesura を置きたるのみならず、母音の長さと廣さとは流動子音（こゝにてはのL音を指す）と相伴ひて、眞の畵

圖をなす。その趣われ等をしてミルトンが "From morn to noon he fell, from noon to dewy eve, a summer's day" の佳句を想ひ起さしむと。

All day the wind breathes *low* with *mellower* tone:
Thro' every *hollow* cave and *alley lone*
Round and *round* the spicy *downs* the *yellow* *Lotos*-dust is *blown*.

——*The Lotos Eaters*

流動子音（リクイド・コンソナント） と廣き母音の 響を繰り返して、 溫柔の調おのづから軟風のさまをあらはしたり。

the blade flew
Splintering in six, and clinkt upon the stones.

——*Balin and Balan*

これさきの例とは反對にて、 短き鋭き母音や齒音（デンタル・サウンド）の類を用ゐて鏗鏘の響をあらはしたるもの。 わが實朝の 『金槐集』 なる名歌、『大海の磯もとどろによする浪のわれて碎けて裂けて散るかも』 の下の句に、 た行か行さ行などの堅鋭の音を用ゐて詩意をうつしたると同じ類なり。

Dry clash'd his harness in the icy caves
And barren chasms, and all to left and right
The bare black cliff clang'd round him, as he based
His feet on juts of slippery crag that rang
Sharp-smitten with the dint of armed heels—
And on a sudden, lo! the level lake
And the long glories of the winter moon.

—*The Passing of Arthur*

この第一行にKの首字疊起法（アリテレイション）、第三行b、cの首字疊起法、第四行にu、aの短音多く、最後の二行に長音多し。而してまた初めに喉音gの強き音を出して、最後にlの流動音を用ゐたり。殊に第三行には強勢（アクセント）ある一綴音の語を重ねて反響の連續をうつしたり。

（二）『リズム』に關する例

テニソンの無韻律（ブランク・ヴァース）に就いては、別にメヨア氏の著『英詩律脚論（イングリッシュ・ミィタア）』に精緻の研究あり。

朱書

See p. 29.

Laurie Magnus: Introduction to Poetry.

The *l*ùs | tre of | the *l*ong | convó*l* | vu*l*ùses.

——*Enoch Arden.*

單に流動音 l を重ねたるのみならず、律脚超過（hypermetrical）なるが故に音調の搖曳に句意をひびかせたるなり。

So thése | were wéd | and mérr | ily rang | the bélls,
Mérri | ly ráng | the bélls | and théy | were wéd ;
But név | er mér | ri ly | beat Ann | ie's heárt.

——*Ibid.*

これも音調に心もちを寄せたる適例なれども、特に第三行目の merrily の語に重きアクセントを置きて悲をあらはし、前二行にある同じ語と異にしたるは、テニソンの用意の存する所を知るに足らん。

Félt the | líght of | her eyes | ínto | his lífe
Smíte on | the súd | den.

——*The Coming of Arthur,*

かくの如くに、アイアムビックに代ふるに强弱二音のトロキイを交へて單調をさけ、音

——338

調を强めたる例甚だ多し。

In cata | ract aft | er cata | ract to | the sea

——*Œnone.*

第一および第三の律脚にシラブルを增して、水勢の滔々たる趣をあらはしたるなり。

And flash | ing round | and round, | and whirl'd | in an arch

——*The Passing of Arthur,*

アアサア・ブリムレイの論集（ラウトレッヂ版三三頁）に曰く、

『これ昔の評家が重んじたる意と音との適應したるいみじき例なり。綴音の數を增してアナペストをなしたるは（in an arch）、普通の調を變じて、之を讀むに當り急激の調を增さしめ、以て劍が『バラボラ』線の彎曲をなして投ぜらるる趣を耳にひびかせたり』と。蓋し "and round and round" と繰返へして共行の終に至るに從つて音調益々急激を加へ、次の行の初めに突如として shot なる一綴音（モノシラブル）の語あらはれ、急調ここに最高點に達すると共に、劍は卽ち武士の手を離れて投ぜられしなり。

This heard Geraint, and grasping at his sword,

Made but a single bound, and with a sweep of it

Shore thro' the swarthy neck,..........

——*Geraint and Enid.*

この第二行の音調の急なるは劍を振り動かす樣を寫したるなり。香川景樹翁の歌論に、『語調の緩急はむかふところの情景の自然に從ふものなり』と言へる例證はテニソンに極めて多し。

これ等は既に俗を異にし國語を異にせるわれ等の耳にすら感じ得べき著るしき例を、家集のうちに就きてただ不規則に選び出でたるに過ぎず。用語聲調に驚く可き技巧すぐれたる此詩人の作に、此種の例證は殆ど無限なりといふ可し。なほ此ほかテニソンの語法に著るしき特徴は、同一語を幾度かくりかへして、そを強く言ひあらはしたることなり。たとへば、

everywhere
Two heads in council, two beside the hearth,
Two in the tangled business of the world,
Two in the liberal offices of life,
Two plummets dropt for one to sound the abyss
Of science and the secrets of the mind.

——*The Princess.*

（なほまた、The Holy Grail, ll. 103, 104; 233—236; 370—327; 472—475; The Marriage of Geraint, . 50—54; Enoch Arden, ll. 590—593; The Coming of Arthur, ll. 459—461 などにも同様の例あるを參照すべし）

また仔細にテニソンの用語に就いて檢すれば、その文字は色彩ゆたかにして幽趣かぎりなく、一幅の好畫圖を隻語にをさめたる姿あるもの多し。いまアァサア王の最後を叙したる詩中に二三の例をとれば、

I heard the ripple *washing* in the reeds
And the wild water *lapping* on the crag.

——*The Passing of Arthur.*

蘆と巖とに打ち寄する水のさまの異れるを、lapping と washing との二語によりて、其けじめを寫したる微妙の技巧は、評家のひとしく讃嘆するも宜ならずや。また

The bold Sir Bedivere uplifted him,
Sir Bedivere, the last of all his knights,
And bore him to a chapel nigh the field,

A broken chancel with a broken cross,
That stood on a dark strait of barren land.
On one side lay the ocean, and on one
Lay a great *water*, and the moon was full.

——*The Passing of Arthur.*

ここに lake といはずして water の語を用ゐたるを、或評家は衒氣ありとして非難すれども、これやがて詩人の精緻なる用意の存する所なるを知らざる可からず。おもふに、water の語を用ゐたるは高所に登りて忽ち眼下に渺茫たる湖水の横たはれるを見たる一刹那の印象を最も巧に言ひ顯はしたるもの、もし之を "a great lake" などといはんか、或形と大さとを具へたる水のさま先づ讀者の心にうかびて、一目したる折に未だ河とも湖とも見分け得ざる共瞬時の觀者の心もちを寫す能はず。これ此場合に於て "a great water" といふ語の感覺的(センシュアス)にしてまた繪畫的(ピクトリアル)に、從つてまた詩的なるに若かざる所以なり。テニソンが鏤心刻骨の名作を讀むひと、先づ細心精慮、辭句の末に這般の妙趣を掬せん事を要す。

　テニソンの用語に就きてなほ深く注意すべきは、すたれたる古語を復活し、また新語を案出して、眞をうつすと共に平凡ならざらん事をつとめたる點に存す。幾多のうるはしき古代サクソン、スカン

ディナギアなどの死語に新しき生命を與へて、十九世紀の英語にこれを復活せしものは、實にテニソンの詩歌なり。（たとへば yaffingale; grig; flay-flint; quitch などいふ語の類）。また新語を創作して、今は普通に行はるるに至りたる selfless, tonguester などの語も尠からず。

以上說き來れる形式美の點に於て、英國の國語に多大の影響を及ぼしたる事は沙翁以後に於てまたテニソンのごときはあらじ。その研究せられ、模倣せられ、引用せらるる事の多きは、ポオプの典雅なる詩篇にすらも劣るまじく、樂聲の瀏喨と色彩の妙趣とを兼ね備へたる點に於て、テニソンは羅曼底格運動の最頂點に達したる大詩人にして、彼が文學史上の地位はなかば此方面に在りといふ可し。

叙述の便に從ひ、われらはここにテニソンの兄なる二詩人のことを略說して、この章を終らんと欲す。さきにも述べたりしごとく、桂冠詩人はじめ其處女作を公にするや、二人の兄フレデリック Frederick Tennyson（一八〇七―一八九八）およびチャアルズ Charles Tennyson-Turner（一八〇八―一八七九）の作をも共に『二人兄弟の歌集』に錄しぬ。されど爾後アルフレッドの盛名獨り高うして、赫燿たる日光のもと星辰の光なきがごとく、

參考書 | Laurie Magnus, 19th C. Lit. p. 227.
Locksley Hall の例及び pp. 232—234.

ひとしくいみじき天禀の詩才を享けたる兄二人、ながく詩壇に聞えざりしが、近時に至りて漸く其詩才を認められ、時々出でたる二人の詩集數卷、また今人の注目を惹くに至りぬ。フレデリックは牧歌の體に秀でて弟なる大詩人のおもかげあるもゆかしく、典麗の聲調を用ゐて自然の風光を叙したる詩歌は、技巧のすぐれたる類稀なる麗章なり。またチャアルズの方は、その作品に溫雅なる宗教趣味あるのみならず、またソネットの名家にして、この詩體に於ては疑もなく十九世紀の巨匠の一に數ふべし。千八百三十年に出でたる『小典零章』（ソネット・エンド・フユツティヴ・ピイセズ）をはじめとして三卷の詩集と、清新の思想を典雅なる十四行詩に托したる詩篇との妙趣は、近英詩歌の珍たるを失はざるなり。なかにも『レティイの地球儀』『大洋』『夏のたそがれ』などの篇を以て、余はソネットの上乘なるものに數へんと欲す。惜むべきはこの人、身を僧職におきて、終生を詩神に捧ぐる能はざりしことなり。

第二節　ブラウニング

序説――幼少時代の素養――シエリイの感化――大陸觀光――『パラセルサス』――『ソルデロ』――エリザベス・バレット・ブラウニング――相思と二人の詩歌――夫妻詩人相携へて南歐に奔る――南歐生活――當時の詩作――夫人の死――佛國漫遊――詩界の一大勢力――晩年の作品――其死――アソランドオの跋歌

——その信仰——善惡の衝突——その人生觀——『降誕祭前夜』——剛健の精神——戲曲的透察の詩才——沙翁との比較——近英戲曲の特徵——心靈の解剖——モノログ——大作『環と書』——物語の梗概——其序歌——全篇の次第——短篇の名作——繪畫音樂に於ける造詣——描寫の詩筆——晦澁難解——テニソンとブラウニング——その對立

テニソンと同じくブラウニングも亦、十九世紀劈頭の羅曼底格派の後を承けて其大なる影響を蒙り、近英人文の一大轉機たる千八百三十二年の前後に於て共に詩人的生涯をはじめ、爾後六十年間ひとしく詩神の寵を得て相伍して騷壇に覇を稱し、おなじ思潮にはぐくまれたる近英の大詩人なり。ヲルヅヲルスを敬仰し、シェリイを嘆賞し、また深くキイツの美をよろこびて、その傳統を紹ぎたるは、二者まことに軌を一にす。しかれどもその學ぶところ等しうして互の交遊またうとからざりし此同時代の二詩人は、幾多の點に於て明らかに背馳し相違し隔絶したる趣あるは、人をして處女王朝の昔における沙翁とベン・ジョンソン二派の對照を想ひ起さしむ。同じく時代思潮と密接の關係ある詩人なれどもブラウニングの天才は、テニソンが愼重寛和の傾あるに反し、時勢に對し遙に大膽に、また奔放に、獨立的なるを異れりとす。みづからも言へるが如く彼は健闘(ファイタア)の人なり、民衆の毀譽褒貶は毫もその意とするところに非ず、ただ勇往邁進、砂を飛ばし石を蹶つて疾驅その往かんとするとこ

ろに往く。かれが一代の思想を指導するや、げに將軍鞍に跨つて萬軍に令するの概あるを見るなり。

ブラウニングもテニソンと同じくその全生涯を詩歌に捧げたる人なり。されどもさきの桂冠詩人が、大陸觀光の遊ありしほか多く故國を去らざりしと異りて、ブラウニングは一生の大部分を異邦の地に送りぬ。從つて其詩篇の題目も、おほかた英國以外の事物を選びたるが多し。かれは千八百十二年の五月倫敦の南郭に生れしが、父は英蘭銀行の書記にして、母は獨逸商賈の女なりき。少時の教育をおほかた家庭に受け、正則の課程を履まざれば、固より大學の業を卒へず。意に任せてひろく群籍を涉獵したれども、精心細緻なる學徒の風なく嚴密なる訓練を受けざりし事は、其一生の作品に著るしき影響を及ぼしし點にして、これまたテニソンと大にその趣を異にせるものなり。天才は幼にして既にその鋒鋩をあらはし、はやく自ら詩人たらんことを決心し、父また讀書を好み才學ならび秀でたる人なりければ、この寧馨兒を指導すること甚だ宜しきを得たりき。はじめバイロンの詩風を慕うて奔放なる律語を聯ねしが、のちシェリイ、キイツの作に親しむに及んで、さきのバイロニズムを棄てたり。なかにもシェエリイを尊崇すること最も深うして、その作は殆ど之を讀まざるなく、終生その感化を蒙りしこと甚だ尠からず。梢に鳴く夜告鳥（ナイティンゲイル）の聲うら悲しき春の宵、はじめてシェリイの詩卷を繙きたる折の感想は、晩年なほ此詩人の胸奥を去らざりき。處女作『ポオリイン』（一八三三）千三十行は大なる成功には非ざりしかど、ここに既に彼の特色著るしきのみならず、また歷々たるシェ

リイの餘響を聞くことを得べし。

この處女作出でし年の冬、ブラウニングは北歐漫遊の程にのぼり、露京聖彼得堡に客たること三ケ月、その交際場裡に加はり、また氷雪にとざされたる蕭殺の景に詩情を養ひて、此間幾多の述作ありき。これより更に杖を南歐伊太利亞の地に曳きてヴェニスを訪ひ、遂に倫敦に歸りて、千八百三十五年『パラセルサス』Paracelsus の無韻詩を出しぬ。是時勢の暗潮に棹さして向上の一路をたどり行く思索家を歌ひたるもの、パラセルサス歲甫て二十、先づ『知識』を以て『こよなきもの』Summum bonum とおもひ、二人の友のすすめにより退きて學藝に身をゆだねしが、後八年遂に滿足を得ざりしに、伊太利亞の詩人 Aprile と邂逅するに及んで、ここに『こよなきもの』を『愛』に求めんとしてまた得ず、友にすら見捨てられて聖セバスチャンに今や逝かんとする時、遂に『愛』と『力』とを以て『こよなきもの』と聲明すといふ物語、いづこともなくゲエテの『ファウスト』に似通ひたる趣あり、ブラウニングが初めて詩壇にその旗幟を飜へしたるは此作なりしなり。翌年悲劇『ストラッフォード』Strafford の出いでて舞臺にのぼされたれど、成功なくしてやみぬ。のち數年の間、プロヴァンスの詩ソルデロ Sordello のことを材としたる作のほか、かれの作中抒情詩のすぐれたるもの多く此頃に出でぬ。『ソルデロ』は此詩聖の傑作の一にして、先づダンテの『神曲』浄罪界（第六篇）に見えたるソルデロのことに筆を起して、その心靈變遷のあとを叙したるもの。ブラウニングの『特徵た

る辭句の晦澁難解は、この頃より既にいたく評壇の冷嘲を招きて名聲いまだ揚らず。以後二十年世は多く此大詩人を顧みることなかりしと雖も、ブラウニングは毫もこれがために屈せず、"Bells and Pomegranates"（一八四一—一八四六）に抒情詩戲曲等の類を集めて世に問へり。

この詩集刊行の間に、かれまた伊太利亞に行きて、千八百四十五年の新春英國に歸り、この時はじめて、其未來の夫人たる巾幗の詩人エリザベス・バレットの作を誦して嘆賞措かず。是よりさき、女詩人の名聲はテニソンと相併びて既に文界に喧しく、遂にブラウニングを凌駕したりしなり。殊にさる親しき友の媒によりて、この二詩人は互にその性行を知り、思慕の情禁ずる能はざりしが、一月十日ブラウニングが送れる最初の書翰に『われ君の書を愛しまたきみを愛す』と書きやりしより、ゆきかふ玉章のたび重りて、綿々たる眷戀のおもひはいよ／＼深く、音にのみ菊の白露よるはおきて、晝はおもひにあへず消ぬべきさまなりしが、同じ年の五月二十日かねての約を履みてブラウニングは初めて女詩人をおとづれぬ。エリザベス・バレット生れながらにして蒲柳の質、ながく脊髓病を患ひてこの頃なほ病床にありしが、二詩人は半日の清談に興つきず、常はしめりがちなる陰暗の病室、けふのみはうららかなる春の日かげ照りそひて、ふたりの胸に燃ゆる愛の靈光ここに滿ちたらへり。女詩人の最大傑作ともいふ可きソネット集中の一篇に、後この折の感懷を歌ひたりとおぼしき一節あり、『神秘のものあり、背後にさまよひてわがうしろ髮をこそ引きたれ、時に聲ありて問ふらく、君を引

きとどむるは誰ぞやと。「死」なりとわれ答ふれば、鏘々たる銀聲さらに響きて「死にはあらで戀にこそあれ」と』。ブラウニンブも亦のちに、『なほ一語』『わが星』『爐邊にて』などの短篇數章、或は大作『環と書』の第一卷の末尾有名なる“O, lyric Love, half angel and half bird”以下の數十行に、女詩人の天才を讃したるなど、妻を憶ふの歌尠なからず。

さてブラウニングはこれより間もなく結婚の事を申出でたれども、身の動きだにかなはぬ重患の女なれば、バレット女史の父は固よりかたく之を斥け、醫が伊太利亞に轉地を勸むるをも肯ぜざりき。われ等が詩人、時には深奥の哲理に冷なる沈思瞑想を凝らせども、素よりこれ熱情おさへ難き人、斯くては世の常なる結婚の成り難きをおもひ、また轉地療養が焦眉の急なるを知りて、翌四十六年秋九月、ひそかに華燭の典を擧げて後一週間、新婚のブラウニング夫妻の詩人は、相携へて突如として巴里に渡り、遂に南歐伊太利亞の地に奔りぬ。先づひととせをピサに送りて後更にフロレンスに遷り、ここに永く偕老の居をトしたり。久しく病床に呻吟して命旦夕をはかられざりし薄倖の女詩人、今や伉儷全きを得て、なやみは日に輕く、みづから今は病あるを知らざるまでになりぬ。ブラウニング乃ち妻と共に、時には羅馬の舊都に古代藝術の幽趣を偲び、またアルノの河べ、山紫水明の境をさまよひて、自然の清興に詩思を凝らしつつ、この二詩人のために世になげにもとこしへなる春とこそ見えしか。

千八百五十年テニソンの大作『イン・メモリアム』世に出でたる年、ブラウニングは『降誕祭の前夜と復活祭の日』“Christmas Eve and Easter Day”の獨唱曲（モノドラマ）を公にし、後五年また詩集『男女』“Men and Women”の一卷を以て世に問ひ、遙に、同じ年にあらはれし桂冠詩人の作『モオド』を凌駕したりき。さきに結婚の當時に在りては、ブラウニングの名聲は遙にその妻に及ばず、世人はエリザベス・バレットの夫として僅に彼を知りたるに過ぎず。然れども此頃に至つてはわれ等の詩人聲譽すでに漸く詩壇の一方に高からんとし、一派の評家の冷遇はあれども、詩才すでに其妻の上にあるを明らかにしたるのみならず、當代の詩壇能く彼と拮抗し得べもの、獨りテニソンありしのみ。おもへば南歐に客たりし十餘年の歲月は、其修養研鑽の時代なりしなり。いまや詩才發達の高潮に達して、戲曲的透察の靈眼益々鋭く、此詩集『男女』に收められたる五十篇は、殆どブラウニング一代の名作を網羅し、綺羅燦然として目を奪ふもの、まさに桂冠詩人の千八百四十二年の詩集と相比すべきものなり。

當時妻なる女詩人は既に一子を擧げ、洋々たる家庭のよろこび日に加はりて、樂しき平靜の生を送りたれども、家計甚だゆたかならざりき。翌年或友の身まかりしによりて其遺產を讓られ、漸くにして窮乏を免れぬ。されども悲しきかな、一難去つてまた一憂來るを如何にせむ、夫人の健康漸くすぐれずなりて、千八百六十一年初夏のころ遂に五十五歲を以てみまかりぬ。（ブラウニングは時に歲四十

九)。詩人はいひ知らぬ悲嘆にくれて、ありし日の思ひ出に憂愁更に深きを増すなる南歐の山光水色を見すてて、程なく故山に歸臥するに至れり。かの『前途を望め』"Prospice"と題したる名歌に、死を恐るるものの妄を笑ひて人生の不滅を說きたる末に、

O thou soul of my soul! I shall clasp thee again,
And with God be the rest!

といへる秀句は亡妻を憶ひたる胸奥の聲なりかし(第五章末尾參照)。

性けだかく才すぐれたる愛妻の死を哭して、彼がためには地上樂園のおもひありし南歐の美鄉をすらあとにして、今英國に歸りしブラウニング、しばしは友との交をも避けて閉居ひとり鬱憂の日を送りたれど、こはみづから病的なるを覺りて再び交際社會に入り、また諸國を遍歷しぬ。嘗て佛蘭西の北方をひとりにて旅したるとき、鐵道に不測の變ありて多く人命を損したる事ありしに、ブラウニングは此折偶然テニソンと相會し、二人ともに時を失して此列車に乘り後れしかば、はからずも共に其命を全うしたる奇談あり、天もまた此二大詩人の壽を惜みて大作の完きを見ることを期したりしか。此頃よりしてブラウニングは年ごとに夏をブリタニイの濱邊に送りけるが、こは其詩作の上に尠からざる利益を與へたりとおぼしく、最も多くその傑作を收めたる詩集の一なる『劇中人物』"Dramatis Personae"(一八六四)は蓋し當時に成りたるものなり。

ブラウニングはまた佛蘭西に於て筆を執りて、其一代の大作『環と書』"The Ring and the Book"十二卷（一八六八―六九）すべて二萬一千行を完成し、性格と境遇との描寫に特得の技を恣にしたるのみか、事相を解剖分析して眞を穿ち微を闡くの精巧に、絶代の手腕を示し、智力を以てすぐれたる此詩人の特色いまや明らかに、名聲ながく定りぬ。蓋し千八百五十年より以後二十年間、世はこの稀世の天才を見るに驚異のまなこを以てしたれど、いまだ之を讃嘆し傳唱するの域に至らざりしが、千八百七十年以降その死に至るまでブラウニングは實にテニソンと相併びて英國の詩界に覇を稱し、時代の思潮を導きたる一大勢力に外ならざりき。かれが佛國の海岸を愛することの深き、普佛戰爭の騷擾をも意とせずして、年ごとに夏を此地に送りぬ。この頃思想と詩筆と共に益々圓熟の境に入りて、名作の出づること甚だ多く、なかにも最もひろく人口に膾炙したる『ヱルヹ・リイル』の篇には、ラ・オーグの海戰に佛國の艦隊を導きたるブレトンの一水兵の事蹟を叙して、この無名の英雄が妻をおもふやさしき心を寫したるもの、かの『ゲントよりエイクスに報を傳へたる歌』と相並びて、ブラウニングの作中バラッド體の秀逸なるものなり。

晩年に至りて希臘古劇の研鑽に心を委ねて、之を敷衍改作し、性格の解剖に獨得の技を揮ひて新樣の趣を寓したるものあり。千八百七十七年カアライルの勸によりて『アガメムノン』を飜したるもの世に聞ゆ。翌年そのうつくしうしたる友エジャトン・スミス孃の俄に世を去りたるを嘆き、切なる哀

悼のおもひ堪へ難くて輓歌一篇をものし、題して『太陽』"La Saisiaz"といふ。こはゼネヴアより程遠からざる山莊に、亡友と共に送りし樂しき夏の日を思ひ出でて、其家の名をとりたるもの。まさに桂冠詩人の『イン・メモリアム』に比すべき悲歌にして、ブラウニングの人生觀は此篇に於て最も明白に示されたり。ただ哲理の深奧ややもすれば詩情の美を傷けんとする彼の缺點、益々此等晩期の述作に著るしきを憾みとす。

此年ブラウニング再び伊太利亞に行きぬ。これ妻を失ひて後はじめてにして、遂に餘生を、昔なつかしきこの美鄕に送れり。當時ブラウニングの名聲すでに詩壇に高く、かつては其作の晦澁を非議したる一派も、今や彼が獨特の妙趣をよろこびて、遂にその眞價をさとり、千八百八十一年に至りて遂にブラウニング研究會の創立あるに至れり。晩年十年の間、詩人みづから其作が既に不朽なるクラシックの列に入りたるを見たれど、なほ孜々として述作の筆をとどめざりき。この間ヹニスに住ひけるが、千八百八十七年遂に邸宅を此市に購ひて居をトしぬ。ここに在ること二年、しばしのわづらひの後、千八百八十九年冬十二月遂に淸淨界裡の永眠に就きぬ。遺骸は故國に送られて、西寺院（ウエストミンスタア・アベイ）に葬られたり。ブラウニングは魁偉の風采を備へて筋骨たくましく、熱情に富める快活の人、その生をおほかた佛蘭西伊太利亞の地に送りければ、擧止風貌おのづから南歐の風ありしと傳ふ。

詩集『アソランドオ』"Asolando"は伊太利亞における彼が逝去と、恰も日を同うして倫敦に於て

出版せられぬ。此集の跋歌はテニソンの『水門(みと)をよぎりて』と題したる辭世の歌と比すべき名篇にして、ブラウニングの作中最後のもの、さながら死に臨める白鳥の高唱にも似たり。この篇の第三節及び四節に詩人みづからを說明して曰く、

'One who never turned his back but marched breast forward,
  Never doubted clouds would break,
Never dreamed, though right were worsted, wrong would triumph,
  Held we fall to rise, are baffled to fight better,
  Sleep to wake.

No, at noonday in bustle of man's work-time
  Greet the unseen with a cheer!
Bid him forward, breast and back as either should be,
  Strive and thrive! Cry, "Speed,—fight on, fare ever
    There as here"'

詩人が臨終の床に就きし前、ある夕、この第三節を傍人に讀み聞かせていふ、『かかることばはいたづ

らなる大言傲語と聞ゆべく抹殺すべきに似たれど、實はこれ單なる眞理に外ならず、眞なるがゆゑに存すべし』と。げにも意氣昂然として勇壯剛邁のすがたあるこの一篇の思想は、如何ばかり時人の胸奥に徹したりしぞや。神を信じ善を信じてただ勵聲叱咤、能く沈滯せる人心を共樂天主義によりて鼓舞激勵したる點に於て、此作は最もよく彼の特徴をあらはしたるもの、獨り『アソランドオ』の跋たるのみならず、共一生の作品の結尾となすに適せずや。之をテニソンの平明なる辭世の歌と比し來らば、二詩人の態度おのづから著るしく異れるを知るに足らん。なべてさきの桂冠詩人の作を讀めば、常に花間を渡る輕風たもとを拂ひてそこはかとなく美香の薫ずるを覺ゆれど、ブラウニングのは、疾風怒號するところ海潮の蓼々たるを聞くの想あるなり。

かみに述べたる『プロスピセ』や、この『アソランドオ』の跋歌にも著るしき如く、神に對する信仰あくまでも鞏固にして、人生を樂觀し、身を當代懷疑の暗潮に投じたれども、毫も之がために動かさるる事なかりしは、ブラウニングが剛壯なる男性的天才なりし所以なり。自然と人生とに對する同情極めて厚く、あくまでも健全なる共所信を枉げずして歡喜悅樂の生を送り、不屈不撓の精神よく終始を一貫したるは、われ等の欽慕に堪へざるところ、『ただここに生存せんはよからずや、心と靈と五感と、とこしへに歡樂のうちに用ゐんはふさはしからずや』と、共名作の一に言ひたるは、げに彼みづからの信條なりき。ブラウニングの强健なる身體はおのづから不屈の精神をそのうちに宿し、

やがてそは廣濶なる同情となり、偉大の性格にあらはれ、屹然として一代に雄視するものなり。かれの傑作の一に數ふべき『ピパ過ぎ行く』"Pippa Passes" といふ戲曲めきたる作のうち、アソロなる機織のをとめがうたふ歌、辭簡にして意はながく、そを耳にしたる罪ふかき人の胸にいみじくも神のみこころを傳へたり。歌にいはく『年は今ぞ春、日は朝にて、あさ七時、片山邊つゆぞ玉なす、雲雀たかく飛び、蝸牛は荊棘に在りて、大神はみそらをしろし給ふ。――世は斯くぞ事もなき』と。わづか八行の歌、これまことにブラウニングの宗教にあらずや。試に當代の時勢をおもへ、シェリイ、バイロン等の熱狂なる革命期いま旣に去つて、基督教反抗のさけび亦聞えずなりしより、民衆はテニソンの溫藉なる高唱に耳を傾けつつある時なり。從つてブラウニングも亦信仰の詩人なりき、基督教の深き精神に參して極めて自由の見解を持し、神の愛と力とを信ずると共に、人類の愛、たかき理想、科學藝術の大精神など、すべて皆確固不拔の信仰によりてかれの心裡に動かす可からざる根柢を有す。而して此廣濶なる信仰はその源泉を心靈における善惡の衝突に起し、幾多の詩篇この衝突を描きてまた餘蘊なし。時ありて惡の勝利に歸するの觀を呈するもあれど、そは表面のことに過ぎずして、彼の述作の眞精神は常に善が窮極の勝利者なるを示したるものに外ならず。現世における惡は寧ろ進化の階段と見做すべく、勇往直前能く此惡に打ち勝つとき、即ちここに吾人は善に到るの道に於て一歩を進めたる也。換言せば、此善惡の衝突あるによりてここにはじめて進歩を生ずるなり。蓋

し進歩はブラウニングが人生觀の根柢を爲せるものにして、かれ謂へらく。

"So triumph ever shall renew itself;
Ever shall end in efforts higher yet.
Ever begin."

現世の生涯は來世に對する準備なり、吾人は此世のままならぬに壓倒せられて、失望落膽の淵に陷るの非なると共に、また現在を以て終極となし具足圓滿の境に在りとおもふべからず。此不完全この缺陷、これやがて人生の光榮にして、われ等に進步あり發達ある所以に外ならず。たかくは至上の神、しもは禽獸の間に介在して、われ等は常に一意向上の念を放たず、憧憬のおもひを失はずしてこそ、吾人はこの缺陷を滿たして前進することを得べきなれ。殊にかれは宗教のドグマを斥けて、ただ聖なる神祕として基督を信じ、宗教にして若し常に一定の形式に固着沈滯すれば、吾人の精神的生活はためにその發展を妨げられて、ここに終を告ぐべしと確信したりき。彼おもへらく、死は人生の最後にあらずして、吾人の生は未來永劫の遠きに及ぶべきなり。ただ其生がのち如何に形を變ずべきかは、これ窺ひ知るべからざる神祕なりと。然れどもブラウニングが來世に對するこの豫言的信條は、毫も迷信の類にあらずして精緻なる論理に考へ、人生の源泉たる愛に其根柢をおきたる說なり。四海同胞皆これ神の一族なりてふ主義を抱きたる彼の廣濶なる同情、またこの愛の信仰に基づく。故にあまね

く同情を以てすべての宗教を容れ毫も偏狹の風なく、殊に羅馬舊教に對して極めて寬大の態度を持したりき。老來益々宗教信仰の形式制限を排斥したれども、如上の信仰に至りては、たとひ題目詩風の變化ありとしはいへ、處女作よりして『アソランドオ』の跋歌に至るまで終始を一貫して毫も異るところあるを見ざるなり。おもふに科學萬能主義は既に當代の思潮を動かし、原始宗教の美を犧牲に供して、或は批評的の神學を起し、懷疑の思想を生みたる時代に於て、詩人ブラウニングの此宗教觀が獨り屹然として時流を拔ける、げにも偉ならずとせんや。

宗教に關する其詩篇は、純然たる彼が信仰の告白なりといふ可し。而して最もよくブラウニングの宗教觀をあらはしたる作は、かの『降誕祭前夜(クリスマス・イイヴ)』の獨白詩なり。これ牛津大學に宗教運動盛なりし時、テニソンの『イン・メモリアム』と年を同うして出でたるもの、共に當時のアアノルド一派の詩風(後段參照)を起すに多大の勢力ありしものなり。この詩の主人公、はげしき風雨に遇ひたる折しばしの宿りを得んとて、とある異宗の會堂に入れり、しかるに其僧が偏狹固陋の暴言を逞うしたるに堪へ兼ねて、遂に此堂を去りぬ。それより再び風雨の難を冒して戸外(とのも)に出でしが、なほ思ひかへせばやや寬容のところ起り、僧の暴言を今はさまで惡くからず思ふに至れり。かくて靜思默想獨り佇むことしばし。時に忽然として雨はれ風をさまりて、天空快濶月光清し。ふと見れば前面に基督のみすがた現はれ給へり、おもてそむけておはすを、御裳裾(みもすそ)しかととらへまつれば、やがて羅馬なる聖ピイタアの堂

へと導かれぬ。されど彼殿堂には入らずして、ただ其儀式のさま如何にとうかがへば、今までおのが見しとは異ざまなる法(のり)の會(ゑ)の、またいひしらぬ畏(かしこ)さあるを見、羅馬舊教にも信と愛との深きを今更に身に沁みて覺えぬ。之より更に基督に導かれ、轉じて遂に獨逸大學の講堂に行きぬ。ここに冷靜の頭腦を以て明確の論理を推し、極めて自由なる批判を神學に加ふる碩儒あり。かれ今その說に耳を傾け、たとひ趣をこそ異にしたれ、ここにも亦同じ信と愛との存するを知り、またおのが信仰と異れるの故を以てあながちに他を斥くるの非なるを覺りぬ、蓋し神のおん前にありては凡ての信仰みな一なればなり。されど斯くては餘りに冷淡の傾なからずやと思へる折、顧みればおのれ既に基督の御裳裾を手放したるを氣附きてその過を覺りぬ。此時風雨は再び起り來りてもとのやうなる苦みを受け、いま消え行く基督のおんすがたを追ひて、再びしかと御衣(みけし)の袖に縋りて更に最初の會堂へと誘はれ、遂にながくここに止まれり。信と愛と、たとひ其樣を異にしたりとも、眞理は如何なる形式にあらはるるとも、決して之を斥くる事なからんと今はおもひ定めしなり。ブラウニングは此篇に於て、福音派と羅馬舊教と獨逸の自由神學とを歷觀して、ひとしく寛容の態度を以てすべてに臨みしが、寧ろ最後の獨逸學徒の偏理を斥けて前二者に同情の筆を用ゐたり。ただ懷疑の暗潮に漂ふことなくして、確固たる信仰を持したる大詩人の面目全篇に躍如たるを見る可し。

疾風怒濤の絕間なきにも似たる近英過渡時代の思想界にありて、以上のごとき態度を以て時勢に臨

みたる曠世の大才ブラウニングの詩歌は、さながら巍然として威四海を壓しさかまく巨浪を蹴立てて進み行く艨艟のごときかな。處女作『ポオリイン』にはじまりて『アソランドオ』に終れる幾十篇の述作は略半世紀にわたりて營々として其詩筆を絶つことなかりし結果にして、彼が詩神に捧げたる不朽の貢なり。げに全集の浩瀚なることに於て沙翁以後の英國詩人に匹儔を見ざるは彼が縱横の詩才を示したると共に、精力の旺盛と心身の剛壯また他に比なきを證して餘りあるを覩るなり。之を同時代の騷壇に見んも、テニソンの溫藉閑雅なるはいはずもあれ、ロセッティの性癖やや病的傾向を帶び、マシウ・アアノルドの詩觀が鬱憂悲哀の調あるに比して、われ等が詩人獨り豪壯の趣を恣にし躍々たる生氣の超然として群を拔けるは、げにも偉なるかな。ランダアかつてブラウニングを讚したる小曲(ソネット)あり、曰く

"Shakespeare is not our poet but the world's,
Therefore on him no speech! and brief for thee,
Browning! Since Chaucer was alive and hale,
No man hath walked along our roads with step
So active, so inquiring eye, or tongue
So varied in discourse.

ブラウニングは傾向に於て純然たる戲曲的詩人なり。

されど其戲曲は固より舞臺にのぼすべき性質のものに非ずして、ただ詩歌としての價値に於てのみ不朽の名聲に値すべきものなり。

殊にまた彼が浩瀚なる全集の大部分を占めたる獨白體（モノロゲ）、牧歌、その他抒情詩の類には、詩風と題目とより云へば種々の變化あれども、形式と精神とに於ては皆悉く戲曲の趣を帶びざるものなしと云つて可なり。

或詩題を捉へてこれを叙するに當り、彼は先づ內部より之を觀察せんとするが故に所謂心理體とも稱すべき一種の特色を有す。

その作品が長篇短篇のいづれなるを問はずおほかた皆モノドラマの體なるは之がためにして、卽ちすべて詩中の人物が讀者に向つて自己の胸奧を語り『われ』といふ第一人稱を用ふるを常とせり。

これ實にかれが慣用の手法にして、斯くてなほよく千篇一律の弊なきを得たるは、眞に古今を獨步せる此天才の特技とも云ふべき乎。

深く人心の內部を透察してその機微を逸せざる點に於ては、之を沙翁と比して必ずしも異なるところを見ざれど、ブラウニングは竟に諸種の人物を綜合して完全なる一篇の喜劇或は悲劇を構成したるもの無きは何故ぞ。

おもふにかれは燃犀の詩眼よく精緻なる透察を試み、人間胸奥の機微に徹するの明はありたれど、その描ける人物は個々の性格の躍如たるにも拘はらず、互に獨立の狀態にありて、沙翁に見るが如き全部の統一がなく、相互の關係の明白を缺きたる憾あり。

これがおのづから周圍の狀態が二詩人に及ぼしたる影響にして、沙翁は繁劇なる活動の世界に於て筆を執れるを以て、その描ける性格はおもに動作（アクション）のうへにあらはれたるに反して、ブラウニングは外部生活が寧ろ沈靜にして、民心內部の狀態の繁雜混亂を極めたる時代に出でたる人、從つてその描ける人物は動作に於て著るしからずして、寧ろ思想の方面に於て個々の性格を活現したる傾向あり。詳しく言へば、ブラウニングの戲曲は動作そのものによりて讀者の注意を惹くものに非ず、心性のあらはれたるものとしての範圍に於てのみ動作を寫したるなり。

卽ち沙翁等の場合に在りては、多く性格が集合して其相互の關係が動作に於て一の結果となりてあらはれ、喜劇たり悲劇たるものなれどもブラウニングのは唯性格に影響を及ぼすものとして動作を描くに過ぎず。

これ彼が心理解剖に長じたると共に詩中の動作を寫すに精緻ならず、從つて戲曲的統一を破りたる所以に外ならざるなり。

かくの如きは獨りブラウニングに於て然るのみならずして、英國十九世紀の諸詩人おほかた皆此傾

向を帶びたるが如し。

おもふに是ギクトリア朝及び共以前の詩壇に優秀なる戯曲を見ざる主なる理由の一に數ふべきか。

卽ち此時代の詩人が生れながらにして皆ことごとく戯曲的天才を缺きたるにあらずして、時勢の風潮おのづからここに到らしめたるをおもはざる可からず。

卽ち複雜深遠なる思索の傾向は動作の方面を輕視せしめ、人心內部の活動に注意を專らならしむ。

殊に自意識の發達は常に戯曲の製作に便ならずして、バイロンの作に見ゆるが如く主人公は常に作者その人を現ずるに至り、或はシェリイの戯曲、ブラウニングの『ピパ』等に於けるが如く、殆ど純然たる抒情詩の傾向を帶ぶるに至らしむ。

斯くの如きは卽ち諸人物の相互の關係を描き出すに非ずして、個人の心情を寫すに全力を傾倒せるに職由せる也。元來ブラウニングは固く心靈(ソウル)の不滅を信じたる詩人なり。四大分離して現身(うつそみ)は朽ち果つとも、心靈のみは獨り永劫の生を保ちて地上に於て得られざりし滿足を更に他界來世に求め、その渇仰のおもひとこしへに絕ゆる事なきを信じたり。

げにも人間に於て心靈ばかり貴きものあらずと固く信じたるブラウニング、その述作がすべて此心靈の解剖に外ならざるは怪むに足らざるなり。

かれかつて『ソルデロ』の篇に附記していはく『われは心靈發展における事相に重きをおけり、他

豈討究に値せんや、少くともわれは常にしか思ひぬ』と。

これ實はブラウニング自ら其凡べての述作に見ゆる最も著るしき特質を明言したるもの。

身をさま〴〵の境遇におきては、人の心靈にもおのづから外界の變化に伴へる多趣多樣の變遷發達なくんばあらず。而して精緻の詩筆よく此眞趣を描き出さんとしたるもの即ち彼の詩篇にして、其作はおほかた皆所謂『心靈の畫圖（ソオルピクチユアズ）』の類にあらざるはなし。

個々の性格をとりて其中樞たる心靈を極めて精密に分解し、微を穿ち幽を闡きて殆ど餘すところ無く、種々の方面より其眞相を明らかにせんと試みたるなり。

其嚴密なる態度は、さながら解剖學者が人體各部の機能構造を研究するが如く、化學者が瓦斯の分析を試むると異ならざるなり。

獨り戯曲のみならずその他の諸作に於ても彼が常に獨白體（モノロゲ）を用ゐ、その解剖せんとする人物みづからをして自己の性格を語らしめたるは、この特質を發揮するに便なりしが故なり。

おもふに動作を主とせる戯曲に在りては、篇中種々の人物は言語或は行爲によりて相互の上に影響を及ぼし互に相關係して、以てカタストロフイを作るがゆゑに對話の必要あり。

然れども專ら個性をのみ明らかにせんとつとめたるブラウニングの曲の如きに於ては、周圍を排除して一人物にのみ興味を集注し、その者をして意識的或は無意識的に自己の心靈の内部を語らしむる

獨白體(モノローグ)を以て適當となすが故なり。
十九世紀英文學の『雄篇(オプス・マグヌム)』にして、またブラウニングが一代の大作たる戯曲『環と書』The Ring and the Book 全部十二篇も、亦此方法によつて成れるものに外ならず。既に戯曲といふ、全篇の構成よく統一を保ちて、如上說くが如き傾向を見ざるやの感あれども、實際はこれまた個々の獨白體の集合に過ぎずして、普通の戯曲と全く様式を異にしたり。
即ち篇中人物が互に相語れるに非ずして、かれ等は個々別々に讀者に向つて自己を說明せるなり。
ブラウニングは此作の題材を古へ羅馬の殺人事件にとり、悽愴なる血なまぐさき一條の物語など人をして戰慄せしむるばかりなるを巧に詩化して、よく白璧の微瑕なきが如き大詩篇を編みたるは、心性の分析解剖に彼が特有の技を揮ひたればなり。
構想の雄大既に能く人目を眩するのみならず、篇中人物と境遇と、複雜精緻を極めて、またいふ可からざる壯麗の觀をなしたるは、さながらゴシック風の大殿堂が、尖塔たかく雲を凌ぎて牢乎たる地盤うごきなきが如く內部裝飾の美と五彩の燦爛たるを望むの觀なきにあらず。
ブラウニング一日フロレンスの書肆に、一小冊子を得たり。十七世紀の終のころ羅馬に起りたる或殺人事件の顚末をしるし、法廷審判の記錄より法王の宣告に至るまで、詳密にして洩らす所なし。
されど固より一篇の無味枯淡なる實記、法律を宗とする者にあらずんば毫も興趣を覺えざるものな

れど、詩人は一讀して忽ちここに大作の詩材を見出でたるなり。いま先づ全部物語の梗概を說かん。

殘忍なる伯爵ギイド・フランチェシニ Guido Franceschini は歲既に五十、貧しかれば富める女を娶りて窮乏を免れんとして遂にポムピリア Pompilia といへる少女と婚しぬ。

然るにこの少女たをやかに德すぐれたれど、素より財ゆたかなるに非ず。ただ其養父母、眞を譌りたるによりて結婚の成立を見たるなれば、程なく伯爵は此事を知りていたく失望せり。旣に老いてまた性酷薄なるこの夫、固よりうるはしき可憫の妻の情にほださるる事もなく、今やいかでか之を無きものにせんとて酷遇虐待到らざるはなく、また之を殺さんにも國法の禁にはかに犯しがたきに、しばしためらひて機の到るを待ちぬ。

あはれなるポムピリアは苦悶に堪へかね、この無道の夫を棄てて家を出でんとすれども、敎會と法律と共に之を許さざれば、忍びに忍びて憂愁の日を送りけるに、やがて身は遠からず母とならんとするに至れり。

ここに於て遂に絕望の勇を鼓し、おのが友なるアレッツオの或若き僧に保護せられて、ポムピリアは恐ろしき夫の家を出でて父母のもとをさして逃れぬ。

伯爵はいまや機の熟せるを見、家の武人を從へて共に其のあとを逐ひ二人を捕へたれど、こたびは遂に意を果さざりき。

然るにポムピリアと僧とは道ならぬ契を結びたりとの嫌疑にて羅馬の獄に投ぜられぬ。ここに審判ありて事の無根は明白となり、寃は雪がれたれど、僧はかくて教會の名を汚したるの故を以て追放せられ、ポムピリアは後漸く其養父母の家に歸るを許されたり。

家に歸りてポムピリアは一男兒を擧げたれど、そをかたく幼兒の父たる伯爵ギイドに祕めけるが、事忽ちにして伯爵の耳に入りしかば、かれ今は如何にもしてポムピリアを殺さんと決心するに至れり。

蓋し國法の定むるところとして伯爵の財は必ず此男兒の有に歸すべきを以て、かくてはいつまでもその惡めるポムピリアの家の縁を絶つこと能はざればなり。

之より二週日を經て、兇惡なる伯爵ギイドは遂に四人の刺客を隨へてポムピリアの家を襲ひ彼女と共老いたる養父母をも倂せて殺害したり。

されどポムピリアのみは、いたでを負ひながら不思議にもなほ三日の間生きながらへたれば、此罪惡の辯證をなす事を得たりしなり。

伯爵は卽夜縛に就き、大膽にも自らの兇行を公言して憚るところ無く、妻すでに操を破りたるが故に、われの此擧は正義の所置たるに過ぎずと强辯しぬ。

さりながらポムピリアの潔白は隅なく證明せられ、伯爵は遂に死刑の宣告を受けたり。

ここに於て社會の有力者は種々の運動を試みて此貴族の命を助けんとはかり、高位高官の人々はみな伯爵の味方となりて之を辯護し、貴族社會の名譽を傷けざらんとつとむ。

事遂に法王に上告せられて其審判に委せらる。時の法王は聰明にして誠實の人、審判は證跡をさぐりて最も明らかに事實を觀破したり。

蓋し法王は老熟の才にして、多年の經驗よく人間胸奥の消息を察するの明を備へたれば、みだりに傍人の言に動かされず、斷乎として罪を宣告し、遂に伯爵を死刑に處したるなり。

かみにも述べたるが如く、此大作全部十二卷は皆篇中各人物の獨白(モノローグ)より成るを以て、讀者は同一の物語を種々の人の口より繰返し聞くなり。

而も之によつて毫も吾等を倦ましむる事なく、伯爵に向ふかとおもへば、更にまたわかき妻と俠勇なる僧の身の上に深きあはれを催さしむ。

變化極りなくして毫も單調の弊なき、人をして絶大の天才が鬼工に驚かしむ。

いま全十二卷の目を擧ぐれば

I. The Ring and the Book.

II. Half-Rome.

III. The other Half-Rome.

IV. Tertium Quid.
V. Count Guido Franceschini.
VI. Giuseppe Caponsacchi.
VII. Pompilia.
VIII. Dominus Hyacinthus de Archangelis, Pauperum Procurator.
IX. Juris Doctor Johannes-Baptista Bottinius, Fisci et Rev. Cam. Apostol. Advocatus.
X. The Pope.
XI. Guido.
XII. The Book and the Ring

第一篇は先づ此作の序歌（プロログ）をなすものなれど、尋常の詩人が卷頭におく序歌の體、多くは華麗の辭を聯ねて修飾の用に供し、或は象徴となりて全篇の裏面に潜める主張または思想を豫め示すのみにはあらずして、ブラウニングはここに大膽なる一新體を創始し、世の評家を驚かしぬ。即ち物語の全部をことごとく此序歌のうちに説き終りて、世の作家がはじめことさらに一篇の歸趣をおぼろげにし、卷を逐うて讀者の注意を誘はんとする慣用法の正反對に出でたるなり。

之をたとふればブラウニングの此第一卷は、さながら樂劇の前曲(オヴァチュア)の如きか、卽ち一個獨立の題目をとりたるに於て其效果をひとしうしたるものあり。卽ち先づ或風景の寫眞と記事とを掲げ、以て人をして其實景に接せんとの願を切ならしむるの類なり。

開卷先づ題名の由來と全篇の結構とを說くに、金環の象徵を用ゐたり、卽ちブラウニングが、古びたる一包の小冊子に得たる殺人事件を詩材として此作を編みたるは、さながらいにしへエトルリアの名工の金環をつくるの法と相似たり。

純粹無雜の黃金は柔軟に過ぎて技工を施しがたきを以て、之に金合を交ふるとひとしく、詩人が古書に得たる羅馬の殺人物語は、作者の想像の新しき分子を加味せられて、ここにはじめて一個の藝術品たることを得べし。

また中心に事實の眞相ありて、多くの證跡あたかも環をなして之を圍繞せるが如きなり。

さて斯くの如くにして枯淡なる一個の物語は詩人の創造力を加へられて、旣に生氣あり活動ある人物が演ずるところの悲劇と變じたるを以て、ここに一篇物語の梗概を極めて平明の詩筆もて叙述したり。

然れども此第一篇に在りては詩人は明らかに物語と讀者との中間に立ち、悲劇は未だ詩人によりて

讀者に語らるるに過ぎず。

故に更に一歩を進めて作者は全く其姿を沒し、篇中の人物をして直接に讀者若しくは觀者に向つて語らしむるはこれブラウニング獨得の技にして、即ち細工を了れる後、さきに純金に加へられたる合金を除去して、遂に完全なる指環となすと全く其趣を同じうす。

ここに於てか物語の外部たる事件の進行は、更に變化して内部個性の發展となり、詩中の人物は各自舞臺に出現し來りて其胸奥を語り出づる獨白體(モノロゲ)を現ずる也。

全篇みな伯爵が法王に上告して、其審判を受くる迄の間に起れる事件なり。

これより、いよいよ悲劇中の人物が出現し來る迄の間に於て、第二篇より第四篇にわたりて、三人の羅馬のひと各々世上一派の意見を代表して、此事件が當時の羅馬市民にいかなる感想を與へしやを敍述したり。

これ劇の本體に入るに先だちて初め先づ之を圍繞せる周圍の狀態を明らかにし、後はじめてその中心に及ばんとする作者が周密なる用意の存するところなり。

即ち第二篇なる『羅馬の一半』は此事件に關する世人意向の半面を代表せる一人物の獨白(モノロゲ)に成り、伯爵を辯護せる側の所見を示し、次の篇『羅馬の他の一半』は之に反して、可憫のポムピリアとその養父母とに十分の同情を表し、伯爵ギイドの兇暴を難ずる他の一派を代表せり。更に第四篇『或第三

者』と題したるは、以上二派のいづれにも偏することなくして、嚴密なる中正の批判を試みんとする一人が、位たかきふたりの人に向ひておのが所見を語れるなり。

その達觀は能く兩者の眞相を精察して餘すところ無けれど、竟に是非の斷案なくしてやみぬ。

曲は進んで之より其中樞に入らんとして、主要なる三個の人物ここに現はる。

先づ第五篇に主人公なる獰惡の伯爵ギイドあらはれ、今や拷問の苦を受けて殺人罪を自白して後、事件の顚末を陳べて自ら辯護す。

滔々數萬言、論證の巧なる、吾等をして殆ど老伯の是にして、却てポムピリアの非なるにあらざるやを疑はしめんとす。

自己に有利なる場合のみ眞をかたりて虛實相交へ、しきりに眞摯の態度を粧うて審判者の同情に訴へんとす。

先づポムピリアの養父母おのれを欺けるを難じ、おのれはその若き妻を愛すれども、妻は毫も溫き情愛を以て老いたるかれに酬いざるのみか、あだし男におもひを通じ遂には戀ぶみのゆきかひも度重れりと誣ゆる、その辯證の巧緻は眞に聽者をして曲直のいづれに在るやを怪ましむ。

いはく、われは家門の名を重んじ、また熱誠に敎會の信仰を奉ずる者、妻がかの若き美しき僧と通じて竊に逃亡するや、いかで默することを得べき、憤恚或は激しきに過ぎたらんも、妻を殺ししは卽

ち此の信仰ある故のみと。兇悪殘忍をいとも巧に正義のことばもて蔽ひぬ。

次なる第六編にあらはるるは、かの俠勇の爵カポンサッチにして、その獨白はさきの伯爵の才氣縱横の辯に比して好個の對照の觀をなしたり。

氣昇り情熱し、抑へんと欲して抑へがたき憤懣と苦悶とが胸裡に溢れて、やがて悲痛熱誠の辭をなしたるもの、片言隻句も皆よく聽衆の血涙を誘ふに足れり。

はじめて或劇場にポムピリアを見し時よりのち、二人の逃亡に至るまでの物語を、ただ有の儘に述べて蔽ふところなく、以て公正の批判に訴へぬ。

されど矯激の言あるひは人の誤解を招きて、神聖なる敬愛は却て道ならざる戀と誤られん事を恐れ、つとめて語を柔らげ激情をとどめんとす。遂に最後に失望の絶叫を殘して彼は法廷を出でたり。

ただ、さきの伯爵年老いて形容枯槁せるに反し、爵は美貌秀麗のひと、青春の熱血胸に湧くと見ゆるは聽衆をして、ポムピリアの關係に疑團を抱かしめしぞ是非もなき。

斯くて吾等は正邪いづれに在るやを定めかぬる時、第七篇に至れば、致命の重傷を負うて今病床に横たはり瀕死のさまにある十七歳のわかき妻の、哀れなる獨白を聽くなり。

いまだ多く世故にたけざるに、身ははやく既に此人生悲慘の極に投ぜられたる一少女が可憐にして無邪氣なる臨終の語、切々として讀むものの胸に迫り、斷腸の思ひいよいよ深きに痛ましむ。

年甫めて十三、清くうつくしきをとめ心の、身の行末を思はず、おのれよりは四倍の齢を重ねたる男の許に嫁ぎ、世の夫といふものみななさけ深き人のみと思ひきや、酷薄冷遇到らざるなきをも忍びしのびて、ただ服従の道をのみぞ忘れざりける。

さりながら身いまは常ならで母とならんも近きに在るを知るに至りては、未だ生れざるわが兒のために斯くてあるべきにあらねば、ポムピリア遂に意を決してかの俠勇の僧をよびて助を乞ひ、共に夫の家を去りたるなり。

これより後、殺害の日に至るまで彼女はただ夢心地に日を送りて、慰めとなり喜びとなるもの獨りこの愛兒あるのみ。

やすらかに此兒を産ましめ給ひ、前後二週日母みづからをして保育せしめ給ひし事を神に感謝し、今もなほ夫をうらまずして終始かれの惡を言はざらんとつとめぬ。

なべて深刻なる悲哀に次ぐに滑稽を以てしたるは、對照の妙によりて益々悲劇の感興を深からしむるもの、例へばかの沙翁の『マクベス』曲中ダンカン王弑逆の後に來る有名なる門番醉狂の一場は、即ち其好適例なりとす。

ブラウニングも亦此大作に同じやうなる手法を用ゐ、對照を試みて悲劇の效果を増したりとおぼし。

卽ち上來述ぶるところの各篇、序を追うて悲慘の趣を深からしめ、殊にポムピリアが臨終の獨白に至つては、まさに悲劇の最高潮に達して直に讀者の心胸を突くのおもひあり。

然るに第八篇に於ては、劈頭の數行すでに律脚の風をも異にし、忽然として滑稽の趣を現じたるは先づわれ等をして驚異の感に打たれしむ。

卽ち此篇は伯爵を辯護せる側の法律家の辯論なれど、毫も熱誠眞摯の態度あるなく、おのが八歲の男兒のために催せる誕辰の祝に心を奪はれ嬉々として樂しげに、また餘念なきもののごとし。殊に送迎に遑なきばかり多くの羅甸語を挿入して、徒に學殖を衒ひ淺薄の論辯を用ゐて、他人の憂を知らざるに似たるもはがゆき心地せらる。

而して次の篇ポムピリアの辯護者に至つては、その冷淡はまた前者に異ならず。殊にその態はあはれむべき女性のために罪狀を否定せんと試みるにあらずして、單に情狀の已むを得ざるに出づるを辯じその貞淑純潔を讃したるに過ぎず。

徒に文飾を事とし、またおのが名利を謀りて、貴族社會の感情を害せん事を恐れたるあと歷々たるを見る可し。この二篇は歪曲のうち最もおもしろからざる部分なり。

興味索然たる此二篇を過ぎて、今や曲の後篇に入らんとするところ、卽ち第十卷は作中の絕唱にして、題して『法王』といふ。

此篇のしめやかなる詩調は、既に能く聰明なる法王の審判、莊重嚴正の趣を寫すに適したり。法王は周圍のあらゆる誘惑障礙を排し、日を重ねて此疑獄を審査し、今や漸く最後の判決に到達し殺人者を以て死罪に處せんと定めぬ。

されどいよ〳〵その宣告に署名するに當つて更にまたおのが誤解なきやを疑ひて、之を先例に徴せしも何等得るところ無く、遂に斷乎として自己の所見が神人の共に正しと認むるところなるを自信して、ここに伯爵の死罪を宣言しぬ。

あはれなるポムピリアの『清淨潔白（パアフエクト・イン・ホワイトネス）』を證して、『神のおん胸に捧げんわが薔薇』なりと讃し、またわかき僧のいみじき振舞をも激賞せり。

第十一卷は曲中の人物最後の獨白にして、刑に臨みて獰惡の伯爵みづから其胸奥の祕を語る。

今や既にさきに粧ひし僞善者の假面を脱して、赤裸々たる一兇漢の面目われ等の眼前に躍々たるを覺ゆ。

憤怒と絶望とに、滔々數萬言をつらねて嘲罵暴言を恣にしたる時、彼を刑場に導かんとて獄卒は戸を開きて入れり。

いまはの折に叫びし最後の數語

"Abate—Cardinal—Christ—Maria—God"……

Pompilia, will you let them murder me?"

ここにポムピリアの清淨またおのづから明らかなるに至れり。

最後の卷は全篇の總收にして『書と環』と題したり。

はじめなるは一篇の書翰にして、ヹニスの一紳士書を其友に寄せて近況を報じ、併せて伯爵の末期を記したるもの。

次なる二つは、雙方の辯護の任に當りし二人の法律家が此事件の結果に就きて述べたる書信にして、最後に遺產はポムピリアの子に傳へらるる事を定めたる判決あり。

ブラウニングはここに全篇の悲劇に對するおのが感想を叙し、現世に於てただ證跡をたどりてまことの正義を求めん事の至難なるを示し、さきに地金なりし一個の物語は今や鑄造彫琢の技を經て、ここにまどかなる一個の金環をなし、詩篇全く成りぬ。

詩人これを亡妻なる女詩人に獻じて悲曲は終を告ぐ。

さきにも述べたりし如く、ブラウニングが心靈に重きをおくの結果として、其戲曲は動作よりは思想の方面に精しく、或人物が何を爲せしかを描き出さんよりは、先づ彼は何者ぞ、何か故に之を爲せしか等の問題を解決するに全力を傾注したるものなり。

從つて常に個性を錙分銖析するに便なる獨白（モノログ）の體を用ゐて、一時に一人物をのみ現じ來りてそが胸

奥の思想感情を其人みづからをして語らしむ。
故に讀者はさながら訴訟を聽く判官のごとく、また廣濶なる想像の餘地を與へらるるなり。かれの作は事件の眞相を殘りなく吾等の眼に呈出するものにあらずして、ただ暗示（サゼスチヨン）を與ふるもの、從つて作中の人物の語るところを聽きて、讀者みづから考察するが故に特殊の趣を覺ゆるなり。事件發展のあとを逐うて個性を分解せんとするにあらずして、作中の人物が或危機に臨みたる刹那の心持を描きて、其心性を明らかにせんとするもの。
而してかれの最も顯著なる此特質を遺憾なく發揮したるものは、即ち上述の大作『環と書』に外ならざるなり。
然れども斯くの如きは、かれが初期の作『パラセルサス』に於ても既に然るを見るのみならず『男女』『劇中人物』等の詩集に收められたる短篇の秀什も亦皆獨白詩の趣をなしたるは、寧ろ後の此大作を成さんがための習練なりしと見ることを得べし。
さりながらブラウニングにしてたとひこの大作なしとするも、彼は猶その秀拔なる多くの短篇を以て、英文學の史上に光榮ある不朽の地位を占むる事を得べし。今これ等多種多樣の珠玉をとりて一々に詳說を加へん遑あらざれども、われは特に叙事的抒情詩の類、情熱盛に生氣潑溂たる詩篇に此詩人特有の樂天思想をうかがひて興趣最も深きを覺ゆる者なり。かのセインツベリイ教授が英國の戀愛詩

のうち古今たぐひなしとまで讃嘆したる『ふたり行くもけふを限り』"The Last Ride Together"の歌は、戀人に捨てられし男の、ただ女々しき涙にはあらで、胸に溢るる想慕の情を抑へ、のちの悅樂を冀ひて今の憂愁を忍ばんとするもの。また同じく戀愛の悲歌『舟のなか』"In a Gondola"といふは、人目をしのぶ戀人ふたり、夜、湖上に舟を泛ぶる樂しさ果敢なくも非命の最後に終るあはれを歌ひたる。『エヹリン・ホープ』"Evelyn Hope"には、さる男おのが切なるおもひをまだ告げでありけるに、はやくも逝きにし共をとめの屍を見て、またも來ん世の戀にあこがるるあはれ深き短篇。『古城の戀』"Love among the Ruins"といふ作に、さながら漢詩に見ゆらんやうなる懷古の情を寓して、『戀ぞこよなき』といふ結句を置きたる歌などは戀愛を題目となしたる作中ブラウヰングが詩筆の妙を見るに足るべき代表的作品なり。古來戀愛の熱情を歌うて唯共感情的方面を描きたるものは、チョオサア以來の英國詩人に決して乏しとせざれども、ここに哲學的の觀察を試みて精細の分析を敢てしたるものは、古今を通じて能くブラウヰングの右に出づるものあるなし。かれが特質たる思索的傾向は此方面に於ても著るしきを見るべきなり。試にかみの諸作のほか、『ゼームズ・リイの妻』"James Lee's Wife"といふ九篇の獨白詩を誦して、熱情に富みまた詩人の趣ある妻の戀愛の苦悶を描きたる妙什を味はば、わが此說の妄ならざるを知るに足らんか。また彼が樂天的世界觀を映じて人間生死の問題を詠じたる『ラビ・ベン・エヅラ』の宗教詩は、さきに言へる『プロスピセ』と共に『死

の恐ろしさに心を煩はさざりし』（Timor mortis non conturbabant）此大詩人の心靈不滅の信仰をあらはしたる雄篇なり。同じく『荒野の臨終』"A Death in the Desert" といふ作も、當代の宗教思想に對する此詩人の見解を寓したる名歌なり、即ち聖約翰、迫害をのがれて其友に助けられ、とある洞穴にかくる、いまはの際（きは）に臨みて看護の人々に向ひそのおもひを語り、後代必ず懷疑の世あらん事を豫言するさまを、史實を離れて活寫したるものなり。このほか叙述の巧妙は目を驚かし、或は思想の幽遠よく讀者を醉はしむる如き妙什の二三を擧ぐれば、『マアテイン・レルフ』"Martin Relph,"『イワン・イワノキッチ』"Ivan Ivanovitch" 等には深刻骨に徹するが如き寫實の妙を味ふべく、聖書に材を取りて希伯來のいにしへをしのばしめたる『ソォル』"Saul"（舊約、撒母耳前書第十六章一四——二三節に基きたるもの）、斷片の悲劇『露臺にて』"In a Balcony" などの妙趣は、確かに此詩人一代の傑作中に數ふる事を得べし。また武勇の事蹟を歌へるもの甚だ多きうち、前述の『エルヹ・リイル』の外、『佛陣美談』"Incident of the French Camp,"『フアイディッピデス』・"Pheidippides" の壯烈あり。殊に彼が得意とせる文藝復興期の詩題をとりたるもののうち、『わが故公爵夫人』"My Last Duchess,"『高僧、聖プラクセッド寺に墳墓を命ず』"The Bishop orders his Tomb at St. Praxed's Church" のごとき特に秀拔のきこえ高し。また故國の春を懷ひたる『異域望鄕』"Home Thoughts from Abroad" の歌に鶫（つぐみ）の聲を叙したる有名の句あるもの（わが國の薄田泣菫氏の詩集『白羊宮』中の一篇「あゝ大和にしあらましかば」といふは、此篇を模したるならんと馬場孤蝶氏の言はれし如く、

げによくも相似たり。）、　愛國の至誠をこめし『海上故國を懷ふ』"Home Thoughts from the Sea"等の小篇はひろく人口に膾炙し、苟くも近英詩歌の研究に志す人の靚過すべからざる妙什なり。材をとる範圍の廣濶なる事近世詩人に其比を見ざるブラウニングの作に就きて、一一に斯かる列擧を試みんは際限なけれども、茲に特に注意すべきは彼が繪畫と音樂とに於ける造詣なり。素より彼は詩歌の方面に全生涯を捧げたる人なれど、同時に其姉妹藝術にも心を致せること深く、繪畫音樂の趣味に關してはまことに英文學のうちにたぐひなき詩人なり。殊に驚くべきは、斯かる方面に特別知識を有したるが故に、詩人自ら直に畫家となり樂人となりて語り出づるもの、皆能く音樂繪畫の眞精神が人心と關聯せるところを明らかにし得たり。一代の作中音樂に關したるは名什は、先づ『アプトフォグラア』"Abt Vogler" に樂聲の人心に及ぼす影響を歌ひたるを壓卷とし、そのほか『ガルッピの樂』"A Teccata of Galuppi's" には輕快の調ひとを醉はしむる妙趣ありて、『サクセ・ゴータのマスタア・ヒュウグス』"Master Hugues of Saxe-Gotha" のごときは、此道にいたり深き人に非ずんば能はざる精緻の筆なり。繪畫に關するものにては、『アンドレア・デル・サルト』"Andrea del Sarto" のあはれと、『フラ・リッポ・リッピ』"Fra Lippo Lippi" の飄逸とを以て、われは全集中の雙璧なりと信ず。

朱書
B's スタイルノ一節ヲ設クベシ
Amy Sharp: Vict. Poets, p. 52.
此處 Amy Sharp p. 56. p. 57. 參照

斯くブラウニングはもと深く繪畫に意を致したるが故に、詩中またおのづから叙景の筆の凡ならざるを見るなり。また其作は韻律の變化に富みたるほか、音調によりて精神を傳ふるの技すぐれ、用語の巧緻よく事物の眞相を活寫するは如何なる繪畫彫刻といへども企て及ぶべからざる妙趣あり。而して嚴密精緻の觀察を寫し、すべての現象をまのあたりに活躍せしめんとするが故に、彼は常に期するところは美ならんよりは寧ろ眞ならん事を欲する也。たとへば、『夜の逢瀬』"Meeting at Night" といふ戀の歌に、月かげあはき野路すぎて妹が家をおとなへば、

A tap at the pane, the quick sharp scratch
And blue spurt of a lighted match,
And a voice less loud, through joys and fears,
Than the two hearts beating each to each!

こは優麗の趣なけれど、實寫の技すぐれたる例として人のよく引用するところなり。なほ歌のこころと音調とを巧に調和したる例として著るしきは、三人の騎士が『ゲントよりエイクスに報を傳ふるの歌』"How they brought the Good News from Ghent to Aix" にして、夜半馬に鞭ちて馳せ行く勇士のさまを、息も堪へぬばかりの急調に寫したるあ

朱書 | 音調ノ事 Amy Sharp: Vict. Poets, p. 54.

り。また亞剌比亞の名將アブト・エル・カドルのもとへ百難を冒して使命を齎らせる勇士を詠じたる歌 "Through the Metidja to Abd-el-Kadr" も、同じく砂塵を蹴立てて躍り行く駿馬のさまを、極めて奇なる韻律にあらはしたり。即ち

As I ride, as I ride,
Ne'er has spur my swift horse plied,
Yet his hide, streaked and pied,
As I ride, as I ride,
Shows where sweat has sprung and dried,
—Zebra-footed, ostrich-thighed—
How has vied stride with stride
As I ride, as I ride!

斯くの如きもの凡べて五節、即ち ride と同一の韻を繰返す事、全章中六十四回に及び、強弱弱（ダクティル）、弱弱強（アナペスト）等の律脚を混淆し、巧に駿馬の疾驅するを描きたるは、所謂聲音繪畫法（クラングマーレライ）の類なり。更にまた前述の『エヹリン・ホープ』に沈靜の調を味ひ、『ファイディッピデス』の雄健急速を賞したるものは、内容外形の調和全くして、その技巧が決して凡手の能くする

朱書 —— ドォソン Makers of Eng. Poetry 278--280 頁以下必ズ參照

ところに非ざるを知る事を得んか。

ブラウニングの詩歌に對する萬口一致の非議は、その晦澁難解を咎むるに在りて、これやがて彼の作が所謂『普通人には味ひがたきもの』"Caviare to the general" となりたる所以なり。この事に就きて世に傳ふるおもしろき逸話あり、或婦人書をブラウニングに致して、妾は竟にきみの詩を解する能はずといふ、詩人答へて曰く、然り、われはじめ詩を作れる時に於ては、其意義を知るもの神と我となりき。今に至つては即ち神ひとり之を知りたまふと。此話の眞僞は姑らく措き、かの邦の學徒すでに其難解に苦しむは註疏評釋の書夥しく、研究會の設立甚だ多きを見ても明らかなり。われ等絕東の民、俗を異にし語を異にするものにとりては、此詩人を研究するの困難なほ更に甚しく、反覆數十回にしてなほ未だ眞に解し得ざる詩篇あり。『アンドレア・デル・サルト』『エヴェリン・ホープ』『學者の葬』"A Grammarian's Funeral" などの如き平明の詩體は、寧ろ除外例として數ふ可きなり。然れども徒に難解を非議するに先だちて、われ等は先づ此大詩人の思想が深邃幽遠の極に達し、之を寫すにおのづから複雜紛糾せる文辭を要したるにおもひ到らざる可からず。殊にブラウニングは毫も其作が通俗的に解し易からんことをつとめずして、初めより旣に讀者に向つて精讀玩味を要求したるなり。詩人ヘンリイ・テイラア曾て警めて言ふ、『一時千人によりて讀まれんよりも、寧ろ一人によりて千度讀まれん事を願ふ者にして、初めて詩人とこそいふべけれ』と。わがブラウニングも亦その友

に送りし書翰のうちにいへる語あり、『われのところを傳へんと思へる讀者のために、わが作おほかたは難解に過ぎたらん。されど或評家の言へるが如くに、われ敢て好んで人々を苦しめんとするにあらず。さりとてまた懶惰の人のため、喫煙に代へ博戲に代へん料にとて斯かる文學を供するにもあらず。故になべて其體に相應なる讀者を得れば足れり。多くの讀者を得んよりはむしろ小數の知己を得んこそ望ましけれ』と。げに其詩の單に娛樂のためのみに讀まれん事は、此大思想家の期するところにあらず。解しがたき節あらば乃ち直に卷を蔽ふが如きわが邦讀詩界の人々、動もすれば難解を以て他人の作を議せんとする者、しばらく詩人の此言に聞け。粗放蕪雜の通讀はすべて、近代の詩歌に幽邃の調を聞き深邃の想をさぐるに堪へざるのみか、ブラウニングの作の如きに在つては其表面の字義をだに解する能はざる事あり。或人かつてミルトンの散文を評して曰く、ミルトンの文、その晦澁なるがために多くの人の顧みる所とならざるを見て、われは近時の讀者が氣魄なきを悲む。平明はもとより貴ぶ可しと雖も、氣力と豊麗とはなほ更に重んずべく、此點に於てミルトンは實に古今を獨步せり。最良の文體とは、作者の赤裸々たる思想をたやすく速に讀者に解せしむる者にあらずして、高遠なる精神に浮び來る感想を、深く十分に讀者の胸奥に徹底せしむるもの、まことに偉大なる智力のおもかげならずや。一般の人にわかり易きは必ずしも褒むべきにはあらで、大才にして解し易からしめんと欲せば强ひて其筆を枉げ、勢ひ束縛の害多きを忍ばざるべからず。……感興まさに高潮に達する

や、鬱勃としてむらがり來る想像とどめもあへず、壯麗なる混亂を爲して紙上に顯はる。凡庸の讀者はこれによりて眩惑せらるるとも、心ある者にはいかばかり興ふかきぞや。淺薄なるが故に明快なる文はあり、されどわれ等は靜なるいささ川の透明を、渺茫たる大海に求むる事を得べきやと。此警語悉く移して以てわがブラウニングの作を許すべきなり。げにも宗教を論じ自由を叫びたるミルトンの論集を繙きて、われ等がその複雜なる難文をたどり、いひ知らぬ妙趣を辭句の間に垣間見たる折の心地は、ブラウニングの難解なる詞章に、幽玄の想を窺ひたる興趣と酷肖するものあるを覺ゆるなり。

さはいへ、ブラウニングの詩篇には題目の困難なると思想の深邃とを以てするも、なほ許すべからざる晦澁あるを免れず。蓋し詞句に前人模倣のあとを避け、獨創奇拔の造語を用ゐしも其一因なれども、また世の評家が難ずる如く、彼の詩、想あまりあつて筆足らざるが如き憾あるもの尠しとなさず。及ぶべき限り緊縮したる辭句に豐富の想を盛らんとつめたるが故に、さながら電報の英文を讀むが如く、語格を紊り文法を破り、片言隻句と雖も冗漫なき代りに、また佶倔聱牙の弊多く、吾等みづから語を補うて之を讀むに非ずんば、往々にして殆ど字義をだに解する能はざるものあり。之を譬ふれば、さながら、人、こころ激しおもひ溢るる刹那に、口いはんと欲していふ事を得ず、遂に紛糾混亂の辭をな

朱書 | B's obscurity, Cf. Laulie Magnus, Introd. to Poetry, p. 51.

して外に發するが如きなり。しかのみならず特に長篇の作に在りては、敍述なかばにして屢々岐路に入り全篇の統一を失ふを以て、われ等をしてその主意の徑路を辿るに苦しましむる事しば／＼なり。甚だしきに至つては、本題を離れて一二頁の間全く他の事を說けるが如き類なきにあらず。ブラウニングの明確なる頭腦を以てしては、斯くてなほ能く終始を一貫したる主意を見失ふに至らざれども、吾等は通讀の際往々にして之が爲に迷はさるる事あり。之等は固より晦澁の主なる原因なれども、しかも多くは反覆數回にして讀者は其解釋を得るに難からず。讀詩を以て淺薄なる駄小說の繙讀に代へ、食後のシガアと同一視せんとするわが邦一部の輕薄者流のごとき、固より此大詩人を解す可きにあらず。

おもふにブラウニングは、テニソンが詩形の彫琢に多大の苦心を費したるに反し、寧ろ內容たる思想の方面に重きを置き、美ならんよりは眞に近く、纖麗ならんよりも剛壯ならん事を欲したるなり。（或る評壇の大家ヲルヅヲルスの詩歌を以て『清純の藝術(ピューア・アアト)』となし、テニソンを『華飾の藝術(オルネート・アアト)』と稱し、而てブラウニングのを『愧奇の藝術(グロテスク・アアト)』として、三者を比較したるは諸詩人の特色を簡明の語に盡くし得たる評なりといふ可し）。これ此二大詩人が根本的にその藝術觀を異にしたる點にして、繪畫音樂に關したるブラウニングの作中屢々此意をほのめかしたるあり。たとへば、『サクセ・ゴータのマスタア・ヒュウグス』の

朱書 | Browning ノ詩風ノ評
Hutton, Brief Lit. Criticism, pp. 261—264.

歌には、この伶人、樂譜のいたづらにこちたき技巧に慊らず、遂に人生の眞趣は斯くの如き藝術に見る可からずと爲し、更にパレストリナの奔放なる樂に新精神の溢るる如きを喜びたるを叙しぬ。斯くてブラウニングの作中には深奥幽玄の哲理は、毫も詩化し醇化せられずして詩中に挿まれたるためし多く金聲玉振の調ややもすれば枯淡なる談理の散文體に亂されんとする憾なきにあらず、晦澁複雜の餘弊はた斯くの如くにして起れるのみ。

機才一代を驚かしたるダグラス・ゼロルドすら嘗て、ブラウニングの作中最も難解のきこえある『ソルデロ』を讀み、解すること能はずしておのれ狂せるには非ずやとおもひしが、遂に何人も皆然るを見て自ら慰めきといふ。されど現存の詩人スヰンバアンは此點に就いて論ずらく、晦澁を以てブラウニングを難ぜんは、猶電信の遲きをかこつに似たらずや。彼はげにも晦澁の正反對なり、かの走り書きを走り讀みする人々は、ブラウニングの如く絕えず急速の運動をなせる智力を逐うてその妙を味ふ能はざる程に、深奥にしてまた燦爛たるものある也。其思想の速度を以て他人のと比較するは汽車と荷車との比較にこそ似たれと。げにも電光の閃くがごときブラウニングの詩才を殘りなく味ははんは、常人の頭腦に尠からざる苦痛あるが故に、之が研究に入らんとする人、豫め難解の故を以て之を斥けざらん覺悟を要す。

吾等テニソンの詩集を繙きて五彩燦爛の美に醉ひ、またかなた遠く、聖樂の妙音かすかなるを聞き

つつ、えならぬ美香の薫ずるを逐うて、そこはかとなく春の若草ふみ行けば、いつとは知らず、前に聳ゆる崢嶸の峰あり、仰ぎ見れば、孤峯天を摩して濛々たる暗雲ふかく鎖しぬ。なほ山ふかく分け入ればをぐらき森のただなか寂寞をやぶりて唯幽鳥の歌ふを聞く、身は既に遠く人寰を去つて、ここに幽聳の音を耳にせるなり。俯して千仭の谿をうかがへば、奔流巖に激するところ深淵萬古の碧を湛ふ。斯くの如きはこれまことにテニソンを去つて、ブラウニングの詩篇に接したるおもひならずや。げに此二大詩人の作品は、上來屢々述べたるが如く、幾多の點に於て全くその趣を異にしたれども、共に同一の社會的政治的宗教的問題に對する一代民心の聲たるに於て、毫も異るところあるを見ず。蓋し最近英詩の一大轉機たる千八百三十二年のころに起れる勞働問題や、貧民の狀態、婦人問題、そのほか教育勞働等に關する大事件は、直接に之を二大詩人の作中に見ることは稀なれども、兩者ともに共感與をここに得たるは毫も疑ふ可からず。『ソルデロ』『パラセルサス』以下の諸篇は前の桂冠詩人が『アアサア王の歌』『モオド』『プリンセス』等と共に、皆當代の時勢が產出したる不朽の記念なり。

顧みれば、十九世紀初期の羅曼底格極盛時代の詩人相踵いで去りしよりこのかた、テニソンとブラウニングとは英國の詩壇を二分し、相對立して各々覇を稱しぬ。二大詩人の作品は全く異れる特質を發揮したるが故に、その詩界に及ぼせる感化も亦いたくその趣を異にしたりき。蓋しテニソンはもとキイツの技に加ふるに、ヲルヅヲルスの靜思瞑想の風を以てし、更に之を新時代に適應したるもの、

從つてその平靜溫雅なる牧歌(アイディル)の體は多くの詩人に影響して殆ど一代を風靡せんとしたる時、蹶然として立つてここに反動の勢を示したるもの、即ちこれブラウニングに外ならず。詩才おのづから方面を異にしたるが故に、一代の尊崇は遠くテニソンに及ばざりしと雖も、哲理の幽玄と戲曲的透察の深遠とを人間の研究に用ゐて、テニソンの詩に對立し、騷壇の一方に堂々たる旗幟を飜へしたるは、げにも近英文學史上の偉觀にあらずや。

第四章　懷疑厭世の詩派

千八百五十年ごろの詩壇――大勢の一轉機――哲學的傾向――詩人としてのマシウ・アアノルド――其詩人的生涯――懷疑厭世の思潮――慰安を自然界に求む――その厭世悲觀の眞相――ヲルズヲルス崇拜及び二詩人の比較――『ドォヴアの濱』――輓歌體――長篇の名作――『ソオラブとラスタム』の名作――短篇の諸作――彼の典雅主義(クラシシズム)――厭世詩人クラフ――閱歷の概略――短篇の抒情詩――『旅路の戀』――詩人ジエームス・トムソン――彼は英國のポオ――純然たる厭世悲觀の詩人――『恐ろしき夜の都』

千八百三十年頃に勃然として起り來れる新時代の詩歌は、更に再び千八百五十年の前後に於て稍その傾向を變ずるに至れり。これ時勢の遷移に促されたるおのづからなる現象にして、獨り詩歌のみならず文藝批評、小說のごときも皆この頃に多少の變化を見るに至れるなり。試に此年ごろに出でたる英國文學界の主なる述作を一瞥せんか。（此表は主としてフレデリック・リイランドの著『英文學年表』に據る）

1848

Matthew Arnold: The Strayed Reveller and Other Poems.

A. H. Clough: Bothie of Tober-na-Vuolich.

Forster: Life of Goldsmith.

Froude: Nemesis of Faith.

Elizabeth Gaskell: Mary Barton.

Sir E. B. Lytton: King Arthur.

Macaulay: History of England. (i. & ii.)

J. H. Newman: Loss and Gain.

Thackeray: Vanity Fair; Our Street.

1849

Aytoun: Lays of the Scottish Cavaliers.

C. Brontë: Shirley.

R. Browning: Poems.

A. H. Clough: Ambarvalia.

Dickens: David Copperfield.

1850

P. J. Bailey: Angel World.

T. L. Beddoes: Death's Jest Book.

E. B. Browning: Sonnets from the Portuguese.

R. Browning: Christmas Eve and Easter Day.

Carlyle: Latter-Day Pamphlets.

Wilkie Collins: Antonina.

Dobell: The Roman.

Elizabeth Gaskell: Moorland Cottage.

L. Hunt: Autobiography.

" Table Talk.

Anna Jameson: Legends of the Monastic Orders.

Merivale: History of the Romans under the Empire. (Vol. i.)

J. M. Neale: History of the Eastern

Church.
F. W. Newman: Phases of Faith.
Freeman: History of Architecture.
L. Hunt: The Town.
D. Jerrold: Man made of Money.
C. Kingsley: Alton Locke.
Ruskin: Seven Lamps of Architecture.

Thackeray: Pendennis.
D. G. Rossetti: The Germ
Ruskin: Pre-Raphælitism.
Tennyson: In Memoriam
Thackeray: The Kicklebury's on the Rhine;
Rebecca and Rowena.

世にこの十九世紀のなかば頃を目して、『英國文藝復興（イングリッシュ・ルネッサンス）』と呼ぶ評家あり。かかる大袈裟なる名稱が果して當れるや否やは姑く措き、千八百五十年のころは科學の進歩が思想界に及ぼしたる影響の結果として、近英の詩歌に於ける一の變遷期を爲したるは毫も疑を容れざるなり。詩壇に光芒最も燦爛たるテニソンとブラウニングとの二大詩人を中心として、群星各々一團をなし、詩才おのづから優劣の差はあれど、皆互に光彩を爭うて出現したる時期なり。即ち前表に示すが如く、一方に於ては、(1)智よりも情に強く、實行よりは豫想にすぐれたる『スパズモデイック』詩派の起れると共に、(2)藝術に中世主義を鼓吹せんとするラファエル前派の同志、漸く藝苑に其旗幟をかかげはじめぬ。(3)また更に重要なる現象としては、智力と想像とを混和し、詩歌に深奥の哲理を寓したる一派が大に勢力を得

るに至れるなり。

この中はじめの二者は後段に至りて詳說すべく、先づここに第三の詩派に就いて論ぜんに、こは固より純然たる新派にあらずして、當代詩界に覇たりし二大詩人を以て領袖となせるもの也。固よりテニソンとブラウニングとは世紀末に至るまで常に詩界の覇王たりし人なれども、千八百五十年の頃には詩才既に圓熟の極に達して、述作に著るしき變化ある事を知るべし。卽ち此年に於てテニソンは其多年の沈思瞑想に得たる大作『イン・メモリアム』を公にして、人間生死の大問題を詠じ、深奧の哲理今や漸く詩文界に重きを爲さんとせる事は既に上に述べたり。同時に『智力の詩人』ブラウニング亦『降誕祭前夜および復活祭』の作を以て世に問ひ、かれの特質たる哲學的傾向さらに新様の趣を帶びて宗教問題に接觸したり。かくの如くにして詩界に覇たる二大詩人既に此同一傾向を趁うて、智的瞑想は想像の作用を加味し、哲學思想を根柢とせる二大作は時を同じうして共に騷壇を驚かしぬ。豈ここに著るしき影響なきことを得んや。本章に於て論ずべきマシウ・アアノルドと共親友アアサア・ヒュウ・クラフ等の、智的分子を重んじたる詩派卽ち斯くの如くにして起れるなり。

邦人のマシウ・アアノルド Matthew Arnold（一八二二—一八八八）をいふ者、多くは『批評論集』『北米講演』『敎會及び宗敎』『雜論集』などの類を繙きて、文藝神學敎育等に關する論文に、靈活の評眼と暢達の散文とをよろこべども、不朽の盛名あるその詩卷を精讀し、ここに奇聳幽婉の聲を

聞かんとする人すくなきは遺憾なりとす可し。もとより批評家としてのアァノルドはラスキンと相並びて近世散文界の雙璧なりといへども、之が爲に彼の詩人的方面を顧みざるは、稍輕重を誤りたるの譏を免れず。蓋し詩人として彼の文藝史上に於ける地位を考ふれば、テニソン、ブラウニングの雄飛時代と後のラファエル前派の時代との間に介在せる諸詩人のうち、才藻最もすぐれたる者なりといふを得べし。卽ち彼の詩人的生涯のうち最も顯著なる時期は、千八百四十九年より千八百五十五年に到る六年間にして、彼のすべての詩篇は先づ此時期を中心として研究せられん事を要す。(彼が散文の大家として初めて大名を博したる『批評論集』第一卷が世に出でたる千八百六十五年には、其詩人的生涯は事實上すでに終を告げたりと見る事を得べし)。かの國に在りても今日に到りては、彼の詩篇は其散文よりも多くの讀者を有するに至り、將來ながく不朽の盛名に値すべきもの固より詩篇に外ならざるは、鑑識ある評家の皆一致するところなり。

閱歷を知らずんば詩人を解すべからず、余は先づ叙說の順序としてここにアァノルドの詩人的生涯の一斑を語らざるべからず。(もとより敎育家として或は批評家として匆忙繁劇の生を送りし人なれども、此等の方面に就いては今說くの遑なきを以て省略す)。彼の父トマス・アァノルドは、人のよく知るごとく育英の事に從ひて德望たかかりし人、偉大の感化をながくラグビイの黌に傳へたるのみならず、祖父も亦宗教に終生を捧げたるひと、從つて詩人アァノルドは遺傳と敎育との力によりて、父

祖信仰の感化を蒙れること極めて大なりき。父トマスはラグビイの校長なりしが故に彼も亦幼少こゝに學び、當時匿名を用ゐて『羅馬に於けるアラリック』（一八四〇）の詩篇を出し、才藻すでに學友を驚かしぬ。後さらに轉じて牛津大學（オックスフォード）に入りしが、當時科學の發達に伴ひて起れる宗教問題この大學に喧しく、ニュウマン等の牛津運動が盛に人心を聳動したる時なりき。アアノルドは信仰かたき家庭を去つて、いま論爭の中心たる此學堂に身をおくに至り、兩者の感化相交つて彼が後年の思想に多大の影響を及ぼしぬ。げに牛津大學はこの偉才のために智的生活の故郷ともいふべく、終生『慈母師府』の愛を失はざりしは彼が後年の詩文に明らけし。この頃のアアノルドは縱橫の機才と快活の質とを以て、あまねく同窓の敬仰したるものなりしといふ。この間つねに心を詩作に潛め、『クロムエル』の作を以て褒賞を獲たるのみならず、のち千八百四十九年を以て出でたる處女作なる小詩集は、この牛津在學の日に成りたるものなり。なほ大學の業を卒へてより以後の諸作をも集めて大成したるもの、『詩集（ポエムス）』二卷（一八五三―一八五五）世にきこゆ。大學を去りて後ランスダウン卿の祕書となり、また枯淡なる視學官の職に忙殺せられたる間にも、希臘古典を摸したる悲劇『メロオピイ』"Merope" のごとき佳作あり。また教育視察のため獨佛諸邦に遊びてまた其文學に研究を積み、殊に佛蘭西のジョルジュ・サン、プロスペル・メリメ。ギゾオ、セント・ブウヴ等と親交ありて、得るところ尠からず。なべてアアノルドの詩篇はこれ等繁忙の俗務に從事したる餘力に成れるが故に、其量に於

ては決して誇るに足らざるなり。されど作すくなかりし詩人グレイが數篇の珠玉、ながく彼が不朽の名を文藝史上に傳へたりしとせば、典麗莊重はるかにグレイを凌駕したるアアノルドの作品、たとひその量に於て少しとも豈われ等の摯實なる研究を値せざらんや。千八百五十七年牛津大學に詩歌の講座を擔當し、ホオマア飜譯に關する講演に詩文鑑賞のまなこ凡ならざるを證しけるが、のち十年にして、その傑作を收むること尠からざる『新詩集（ニュー・ポエムズ）』（一八六七）あらはれぬ。以後世を終るまで詩筆を絕ちて、おもに文藝批評に身を委ね、また教育宗教を論じたるもの多く、唯詩興禁じがたきに及んでその折々二三の妙什あるに過ぎざるなり。千八百八十八年、その痼疾なる心臟を患ひて遂に起たず。詩文宗教哲學教育の諸方面にすべてを一貫せる主張を以て偉大の感化を民衆に與へし師傳は、今その天職を全うして逝きぬ。

　彼の詩歌は純然たる時代思潮の反映に外ならず。當時勃然として起り來れる科學萬能主義その勢を逞うして、思想界の根柢に一大動搖を起さしめてより、宗教信念は懷疑の暗潮に漂うて一代の民衆その歸趣するところを知らず、當時の人みな苦悶衝突の渦中に迷ひ、舊信仰すでに危うして、新信仰はいまだ成らざりしなり。アアノルドの思想は周圍のこの影響を蒙りて、心裡苦悶のさけび外にあらはれたるものその不朽の詩篇をなしたるなり。これまた天性と閱歷との然らしめたる所にして、おもふに幼時父の膝下にありて敬虔の至情を養はれ、後去つて牛津大學に當代懷疑の聲を耳にしてより、か

れの詩篇は、はやくも既に胸裡に鬪へる此二者の衝突の聲をなしたりしなり。彼の感情は飽くまでも、舊信仰の貴きを離れざらんとすれども、更に透明にして鋭敏なるその智力はここに斷乎として明確なる論證を求めてやまざらんとす。身は新しき時代思潮の急流に棹させども、舊信仰を顧みてはなほ追慕回憶の念を絕たずして深き悔恨になやむ。かれの詩中の語を藉りていはば、『一は既に死し、他はなほ生れんに力なき二つの世界の間にさまよひて、わが頭を置かんところも無くて獨り地上に待ちわび』ぬ。これまことに、彼の批評的精神が信仰と衝突したるが故にして、煩悶の由來するところ亦ここに存するなり。しかのみならず、アアノルドはまた當時の傾向が急激なる變化絕ゆること無きを見、社會上および政治上の現象は佛國大革命の餘響を蒙りてなほ未だ固定するのさまなく、思潮益々複雜混亂の境に入らんとする大勢に深くも心動かされたりき。

斯くの如き苦悶衝突の渦中に在りて、アアノルドはブラウニングの如き廣大深遠なる哲學的考察の力を有せざりしが故に、從つて後者の剛壯なる樂天觀なかりしと雖も、さりとてまた、アアノルドの詩歌を單なる絕望痛恨の叫びに過ぎずと判ずるも誤れる觀察なり。否な寧ろ彼は絕望の勇を鼓して自ら安んぜんと欲したりし者、卽ち超然として人間悲哀の界を解脫し唯自然を靜觀して、自己の心靈そのものにたよりて慰安を求めんとしぬ。故にかれの詩歌に厭世悲觀の聲あるは、吾人に人界の悲哀痛苦を示し、われ等をして之を超脫せしめ、以て自然の淸境に誘はんとしたるものに外ならず。卽ち彼

の使命とせるところは、功利唯物の時代を靈化し、吾人をして病的なる近世生活の界

"This strange disease of modern life,
With its sick hurry, its divided aims,
Its heads o'ertaxed, its palsied hearts."

(*The Scholar Gypsy*)

を脱せしめ、自己心靈の解脫によりて煩悶を免れしめんとせるなり。故に吾等その作を讀めば、熱情の燃ゆるがごときを過ぎて平穩冷靜の境に導かるる心地あり。換言せばアァノルドの詩想は、バイロンの厭世的熱情（前章に說きたる所謂『世紀病』）に加ふるに、ヲルヅヲルスの信念と自然觀とを以てし、なほ之を調和するにいにしへのストア學派の冷靜を加味したるものと謂ふを得べし。

アァノルドはさきの羅曼底格時代の詩人中ヲルヅヲルスの系統を紹ぎて、其感化を蒙りしこと最も大なりし詩人なり。げにも湖畔の老詩聖に對するアァノルドの尊崇敬慕の情は、有名なるヲルヅヲルス論となりて現はれたるのみならず、また燃犀の評眼よく此『近代詩祖』の美を鑑識したるは、彼が編みたるヲルヅヲルス撰集のすぐれたるを見て見るべし。おもふにアァノルドは能くヲルヅヲルスの短所を觀破して之を棄て、ただその自然に對する愛と沈靜の趣とを尊びたりし詩人なり。然れども吾等はここに二詩人が前後時代を異にしたる結果、おのづから其詩篇に異れる特色ある事を知らざる可

からず。即ちアアノルドは自然を愛しその美を頌するに於ていたくヲルヅヲルスと相似たると共に、湖畔詩人の沈靜に至つては單に之を追慕し憧憬したるに過ぎざるなり、是アアノルドの時代は既にヲルヅヲルスの閑靜なる時にあらずして、匆忙繁劇を極めたる時世なればなり。時勢既に全く趣を異にしたるが故に、たとひ心に沈靜を貴ぶとも、詩歌に於て實際これを摸し之を學ぶこと能はざりしなり。是に於てかアアノルドの詩篇は、ヲルヅヲルスの沈靜に代ふるに悲哀を以てするに至りしなり。かれの瞑想沈思みな常に鬱憂の趣あるは、即ちこの故に外ならず。

げにも吾等この詩人の作を讀みて、悲哀のしらべしみ〴〵と胸に響くを覺ゆる時、靜寂なる春の夕まぐれ遠く梵鐘のかすかなるを聞くが如きおもひあり。數多きその名作皆おほかたは斯かる特徴を帶びたれど、殊に『ドオヴアの濱』（一八六七）と題したる彼が抒情詩の絶唱は、淸楚の短篇能く深遠の想を寓し、此詩人の特色すぐれて著るしき名歌なり。月はさやかに海しづかなるドオヴアの濱邊、寄せてはかへす波のまに〳〵、渚のさざれ石とこしへなる悲哀の調を傳ふれば、そぞろ希臘古詩人の秀句を偲ばしむといひ、更に轉じておのが懷疑厭世の想を幽婉の調に托していふ、

The Sea of Faith
Was once, too, at the full, and round earth's shore
Lay like the folds of a bright girdle furl'd.

But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar,
Retreating, to the breath
Of the night-wind, down the vast edges drear
And naked shingles of the world.

Ah, love, let us be true
To one another! for the world, which seems
To lie before us like a land of dreams,
So various, so beautiful, so new,
Hath really neither joy, nor love, nor light,
Nor certitude, nor peace, nor help for pain;
And we are here as on a darkling plain
Swept with confused alarms of struggle and flight,
Where ignorant armies clash by night.

これまことにアアノルド一代の秀句にして、彼の師たる自然詩人ヲルヅヲルスに聞く可からざる悲哀の聲にはあらずや。

沈思の鬱憂、おのづから之にふさはしき哀調を帶びたるは、アアノルドの特色なり。而して此特色あるがために、彼は英國古來の詩人のうち輓歌體の作に最も成功したる一人なり。おなじく哀觀の詩人にして共に大學に在りし頃より莫逆の交あるクラフの死を哭したる悲歌『サアシス』Thyrsis 一篇、實にアアノルド一代の傑作たるのみならず、また英文學のうち友の死を哭したる古今の名歌、たとへばミルトンの『リシダス』、シェリイの『アドネイス』、テニソンの『イン・メモリアム』などと共に、不朽の聲名を値すべき大作なり。この外『ラグビイ會堂』『南方の夜』などは稍趣を異にしたれども、また此體の最もすぐれたるものなる可し。

かれの長篇の作中先づ戲曲に於て名だかきは、『メロウピイ』"Merope"と『エトナ山上のエムペドクリイズ』"Empedocles of Etna"となり。われ自ら未だこれ等の諸篇に精緻の研究を試みざれども、詩筆なほ動作と性格の微を究むるに至らず、詞藻の美はあれども戲曲としては失敗に歸したりと多くの評家は謂ふ。されど敍事詩の長篇『ソオラブとラスタム』"Sohrub and Rustum"および『トリストラムとイシュルト』"Tristram and Iseult"の二篇に至つては、此詩人の特色を遺憾なく發揮したるものにして、たとひ同代の大詩人と雖も及び難き妙趣あるを見るなり。前者は詩材を波斯の古詩人フィルドウシの

朱書 | Cf Dawson, Makers of Eng. Poetry P. 253——

作にとり、ホオマアの詩風を摸したるもの。父なる猛將ラスタムは、ソオラブがおのれの子なるを知らずして戰場に之を殺すといふ悲壯の物語。後者は例のアアサア傳說に屬する悲劇を熱情の辭にうつしたるものなれど、物語に重きを置かずして、寧ろ精緻なる抒情の筆ここに婉美を極めたるを賞すべきなり。然れども後のスヰンバアンが同じ中世傳說を材となしたる名作を讀みて、濃艶の彩筆に驚きたる人には、アアノルドのこの作稍遜色あるの感なきにしもあらず。かくてわれは純然たる客觀の詩『ソオラブとラスタム』の一篇を以て敢て此詩人一代の傑作と見なさんと欲す。蓋し智性に長けたるアアノルドのごとき詩人の常として、抒情の歌多くは叙事詩に若かざるの觀あればなり。

劈頭『さて曉色ひんがしの空をこめて、オクサスのながれ霧たちのぼる』と、先づ敵味方對陣の朝景色に筆を起したり。韃靼の主將ペランヰイサの陣屋に若武者ソオラブは訪れ、乞うて曰く、けふの戰を休みて一騎打ちのほまれを我に與へたまへ、日ごろの願なる父に會はん事もかなふべしと。この議容れられて遂に波斯軍よりも戰士一人を選び、ここに陣頭の仕合はじまれり。波斯軍の戰士はこれソオラブの父ラスタムならんとは、父子互に之を知らず、從つて何人もさりとは心づかざりき。血氣さかりの若武者ひごろの剛勇に似ず、けふのみはあやしう父の事のみおもひまさりて腕にぶり、遂に仆されぬ。仆されたるソオラブいたでに息も絕え絕えなる苦みを忍びて、われはラスタムの子なりといふ。父は固より其敵手がおのれの子なりとは知らで、狡奴(しれもの)の虛誕(そらごと)ぞといひ罵れば、若武者苦しき息

を勵まして答ふらく、

"Man, who art thou who dost deny my words?
Truth sits upon the lips of dying men,
And falsehood, while I lived, was far from mine.
I tell thee, pricked upon this arm I bear
The seal which Rustum to my mother gave,
That she might prick it on the babe she bore."

ソオラブ胸を開けばこの黥(いれずみ)こそはげにもラスタムが紋どころ！　父はあまりの驚きに突立ちたるまま語もなくて、ただ一聲 "O boy—thy father!" とばかり身は礑と地にぞ殪れける。やがてよみがへり父子相抱きて慟哭す、兩軍の將士みなこの光景をみて黯然として涙を呑む。ふたりが龍奔虎騰の血戰を寫したるあたり、筆力神に入つて壯麗雄渾を極め、劍光きらめくところ鏘々の音を耳にするの想あるのみならず、詩人は巧に之に叙景の筆を配して周圍自然の景狀を現ず。末尾更に一轉オクサス河畔のゆふべを叙して全篇を結びたるあたり、靜寧の晩景を叙したる詩筆は、テニソン、ブラウニングと雖も遠く及ばざる妙趣あるを覺ゆるなり。ただ典雅派(クラシック)詩人の常として、比喩形容のためにいたづらに佳句麗語を聯ぬる事多きに過ぎたるが故に、吾等には却て詩興を殺がるるの想無きにあらず。

このほか短篇の類に在つて特に秀でたる二三を數ふれば、先づ『棄てられたるマアマン』"The Forsaken Merman" は、人間の女マアガレットと婚して後、遂に見捨られたる海王の歌なり。中世羅曼底格の詩情ゆたかに、吾等をして後のロセッティ一派の藝術に對するが如き想あらしむ。また『リクキエスキャット』"Riquiescat"（かの世にて安らかなれや）は僅に十六行の一小篇なれど、最もひろく人口に膾炙したる妙什にして、交際場裡の花とたたへられし女、靈はいま束縛多き現世を去つて廣大無窮の死の界こそ自由の郷にやすらへるを歌ふ。更にまたアアノルドが自然と人生に對する沈思瞑想をうかがはんと思ふ人は、倫敦熱鬧の巷をよそにここのみは仙鄕なるケンシントン公園の歌 "Lines Written in Kenshington Gardens" に、喃々たる鳥語を聽きたる感想の幽なるを味ひ、或は夜告鳥を詠みし哀調の歌『フィロメラ』"Phironela" を誦し、『未來』"The Future"『いづれの運命にも準備たる』"In utrumque paratus"（題名は Virgil Eneid II 61. より取れるなり）などの篇、琴笛の妙音かすかなる耳かたむけよ。

アアノルドの詩歌にはなべて色彩の濃艶を見ず聲調の優麗を聞かざれど、ただ低唱微吟これを久しうして、ここに簡素明晰の美を見る。青春の熱情湧くが如きを盛りたる奔放の詩風に非ずして、ひたぶるに謹嚴の風を重んじたる體なり。當時羅曼底格の風潮沖天の勢を以て詩界を風靡したるとき、かれは獨り典雅派の主張を持したる人、從つて批評家としてのその同情も、テニソンなど同時代の英國

詩人の上にうすくして、却て外邦の詩人に向つて厚かりき。固よりアアノルドの抱ける典雅主義(クラシシズム)は、十八世紀詩人のそれの如くに峻嚴ならざりしと雖も、彼が詩題の選擇に重きをおきたるが如きは、即ち此典雅派の特徴を示したるなり。當時テニソン、ブラウニング以下羅曼底格派の詩人は、自然と人生とのあらゆる題目をとりて之を詩化せんと試みたれども、アアノルドは獨り此點に於て飽くまでも典雅派の主張を持して、詩歌の題目に斷乎たる制限を設け、ただ或種の事物のみが詩題たるに適すべしと信じたるなり。(然れども時には此主張を離れて却て千古不朽の妙什をなしたるもの、たとへば前述の『棄てられしマアマン』の如き羅曼底格の作あることをも忘るべからず)。而して詩人たる彼が斯くの如き主張あるは、批評家として及び教育家としての其の主義と共に、全く古代文化を尊崇すること極めて深かりしに基づく。げに彼の詩篇には富贍なる學殖おのづから現はれて、教養ある人士の胸には切なる哀音しみわたるが如きおもひあるなり。吾邦人の間に廣く知られたる "Sweetness and Light" (スヰフトの語をとりて「都雅と聰明」の義に用ゐたり)の有名なる論文を讀みたる人は、近代の俗流(フイリスティン)を排し、古典文藝の美を敬慕せるアアノルドの根本主義を知ることを得ん。かれが後のロバアト・ブリッヂス等と共に近英の詩界における新典雅派たる所以、はたこの主張に基づけるなり。

アアノルドが有名なる輓歌『サアシス』に哭したる心友アアサア・ヒュウ・クラフ Arthur Hugh

Clough（一八一九――一八六一）も亦、千八百三十年代および四十年代に於て牛津大學を中心として盛に起れる懷疑の風潮を代表したる詩人なりき。アアノルドに比しては才藻稍劣りたれども、思想發達の徑路に於ては二者殆ど其趣を同じうす。幼少の頃しばらく米國に在りしが、後故國に歸りてラグビイ黌に學び、ここに深く博士アアノルドの信仰に感化せられし後、更に移りて當時宗教問題論議の源たる牛津大學に學ぶ、これ實に彼の思想一轉の機をなしたるなり。彼もと誠心摯實の人、夙におもひを人生問題にひそめて、さきに蒙りたる宗教的感化によりて得るところ既に尠からざりしなり。而かも今やこの大學に教義の新說を耳にし、自由神學の論に接するに及び、彼も亦遂に懷疑苦悶の人となり了んぬ。大學の業を卒へて後は孜々として育英のことに從ひしが、此間に出でたる "Ambarvalia" を以て彼の處女作となす。また南歐伊太利の美鄉に遊びてヹニスの市を訪ふや、當時の感想を寫したる長篇『ふた心の人』"Dypsychus" あり、智すぐれ情はげしき主人公が、理想と現實との衝突に懊惱苦悶せる樣を描きたる、一篇の趣はややゲエテの『ファウスト』に似て而かもその深遠なし。信不信、善惡等の複雜なる大問題を提げて詩筆なほ之に伴はず、徒に枯淡無味の譏をうけてやみぬ。のち全く教職を棄て、健康漸く衰ふるに及んで國を去り、途上『大海』"Mari Magno" の作あり、舟路のつれ〴〵に同好の友相集りて各々語り出でたる物語、みな戀愛結婚などの社會問題に關したるものなり。クラフ更に痾を養はんとてフロレンスに行き、ここに熱病を患ひて遂に逝く、享年

四十有三。

英詩に六律脚(ヘクザミタア)を用ゐて成功したるもの少きは、かの國語本來の性質が然らしむる自然の結果なれども、クラフは巧に此困難なる律を用ゐて成功しぬ。なべて彼の詩歌は長篇に失敗したれども單にその部分を取りて之を論ずれば、溫藉沈靜他の及び易からざる妙趣を具ふ。また短篇の抒情詩中最もすぐれたる『風吹くかた』"Iua Cursum Ventus"『いのちの流れ』"The Stream of Life" など、人生問題の深きをさぐりたる名篇、ひろく人口に膾炙す。また『煩悶を甲斐なしとな言ひそ』と詠みたる歌は、近世の詞花集(アンソロジイ)を編む人の決して看過せざりしもの。曰く

Say not the struggle nought availeth,
　　The labour and the wounds are vain:
The enemy faints not nor faileth,
　　And as things have been they remain.

If hopes were dupes, fears may be liars;
　　It may be, in yon smoke concealed,
Your comrades chase e'en now the fliers,
　　And, but for you, possess the field.

For while the tired waves, vainly breaking,
　Seem here no painful inch to gain,
Far back, through creeks and inlets making,
　Comes silent, flooding in, the main.

And not by eastern windows only,
　When daylight comes, comes in the light;
In front, the sun climbs slow, how slowly!
　But westward, look, the land is bright.

この第三節高潮を詠みたる四行のみを以てするも、なほ彼をして盛名ある詩人の列に伍せしむるに足らんと、セインツベリイ教授は嘆賞しぬ。

彼の死後に至りて世に出でたる長篇『旅路の戀』"Amours de Voyage" また六律脚（ヘクザミタア）を用ゆ。主人公なるクロオドは殆ど懷疑の化身とも謂ふべき人物にして、千八百四十八年の革命の折羅馬に在りし一青年なり。かれ革命に就いて其意向を定むる能はず、身は羅馬に在れどもおのれ果して羅馬を好むや否やを疑ひ、また妙齡の婦人を戀ひながら猶己れ自らの戀を疑へるなり。はじめ此婦人をして獨り去らしめ、後さらに之を追ひ求むれども得ず、茫然自失、遂に一種の信仰を得たり、而かも依然とし

ておのれ其宗教の何なるやを語る能はざるなり。かくて簡單なる一篇の脚色何等の結末なく、茫漠朦朧にして終れる戀の物語詩なり。此作のはじめに冠したる題言（モットオ）にいふ、『かれはすべてを疑へり、戀そのものをすらも疑ひぬ。』"Il doutait de tout, même de l'amour" と。この語は實にクラフのすべての作を一貫せる懷疑の傾向をいひ顯はしたるものなり。げに渾沌たる當年の思想界に在りて、智性すぐれたる誠心の詩人、おもひを人生の問題にひそめて遂に之を解決すべき斷案を得る能はず、その詩は胸裡苦悶の聲たらざるを得ざるなり。而してクラフは獨り此懷疑的傾向に於てのみならず、またヲルヅヲルスの感化を蒙り、學殖教養ある詩人たるに於て、全くアアノルドとその趣を同じうしたるなり。

斯くの如くにして上述の二詩人は、懷疑の暗潮に行衞も知らずさまよひたりき。ただアアノルドはなほ鬱憂苦悶を自然の淸境に忘れんとつとめ、クラフも亦、其抒情詩中の一篇に『あはれ、人、とはに望みを失はずして信ぜよ』と歌ひて、みな共に奮つて懷疑の苦境を脫せんと試みたるなり。即ち暗黑なる想海に、なほ一道の光明をさぐりて進むの勇を失はざりき。しかれどもここにまた時世厭離の極に達して、混亂の思想界に全く望を絕ちたる悲觀詩人あり、ジェームス・トムソン James Thomson（一八三四――一八八二）は即ち是なり。その作『恐ろしき夜の都』"The City of Dreadful Night" は實によく彼の天才を代表す。

トムソンの生涯ははなはだ變化に富む。はじめ實業界に身を投じて北米に行き、また新聞通信員として西班牙にとどまり、後遂に故國に歸りて操觚の業に從へり。著すところ詩歌のほか論集一卷あり。彼シェリイを崇拜すること深く、またハイネ、ショペンハウエル等の厭世思想に得たる感化、歴々としてその述作にあらはれたり。多年豪飲の結果いたく健康を害し遂に病を得て死したる人、粗放不羈の性行は北米の詩人ポオに酷肖せるが故に、かれ遂に『英國のポオ』の名を得るに至りしと雖も、もとより此比較はおもにその轗軻落魄の一生に就いていへるものに過ぎず。蓋しトムソンの作にも、ポオの特質たる "un amour insatiable du Beau, qui avait pris la puissance d'une passion morbide"（『美の熱愛遂に病的熱情の力をとれるもの』とは佛のボドレエルがポオを批評したることばなり）はあれども、ポオの詩歌に最も著るしき超自然の分子は之をトムソンに覓むべからざればなり。若し異邦の詩人に比較すとせば、トムソンは寧ろ佛蘭西のボドレエル、伊太利のレオパルディなどに近からんか。

彼の詩篇は嚴密の推敲を經たるものに非ずして寧ろ天才が一氣呵成の作なるが故に、吾等の研究に値せざるが如き劣作その大半に及ぶ。『不眠』"Insomnia" といふ作に、おのれが鯨飮の餘に得たる心身の苦痛を叙したるもののほか、彼が厭世悲哀の想をうつしたる『恐ろしき夜の都』は、一代の傑作として永く不朽の聲名を傳ふべきものなり。是れまことに暗澹溟濛たる當時の思潮を反映し、科學的文明と共に起れる懷疑の思想をうつして雄大深沈の畫幅をなしたるもの。その寓意は獨逸中世の名

匠アルブレヒト・デュレルの作『憂愁（メランコリア）』のすがたにとりたり、『蕭條たる高地の上、翼ある女人の黄銅の巨像たてり、壯大にして神祕』（第二十一章）と言へるもの卽ち是なり。開卷第一節題名のこころを說きて先づ讀者を悲愁の天地に誘はんとす、いはく、『こは夜の都なり、また或は死の都か、されど夜のなるは疑なし。露おく曉のほのぐらき冷氣に次いで淸明の朝は竟に來らず、月と星とは侮蔑（さげすみ）と哀憐（あはれみ）ともてかがやかん。日は未だ曾てこの都に來らず、白日のもと、そは消え果つべければ。さながら夜の夢のごとくに』と。げに天日の光明をあふぐ事なきこの常闇（とこやみ）のさとは、彼が絕望厭世の想を寓したる天地なりき、時代のかぎり無き苦悶憂愁、おのづから詩人の胸に響きて此悲調をなしたるなり。

第五章　スパズモディック派の詩人

此派の特質――內容と外形――懷疑哲學の傾向――バイロンの感化――其名稱の由來――此派の詩人――ベイレイ――『フェスタス』――シドニイ・ドベル――『羅馬人』――『ボオルダア』――その戰爭詩――アレクサンダア・スミス――ゼラルド・マッセイ――勞働者の詩人――愛國の歌――ブラウニング夫人――『葡萄牙ソネット集』――女性詩人の特質――女詩人と伊太利亞

近代英詩の一轉機とも見なすべき十九世紀の中葉に起れる詩派の一として、次に余はスパズモディック派を說かん。さきにも謂へるが如く、當時の詩壇に對峙し共に羅曼底格の覇王として一代に影響感化を及ぼせる事大なる二大詩人は、テニソンとブラウニングとなりき。されど前者の偉大なる所以は主として技巧のすぐれたるに存し、後者は寧ろ自由奔放の體を具へて、深奧の想・熱情の筆を以て一世を風靡したるなり。スパズモディック派の詩人も亦此二大詩聖の感化を蒙りて起れるなり、即ちテニソンが詩形の彫琢に苦心すること多きを去つて、文字修飾の羈絆を脫し、寧ろブラウニングが思想の方面にまされるに倣ひ、詩形よりも多く內容に意を用ゐ、更に一步を進め時代の傾向を趁ひて近世的ならんとつとめたる者なり。蓋し當時の英國詩界は獨逸文學の影響をうくる事著るしく、人生と

宗教と詩歌とを一致せしめんとする獨逸羅曼底格派の風潮を迎へ、またゲーテの『ファウスト』さらに絶大の感化を及ぼし、テニソン、ブラウニングにすら歴々たる其痕跡をみとむ可く、スパズモディック派の詩歌のごときも明らかにここに淵源したるなり。此詩派はまた更に他の方面より觀察して、當代の思想界における懷疑苦悶のおのづからなる反映とも見るべく、人生の意義を尋ねて遂に得るところなく不安と煩悶と其極に達して、遂に斯の如き不自然なる神經質の詩人を現じたるなり、故に或點に於ては此一派は、佛蘭西輓近の象徴詩人と其趣を同じうしたる者なきにあらず。かくて其特質は激越の感情を恣にし、人生宗教の問題に觸れては想あまりあつて筆足らず、常に一種の哲理を寓すれども統一なく綜合なく、感興の迸發するところ支離滅裂の詞章をなせるもの多し。たとへば此一派の詩歌に在つては、譬喩のごとき唯徒に誇張浮華の弊を生じて、却て詩情を沒了し晦澁の弊を增したるが如き感なきにしもあらず。この派の詩人は『詩歌の材料を以て詩歌そのものなりと誤解したり』と、或評家の唱破せる眞に故なきにあらず。此點に於ては、かの十七世紀のドン一派の詩人（ジョンソンが呼んで哲理派（メタフィジカル・スクール）といひしもの）が、好んで浮華の辭、複雜の詞章を用ゐて、詩歌に一種の哲學を寓したるものと酷肖せるの觀あり。要するに奔逸の激調を弄して未だ完美の詩歌をなさず、同じく當時の風潮に動かされて成りしテニソンの『モオド』に見ゆる熱烈の感情を學んでその華麗濃艶の趣なく、またブラウニングの高調を摸して、而もなほ到らざること遠きものと謂ふべき乎。されど

も此一派おほかた皆少壯氣銳の騷人にして、獨創に富み新樣を賞でたるが故に、守舊派に見る可からざる斬新の妙趣を具へたり。ただこれ等獨得の詩風、いまだその發達の盛期に及ばずしてやみたるを憾みとす可し。はじめしばしは時好に投じて喝采を博したれども、遂に嚴密なる批判の排斥するところとなり、かれ等みな空しく縱橫の奇才を抱きて成すところ完からずして終りしなり。故に此派に對する吾人の興味は作品そのものに在りと言はんよりは、寧ろ其文學史上の意義に存するなり。

十九世紀初期の諸詩人は、さきにも言へるが如く、皆十八世紀主義を破壞して羅曼底格の傾向を詩壇に復活したる者なり。されども其後代に及ぼせる感化に至つてはおのづから多種多樣の觀なくんばあらず、たとへばキイツがテニソンを起しまたロセッティの源をなし、ヲルヅヲルスがアアノルドの尊崇する所となり、スヰンバアンが或點に於てランダア、シェリイと相似たるが如き、大體の傾向に於て各自その趣を異にせるを見る。而してこのスパズモディック派の詩人に至つてはバイロンに負ふところ甚だ多く、情熱の狂飇さながら天を燬くがごとき特色を傳へて、彼の厭世的世界觀に感化せられたるところ甚だ尠からざるなり。また彼等が好んで戰爭・自由主義等を以て詩題となし、矯激の感情を歌へるもの多き、固より當時眼前の問題がこれ等の詩人に大なる興奮を促せしに由るとはいへ、バイロンの影響も亦決して少きにあらざりしを證するに足る。

また『スパズモディック派』（痙攣的の意）の名稱は、もとカアライルがバイロンを評するに用ゐた

る語なり。のち更に轉じてこの詩派に適用せらるるに至りしは、當時の詩人エイタン William Edmondstoune Aytoun が諷刺嘲罵の筆を揮うて此派の弱點を笑ひたる喜曲『ファミリアン』'Firmilian'（一八五四）に此語を用ゐたるに初まる。激情の興奮おさへがたきは、さながら神經過敏の痛苦その極に達して、七顚八倒のなやみ堪へがたきに似たるを諷したるなり。かくてスパズモディック派といふもの固より一群の詩人が相集りて旗幟を鮮明にし、自ら一派の主義を標榜して詩壇に立ちたるものにあらず。ただ時代の趨勢おのづから詩歌に影響を及ぼしたる結果、殆ど時を同じうして同一の傾向を帶びたる幾多の詩人を産出するに至れるを見、傍人が諷戒の意を以てこの一團の詩風に特種の名稱を與へたるものに過ぎず。故に此派に屬する詩人を數ふるに當つて、テニソンにすら一時此風格ありとなし、また前述のクラフをも加ふるなど學者の間もとより說を異にす。唯フイリップ・ジェームズ・ベイレイを以て其先驅となし、更に時を經てシドニイ・ドベル、アレクサンダア・スミスの二人相携へて同一の傾向あるを數ふるに於ては、評家みな說を一にす。なほ或人のいふ如くゼラルド・マッセイをこのうちに加へ、われは更に普通の說に反し、ブラウニング夫人を以て敢て此派に屬すと爲さんと欲す。このほかなほアアネスト・ジョオンズ Earnest Jones, スタンヤン・ビッグ Stanyan Bigg 等の名あれども、群小詩客もとより多く言ふに足らず。

最もはやく此派の傾向をあらはしたる詩人は、フイリップ・ジェイムズ・ベイレイ Philp James

Bailey（一八一六—一九〇二）なり。その作『フェスタス』"Festus" は千八百三十九年を以て世に出で、爾後殆ど六十年間版を改むるごとに增補改訂を施し、獨り英國のみならず大西洋の彼岸に於ても、讃賞の聲極めて喧しかりき。今は詩文の研究者を除きては此作を讀む人少けれども、當時名聲の嘖々たりしは實にわれ等が想像の外に在りしなり。おもふに超凡奇拔なる新聲はしなく時好に投じ、懷疑の暗潮に漂へる民衆の胸に切々の響を傳へたるが故ならん。されど彼の詩才は早熟にしてまた早老なりき。此處女作に於てはやく既に畢世の才藻を傾け盡くししにや、後年の作に至つてはおほかた言ふに足らざるもののみ。そも『フェスタス』はファウストの古說を用ゐてここに哲學の新意を寓したるもの、ゲーテのとはいたく趣を異にして、寧ろバイロンのに倣へるなり。惡魔は其力と智とによりて勝利を占めたれども、一女性の愛着にほだされて遂に人性のあはれを知る。一篇の意は神人の關係を明らかにして、神の惠、靈魂の不滅を說くに在れども、必ずしも哲理の深遠なく、はた詩風の美あるを見ず、今人をしてそが前代の名聲故なきかを疑はしむるものあり。たとへば

"Swearers and swaggerers jeer at my name."

のごとき、誰か之を弱強（アイアムビック）の詩律中に見て意外の感なきを得んや。げに篇中の或部分には、散文を單に詩のさまに印刷したるに過ぎずとおぼしきものさへ多かり。ただ往々にして、

We live in deeds, not years, in thoughts, not breaths;
In feelings, not in figures on a dial.
We should count time by heart-throbs. He most lives
Who thinks most, feels the noblest, acts the best.
And he whose heart beats quickest lives the longest:
Lives in one hour more than in years do some
Whose fat blood sleeps as it slips along the veins.
Life is but a means unto an end; that end,
Beginning, mean, and end to all things—God.
The dead have all the glory of the world.

のごとき篇中の秀句、いまあまねく人口に膾炙したるもの無きにあらざるなり。

此派の人々多くは詩興の奔逸に任せて筆を走らし、激越の調を恣にしたるが故に、時あつて豪壯雄渾容易に他の企て及ばざるが如き妙趣あると共に、また粗奔蕪雜、殆ど論ずるに堪へざる詩句の散見するを見る。ベイレイよりは稍時を隔てて後にあらはれたる此派の驍將シドニイ・ドベル Sydney Dobell（一八二四―一八七四）最もこの風を具ふ。その詩篇に晦澁枯淡の譏を招きたる多くの缺點はあれども、同情あまねく熱意の盛なる、殊に自然叙景の筆に特殊の妙あるは、をさ／＼大詩人に讓ら

ざるの觀あり。かれは千八百五十年はじめて『羅馬人』"The Roman" の曲を公にして、いたく詩界の注目を惹きたり。當時伊太利亞の獨立問題に熱烈の同情を寄せたる歌なれば、其自由を叫びたる抒情詩體の激調ひとしほ鋭く時人の耳に響きたりとおぼし。當時いまだ年若かりしドベルが悲壯豪放の詩風は、さながらバイロンが希臘の爲に呼號するが如く、殊に此篇のうち羅馬のコリシイアムを詠じたるあたりの妙趣は、かの『チヤイルド・ハロルド』中の絕唱、月あかき夜おなじ廢墟に古をしのびたるバイロンの壯調に讓らざるものあり。然れども詩才なほ之よりも一段の進境を示したるは、次の作『ボオルダア』"Balder"（一八五四）なりとす。こは北歐神話に見ゆる平和光明の神、その宮居なる『遍照殿』Briedablik は天上の銀河にありといふ。ひとたび暗黑の夜の神に殺されしが、遂にまた神々の願によりて再生を得たり。これと同じ題目をとりたるもの、近代の英國詩人に在つては、マシウ・アァノルド及び後段說くところのヰリアム・モリスの如きあれども、ドベルのはいたく之等と趣を異にしたるが如し、卽ち材を此神話に借りたれども、飽くまでも主觀的態度を持し、叙事に重きをおかずしてただ當代暗黑の思想界を之によりて歌はんと試みたるなり。卽ち詩人がその自序のうちに言へるがごとく、此篇の主意とするところは、『懷疑より信仰に、また渾沌より秩序に向うて進み行く人心の發展』を繹ぬるに在り。故に結構は稍ブラウニングの『パラセルサス』に似たれども、その深邃なくして晦澁は寧ろこれに過ぎたり。われ等は篇中に雄大宏壯の美を見ること屢々なれども、

また興趣索然たる幾多の詞章に會しては、殆ど卷を投ぜんとする事あり。おもふに此一派の詩人の玉石同架の作品を研究するに當りては、全集の通讀は却て勞多くして得るところ少く、寧ろ豫め鑑識ある學者の所說に聽き、選集拔萃の類によりて其美を味ふを便なりとす。

千八百五十四年からエディンバラに行きて、ここに同好の詩人アレクサンダア・スミスと相識り交情こまやかなりき。その結果として、當時クライミア戰爭に對する感興を歌ひたる合作のソネット集一卷『戰爭の歌』"Sonnets on the War"（一八五五）と題したるもの成れり。ドベルは愛國の至情熾なりし詩人、好んで砲火劍戟のことを詠じけるが、この方面に於てはかれ稍テニソンと相似たるものなきにあらず。その豪壯勇健の調はおのづから此種の詩題に適し、往々にしてかのバイロンがヲータアルウ戰前の景を叙したる章中の名句、

And nearer, clearer, deadlier than before!
Arm! arm! it is—it is—the cannon's opening roar!

——*Childe Harold, III, XXII.*

の豪健を想ひ起さしむるものあるなり。ただ最も詩形の美に細心の注意を要すべきソネットの體としては、押韻の不完全用語の蕪雜に後代の非難を免れざる可し。いま集中より、スパズモディック派詩風の一斑をうかがふに足る可き一首をとりてここに掲げん。

HOME: IN WAR-TIME.

She turned the fair page with her fairer hand—
More fair and frail than it was wont to be;
O'er each remember'd thing he loved to see
She lingered, and as with a fairy's wand
Enchanted it to order. Oft she fanned
New motes into the sun; and as a bee
Sings through a brake of bells, so murmured she,
And so her patient love did understand
The reliquary room. Upon the sill
She fed his favourite bird. "Ah, Robin, sing!
He loves thee." Then she touches a sweet string
Of soft recall, and towards the Eastern hill
Smiles all her soul——
　　　　　　for him who cannot hear
The raven croaking at his carrion ear.

妻が家に在りて征夫を想へる靜けき光景を叙し、急轉直下忽然として戰場の慘景にうつるところ、急

激の變化先づ讀者の意表に出づるものあり。殊にソネット一篇の主たる結句に、carrion といふ語を用ゐたるは凄愴の感むしろ强きに失し、人をして震慄せしめんと欲す。

ドベルと共に此派の代表者たるアレクサンダア・スミス（一八二九―一八六七）は、千八百五十三年はじめて『人生戲曲』"A Life Drama" の篇を公にし、青年詩人の處女作には珍らしき注目を惹き、毀譽褒貶相半ばして一時詩壇に雄を稱しぬ。されど世評が朝三暮四さだまりなきは東西古今その軌を一にす、スミスが後年の作たとへば『都の歌』"City Poems"（一八五七）の詩集のごときには、固より佳什に乏しからずと雖も、後また遂に處女作に得たる名聲なく、寧ろ評壇の冷遇を蒙りて終れり。かれはげにもドベルの長所と短所とを併せ具へ、辭句のわざとらしき、譬喩の多きに失したる、みな此派に常なる缺點を免れず。蓋しかれはキイツ、テニソン等の美を摸して、而かも洗錬なほ未だ到らざるものあればなり。玉石混淆のその作品のうち固より佳句麗章を求むるに難からざれど、長篇はなべて統一を缺き雅醇の趣なし。われは寧ろ其短篇の諸作に光彩ある珠玉の篇を拾ひて、此奇才のおもかげをしのぶべしと爲すものなり、例へば『都の歌』の集中グラスゴウの市を詠じたる篇などは雄麗の妙をつくし、日光を浴びて雲煙の漠々たるに包まれたる都府の美觀を詠じたるごとき、ながく英國の詩歌と共に不朽なるものならんか。

朱書 | Cf. Wilkinson, Some New Lit. Valuation 卷尾

なほ此派の名家に數ふ可きものに、ゼラルド・マッセイ Gerald Massey（一八二八生、現存）あり。千八百四十八年、對岸佛國の二月革命に呼應して英國に起れる Chartists の運動を賛し、革命に闘する詩篇を集めたる詩集『自由の聲、愛の歌』一卷 "Voices of Freedom and Lyrics of Love" を公にし、自由と博愛と人道とのために絶叫したる詩人なり。これを今日に於て考ふれば、民權の伸張ゆたかに國を擧げて太平の和樂を謳歌せる現代の英國の呱々の聲なりと見ることを得べし。マッセイはもと貧しき舟夫の子にして、初等教育すらも完全にうくる事なく、幼時より身を勞働社會に投じ、遂に健康を損うて一家益々困窮に陷り、將に餓死せんとする悲境に臨みたる事すらあり。彼の後年の作 "Little Willie" "The Famine Smitten" などの如き、材をおのれ自らが閲歷にとりたるや明らかなり。此間に在りて閑を偸みては、詩歌歷史哲學旅行記などの諸書に眼を曝らし僅に艱苦を慰めしが、やがて社會問題に意を注ぐに至りしなり。この頃塗炭に苦しむ窮民の慘狀を愬へて之が救濟をはかれるチャラティスツの運動に注目し、またしきりに英國の共和主義者の所説を研究し、之を自己が流離艱苦の生活と對照し來つて得るところ尠からず、遂に勞働者の詩人たるべきおのが天職を自覺しぬ。當時しきりに基督教的社會主義を唱導せるキングスレイとも相識るに至りしが、千八百五十四年 "The Ballad of Babe Christabel" および他の抒情詩を集めて世に公にす、マッセイの聲名一時に高く詩壇に讃美の聲喧しかりき。

かれはまた愛國の熱誠に富みし詩人なり。當時クライミアの戰役に際して壯烈なる幾篇のバラッドを作り、またルイ・ナポレオンに反對して深刻の冷嘲一代を驚かしけるが、これ等の諸作を集めしもの『戰の樂人』"War Waits"（一八五五）『ハヹロック進軍』"Havelock's March"（一八六〇）などあり。晩年は心理學催眠術の研究に心をひそめてまた詩作なし。

轗軻不遇の一生は天才發達のために如何に不幸なりしぞ、而も彼が一生の詩作はまさにこれ十九世紀後半英國史の活畫圖と見做すべきものなきにあらず。クライミアの役に際しては、England Goes to War, Cathcart's Hill, After Alma, Before Inkermann など壯烈のバラッドあり。印度叛亂に當つては、英人の武勇を讃したる『ハヴェロック進軍』（テニソンが同じ題目をとりたる名篇『デフェンス・オヴ・ラックノウ』參照）あり。このほか"Sir Richard Grenville's Last Fight"（テニソンの作"Revenge"參照）のごときは近英のバラッド體の最も秀拔なるものといふ可し。その自由を愛するの精神は、滿腔の同情を捧げてガリバルディを讃し、また匈牙利のコッスートの來遊を歡迎したる熱烈の詞章に窺ふことを得ん。若しそれルイ・ナポレオンを侮蔑したる犀利の諷刺に至つては、英文學の史上之と比すべきもの蓋し多からざるべし。今『二人のナポレオン』の篇より左の數節をかかげて之を證せん。

One shook the world with earthquake—like a fiend
He sprang exultant—all hell following after!

The *other*, burst of bubble and whiff of wind
Shook the world too—with laughter.

The *First* at least a splendid meteor shone!
The *Second* fizzed and fell, an aimless rocket;
Kingdoms were pocketed for France by one.
The other picked her pocket.
*　　*　　*　　*
That showed the sphinx in front, with lion-paws,
Cold lust of death in the sleek face of her,—
This the turned, cowering tail and currish claws,
And hindermost disgrace of her.

——Massey, "The Two Napoleons

かれ曾ておのが詩集の卷頭に序して曰く、『愛の息(いき)に遇ひては焰と燃え、美の存するところ歌をなすもの、そはわが胸にあらん。ああ、さりながらわが作はなほ亂調の琴のみ』と。まことや彼の詩は熱烈の眞情ゆたかに抒情の美はあれども、詩形に於て押韻の亂雜用語の浮華なるを遺憾となすなり。

感情の狂奔にまかせて筆致に誇大粗奔のあとあるは、彼を以てまたスパズモディック派の詩人に數ふる所以なり。

われ今本章を終るに臨んで、ここにブラウニング夫人 Eilzabeth Barrett Browning（一八〇六—六一）を說かん。蓋し世の評家は此女詩人を以てスパズモディック派のうちに數へざるを常とすれども、多くの點に於てその傾向を一にし、詩風おのづから相肖たるものあるがゆゑに、われの此分類は必ずしも正鵠を失したりとなす可らず。もとより夫人の詩才は、ただにクリスティナ・ロセッティと伍して、英國古今の巾幗詩人中最も秀抜なるものたるのみならず、之を他のスパズモディック派の人人に比して、才藻のすぐれたると世の敬重厚かりしとは（夫人はテニソンと共に桂冠詩人に擬せられたる事あり）、寧ろ遙に其上にありと謂ふべし。唯千八百五十年以後卽ち女詩人の晩期の作品に至つては、おのづから時勢の感化を蒙りて最も多くスパズモディック派の弊風を帶び、感情矯激に失して詩形整はず、壯年時代の作に見えたる婉美秀麗のすがた失はれたるを憾とす。げに其家集の三分の一は研究に値せざる劣作なりと、或人の謂ひしも故なきにあらず。またさる評家のごとき、この女詩人を目して『神經患者の女學生』とまで酷評するに至れり。

其詩篇には夫なる大詩人の感化もとより之なきにあらざれども、思想感情すべて女性的なる點こそ其最も著るしき特質なるべけれ。傑作『葡萄牙ソネット集』"Sonnets from the Portugues"（一八

五〇）には女性の眞理を吐露して、能く十九世紀英詩の雄篇をなし、殊に又た『フロレンスなる小兒の塚』の如き作は、母なる人ならでは作りがたき一種の詩情をたたへたる妙いふ可からず。されば深奥幽遠の想を歌ふが如きは決して其長所とするところに非ずして、唯おのが胸のおもひ切なるを自然なるしらべに歌ひ出でし諸篇には、不朽の名作ながく後代の人を動かすに足るもの多し。その缺點はセインツベリイ教授等の非難せるが如く、詩形の推敲未だ到らず用語の蕪雜押韻の不整にあれども、また徒に感情の奔逸にまかせ殆ど神經質の激調をなせる點に非難あり。殊に深沈の想を歌はんとしたる諸篇は動もすれば誇張に失して散漫の弊その極に達し、冗辭全篇のなかばに及ぶものすらあり。かのラスキンが激賞したる晩年の作『オオロラ・リイ』Aurora Leigh（一八五七）の物語詩のごとき艶美の譽を得たれども、猶此缺點いちぢるしきを見る。されどこれやがてブラウニング夫人がソネットに成功したる所以にして、僅に十四行の短詩形おのづから緊縮を要するが故に、素より此の冗語を容るるの餘地なきを以てなり。

女性の詩人にしておのれみづからの戀を歌ひたる者は、我邦の文學には萬葉集の古代より既に其類すくなからざれど、英文學に在つては『葡萄牙ソネット』を以て獨り珍となすべし。げに女性の見地より見たる女性の戀愛は此篇を措きて他に求むべからざるなり。必ずしも思想の深遠なるにあらず、措辭の妙はた遠く沙翁、ミルトン、ロセッティ等のソネットに及ばざれども、おもふにあなる胸のお

もひ女詩人の麗筆に載せられて、戀のあはれはげにも此集に盡きたり。ここに其中なる一篇をかかげて熱情の詩風を示さん。

If thou must love me let it be for nought
　Except for love's sake only. Do not say
"I love her for her smile.....her look.....her way
Of speaking gently,.... .for a trick of thought
That falls in well with mine, and certes brougt
　A sense of pleasant ease on such a day;"—
　For these things in themselves, Beloved, may
Be changed, or change for thee,—and love so wrought,
May be unwrought so. Neither love me for
　Thine own dear peity's wiping my cheeks dry,—
A creature might forget to weep who bore
　Thy comfort long, and lose thy love thereby!
But love me for love's sake, that evermore
　Thou mayest love on, through love's eternity.

—*Sonnets from the Portuguese*, No. XIV.

蓋し此女詩人のすぐれたる所以は、その作にあらはれたる παθος の楚々人を動かすものあるが故なり。これ單にソネットに於て然るのみならず、かの名高き『クウパア墓畔吟』"Cowper's Grave" 或は、工場鑛山などに勞働せる幼者のためにあつき同情の涙を濺ぎたる『小童のなげき』"The Cry of the Children" 等の作を讀みたる者の、ひとしく首肯する所ならん、親子夫妻の愛を詠じ、或は友愛の情を歌ひしものに傑作多きも、全くこの故を以てなり。

幼き頃より彼女は詩作に耽りて、また希臘古詩の美を味ふこと深く、爾後世を終るまで純然たる詩人の生涯を送りぬ。さきにブラウニングの條下にも述べたる如く、千八百六十一年の夏遂にフロレンスの僑居に逝く。げに南歐山紫水明の美郷は詩人夫妻のために第二の故郷なりき。その長逝を悲みたるもの、獨り夫なる大詩人と英國國民とのみならんや、フロレンスの市人は夫人のために碑を建てて深き哀悼の意を表したり、伊太利亞の詩人トマセオその墓誌を撰す、曰く、『エ・バ・ブラウニングが筆をとりしも、また命を終りたるもこの處なり。かれはこがねの歌もて英伊兩國を結ぶ環をこそつくりたれ』Qui scrisse e mori E. B. Browning, che……fece del suo verso aureo snello fra Italia e Inghilterra" と。ブラウニングの大作『環と書』の末尾またこの事を言へり。蓋し女詩人の詩誌『カサ・ギディの窓』"Casa Guidi Windows" (一八四八) のごとき、當時の伊太利革命に對して滿腔の同情を捧げたるものさながらバイロン卿の熱情あるを見れば、この墓碣銘かならずしも過言

にあらざるを知らん。

第六章　ラファエル前派（P・R・B・）

第一節　詩人ロセッティ兄妹

序說――ラファエル前派の起源――ラスキンの所說――此派の特質――中世尊崇――文藝史上ロセッティの地位――南歐の血統――ダンテの名――幼時の素養――ラファエル前派創立――こひ妻――その死――急激の神經性――詩集發掘――『肉感詩派』の攻擊――晩年――南歐中世――超世高蹈の詩人――『驚異の復活』――繪畫と詩歌――ソネット體――『生命の家』――その中心思想――其序歌――戀愛詩――此集の特色――讚賛のソネット――バラッド體――此體の名作――『在天聖女の歌』――其抒情詩――哲理冥想の詩篇――伊太利詩歌の飜譯――佛蘭西詩歌の飜譯――古語の復活――聲調の美――ダンテの感化――戀愛觀――ピイアズ氏の說――散文の著『手と靈』――女詩人クリスティナ・ロセッティの閱歷――シモンズの批評――其宗敎詩――敘事詩――象徵詩――詩人兄妹

科學が空前の發達をなしたる影響として、純理を尊重するの風遂に思想界に瀰漫せんとするや、反抗の勢また從つて玆に起りぬ。卽ちかの牛津運動（オックスフォード・ムウヴメント）に、熱情の信念を主張し敎會の權威を重んじて、

批評的自由神學を斥けんとせる高僧ニウマン一派の呼號のごとき、まさにこれ偏理沒情の信仰に對すろ教界不滿の聲に外ならざりしなり。而してこの運動と殆ど時を同じうし、また其根本的精神を一にして、藝術の方面に現はれたる一派の活動、これ即ちラファエル前派の結社なり。蓋し人間の理性の方面をのみ偏重せる一世の傾向に反對して、想像を重んじ美感を貴び、枯淡無味の現代をのがれて空靈縹緲たる中世の風尙を復活せんとし、科學萬能の時勢に反抗したるは二者全く其趣を同じうしたる者あり。

そもラファエル前派（The Per-Raphaelite Brotherhood 略して、P.R.B. と署す）といふは、詩歌よりは寧ろ先づ繪畫の方面に於て、藝苑に新奇獨創の風を起したる一派の稱なり。はじめ千八百四十八年ロセッティ、ミレイ John Everett Millais, ハント William Holman Hunt 等三人の青年畫家は、同じ主義を標榜して後素界に羅曼底格の新派を起しぬ。蓋しラファエル以前の南歐術藝の神韻をよろこび、麗織巧緻の風を斥けて自然の靈興湧くが如きを貴び、典雅の古代精神を棄てて眞情の美を愛したるは、即ちこの名稱ある所以なり。おもふに文藝復興期のラファエル以前の古畫（ことに宗教畫）は、色彩陰影の微になほ到らざるところ多く、形態整はずして技巧の幼稚なるはあれども、蒼古簡朴のすがたゆかしくてゴシック風崇嚴すてがたきのみか、また敬虔の精神あふるるばかりの妙趣に富む。さながら自然のままに生ひたる野薔薇のすがたけだかく香ゆかしきが如く、或はことばもおぼ

つかなき童の語るを聞きて、たとしへなきあはれを覺ゆるに似たり。この派創立の源を考ふれば、ハントとロセッティ或るときミレエの家に會して、古へのゴッツォリ、オルカニヤ等の壁畫（伊太利ピサなる墓所「聖野」(カンポ・サントオ)に在るもの）を版にしたる畫帖を手にせしにはじまる。而して此畫帖こそはさきにキイツやリイ・ハントの心を奪ひて、高遠の韻致よく熱情の詩人を醉はしめたるものなりき。

ラファエル前派の活動は、やがてこれ新羅曼底格(ロマンティシズム)主義の勃興なり。さきにヲルヅヲルス等の『抒情詩集』にはじまりたる此風潮は、更に遷りてテニソンの詩才によりて大成せられ、再轉して遂に此ラファエル前派に清新の熱意を加へ、繪畫と詩文との二界に跨れる藝苑の一大勢力をなしぬ。蓋し徒に古式古法を墨守して、粉飾の末技遂に藝術の眞意を逸せんことを憂ひ、當代の人を戒めて『爾みづからのまなこもて自然を觀よ、而してみたるところを畫けよ』ととなへたる豫言者は、實に『近代畫家論』の著者ラスキン其人なりき。かれ今教へていふ、單純の心もて自然を求めよ、而して自然の意を洞觀せんがためまめやかに之に仕ふべし。何者をも棄つるなく擇ぶなく、さげすむ事勿れと。げにも此偉大なる評家が、古今にたぐひ稀なる流麗明快の文を以てしたる所説こそは、ラファエル前派のために萬軍の援を得せしめたるものにして、また其創立を促したるものと謂ふべきなり。卽ち二者は相俟つて理論と實行とに、文藝復興期以後の藝術の風に反抗して、新羅曼底格の派を起したるものに外ならず、おもふにラファエル以後の繪畫は自然を離れて美を求め、畫かれたる人物は既に圓滿に想化

せられて眞相の見るべきなく、宗教に關する題目をとれるもの美は卽ち美なれども、敬虔なる至情のまことは遂にもとむべからず。之に反して其以前卽ち南歐中世の繪畫に至つては、理想的傾向よりは寧ろ寫實の風を帶び、また毫も古式の束縛を蒙らずして直に奔放の熱情を披瀝し、唯まごころを以て美をありの儘に描き出さんと試みたるもの、之を和歌にたふれば古今集以後の纎麗なくして、萬葉古詩の蒼古を見るがごときなり。げにも中世の繪畫は自然を描きてここに眞情を托したるもの、單純簡素の特色は中世基督教の精神と相交りてここに神韻縹緲の美をなしぬ。今や久しく顧みられざりしこれ等古畫の精神を激賞して、藝術の界に自然と熱情とを鼓吹したる絕大の評家ラスキンと、及び中世建築の宗教等の精神を復活せる牛津運動とは、相共にラファエル前派の藝術を生み、これ等は皆互に脣齒輔車の關係をなして、當年の純理冷索の思想界に反抗するに至れるなり。おもふにこれ皆、かつて冷靜枯淡の理義を重んじ情熱の美を顧みざりし前代に於て久しく蒙昧闇黑の世として無視せられたる中世が、輓近の想界に於ける歷史的意識の勃興に伴うて、遂にかかる一派の注意を惹き起したるものに外ならず。換言せば、上帝を信じ天堂にあこがれ、毫も近代民心の懷疑的風潮を見ずして全く羅馬敎會の教義を以て源泉とせる中世思想が、今や猛然として科學至上主義に對抗し來れるなり。しかのみならず、また別に當時漸く學界の一方に盛ならんとせる文獻學の發達は歐洲中世の國語の精緻の研究を積みて、おのづから其の文化を近代に傳ふるに與つて大に力ありし事をも忘るべからず。かく

の如くにして藝術に清新の氣を吹鼓せるラファエル前派は、この頃に鬱勃として起り來れる中世尊崇の精神にはぐくまれて、遂に藝術界に共堂々たる旗幟を掲ぐるに至れるなり。

藝苑の新勢力たるこの派の始祖ロセッティは、獨り近世畫界の巨匠たるのみならずして、實に詩壇における曠世の大才なりき。畫よく詩のこころを寫し、詩よく畫の精神を傳へ、有聲の畫は無聲の詩と相俟つて、共に十九世紀後半の英國藝術に清新の趣味をはじめ、新維曼底格傾向を起したる偉人なり。上來いくたびも述べたるが如く、中世主義は詩歌の方面に於て、既に十九世紀初期の大詩人キイツ、スコット、コウルリッヂ等の作に顯著なる復活を見、次いでテニソンの諸作にも亦ラファエル以前の藝術の趣致を寓せたる著なきにしもあらず。されどもこれ等はみな未だ中世の熱情神祕の美を精査して深くここに參する事なく、中世主義の靈興を感得して能く之を近代に移植するに至らざりき、之をなしたるは即ち畫家詩人ロセッティにはじまる。

詩人として、ラファエル前派の翹楚ロセッティはキイツの傳統を承けたる人なり。すべてを棄ててただこれ美をのみ重しとする藝術至上主義を奉じ、所謂 *l'art pour l'art* の主張を以て戀愛の熱情を歌ひ、中世思想の妙香に醉ひたるかの薄倖の詩人に、ロセッティは私淑したるなり。スコット、テニソン等の歌へる俠勇壯烈の景情には疎くして、ロセッティは寧ろかの中世の人の胸ふかく潜みたるたとしへなき深奥幽婉の熱情を慕ひ、シェリイの夢幻的傾向を逐はずしてキツィの感覺美を傳へたるなり。

かくの如くにしてその曠世の天才は、繪畫に於てハント、ミレエ、バアン・ジョオンズ等に偉大の感化を與へ、遂に彼等をして出藍の譽をなさしめたるが如くに、詩歌の方面に於ても十九世紀後半の大詩人の作に歴々たる反響を與へ、熱烈濃艶の詩社ひとたび起つて騷壇に曠古の偉觀を現じぬ。たとひ其詩集は千八百七十年に至るまで公刊せられざりしと雖も、はやく既に交友の間に行はれたるがゆゑに、モリスの處女作(一八五八)に著るしき感化をあたへ、殊にスヰンバアンの『ポエムズ・エンド・バラッヅ』(一八六六)にめざましき影響を及ぼして、格律の妙、色彩の美遂に評壇の耳目を奪ひぬ。

南歐中世の風格著るしきロセッティが藝術の眞趣を解せんと欲する者は、先づ特に彼の血統に注目せざるべからず。その名の示すが如く彼は純粹なる北歐英國の人にあらずして、アルプス山南美鄕の民の血を承けたり。父の代より英國に歸化し、英國に教育せられ、全生涯を英國に送りたる伊太利亞の人なり。十九世紀のはじめ戰雲遂に南歐の樂土をも蔽うて國事多端なる頃の事なり、愛國の至誠遂に祖國に容れられずして罪をネープルスの政府に得、ひそかに國を逃れてあはれ流竄の身となり、杖を英京に止めたる亡命の一孤客ありき、名をガブリエレ・ロセッティといふ。このひと詩に巧にまたダンテ學に精しく、かつ其博識なりしはネープルス博物館の宰たりしによりて知らるべし。宗教に關する詩歌をあつめたる『福音の琴』"L'Arpa Evangelica" の著あるのみならず、遂にまた倫敦大學の講座に上りて祖國の言語文學を講じぬ。然るにかれまた伊太利亞詩人の女にして英伊混血の一婦人

を娶り、二男二女を擧ぐ。わが畫家詩人ダンテ・ゲブリエル・ロセッティは實にその長子にして、弟ヰリアム・マイケル・ロセッティいま古稀の齡を越えてなほ現英評壇に一方の雄を稱す。二女のうちマリア・フランチェスカ・ロセッティは『神曲』を論じたる一名著に其名をとどめ、女詩人クリスティナ・ジョルジナ・ロセッティこそ其妹にてありしなれ。かくの如くにしてロセッティ兄妹は其脈管に四分の三の伊太利亞人の血を傳へたるのみか、その父かたよりも母かたよりも共に南歐詩人の血統を導きたるなり。ああ嶺南沃野の花はしなくも北歐の藝苑に移されては、よしや百花繚亂のなかなりとも、ここにたぐひなき色香のひときは秀でて時人の心を惹きたるも、げに故あるかな。

ゲブリエル・チャアルズ・ダンテ・ロセッティ（のち教名(クリスティアン・ネイム)の順序を更へて Dante Gabriel Rossetti といふ）は、千八百二十八年の春五月英京に生れし人なり。其名にダンテの文字あるは、父がかの『神曲』の大詩人に對する尊崇敬慕の至情あつきあまり、之をおのが長子の名に冠したるなりと傳ふ。而して恰かも此嬰兒長じて遂にダンテの遺風を近英の詩壇に復活したるも奇ならずや。ロセッティは正式の學校教育を受くる事少なく、また固より大學の課程を履まず。かれが殆ど希臘語に通ぜずして、徹頭徹尾古典文藝の趣味を排斥したるは、由來するところ多少この點に存すといふ可し。幼にして天稟の才すでにその鋒鋩を露はし、十五歲の頃遂に畫家たらんと決心して美術學校に入り、のちマドクス・ブラウンの畫室に入りて益々後素の技を磨きぬ。かくて彼が詩文に關する素養は全く自

修によつて得たるものにして、幼少すでに能く英伊佛の國語に精通したりしのみならず、文藝の才藻すでに後年の特色を示しぬ。而して彼が時代の趨勢に反抗して、あくまでも科學萬能主義を斥けたる特質は、おのづから旣に幼時の嗜好にあらはれ、哲學科學の枯淡冷靜なるを忌みて、繪畫音樂詩文の類にのみ心を注ぎたりき。

彼がはじめて聲名を博したるは、繪畫の方面に於てなり。千八百四十九年ミレエ、ハント等と共にはじめてP・R・B・の社を結びて、同人の畫幀を以て展覽會を開くや、奔放なる斬新奇聳の風格は遽然として一代の耳目を聳動せり。翌年また更に雜誌"Germ"を創刊して『自然の簡朴を重んず』といふ此派の主張を明らかにし、盛に藝苑の一方に新しき羅曼底格主義を標榜するに至れり。此雜誌は僅に四號にして廢刊の厄に遇ひたれども、ロセッティ兄妹ここに幾十篇の秀什をかかげ、うちにもかの『在天聖女』の歌（かれ十八歳の時の作）や、散文小說『ハンド・アンド・ソオル』のごとき名篇は、はじめて此誌上に於て世にあらはれたるなり。たとひ科學的文明に眩惑したる當代凡俗の冷遇をうけたりしと雖も、鑑識ある少數の人々はこの驚く可き新聲の美に醉ひてP・R・B・の詩風すでに隱然たる偉大の感化を當時の靑年詩人に與へたりき。

ロセッティが孜々として丹靑の技を勵み、畫家としての名聲すでに大に揚れるころ、千八百五十年、モデルの婦人に一商賈の女エリザベス・シッダル Elizabeth Siddall といふ美女を得たり。この

ひと能く藝術の趣味を解し、みづから好んでロセッティのためにモデルとなり、彼の名畫にあらはれしビアトリスや聖母のすがたに寫されて、ながく麗容を不朽につたへたり。かくて同じ道に好み深きふたりがなかには、いつしか切なる相思の情やみがたく、のち十年にして遂に華燭の典を擧げ、相携へて共に巴里の都に遊ぶ。これよりロセッティが妻に對する熱愛は日に益々深きを加へて、さながら天使に對する尊崇思慕の情にも似たりしといふ。此頃かれ頻に詩作に從事し、『伊太利古詩人』"The Early Italian Poets"（千八百七十四年の改版には、"Dante and his Circle, with the Italian Poets preceding him" と題したり）の飜譯あるほか、妻の好みに任せて當時つくり出でたる幾多の詩篇、みな萬古に傳ふべき秀什にして、いま實に其家集の大部分を占むるものなり。

されど定めなき世に樂しき花のながめは長からで、ロセッティが滿腔の熱情を捧げたる妻は後僅に二年にして不歸の客となりぬ。詩人のいひしらぬ悲みはその極に達して、いまは氣も心も消え失せなんばかりにぞ打ち萎れける。さきに妻を喜ばしし歌の集、ひとりさびしき此世に殘りたればとて今はた何の用ぞ、過ぎし日のおもひでの種なるもなか〳〵に苦しければとて、遂にこの詩を柩のうちに置きて共に寺院の庭に葬りぬ。夫の熱情の歌のひとまきを枕して妻はとはに眠れり、その『こがねなす美し垂穂のたれ髮』はふさやかに詩卷を蔽ひつ。妻が歸らぬ旅路を慰めんにはこよなきしろなれど、かくては空しく千古の麗章遂に世に滅ぶを如何にせん。或人この事を傳へしるしていふ、『ロセッテ

イはその愛と共に、その夢想その榮譽をも併せて妻と共に葬りけり』と。

のち數年やるせなき悲嘆に亂れし心も漸くをさまりては、ロセッティまた丹青の技に其彩毫を揮ひて怠らず。うまれながらにして過敏なる神經性はこの頃益益その度を高め、加ふるに眼を患ひて殆ど盲目ならんとし、また烈しき不眠症になやみぬ。しかのみならず閑居して殆ど交遊を絶ち、沈鬱の性情は益々甚だしき病的傾向を示したり。かくて彼にブラウニングの剛健を見ず、テニソンの溫藉なきは、おのづから其體質の然らしむるところなきにしもあらず。たとひ十九世紀末大陸のデカダン文學とはいたく其趣を異にしたりしと雖も、すべてラファエル前派の詩人に多少歐洲近時の病的傾向ありて、所謂 *morbidezza* の美あるは、否定すべからざる現象たるを見る。これ獨りロセッティに於て然るのみならずして、其妹なる女詩人クリスティナやまたスキンバアンの蒲柳の質も、みなおのづから急激過敏の神經性となりて、其特得の詩風を起したるにあらざるか。さてロセッティは斯くて病のために已むことを得ずして、遂に繪畫の筆を捨つるに至りたれども、其一代の逸品たる幾幀の名畫すでに世に出でて稱讚の聲たかく、畫界に於ける彼の大業今やすでに成れるの觀あり。獨り詩人としてはかれ猶未だ其天職を盡くすに至らず、單に一部の交友の間に及ぼしたる偉大の感化を除きては、詩壇なほ此畫堂の大詩人を知るものあらざりき。

丹青の彩毫をすてたるロセッティいま更に詩筆をとりぬ。さきに妻が世を去りし時より絶えて此道

に遠ざかりし幾年間蘊蓄し得たる詩思ひとたび發しては、幾篇の麗章今やたちどころに成れり。是より先き、彼の感化を蒙りたるモリスの如きスヰンバアンの如き、既に其大作を公にして詩壇に盛名を馳せ、群小の騒客も亦各々其才華を競へるあり。ここに於てロセッティもおのが詩集を公にせんとするの意盛なれども、舊作は皆すでに亡き妻のおくつきに葬られたるを如何にせん。之を取り出さんにも、英國に在つては墳墓發掘は國法の禁なり、況んや愛妻の屍を辱むるをや。ロセッティは斯くて苦悶し狐疑してしばし決するところなかりしが、遂に知友の盡力により法定の手續を了し、亡き妻の墳墓を掘りてここに其詩集を得たり。もとより彼みづから其場に臨まんはさすがに堪ふる所にあらざれども、妻の麗容このとき未だ朽ちずして、金髪なほ過ぎし日の如くに詩卷を蔽へりしと傳ふ。かくて十九世紀の大詩篇は、地下に埋沒する事八年の後遂に世に出でぬ。剞劂に附したるは千八百七十年なり、題して『詩集』と云ふ。

詩集あらはるるや、幽眸の新聲は忽ちにして世を驚かしぬ。既に繪畫によつて彼の風格を賞したる英國當代の藝苑、いままた其有聲の畵に同じ神祕情熱の靈趣をよろこび、此畵家をして一躍大詩人の列に入らしむるに至れり。されども其翌年の末つかた、評壇の一隅に先づ非難の聲あらはれ、匿名を以て激烈の攻撃を此詩人に加へたるものあり。固よりそは藝術そのものの批判にあらずして、詩題の選擇描寫の法に對してかの東西いづれにも多かる道學先生の說なりき。熱情を恣にし道義の制裁を顧

みずして、キイツなどのやうに感覺美を重んずる極端なるこの羅曼底格派に對する誹謗の聲は、これより先き既にスヰンバアンの詩篇に加へられしもの、今ロセッティの詩集出づるに及んで非難の聲更に高し。集中の麗章、ことに "A Last Confession," "Nuptial Sleep" のごとき熱烈の新調は、道學の徒をして顏色なからしむるものあればなり。詩人にしてまた散文の名家たるロバアト・ビュカナン Robert Buchanan のごときは、千八百七十六年の『肉感の詩派』"The Fleshly School of Poetry" と題したる評論を公にし、盛にラファエル前派の詩人を攻撃したり。藝術の眞意を解せずして猥に詩文に容喙せんとするこれ等枯淡なる道學の徒に對して、ロセッティは果して如何なる態度をとりしか。わが明治の一女詩人がやは肌のあつき血汐にふれても見でさびしからずや道を說く君(『亂れ髮』)の痛切、歌にきけな誰れ野の花に紅きいなむおもむきあるかな春罪もつ子(同上)の奔放を以て、これ等の評家に報いざりしとは雖も、彼はおもむろに一篇解嘲の文を草して之を公にし、『詩は肉感の趣味あるを妨げず、否な當にあるべきなり』と主張して之に答へぬ。スヰンバアンまた激烈なる得意の散文を以てビュウカナン等を反駁したるあり(後段參照)。新派の盛名を嫉み一徒に毒舌を弄したるビュウカナンの徒、たとひ自らに二三の佳作ありとするも、詩才識見もとより遠く此二詩人に及ばざるは明らかにして、其非難のごとき豈深く顧るに値せんや。

戀妻を失ひてよりは胸奧のなやみ安らかなる日もなきに、また其精苦の作はかかる非難を蒙むるに

至り、懊惱苦悶やるせなく、唯さへ過敏なる其神經性に激烈なる刺戟を蒙りぬ。不眠症の苦みを劇藥に忘れんとして却て益々其健康を害し、千八百七十二年の頃よりは病勢なほ更に加はりて鬱憂狂となり、自殺をさへ企つるに至れり。されど後少しく健康を回復するに及んでは、また營々として製作に從事し、繪畫に於て『ダンテの夢』『プロサアピナ』の大作成り、詩歌にまた『しろぶね』『王の悲劇』の雄篇を產しぬ。然れども此精苦勵精再び其健康をそこなひて病を得、遂にまた起たず。千八百八十二年の初春、亡妻のあとを慕うて天堂に急ぎぬ。ああそこなるおばしまに倚りて、地上のわが戀君はやく來ませと待ちわぶる "The Blessed Damosel" のおもひや、斯くて遂にかなひたりけん。死するに先だつ一年、晩年の諸作を集めたる "Ballads and Sonnets" 世に出づるや、こたびは嘖々たる讃稱の聲もて詩壇に迎へられぬ。

たとひ足は未だ嘗て嶺南の地を踏まざりしと雖も、生來すでに南歐民族の血統をうけたるロセッテイは、詩歌に於ても繪畫に於ても、北人に常なる深沈冷靜の傾向少くして、熱烈の風濃艶の體おのづから一家の特色をなし、幽婉縹緲さながら異香の人を醉はしむるが如き妙を具ふ。而して中世を尊崇思慕することのあつきは凡べての作品に著るしく、彼やまことに身は英京熱鬧の巷にあれども、魂は遠く南歐中世の代にたちかへりて、ダンテが世に在りし日のフロレンスにやさまよひたりけん。或はまた夢は通ふ十二三世紀の佛蘭西やパレスタインに、枯淡無味の現代を忘れんとしたりしものか。十

九世紀の英京汽笛の音すさまじう、肩摩轂撃のものさわがしきに、彼は毫も心をとどめざりしなり。

ロセッティはげにも時勢を超越したる高蹈の詩人なり。ダアヰン等の進化論に起りたる科學の發達、近代の道德說、民主主義の政治論、商工の進步、みな彼に於て全く何の關するところあるなし。ロセッティはまた宗教としては固より中世の羅馬加特力教の上に同情を寄せたる事勿論なれども、冷索の哲理を顧みざりしが故に近代懷疑の暗潮に觸るる事もあらざりき。平生手にする所の書册多くは妖怪神祕の物語にして、科學の如きは其最も忌むところなりき。嘗て謂へらく、『地球が日をめぐりたりとて、日が地球をめぐりたりとて、何の關する所かあるべき』と。世を擧げて近世人文の新しき現象にまどひ、諸種の問題に解決を得んとして熱中狂奔せる間に、超然としてわが畵家詩人は獨りこの枯淡無趣の時勢をよそにして、遠く中世の天地にあこがれ、神祕夢幻の美をさぐり、ここに天樂の妙音かすかなるを耳にして、微趣幽韻ちかき代に求めがたき美を味ひぬ。現存の大家シオドーア・ワッツ・ダントン氏もまた、詩文二界に跨りて盛名ある此派の偉人なり。このひと曾てわが畵詩人を論じて、近英詩文の一大傾向とも謂ふべき『驚異の復活』The Renascence of Wonder が、ロセッティに於て實に共最高潮を極めたる由を論じたり。おもふに詩界の新潮は初めかげ幽なる林間に出でて、流れてはよどみ、淀みては流るるいささ川、もみぢ漂ふと見ればまた月を宿し、花浮ぶ事あればまた更に漣に星ぞきらめく。やがては急湍激流に注ぎて遂に洋々の流をなし、またわだの原澎湃たる狂濤

の勢すさまじきに至るを常とす。余がかみに述べたるが如く（第一章第二節參照）、羅曼底格派の著るしき特徴たる『驚異復活』は英詩に於て先づ十八世紀のバラット體の復興を以てはじまり、パァシイの『古歌拾遺』『オシアンの歌』或はチャタアトンの詩歌にあらはれ、次いで其怪異奇古の精神をコウルリッヂ、スコット等革命期の諸詩人に傳へ、ここにひとたび急激の勢を增して、流風遺韻さらに著るしく後のテニソンに及べり。即ちその作、『シャロットの姫』『サア・ガラハッド』『聖アグネス』『眠れる美女』『マリアナ』の如きは、蓋しワッツがここに所謂『驚異復活』の好適例にあらずや。されどテニソンは固より時勢の傾向に從へる近代の代表的詩人なるが故に、この中世趣味の復興に於てはなほ到らざるもの多し。之を助長し之を完成して萬丈の光焰をあげたる者は、即ちわがロセッに外ならず。遠く現代の風尚を超脫したる彼の思想は、遺憾なく其特色ある藝術にあらはれ、之に接する者をして、さながら夢寐の間龍頭鷁首の舟に棹さして神仙の美鄉に迯らるるの想あらしむ。その詩歌はまことに南歐中世の詩人ことにダンテの遺風を、十九世紀の英詩に復活したるものに外ならざればなり。而して單に之を英詩發展のあとより考ふれば、ロセッティの詩篇はまさにブレエクの神祕幽奧の遺響を傳へ、キイツの『あはれみなき美女の歌』、コウルリッヂの『クブラ・カン』『クリスタベル』などに、偉大の感化を蒙りて起れるものと謂ふべきなり。僅に數語のうち、能く羅曼底格趣味を綜合し得たるかのキイツの名句に所謂

……magic casements, opening on the foam
Of perilous seas, in faery lands forlorn.

——*Ode to Nightingale*, VII.

の景情は、ロセッティの詩歌の根本精神をなすものと謂ふべき乎。

おもふに畫人にしてまた詩客を兼ぬるもの、その作品にはおのづから畫趣詩體相おなじきものあるを見るなり。わが國の謝蕪村が豪放の畫風は、俳句に於ても亦『梅さきぬ、どれがむめやら、うめぢややら』の警句を喝破して、古來繩墨の桎梏を脱し、高遠の韻致を重んぜんとしたるのみか、更に、その詠ずる所往々にして詩歌の界を脱して造形藝術の域にせまり、『一行の雁や端山に日を印す』の如き一幅好畫圖の觀をなし、眞正の意味にていへる word-paintings たるもの甚だ多し。而して同じ特色はまた之をラファエル前派の畫詩人に於てみとむる事を得ん。卽ち彼の根本精神たる中世主義 Mediaevalism は繪畫に詩篇に生氣躍々たる活動を見、在來の詩格の束縛を破りてまたテニソンの纖麗に倣はず、其詩篇は著るしく繪畫の趣をなして、色彩の豐麗風韻の幽婉に於て、畫と詩と殆ど趣を等しうしたるものあるなり。殊に法式を脱して、精緻の筆能く表精の巧を盡くしたるを以て其特色となす。近英散文の大家ペイタアはこのP・R・B・派に關係あさからぬ偉人なり、かつてロセッティを評していふ、『誠心摯實の風すでに其初期の作にも著るしく、そはやがて直截にして法式に拘泥せざる

表現となりぬ』（ペイタア『鑑賞論』二〇六頁）と、而してこれ實に彼がラファエル以前の南歐畫家に蒙れる感化によれるなり。

此畫詩人の作中、南歐趣味の最も著るしく現はれたるは其ソネット集なり。かつてリイ・ハントが謂ひけん如く、英文學の史上詩歌發達の盛期には、伊太利亞詩人の感化甚だ大るを常とす。古くは先づ『英詩の曉星』チョオサアの頃より、處女王朝の沙翁スペンサアの代はいふまでもなく、近世の羅曼底格時代に入りて此現象は益々著るしく、ロセッティに於て最も顯著なるを見る。而して伊太利亞詩歌の美は、實にペトラルカ、ダンテ等の豐麗なるソネット體に於て其極致に達したるものといふべく、わがロセッティこの詩體に於て曠古の絕品をなしたるもまた怪むに足らざるなり。おもふにソネットは其起源甚だ古く、はじめ南歐熱情の民が琴笛のおとかすかなるに合はせて歌ひし小曲なりしが、遂にペトラルカの詩筆にのぼるに至つてここに其大成を見、劃然たる特殊の詩形をなすに至りしなり。後代英伊獨佛の諸詩人また頻に此體を試みて、律格押韻に各々皆多少の變更を試みたり。英文學に在つては初め十六世紀の中葉、トマス・ワイアットとヘンリイ・ハワアド（サレイ伯）の二詩人この新體を伊太利亞より傳へてペトラルカの詩風を學びたるに起る。のち沙翁ミルトンまた其大才をここに試めるに及んで、英詩におけるソネットの地位遂にながく定まりぬ。近代に及んでは先づヲルヅヲルスの諸篇にめざましき發達をなしてより、羅曼底格の諸詩人しきりに此短小詩形を用ゐて紅恨紫

怨を托し、現代に至るまでなほ此體の名家甚だ尠しとなさず。十九世紀の英詩に於ては、かのブラウニング夫人の『葡萄牙ソネット』戀のあはれを盡くして、古今の絶唱たるを失はざれども、之をわがロセッティの諸篇に比す、詞藻聲調の美に於てなほ及ばざること遠きを見る。

ソネットの體は人の知るごとく強弱五脚音（アイアムビック・ペンタミイタア）すべて十四行より成れる短詩形に、一個完結したる思想を歌はんとするものなり。起句（オクテエヴ）の四行（クオトレン）ふたつと、結句（セステット）の三行（タアセット）ふたつ、すべて四部に分たれ、其各部内容の關係は、さながら漢詩の絶句における起・承・轉・合の如きなり。殊に押韻は嚴密の方式あるが故に、伊太利語の如く母音の變化に富みたる國語には適したれども、押韻に不便なるテュトニック語ことに英語の如きを以てして、なほ嚴正の規範に從ふは其困難實に名狀す可からざるものあり。これ英國古來の詩人が、伊太利亞體の形式に皆多少の變更を試みたる所以に外ならず。而して此體の特色たるや、長篇に寫しがたき隱約機微の麗想を捉へて、之を簡潔の詞章に托するに在れば、もとより片言隻句の冗漫を許さざるのみか、殊に内容と外形との調和に於て一點の缺くる所あるべからず。その美はげに萬朶の花、雲の如きながめにはあらで、一輪のさうびにゆかしき色香を賞づるが如く、或はまた微瑕なき珠玉の光彩燦然として人目を奪ふにたとふべし。妙想おのづから海潮のしらべをなして、詩人が鏤心刻骨の技にうつされ、

A sonnet is a wave of melody:

From heaving waters of the impassioned soul
A billow of tidal music one and whole
Flows in the "octave;" then returning free,
Its ebbing surges in the "sestet" roll
Back to the deeps of Life's tumultuous sea.

といふが如き精妙の域に入るを要す。これ決して凡手の企てがたき至難の體にして、むかし佛蘭西のボアロオが『瑕なきソネットは長詩に値したり』といひたるも宜なり。而してロセッティは沙翁のごとくに古式を破る事なくして、大體に於て嚴密なるペトラルカの規格を守りて、古今に比なき此體の名家たる、この一事すでに能く彼が秀拔の詩才を證するに足らん。

かれのソネット集（一八八一年刊行）は、古の星占家（アストロロジャア）が人の運氣を天上の十二座に配したるその第一『生命の家』"House of Life" とをいふをとりて、表題となしたり。收むるところ凡べて百有一篇、わかちて二部となす。初め五十九章を『青春と變化』（ユウス・エンド・チエンジ）と題し、後の四十二章を『變化と運命』（チエンジ・エンド・フエート）といふ。製作の年代は皆一様ならずして、まだうらわかき二十歳の頃よりして其晩年に至るまでの諸作を集めたるもの、まさにこれ彼が心靈生活の歷史にして、ロセッティ自ら前後三十有餘年にわたれる詩人的生涯の内面を語れるものと見るべし。そも世の人かれを呼んで "A great lover" といふ

は、熱烈の戀愛この多感なる詩人の生命なりしをいへるなり。おのが滿腔の熱情を捧げ盡くし、戀妻はやく世を去りてやるせなき悲哀に沈みし物語は既にかみに述べつ、其傳記はげにも此女性を慕ひし一篇の戀物語、喜憂哀樂のさだめなきその折々に胸の思をやりし歌のかず〱は、即ち此集『生命の家』に殘りたり。故に全篇おほかたは彼の熱烈なる戀愛觀をうつしたる書にして、はじめは血汐湧きたつ青春の胸のおもひ盛に、こころは希望の光に輝きしかど、享樂の夢はまどかならず戀妻の死に會して、はしなくここに人間生死の大問題に觸れて、鬱憂悲哀の感益々深きを加ふ。されどやがてまた闇黑のうち一道の光明をみとめ得て、心は再び安靜の境に入る。これ實に集中のソネット百有一篇の中心たる思想をなせり。

　卷頭先づソネットの性質を說きたるうるはしき一篇あり。ソネットを以てソネットを說明したるもの近代の詩歌に其例乏しからず、さきにはヲルヅヲルス、のちにはワッツ（前段に引用せるもの）の如きに名作あれども、皆ロセッティの此序歌に比していたく遜色なき能はず。冒頭なる

A sonnet is a moment's monument,—
　　Memorial from the soul's eternity
　To one deal deathless hour.

の語は、佛蘭西のミュッセエが『詩とは何ぞや』といふ即興詩に、

Chasser tout souvenir et fixer la pensée
Sur un bel axe d'or la tenir balancée,
Incertaine, inquiète, immobile pourtant;
Éterniser peut-être un rêve d'un instant;

といへるこの『恐らくは刹那の夢想を永劫に傳ふ』の句を摸したりとおぼしく、『生命の家』一卷これ自己心情の發展を告白せる胸奥の聲なるよしを、先づ此序歌一篇の趣意にほのめかしたるもられし。

卷中の諸篇、或は繪畫の風あるもの或は瞑想の餘に成るもの、之を譬ふれば燦爛の光もまばゆき百有一篇の珠玉をつらぬるに、劈頭第一歌『戀の高御座（たかみくら）』"Love Enthroned"の麗章を置きたるは、先づひときはすぐれし靈光に衆目を奪はんとにや。全卷の中心思想たる彼の戀愛至上主義は典麗の辭にうつされて、げにも此一章に盡きたりとおぼし。いはく、

I marked all kindred Powers the heart finds fair:—
Truth, with awed lips; and Hope, with eyes upcast;
And Fame, whose loud wings fan the ashen Past
To signal fires, Oblivion's flight to scare;

And Youth, with some single golden hair
  Unto his shoulder clinging, since the last
  Embrace wherein two sweet arms held him fast;
And Life, still wreathing flowers for Death to wear.
Love's throne was not with these; but far above
  All passionate wind of welcome and farewell
He sat in breathless bowers they dream not of;
  Though Truth foreknow Love's heart, and Hope foretell,
  And Fame be for Love's sake desirable,
  And Youth be dear, and Life be sweet to Love.

『情(こゝろ)の美(よ)しと見たりし似たる力すべて、』眞理、希望、青春、生死の界すべてを超越して戀愛は獨り神祕幽遠の域に在りといふ此思想は、既に全卷の根柢を爲せるのみならず、かかる全く抽象的の觀念をあらはすに'awed lips,' 'eyes upcast'等の語を用ゐて吾人に感覺美を促したる筆致は、固より古今多くの詩人に常なる事ながら、特にロセッティの長所となすところ。また四五六の三行には此詩派の作に著るしき特色の一斑を窺ふべし。冒頭のこの一章すでに人目を眩するや、更にまた之に次いで、II、『戀の生れ』、III、『戀の遺言』、IV、『戀のながめ』、V、『こころの望』、VI、『くちづけ』以

下の詩篇、みな艶美の筆もて戀愛の高調を歌ひ、われ等が胸奥に熱情のひびき切なるを傳へて、遂に夢幻忘我の境に誘はずんばやまざらんとす。

此集に收められし諸篇の詩美をのこりなく解剖し評說せんことは、本書の範圍の許さざる所なれども、いま特にすぐれたる名篇を數ふれば、『戀の戀びと』（第八章）、『かの君なくば』（第五十三章）、『まことの女』、（第五十六章以下三章）、『えらび』（第七十五章）、『靈の美』（第七十七章）、『單絃』（第七十九章）、『去にし歲月』（第八十六章）、『サタンよ、わが後（うしろ）に退け』（第九十章題名は路加傳第四章八節にとれり）、『銘文（しるしぶみ）』（第九十七章）、みなこれ英國古今のソネットにならびなき秀拔の作なるは、夙にかの國の批判もみとむるところ也。全篇の特色は熱烈の感情を恣にして奔逸の空想を馳せ、寫すに濃艶華麗の辭を以てしたるのみか、幽婉なる神祕のすがたを豐麗の色にしのばしむるに在り。また謹嚴精緻の推敲を經て、一語一音の微をもゆるかせにせざりし彼の苦心のあとは、最も著しく其聲調の美にあらはれたり。從つてまた音のため無意義の辭を設けたりとさへ覺ぼしきもあれど、いひ知らぬ幽趣微韻おのづから此間に存するを見るべきなり。世の評家往々にしてラファエル前派の繪畫に精慮苦心の過ぎたるを咎むる人あれど、同じ缺點をわれまたロセッティのソネットにみとむ。たとへば好んで頭韻（アリテレイション）を用ゐんとするの結果、必ずしも最上の語にあらずとも、ただ其語が或特別な文字を以て肯まるが故に、之を用ゐたるが如き場合あり。而して彼の特色たるかの肉感的傾向に至つては最も

此ソネット集に著るしけれど、此點に關する非難に對して我は全く從來の評隲に同意する事能はず、蓋し詩美の靈興却て之がために深きは、キイツに於けるが如くロセッティ亦然ればなり。若しそれ道義風教の方面より非難を試むる者のごときに至つては、既に彼の詩歌が色彩燦然として樂聲の嚠喨を伴へるの美に呆れたるわれ等、固より之を問ふの遑なきなり。

ロセッティのソネットは此集に收められたるものの外、また畫幅に題したる清新の詠におなじ神韻靈趣を誇れるあり。彼が尊崇愛慕したる古今名匠の畫幀、例へばジオルジオネ、サンドロ・ボッティチェルリ、レオナルド・ダ・ギンチ、また殊にラファエル前派の同人、即ちホルマン・ハント、バアン・ジョオンズなどの名畫に題したるソネットは丹靑の妙を發揮して餘蘊なく、更におのれ自らの彩毫に成れる畫幅の賛に至つては、幽麗の詩歌よくその姉妹藝術を助けて、共に中世趣味の神韻をうつし、畫才詩想ふたつながら秀でたる此曠世の偉才に非ずんば能はざる妙什をなしたり。なかにも『受胎告知(アナンシエイシヤン)』『パンドオラ』『夢想(デイ・ドリイム)』等の畫賛は詩と畫と相照映して共に、此P・R・B・派に特有なる妙趣を遺憾なく發揮し得たるものなり。之を要するにロセッティのソネットは彼の特色たる神祕的色彩と艷麗の美とを恣にし、なほミルトンの莊重ヲルヅヲルスの明快を併せ備へ、疑もなく英詩の古今に最も勝れたるものといふを得べし。若しそれ强ひて倫を過去に求めんか、獨り詩聖沙翁のソネット百五十四篇これと比すべきあるのみ。

ロセッティは單に此ソネットのみを以てするも英文學の史上に不滅の盛名を値すれども、これ以外になほ秀抜の作品甚だ多き事を忘るべからず。先づ其叙事詩に就いて言はばバラッド體こそ彼が最も得意とする所なりけれ。前段屢々述べたるが如く、十八世紀にパアシイの『古歌拾遺』出でてよりこのかた、羅曼底格派の勃興と共に古のバラッド體を復活して此體の名家たるもの多く、スコットなどよりテニソン、ブラウニングを經、今やロセッティに至りてその發達の最高點に達しぬ。おもふに此古詩の風を學んで成功せんとする者は、簡朴蒼勁の詩句を用ゐて景情を活現するの技に長じ、また叙事の筆おのづから戯曲的なる精緻あらん事を要す。而してロセッティの詩才は能く此體の精神を感得し、バラッド體に於てはソネットに見ゆるが如き詞藻の華麗なくして、全く簡明直截の筆を用ゐて、中世のすがたを近代の詩に復活し得たり。その作中 Rose Mary, Sister Helen, The White Ship, The King's Tragedy, The Bride's Prelude, Stratton Water の如きは、固より題材を中世にとりたるものなれども、Troy Town, Eden Bower のバラッドの如き希臘若しくは希伯來の題目を歌へるものすら、其詩情風韻みな中世主義（ミデイヴアリズム）の畫趣を帶びざるなく、彼が實に十九世紀の英國に生れ出でし『中世の人』homme du moyen âge たるを見るに足らん。

ロセッティは畫家にしてまた詩人たりしが故に、その詩集はテニソン、ブラウニングの如く浩瀚ならざるは勿論なれど、さりとて各篇に就いてここに精密の評説を試みんは紙幅の許さざる所、すなは

ち其主なるもの二三に就いて言はんか。先づ『しろぶね』と題したるはバラッド體の透明にして、千百二十年十一月二十五日英王ヘンリイ一世の子女、佛國より船出して遂に途上に破船したる事蹟（この事はすべての英國史に記載あれども就中グリインの記述最も興味ふかし）をとり、精密に史的事實を逐うて簡素明快の詩句に寫し出でたるもの。殊に篇中難破の光景を描きたるあたり、此詩人が動作を描くに巧にして戯曲の風を帶びたる筆致の精巧遙にテニソンのバラッドの上あるを證するものあり。また中世の迷信を基礎としたるものに"Sister Helen" あり、怨敵の像を蠟もて造りて之を火の前に置く、そが熔け去るときには呪はれたる人、惱みに斃るといふまじなひあり。主人公なる少女ヘレン或貴公子と婚約を結びてありけるに、男は之に背きてほかの女を娶りしかば、ヘレン瞋恚のあまりここに宗教上の大罪たる呪殺の法を行へり、三日にして蠟の人形将に溶けなんとするとき、男の親族馳せ來りていふ、かれ今や死せんとす、願はくば此呪詛を宥せよと。少女聽かざりければ男は死して怨靈あらはれぬ。全篇みな少女と其弟との問答に書きなしたる、あはれひときは深うして羅曼底格の特色殊に著るしき名作なり。"Troy Town" と題したるはいふ迄もなくホオマアの古詩に見ゆるスパルタの皇后ヘレンの事を歌へるバラッドなれども、全く希臘の詩情なく、ヘレンもヴィナスも皆クラシックの天地を脱して全く中世の風韻を帶びたるは、是れロセッティ特得の技にして、殊に

(O Troy's down,

といふ奇しき折り返へし（バアドゥン）に幽趣微韻をこめたる、萬人のひとしく嘆稱するところ。げに斯かる折り返へし常に他の詩人に見るべからざる特殊の妙味あるは、ロセッティのバラッド體のすぐれたる所以の一なりといふ可し。斯くの如くに列擧し來らば殆ど限りなき秀什のうち、古へ英國の門附（かどつけ）が歌ひし古歌に擬したる"Stratton Water"或十字軍時代の女人尊崇の俗を寫したる"The Staff and Scrip"（詩材はかの有名なる古代物語集『羅馬人行事（ゼスタ・ロマノオルム）』に採れり）、蘇蘭王ジェームス一世の殺害を歌ひて雄勁熱烈の趣ある"The King's Tragedy"、また寶玉のうちに潜むといふ魔力は清淨の人のためによく未來を告ぐといふ中世の迷信を基礎とせる"Rose Mary"等の諸篇みな實に古今の英文學におけるバラッド體の最も優秀なるものとしてみとむるを得べし。

ロセッティをして近英の詩界に重きをなさしめたるものは、以上說くところソネット、バラッドの體のみならずして、なほ叙事詩抒情詩の方面に於て幾多の秀什まことに千古に傳ふべきもの多かるなり。なかにも、奔放の情熱を托して南歐中世のすがたを傳へたる『在天聖女』"The Blessed Damzel"の歌は、彼が青春の作にして、其詩才の特性を最もよく發揮し得たるものなり。むかし戀ひつ戀はるゝ男女ふたりありけるが、地上の淨き契も長からで、女はつきせぬ思を殘して早く世を去りつ、天國なる神の宮居につかふる侍女となりぬ。胸にあまる萬斛の愁思をたたへ、『天堂なる こがね のお

ばしまにゐよりて』、わが夫の君よはや來まさずや、ここ天堂に永劫の契を結ばんをと、呼びては嘆きなげきては呼ばふを、地上なる夫、おもひはまた更に深けれど、天上天下相距る事遠うして今はた如何にかすべき。遂に一道の光明をみとめ得たれども、『それさへ遠くおぼろにて』心願遂にかなはず、女は天門のおばしまに腕投げかけて泣きくづほれぬ、之を一篇の主意となす。聲調と色彩の美を盡くし、艶麗はまた幽婉の趣を伴うて、情熱の神韻まことに此篇に及ぶものあらず。なべて詩人が初期の作には其特技最も著るしくあらはれたるが常なれど、ロセッティの此作の如き最も然りとなす。いま其詞藻の美の一端を示して、彼が詩筆の特色を窺はんか。先づ此詩の冒頭第一節に聖女のすがたを叙したるうちに、

Her eyes were deeper than the depth
Of waters stilled at even;

天門のおばしまに居よりて地上なる夫の君を想へる聖女のまなざし、おのづから萬斛の愁思を湛へて、碧潭の深き色を宿したるもゆかしく、夕まぐれに靜なるを習ひの水の面に似たり、といふ此精緻の筆、まことに吾等をして『神曲』の作者を忍ばしめんとす。此秀句はじめは

Her grave blue eyes were deeper much
Than a deep water, even.

とありしを後あらためて

> Her eyes knew more of rest and shade
> Than waters stilled at even.

となし、遂にまた三たび改竄して今の如くになしたりといふ。詩人の深き用意、おのづから此推敲のあとにあらはれたるを味ふべし。

げにペイタアが評して言ひけん如く、此篇の冒頭數節の美は、神祕幽婉の景情を盡くして、ダンテ時代の畫家たとへばジオットなどの丹靑に見ゆらん趣なり。また熱烈の情を感覺美に描き出でたる例は

> And still she bowed herself and stooped
> Out of the circling charm;
> Until her bosom must have made
> The bar she leaned on warm,
> And the lilies lay as if asleep
> Along her bended arm.

身をかがめて、おばしまに倚れる女が胸の焰は、其欄を溫めたりといふ此秀句は、キイツなどに似て更に一段の精彩を見る。かくの如きを列擧し來らば、ここに殆ど全篇を引用するの要あるなり。更に

また、嘗て下界に相思の契淺からざりし多くの男女死して後ふたたび相會し、歡喜の聲は天堂に滿ちたりといふ第七節を掲げんに、

> Around her, lovers, newly met
> 　'Mid deathless love's acclaims,
> Spoke evermore among themselves
> 　Their heart-remembered names;
> And the souls mounting up to God
> 　Went by her like thin flames.

この最後の二行の幽趣ロセッティを措てはた誰にか求むべき。要するに、奔放の空想を逞うして瑰奇幽邃の趣ある此一篇は、作者みづから言へる如く、かの北米の詩人ポオの名作『レイヴン』に負ふところあるに似たり。ロセッティ自らの畫幀『手に三枝の百合もちて、ゆたに垂れたる金髮七星を點じ』たる此聖女を畵けるもの、畵またよく詩のこころを表はしたるあり。

なほ此外われの愛誦措く能はざる諸篇を擧ぐれば、"The Portrait" と題したる抒情詩に、逝きし戀人のあとを悲みて、そをゑすがたに寫ししを歌へる、また幽玄なる "Sudden Light" におのが前世の戀を憶ひたる、二者ともに同じく戀愛の神祕觀をうつしたるものなり。また"Dante at Verona"

の作すべて八十五節は、『神曲』にあらはれたる事蹟をさぐり、またなかば史乘に憑りて、ダンテが飄零の生涯を歌へるもの、追慕尊崇の至情おのづから此熱誠謹嚴の詩風をなしたるものか。短篇"The Sea Limits"には潮聲のとよもしを聽きて幽思に耽り、"The Stream's Secret"にはかれが自然界を描く詩筆の妙趣を見るべく、或は小さき花のすがたに能く憂愁の心理の機微を捉へたる"The Woodspurge"の小篇、いづれか皆近代詩の絶唱にあらざる。また"The Bride's Prelude"は斷片なれども、景情を例の中世にとり、新妻と其妹との對話に深酷の物語を寫し熱情の筆、一方に於てまた心理の透察に偉大の力あるを示したり。然れども彼が縱横の詩才は必ずしも中世戀愛の境にのみ限られたるにあらず、明敏の透察幽遠の思索、往々にしてブラウニングの哲學的傾向あるものを見るに至つては、ロセッティの詩集を繙くものの常に驚嘆するところなり。この例證としてわれはここに先づ"Jenny,""The Burden of Nineveh"との二篇を擧げん。二者共にロセッティに常なる濃厚の色彩なくして直截明快の詩句を用ゐ、近世的詩材に深邃の瞑想を托したるものなり。『ゼニィ』にはある青年が娼婦のもとに通ひけるが、ふと快樂の迷夢さめ飜然として悟るところあり、夜を徹して沈思したる後、女の眠れるひまに窃に金錢を其室にのこし置きて立去る。蓋し道ならぬおのが快樂を貪りて社會の弊竇を大ならしむる事の殘念なるに想ひ到れるなり。叙述おのづから中世趣味あれども、題材は之を現代生活の暗黑面にとり、ここに道義の意をほのめかしたるもの、獨白（モノロゲ）詩の體を用ゐて明

暢の叙述を試みたるなり。『ニネヱの歌』（一八五〇）は、當時新に大英博物館に納められたる人面獅身にして鷲翼ある巨像を詠じたるもの。古代アッシリアの都城ニネヱの廢墟より新に發掘せられし此巨像は、古のバビロン、アッシリアの人々には、王者權力の象徴と見做されて神聖視せられたるもの、ロセッティ今これを見てそぞろ古代都城の盛時を懷ふの感に堪へず。げに桑田碧海の譬もことわりたれど、たのみがたきは有爲轉變の世のさまよ。威八紘にふるひし大帝國が、ありし昔の勢力、燦然たりし文化宗教、みな夢の如く去つて今いづくにか之を見ん。誰か知らん、倫敦の大都も未來また此悲運に陷るの日あらんを。その折もし異鄕羇旅の客ありて大英博物館の廢趾に此巨像のあるを見ば、必ず言はん、そのかみ英國の人が禮拜したりし偶像の奇しき事よと。かくてロセッティの感想は此篇に於て、古代史の追憶に入り哲理の幽玄に走りて、さながらブラウニングの詩篇の深奥の想を賞するのおもひあらしむ。この外なほ抒情詩 "Soothsay" のごときを讀みたる者は、何人もロセッテイが單に中世的熱情の詩人にあらずして、其詩才ときには幽玄の思索に向ひ、深遠の理路を辿らんとするの傾向あるを知り得べし。

ロセッティまた幼より外邦詩歌の研究に意を注ぎて、飜譯を試みたるあり。はじめ十五歳の頃獨逸語を學び、かのスコットの譯ありてより頻に英國羅曼底格派の詩人を動かしたるビュルゲルの作『レノオレ』を英譯し、のちまた『ニベルンゲンリイド』の譯ありし由なれど、今二者共に傳はらず。こ

れ等と同じ頃に成りし飜譯にして今のこれるは、獨逸古詩人ハルトマン・フォン・デル・アウエの作『あはれなるハインリッヒ』(獨逸現代の大詩人ハウプトマンの同題の作、および米國の詩人ロングフェロウの『ゴールヅン・レゼント』みな同じく此悲壯なる古詩に基づけるなり)を譯したる一篇(一八八六出版)あるのみ。さりながら是等北歐獨逸民族の文學はもとよりロセッティの純然たる南歐趣味にかなふべくもあらねば、後年また此方面に筆を染むる事なかりき。その專ら力を注ぎたるは羅甸民族の詩歌、ことに中世加特力教の精神にはぐくまれたる伊太利亞の文學にして、殊にダンテを仰望思慕する事最も深かりき。おもふに近英羅曼底格派の文學に於て此神曲の詩人を追慕するの風潮はケリイの英譯(一八一四完成)出でてより益々盛に、コウルリッヂ、シェリイ、キイツ、リイ・ハントなどを經てテニソン、ブラウニング皆ここに神韻靈趣を覓め、今や遂にロセッティに至つてその最高潮に達したるなり。前段すでに述べたるが如く、ロセッティのダンテ崇拜は其父よりの嗜好を傳へたるものにして、彼の特色たる南歐中世的の思想よりいへば、此近英の大詩人はまことにダンテの再生たるの觀あるなり、其筆に成れる伊太利古詩人の英譯が能く原意の幽趣を移し、聲調の機微をすら逸せずと稱せらるるもの眞に故あるなり。ロセッティはまたダンテみづからおのが靑春の戀のあはれを寫しし『新生』の篇を譯して其優艶の趣を傳へ、また『神曲』の中千古の絶唱と稱せらるる地獄界第五章、パオロとフランチェスカの悲劇の條を飜して、巧にテルザ・リマの押韻を驅使し、原詩の幽趣をうつし得たるもの、單にロセッティの詩才の秀拔なるが爲のみにあらずして、

また深く中世文藝の精神を感得したるものあればなり。『詩歌は嚴密の科學にあらざるが故に逐語譯は必ずしも重んずべきにあらず。原詩の精神を傳へ、その美を損せざらんとつとむるこそ飜譯の要諦なれ』とは彼が古詩英譯集の自序に明言せる所。げに內容と外形とともに全くして、原詩の神韻を傳ふる飜譯の絶技に至つては、古今の英文學を通じて未だ彼の右に出づる者あらざるなり。

羅甸民族の血をひいたる彼の好尙は、伊太利亞の詩歌のみならでまた佛蘭西文學の上にも向ひたりき。近世の作家にてはユウゴオ、ミユツセ、ヂウマ等を耽讀し、殊にユウゴオの作 "Les Burgraves" 中の短篇二章を譯したるもの、われ曾て之を原詩と對比して今更のやうに其鬼工に驚嘆したる事ありき。狂熱の激情あふれたるかの二篇の調を、ただそのままに英詩に移すさへ至難の業なるに、ロセッティの譯は却て此點に於て原詩を凌駕したるのみか、原意をうつすの精巧なる、次の一例によりても明なるべし。

Nargue à toutes les villes,
Et nargue à tos les rois!

を譯して

A fig for all the cities,
A fig for all the kings!

佛蘭西語の 'Nargue à......' を譯するに、伊太利語原より來れる英國俗語 'A fig for......' を以てしたる巧緻は、たやすく凡手の思ひいたらざる所なるべし。然りと雖もロセッティが最も多く崇拜したるはかかる近世の詩人にはあらで、かの佛蘭西詩歌の源泉たる不羈熱烈の學生詩人フランソア・ギョン François Villon （一四三一—一四六一?）なりき。その作にしてロセッティの英譯あるもの三篇、中にも過ぎし代の佳姫麗媛のあとを懷へる『むかしのたをやめの歌』"Ballade des Dames du Temps Jadis" は、婉美の詩情千古に不滅の名あるものいまロセッティの麗筆に譯せれて更に一段の光彩を加へたり。此一篇の飜譯に於て特に有名なるは、毎節の『折り返へし（バアドゥン）』なる『こぞの雪やいづこ』といへる秀句

Mais où sont les neiges d'antan?

を飜して

But where are the snows of yester-year?

といひ antan（語原は羅典語 ante-annum）を譯するに當つて新語 yester-year を創作し、及ぶ可きかぎり原詩の律脚を變へずして聲調の美を移したる奇巧のあとは、世を擧げて讃嘆の聲を惜まざりしも宜なり。蓋しギョンが熱情の詩風を追慕するもの近英羅曼底格派の詩人に多くして、其英譯のごときまた甚だ尠

しとせず。殊に此麗人の歌の譯に於て、アンドルウ・ラングのとジョン・ペインのとは最も秀拔の聞え高きものなれど、固よりロセッティの此譯に及ぶ可くもあらず。抑韻の自在格調の美、英文學の史上にならびなきスヰンバアンすらも、曾てギョンを英譯するや、ロセッティの手に成れる此一篇を見、筆を投じて嘆じていふ、ああこれ人間の企て得べき無上の譯なりと。まことやロセッティの譯は原詩をさへも凌駕したるものなるをや。

ロセッティは斯くの如くにして伊太利中世の詩文のみならず、深く佛蘭西の古文に心を潜めたるが故に、從つてその用ふる詩語また古代佛語の美を變化移植したるもの極めて多きを見るなり。これ既に前段に逑べしが如く、テニソンが獨逸民族の古語を復活したると共に、近英詩歌の用語をして豐富ならしむるに與つて力ありしものなり。また其聲調音律に奇古の風を摸し、句法造語に現代を離れたる耳新しき風格あるは、直に P・R・B・派のスヰンバアン、モリスなどの大詩人に影響し、更にまた廣く近代の騷壇を感化して遂に一種の Mannerism をなすに至りぬ。一例をいはば "herseemed" といふ語(『在天聖女』の歌第十三行)のごときは古語に "meseemed" などいふを摸し、ロセッティが創造して巧に用ゐたる語なれども、みだりに他人の襲用を許さざるものなるべし。而してまた其聲調の美を極めたるは主に母音と子音との巧妙なる調和によるものにして、この技ははじめ羅曼底格派の勃興期に於てコウルリツッヂ、キイツ等の詩篇に著るしく、更にテニソンに至つて大成せられたる

もの、今ロセッティの詩筆によりてなほ多くの洗煉を經たるなり。
ダンテ青春の胸に湧く血汐を濺ぎて、おのが戀の半生を書きたる『新生』（ヰタ・ヌオヴァ）の篇にロセッティは多大の感化を蒙りて、その景慕の至情遂にかの名譯をなさしめたる由は既にかみに述べたり。げにもダンテ九歳にしてはじめて麗人ビアトリスに遇ひ、そが艶なるすがたにあやしき胸奥のときめきを覺えしより、熱烈の情は束の間もやむことあらざりしが、ビアトリスは果敢なくも二十四歳を一期として色香まさかりの春に世を去りけり。ダンテ乃ち『新生』の篇に優艶なる抒情の筆をはせて慟哭痛嘆の聲を托しけるが、やがて移つて哲學に慰安を求むるに至り、ビアトリスは遂にダンテが理想の權化となり、これによりて遂に天堂界に導かるるよしは大詩篇『神曲』に見えたるが如し。かくて此女性に對するダンテが熱愛の精神は遂に彼の中心思想をなし、いたく中世の民心を動かしたる彼の瞑想と詩篇と、その淵源するところすべて皆この女人崇拜に存するなり。而して更にこれをわがロセッティに見んか、すでに南歐熱情の血を承け、またダンテ尊崇のおもひを父より傳へられ、而しておのが戀妻はやく世を去りたる悲哀の感更にこれに加はれるあり。かれがひたすらダンテの蹤を追うて、此偉人の作中に幽遠神秘の妙想を尋ねたるもまことにうべならずや。試に見よ、かれの名畫『享樂受福』（ビアタ・ビアトリクス）（此題名すでにダンテの『新生』に取れるなり）の一幀に、丹青の巧を盡くして亡き妻の遺影をとゞめたるを。またかの「ゐすがた」の一詩（ロセッティが妻に別れしよりも以前の作に屬すれども後に改刪を施しぬ）、今は世になき戀の君がおもかげを忍びたる哀傷のしらべ

を聽け。かくも眞摯に、かくも熱誠の同情もてダンテの神韻を傳へんとせし者、ロセッティを措きて西歐近代の詩人に又とありや。かれ歌うて曰く、『わが靈は新生を享けて天上聖樂のあなたに通ひ、直にかの君の靈と相交りてそこに神の靜寧を知らん時、ああいかによろこび畏みてわが靈は立つらんか』（『ゑすがた』第二十一節）と。宛然としてこれ『神曲』天堂界にあらはれたるダンテの瞑想にあらずや。また曰く、

Your heart is never away,
But ever with mine, for ever,
For ever without endeavor
To-morrow, love, as to-day;
Two blent hearts never astray,
Two souls no power may sever,
Together, O my love, for ever!

Parted Presence st. VI.

戀はただに地上のものならんや、戀愛の絆によりてこそ今世は直に來世と結び、地上の生はやがて天上のそれに通へるなれ。えにしの神が結びし現世の契は天界享樂のさきがけにして、ふたりの靈はとはに離るることあらざるなり、愛やまことに宇宙至高の王者なるかな。『この現身を動かせる思想と

情熱と歡樂と、すべて皆愛の御使にして聖なるそが焔をはぐくむ』と、十九世紀初期の大詩人が歌ひたるところ、いま更に百尺竿頭一歩を進めしもの、ダンテの感化を蒙むること大なりしロセッティが中心思想たる戀愛觀をなせるなり。

ビイアズ氏はその名著『十九世紀羅曼底格主義の發達史』に於て(三〇一頁)、ロセッティが文藝史上の效果を論斷して之を三個の方面に在りとなせり。曰く、

第一、繪畫と詩歌とに、初期フロレンス派の宗教的精神を復活表現したること。

第二、ダンテ殊に其生涯人格、および當時いまだ飜譯なかりし『新生』の如き小篇を、英國の公衆に紹介したること。

第三、民謠(ポピュラア・バラッド)の體を用ゐて傳說を歌ひ、またおのが獨創の羅曼底格なる詩材を歌ふに當つて、其繪畫に特有なる典麗の色彩と感覺的幻像とを以てし、かくて中世の思想と生活との例證を與へたること。

ロセッティが深く中世思想の源泉たる加特力教の精神に參したるは、そが詩歌的方面にして、即ち南歐中世の宗教的美術の羅曼底格の傾向を喜べるもの、換言せば宗教信者としてにはあらずして、飽くまでも藝術家の態度を以て此精神に對したるなり。此點に於て彼は妹なる女詩人クリスティナが、熱誠の信仰遂にあらはれて幽玄の詩歌をなしたるとはいたく趣を異にせるものあるを見るなり。即ち

一言以て彼が藝術の特徴をいへば、中世神祕的精神の奔放を以て現代の科學萬能主義に反抗したるものに外ならず。而して此中世思想の代表たり權化たるものを、彼は曠世の大詩人ダンテに見出でたりしなり。

ロセッティは斯くの如くにして超世高蹈の詩人なり。テニソンが時勢の代表たるに比して、かれは全く正反對の態度を以て世に臨みたりき。筆致の精巧、聲調の婉美はテニソンの下にあれども、情熱の熾なると色彩のゆたかなるとに於て、遙に桂冠詩人を凌ぐのみならず、羅曼底格なる中世主義の大詩人として西歐の諸邦また彼と比すべき者あるなし。ただ憾むらくは高遠清新の調いたづらに俗耳に遠くして、民衆が謳歌の聲は獨り平明なるテニソンの詩歌にのみそそがれぬ。

ジョン・アディントン・サイモンヅ嘗て言ふ、ロセッティ藝術の美は分解批判の能く傳へ得るところに非ずと。われの禿筆に至つては殊に意を盡くさざる事甚だしうして、讀者に向つて先づロセッティ詩卷の精讀を勸むるの念いよ／＼切なるを覺ゆるのみ。ここに先づ筆を擱きて、更に彼の妹なる女詩人の評說に移らん。

(附記) ロセッティに散文の著あり。そのうち文藝批評に關する類はさまで注目の必要なけれども、數篇の物語(ロマンス)には彼の特色たる神祕趣味を發揮して、奇想幽思さながらポオの短篇に似たるものあり。詩人ロセッティを研究せんとする人は、繪畫のほか此物語の類をも度外視すべきにあら

す。中にも有名なるは、“Hand and Soul”の一篇にロセッティ藝術觀の一端をほのめかしたるものなり。或女人の畫像あり、麗容眞に迫りて悽愴の鬼氣人を襲ふは一見して凡手の筆にあらざるを知る、物語は卽ち此畫幀の由來を說けるものなり。曰く、四百年の昔伊太利亞に或靑年畫家ありて、天稟の才は群を拔きたり。此人はじめは聲名を博せんとの望もて技を勵みしが、此望は直に達せられ、まもなく一代の大家の列に入りぬ。その畫くところは人物と風景とを選ばず、皆ことごとくおのが眼に觸れて美なりと感じたるものなり。然るに此畫伯はもと宗教の信仰厚かりし人、やがて自らおもへらく、われ今に至るまで徒に名を求め或は人の感官を喜ばさんとて美なるものを畫きたれどこは誤れり、以後はただ永遠の眞理を寫し天界の事物を描かんと。これより後は全く着想の方面を變じて神祕的宗敎的の題目を選ぶに至りしが、令聲忽ちにして地に墜ち、世人また共丹靑の技を顧るものなし。ここに於てか彼は鬱憂悲哀のおもひに堪へず、はては遂に自殺を謀るに至りしが、或時妖艶の美女あり、ふと音もなく彼の室に現はれ來りて畫伯を凝視す。畫伯は口かたらんと欲すれども語る能はず。此時美女のいはく、『われは君の靈(ソオル)なり、君このごろみづからの靈に背きて藝術の道に携はり、美を愛するの念なし。徒らに眞を示さんとして却て美の世界を忘れ、かくて遂に神罰を招けるなり。君もしみづからの靈に忠ならばおのづから大作を得べし。先づわれの此すがたを描きて、さきに君が失ひし力を恢復せよ』と。かくて畫

伯がおのれの靈の化身たる此美女を書きしもの、卽ちかの一幀の古畫なり。靈活の氣は神韻の縹緲たるに加はり悽艷のすがた見るものをして能く畏怖震慄せしむるは、藝術の堂奥に入りたればなるべし。之を一篇の梗概となす。瑰奇の風はポォの短話に似通ひたれど、ここにロセッティは藝術の要諦をほのめかし、此道に入る人には美にあこがるる熱誠眞摯の情を以て獨り尊ぶべしとなせり。而してかくの如きはまさに、ロセッティの繪畫と詩文との特色を自ら語れるものにはあらざるか。

近英の文學に數ある女詩人ヒイマンズ、インジロウ・エリオット、プロクタア、ノックス、ヱブスタアなどと相ならびて、すぐれたるを先づブラウニング夫人に數ふる人もあれど、最近の批判はむしろクリスティナ・ロセッティ Christina Georgina Rossetti に傾くものの如し。ロセッティ家四人兄弟の末なるクリスティナは千八百三十年の十二月五日を以て生れぬ。處女の平靜なる生涯を熱鬧なる英京に送りしひと。幼き頃より父母に仕ふるの至誠いちじるしく、殊に母に對する愛の深かりしは、今その集のうちに收められたる十二歲の時はじめて作りしといふ幼なげなる歌を見ても知らるべし。慈母の死（一八八六年）まで五十六年間の久しき、女詩人は遂に共膝下を去らざりき。

幼時よりかれは兄とおなじくいたく動物を愛したるよしは、その諸作に見ゆれども、わきて "Brother Bruin," "These all wait upon thee" などの篇にいちじるし。おほかたの教育を家庭にうけ、

九歳より十四歳の頃まで特に嗜みて伊太利亞の詩人メタスタシオを讀みしといふ。千八百四十七年祖父 Gaetano Polidori は此愛孫のために最初の詩卷 "Verses" と題したるを上梓しぬ。"Vanity of Vanities," "The Dead City", "The Water Spirit's Song" などの作は既に此集のうちに收められて異彩を放ちたり。のち數年、かのラファエル前派の機關雜誌『ジャアム』に、Ellen Alleyn といふ名を用ゐて揭げたる數篇の詩歌あり。

クリスティナは實に兄なる畫詩人の用ゐし最初のモデルにして、かのゲブリエルが一代の名畫として今テイト畫堂の藏なる『受胎告知(アナンシエイシャン)』のほか、おなじくP・R・B・の名家ホルマン・ハントの『世界(ジ・ライト)の光(オヴ・ジ・ウアアルド)』またミレイの名作にも用ゐられたり。そのわかかりし頃、容貌に沈鬱の調あるは健康のすぐれざりしによれり。現存の名家シオドーア・ヲッツ・ダントンのしるす所によれば『母およびゲブリエルのわれに語りし如く、まことに愛らしうして溫柔沈靜の趣あるかほばせなりき』と。げに謹嚴の性おのづから其おもてに著るしければ、この種の畫題にふさはしかりしならんか。

そのはじめて世に知られしは名作 "Goblin Market and other Poems" (1862) 集なり。次いで出しもの、"The Prince's Progress and other Poems" (1866), "A Pageant and other Poems" (1881) などなり。

かれの婚を求められしことふたたび、而かも皆宗教の信仰にあきたらずしてこれを斥けしといふ。

たとひ其稀世の詩才なくとも性行すでに能く世のなべての女性が師表と仰ぐべきもの、敬虔なりしは言ふまでもなけれど恩愛の情ひとにすぐれ、あはれみといつくしみ、其最後の日までかはる事なかりしが、千八百九十四年十二月二十九日を以て遂に靜に世を去りぬ。

英國現存の評家アアサア・シモンズがこの女詩人を評したる語、簡なれども能く著るしき特色をいひ盡くしたり。曰く、"A power of seeing finely beyond the scope of ordinary vision: that, in a few words, is the note of Miss Rossetti's genius, and it brings with it a subtle and as if instinctive power of expressing subtle and yet as if instinctive conceptions; always clearly, always simply, with a singular and often startling homeliness, yet in a way and about subjects as far removed from the borders of commonplace as possible."

その作品に宗教詩のたぐひ甚だ多きはいふまでもなく、この方面に於て近世に稀なる秀抜の詩歌甚だ多し。評家は目してかの十七世紀のハアバアト、ヴォオン、クラショウなどにもまさりたりとなせり。而してその宗教觀には、アアノルド、クラッフなどに見ゆる當代一般の懷疑厭世の傾向を見ず、はたブラウニングのごとく深奥の智力を以て冷かなる理路を辿れるにもあらず。さながら中世の人のごとくに信仰あくまでも深うして、また純然たる感情のそれなり。懷疑の暗潮に漂はずしてむしろ樂天說に傾きたれども、巾幗の詩人に常なる悲愁の調ありて、哀音かすかにわれ等が胸にせまるものあ

り。上に述べたる"Vanity of Vanities"と題したる麗はしき小曲に『あだなる快樂や、あはれ。ああ、過ぎにし光榮。快樂ぞ遂には悲み、ほまれ亦遂に得るところなし。打ち沈む心かくぞ言ひける』と歌ひし篇はかれが人生觀における最後の斷案なりかし。されどわれ等はこの種の詩篇よりは寧ろ『夢の鄕』"Dream-Land"のごとき抒情詩に、此派の特色たる奇聳神祕の趣あるを賞し、また敍事の歌などに中世の餘韻をたたへたるうち、倫理の觀念をかいまみ得べき作を喜ぶべしとなす。たとへば傑作『ゴブリン・マアケット』は、姉が身をささげて妹を救ふといふ可憐の物語に道義の意をほのめかしたるもの。寂寥の地にて、わかきむすめたちに奇しきくだものを賣るゴブリンどもあり。その價やすくして而かもうるはしきこと限りなければ、ひとたびそを食ひたるものは、必ず之をふたたびせんとす。然らずば老年と死と忽ちにして到るといふ話說をもととせる羅曼底格の傾向——詳しく言へばラファエル前派の風格きはめて著るしき敍事詩なり。"The Prince's Progress"の篇には、王子あり、さる姬君に婚を約し、日を定めてそのもとに行かんとす。姬はおもひ焦れて待ちにまちたまへど、脊のきみは徒らに途上に悠遊して到らざること十年のながきに及ぶ。篇中曉色を敍したるうるはしき次の二節は人々の愛唱するところ、平明簡素の詞句に景情をゑがきて、殆ど一幅畵幅の觀をなしたるは此人の特色なり。今かかげて其詩風を示さん。

At the death of night and the birth of day,

When the owl left off his sober play,
And the bat hung himself out of the way,
　Woke the song of mavis and merle,
And heaven put off its hodden gray
　For mother-o'-pearl.

　Peeped up daisies here and there,
　Here, there and everywhere;
　Rose a hopeful lark in the air,
Spreading out towards the sun his breast,
　　While the moon set solemn and fair,
　Away in the west.

クリスティナ・ロセッティは、また屢々英詩に稀なる奇しき詩形を用ふ。たとへば“Maiden Song”に用ゐたる形のごとき、毎節九行より成り、すべて二十一章、第九行は押韻なくして、その最後の綴音（シラブル）つねに母音を同じうせり。また“Love from the North”といふバラッドはすべて八節にして、おのおのみな同一の語を以て終れるなど、ことさらに奇異の形式を用ゐて聲調の美をなしたる、決して

凡手の能くするところにあらず。

この詩人の作に象徴詩の極めて多きをも注目すべしとなす。そのすぐれたるは現存の大家イイツ、またはむかしのブレエクの壘を摩するものなきにあらず。簡朴の語にいふべからざる深沈の想を寄せ楚々ひとを動かすもの多かるうちに“Three Seasons”の一小篇のごとき、わきて秀でたりとおぼし、希望と戀愛と回憶とを人生の三期に配したる僅に四節より成れる麗章なり。

> "A cup for hope!" she said
> In springtime ere the bloom was old:
> The crimson wine was poor and cold
> By her mouth's richer red.
>
> "A cup for love!"—how low
> How soft the words; and all the while
> Her blush was rippling with a smile
> Like summer after snow.
>
> "A cup for memory!"
> Cold cup that one must drain alone:

While autumn winds are up and moan
Across the barren sea.
Hope, memory, love:
Hope for fair morn, and love for day
And memory for the evening gray
And solitary dove.

女詩人が兄ゲブリエルの大才に負ふところ大なるはいふまでもなく、相ならびてP・R・B・派の驍將たれども、二者の作品また各々ことなれる特質なきにしもあらず。かれの熱烈絢爛なるに比して、これの稍簡朴清楚の趣あるがごとき、ただに其性を異にし、信仰を異にせるが故のみにあらじ。ソネットの作には兩者ともに嚴格なる伊太利亞の式をとり、女詩人の集のうちの幽遠なるものに至つては直にかの『生の家』百一篇の珠玉と光芒を爭はんとするものあるなり。

第二節　この詩派の諸詩人

ロセッティとモリス――モリスの幼少時代――處女作はP・R・B・の先鋒――此作の内容――美術工藝品の製作――『ジェイソンの生涯』――『地上樂園』――北歐

傳說の研究——北歐の古代趣味——社會主義者——チョオサアの感化——中世思慕——ロセッティとの比較

スヰンバアン——素養——悲曲『アタランタ』——聲調の美——『ポエムズ・エンド・バラッヅ』第一卷——其特色——佛蘭西詩歌の影響——古典文學の素養——急激の自由主義——海洋の愛——其バラッド體——戲曲——ケルト傳說——其散文——反抗的革命的精神——シェリイ——此派の諸詩人の關係——少數の讀者

ラスキンの學說、牛津大學の宗教運動などに關聯し、寧ろ時運の流にそむきて起り來れる藝苑のこの新派は、中世的精神の復活を以て其根柢となし、超然として枯淡無味なる科學萬能の世をよそにせるは前段すでに詳說せるが如し。然れども更に此詩派に屬する諸詩人の各々に就きて細緻の研究を試むれば、そのあひだまた自ら各個の性格を異にし、着想の方面の一ならざるを見るは言を俟たず。開祖たるロセッティ先づしきりに南歐熱情の趣味を鼓吹せるとき、ここにはまた北歐古文の靈趣を近代の新聲に移さんと試み、一代民衆の美術思想に大なる感化を與へし大詩人あり、ヰリアム・モリス(William Morris 1834—1896)は即ち其人なり。

モリスはもと富豪の家に生れし人、彼が單に詩界の偉人たるのみならずして美術工藝の發達に力を盡くし、室內裝飾の術に尠からざる進步を促がしたるは世襲の產ゆたかなりしも、おのづから其一因たらずんばあらず。少時しきりにキイツを耽讀し、またスコットの歷史小說を繙き、或は英佛の古書

を渉獵したるは、後年彼の藝術趣味の方向を定むるに至大の感化ありしもの、ミルトン、ヲルヅヲルスの類に至つては殆ど之を顧みざりしといふ。はじめ繪畫を學びて成功せず、のち牛津大學の程にのぼりたれど枯淡なる理議の學には固より心をとどめず。此間にかの畫家バアン・ジョオンズと傾蓋の交を結びて共に深く中世文藝の翫賞にふけり、殊にラスキンが南歐中世の建築を論じたる『ヴェニスの石』の名著を讀みて、いたくゴシック建築の風に趣味を感ずるに至れり。千八百五十八年（即ちテニソンの『アアサア王の歌』第一卷の出でし年）、處女作なる“Defence of Guenevere and other Poems”の一卷を以て世に問ふ。これ實にロセッティを以て領袖とせるP・R・B・派のゴシック趣味の詩歌が騷壇にあらはれたる先鋒にして、奇古幽粹の中世主義未だ俄に世上一般の人を動かすに足らざりしと雖も、既に隱然として藝苑の一大勢力をなしぬ。セインツベリイ教授の如きはテニソンの初作がギクトリア朝詩歌の第一期を劃するが如く、モリスの此集は其第二期を始めしものなりと論じたり。此集のうち最初の四篇は、材をかのアアサア王の傳說にとりたるもの、之をテニソンの作に比すれば、ひとしくギネギイアを歌ひガラハッドを叙するにも、兩者のあひだいたく其趣を異にしたり。蓋しテニソンに見ゆるが如き道義の思想なく、また近世趣味と詞藻修飾の美とに至つては、もとより之を望むこと難けれども、モリスの作はむしろマロリイの古書に近く、中世羅馬教の趣味を其儘に傳へて熱情の奔放筆致の簡朴を以てすぐれたりとなす。また集中の他の諸篇に就いていはば、先づ

英國古史に基き中世の題目をとりたる作のほか、モリス獨創の詩題に幽遠神祕のすがたあるものに秀拔の作多く、ここには北米の詩人ポォの感化ほの見えて、殆ど歐洲近時の象徴詩派の作に髣髴たるものさへあり。試に次の數句を掲げて其一斑を證せん。

"I sit on a purple bed,
Outside, the wall is red,
Thereby the apple hangs,
And the wasp, caught by the fangs,
Dies in the autumn night.
And the bat flits till light,
And the love-crazed knight
Kisses the long, wet grass"

——*Golden Wings.*

"Between the trees a large moon, the wind blows
Not loud, but as a cow begins to low."

——*King Arthur's Tomb.*

"Quiet groans

That swell out the little bones
Of my bosom."

——*Rapunzel.*

かゝる神祕夢幻の趣を以て、後段に說く可き現存の詩人イイツの詩歌と比較せんもまた興多かるべし。

此作ありて後、自ら資を投じて美術品の工場 Morris & Company を倫敦に設け、ロセッティ、バアン・ジョオンズ等と共に自ら其製作を督し意匠を案じたるは、ラファエル前派の藝術趣味を普及するに、與つて大に力ありしものなり。此間に在つてモリスまた傍ら詩作に從事し、成るところ先づ "Life and Detah of Jason" (一八六七) あり。さきの處女作に見ゆる奇峭嵯峨たるすがたあとなく去つて、ここには流水のよどみなきにも似たる流麗明快の詩風、靜にわれ等を神祕の境に誘ふ。此篇はホオマア以前の希臘古說を材としたる、無慮一萬行十七篇にわたれる長篇の敍事詩なり。まづ筆をジェイソンの幼時に起す。彼長ずるに及んであまたの勇士を率ゐて『アルゴオ』の早船(はやぶね)を艤し、遠く東のかたコルキスの國を指して黃金の羊毛を求めんとて、萬里遠征の航路にのぼる。途に幾多の冒險を試みて能く萬難を排し、遂にめざす東方亞細亞の國に達すれば、そこなる王厚くジェイソンを遇し饗宴を設けて之を迎へぬ。時にうるはしき王女メディアははじめてジェイソンを見しより、忍ぶにあ

まる相思の情はやくも二人の間を結びけるが、王は姫をして告げしめて曰く、君もしわが有なる黄金の羊毛を得んと欲せば命を賭せざるべからず。卽ち先づ二頭の大牛に軛し、そを役して地を耕し、そこに惡の種なる龍蛇の齒を蒔けよ。やがて甲冑に身を固めし猛卒この種より生ずべければ、君そを殺しておのが命を全うするを得ば、かの羊毛を得べしと。かくてジェイソンはメディアの姫の魔術の助により遂にかの羊毛を得たる後、二人相携へて共にひそかにコルキスの國を逃れ出で、歸航の途上また幾多の險難を冒し遂に故國に歸りぬ。それより十年がほどは琴瑟相和して事もなかりしが、のちジェイソン遂にこのメディアを見捨てて、更にグラウセの姫に懸想しければ、メディアは怒に狂ひ、その魔術を用ゐて先づ戀の仇なる此姫を殺し、剰へおのが二兒をも殺し、みづからは龍車に駕して遂にアセンズをさして立ち去りぬ。獨り殘されしジェイソンは斯くて深く鬱憂苦悶に陷り、悲哀のうちに世を去れり。これ卽ち一篇の梗概なり。この物語すでにホオマアのオディセイにあらはれて、ピンダア、オヴヰッド、ユーリピデス、セネカ等の大詩人をはじめ、後には佛蘭西のコルネイユの名作のごときによりて廣く世に知られたれど、このモリスの豐麗なる叙述に至つては、古代説話の人物をして能くわれ等のまのあたりに髣髴たらしめ、躍如として十九世紀の舞臺に活現せしめたる妙趣他に求むべからず。暢達明快の詩筆は更に丹彩の巧を添へて、風景を叙し動作を描くや、毎節みな好個の畫幅にあらざるはなし。すべて大詩人の作には古來すでに廣く世に知られたる説話を材として、おのが詩

才もて之を醇化したるもの多きは、今更めきて沙翁やチョオサアの例を引くまでもなけれど、モリスが叙事詩の秀拔なるもの亦すべて此類なり、いま此篇のうちなる詞藻の美を示さんと欲せば、もとより長き引證を要するを以てそは省きつ。何れ劣らぬ光彩まばゆき諸章のうちに就いて、ジェイソンが船出の光景を叙したるもの、コルキス王の宮殿をゑがきたる一節、或はジェイソン遂に黄金の羊毛を得て歸路に就くあたり、殊にまた末段悲壯の幾章を以て、われは近代叙事詩の最も優逸なるものとなさんと欲す。詩律はすべて五脚對聯の體をとりて、しかもまた單調の弊なきに驚く。

かくてジェイソンの篇によりて初めて多數の讀者を得たるモリスは、之に次いで直にまたかれが一代の傑作たる『地上樂園』"The Earthly Paradise" 四卷（一八六八―七〇）を以て世に問ふや、詩壇における彼の名聲ながく定りぬ。收むるところの物語すべて二十四篇、うち十二篇を古典文學にとり他の一半を中世傳說に得たり。むかし北歐の或人々、その國に惡疫多きを避けて、西海のあなたにありと傳へ聞ける不老不死の仙鄉『地上樂園』を尋ねんとて、いくとせがほど波路をはるかさまよひけり。されど目ざす樂園は遂に求むべからざるのみか、途上幾多の冒險に一行の人々數さへ今は少く、疲勞困憊のさまいともあはれに、遂にある古き都城に着きぬ。こは遠き昔希臘より逐はれたる人人の建てしものにして、一行はここになみ／＼ならぬ歡待をうけて、一年のあひだ月ごとに二度の饗宴に美酒佳肴をつらね、主客かたみに古き代の物語を述べたるもの、卽ち『地上樂園』の歌なり。四

季折々のながめも夢と過ぎては月々日々のうつり行くままに、やがて死は遂に來りて萬事休するや、ここにまた喜びなく悲みあるなし。熱情の焔はよし猛くとも、やがて沈み果てては死火冷灰と異ならず。人ゆゑなくして生を冀ひ、故なくして死を恐ると雖も、歸するところは卽ち寂滅にあらずや。これ常にモリスの詩篇にほのめかされし悲哀觀にして、『地上樂園』の作に最も多く斯かる思想傾向を見るなり。この篇の跋歌の一節に曰く、

"Death have we hated, knowing not what it meant;
Life have we loved, through green leaf and through sere,
Though still the less we knew of its intent:
The Earth and Heaven through countless year on year,
Slow changing, were to us but curtains fair,
Hung round about a little room, where play
Weeping and laughter of man's empty day."

さて作中、北歐の古說は佛蘭西系統の中世傳說、獨逸晩期の說話と相交はり、『ニベルンゲン・リイド』『エッダ』『ゼスタ・ロマノオルム』などに得たる詩題は、また更に『アルセスティスの戀』『キュピッドとサイキイ』『アタランタ競走』などの如き希臘神話を加へ、北歐は希臘と、古代は中世と、

互に對照映發してその美はさながら初花染のまばゆきに、紅葉の錦、沈靜の色ゆかしきを合せたらんやうなり。卷中の二十四篇もとより皆それぞれの妙趣を具へて、俄に優劣の批評を下し難けれども、セインツベリイ教授のごときは、"The Lovers of Gudrun"（詩歌を北歐傳說にとりたる悲哀の物語にして、ロセッティもいたく之を愛讀したりしといふ）のごときを壓卷なりとせり。されどわれのひそかに認めて絕唱と信ずるは、題材をシャアレマン傳說にとりたる"Ogier the Dane"の物語（第八月の條に在り）なり。

いま此一節を揭げて妙趣の一端を示さん。

勇士オジイアは仙境アヴァロンの嶋にゆきてうるはしき仙女モルガンと婚し、むかし下界に在りし日の事ども打ち忘れ、樂しき生を送ること百年にあまりぬ。ある時仙女いひけるは、『君の名すでに地上の人に忘れらる、いざ再び行きて功名を遂げ來らずや、われは遙に君を擁護せん』と。ここに於てオジイア俄に人界の故生なつかしう、仙女より一個の指輪を得てやがてもとの地上へと歸り來りぬ。膂力衆にすぐれし美丈夫、身にあやしき古風の衣を着けたるをもて、人々呼んで『古武士』とぞいひける。恰も此頃佛蘭西に戰亂ありて海内亂痲のごとくなりしが、オジイアは巴里に行きてさる旅宿に在り。ここに一冊の古書を得しが、そは數百年以前かれが未だ地上に在りしころの記錄にして、其友なる武士の事蹟またはおのれの事ども皆しるしたれば、過ぎし日のおもひ出に興益々深く、いつしかわ

れを忘れて讀み耽りぬ。時に女王はルウアンに戰へる國王の軍を援けんとて兵を募りければ、オジイア之に赴きけるが、美容と勇武と人にすぐれしのみか、まなざしに此世の人ならぬ輝き著るしければ威忽ちにして衆を壓しぬ。彼うつくしき女王に謁するや、往年の回想またもや彼をして地上の麗人を憶はしむ。

> And his heart burned to taste the hurrying life
> With such desires, such changing sweetness rife.
> And yet, indeed, how should he live alone,
> Who in the old past days such friends had known?
> Then he began to think of Caraheu,
> Of Bellicent the fair, and once more knew
> The bitter pain of rent and ended love.

かくて彼は女王に忠誠を誓ひしが女王またひそかに胸のおもひを焦し給へり。誓式終りて後オジイアは庭園に出で行き懷舊のおもひに暮れし間にいつしか眠に入りぬ。女王は一人の侍女を隨へて園内に來たまひ、ふと彼のうまいせるを見て立ち止まり給へり。彼女は戲れにオジイアのかの指環を取り去りけるに、老齡忽ちにして到り、少壯の美丈夫は變じて瀕死の老翁となれり、されど女王は再びその

指環をもとの如く彼の指にはめ給ひき。オジイアは目ざめて後そを知るよしもなく、ただ惡夢に襲はれしとのみ思へるなり。之より後かれは女王のために武勳を建つる事多く、アヴァロンの仙鄕をもいつしか忘るるに至りぬ。女王遂に彼に命じて大軍に將として出で立たしむ。翌朝オジイアめざめてしきりに往事を憶へるとき、彼はふと美しき一組の歌を聞きぬ。是ぞ女王が別離の曲にして其沈痛の調こそは、まことに作者モリスが叙事の筆の巧を盡くしたるもの。曰く

HAEC.

In the white-flowered hawthorn brake,
Love, be merry for my sake;
Twine the blossoms in my hair,
Kiss me where I am most fair—
Kiss me, love! for who knoweth
What thing cometh after death?

ILLE.

Nay, the garlanded gold hair
Hides thee where thou art most fair;

HAEC.

Shall we weep for a dead day,
Or set Sorrow in our way?
Hidden by my golden hair,
Wilt thou weep that sweet days wear
Kiss me, love? for who knoweth
What thing comes after death?

ILLE.

Weep, O Love the days that flit,
Now, while I can feel thy breath;

Hides the rose-tinged hills of snow—
Ah, sweet love, I have thee now!
Kiss me, love! for who knoweth
What thing cometh after death?

Then may I remember it
Sad and old, and near my death.
Kiss me, love! for who knoweth
What thing cometh after death?

朝まだきに勇士は發足すれば、女王窓より花束を投じたまふ。この戰に國王斃れたまひしが、將士みなオジイアを以て君とし戴き、やがて女王との結婚成れり。されどのちまた彼は仙女に導かれて、アヴァロンの仙鄉にかへり去りぬ。

『地上樂園』の作に次いで、モリスはまた"Love is Enough"(一八七三)を以て世に問ふ。詩材を『マビノギオン』傳說集にとりたる神祕劇にして、詞藻の美はあれどもモリスの詩才は素より叙事抒情の方面にすぐれて戲曲に適せず、空しく失敗の作に終りきと世の學者は謂へり。かくて詩作に忙しき間、彼はテムズ河畔に別墅を設けて、ここにロセッティと共に益々P・R・B・派の技を磨きぬ。この頃モリスはアイスランドに遊びてその古說(サガ)を研究し、ここに詩想また更に新しき色彩を添へたり。おもふに『エッダ』の卷に集成せられたる北歐傳說は、十八世紀の末葉に羅曼底格趣味の起れると共に、漸次英文學に著大の感化をあたへ、はじめ先づパアシイ、スコットなどの述作にあらはれしより以來、飜譯解說の書出づる事甚だしげく、モリスも既に『地上樂園』のうちなる二篇に此古說をとれ

るあり。そも之等北歐傳說の特徴は、原始時代の北方民族の氣質を遺憾なくあらはしたるに在り。物語中の人物は皆剛勇精悍の氣猛く、ただに男子のみならで女性にいたるまで多くは鐵石の心をもて、義に厚く情に富みたり。愛憎の念あくまでも强うして、殊に復仇雪辱の念銳く、臥薪嘗膽半世の苦を忍んで、之がためには恩愛の契をすらも顧みざらんとするは、秋霜烈日の氣概、さながらわが鎌倉朝の武人に髣髴たるものなきにしもあらず。おもふに地は人を化すとかや、アイスランドは不毛磽确の一孤島、雪山たかく北海のあなたに聳えて、湧きたぎつ硫黃の泉ものすごく、四時おほかたは暗瞑の狹霧に包まれたりといふ。而して此民また詩想ゆたかに、剛邁不屈の民族性は、やがておのづから奇峭の傳說にあらはれたるなり。カアライルは嘗てその『英雄崇拜論』のうちに言へらく、『なべての異敎神話における如く、北歐神話の根本も亦自然界の神性をみとむるに在り。換言せば四圍の世界に働ける神祕不可解の勢力と人心との眞摯なる交涉に外ならず。この點に於て北歐神話は他の諸邦のそれにすぐれたりと覺ぼしく、ここに古代希臘における優雅典麗の趣はなけれども、熱誠眞摯の特徴は優にその缺を補うて餘あるなり』と。十九世紀羅曼底格派の諸詩人、みなしきりにその幽遠の靈趣に醉ひて、題材をここに求めたるもの多きまた宜ならずや。モリスは夙にこの傳說の美を愛すること深く、自らアイスランドに遊ぶ事前後二回、親しく其山水の奇趣をたづね、傳說に現はれたる民情を觀察しぬ。その結果としてあらはれたるもの、卽ち叙事詩 "Sigurd the Volsung"（一八七六）の飜

譯四卷あり。讀詩界はたとひさきの『地上樂園』の作を迎へし嘆美を以てせざりしと雖も、此一篇の譯詩は英詩にあらはれたる北歐文學の産物として、ながく不朽の珍たるを失はざるなり。

モリスが北歐研究の結果はこの外なほ古詩『ビオウルフ』の飜譯（一八九七）となり、また晩年の作なる幾篇の散文詩物語のたぐひにあらはれたり。その文體は十五世紀頃の古文を摸し、マロリイの散文に見ゆる如き奇古の體を學びて、用語はことさらに北歐語原のものを選びぬ。"Cheapingstead"(market town)、"Song-craft"(Poetry)、"Wood-abiders"(foresters)等のごとき奇拔の造語に至りては、もとより純正語（ピュリズム）を重んずる論者の非難を招たれども、こは羅曼底格の古代趣味を傳ふるに於て、その効果甚だ大なりしを想ふべきなり。蓋し獨逸民族が北歐の森林に漂浪して、殺伐精悍の特質を恣に發揮したる時代を寫し、衣服調度の微をすら逸せずして其光景を活寫したる妙趣は、かのスコットの歷史小說と共に、近世英文學の双璧となすことを得べし。慓悍の武人が天神地祇を拜して戰陣に赴き、あるはまた謳歌宴舞のただなか、麗人の紅涙を點出して巧に讀者の心を奪ひ、恍惚として過去の世界に入らしむるに至つては、二者共に其趣を同じうしたるものあるなり。

このほか、モリスまた『オディセイ』と『イイニィド』とを譯したれども、其得意とする處はもとより羅曼底格なる中世に在りて、かかる古典にはおのづから成功少かりき。おもふにかれは決して自ら言へるが如く、

"the idle singer of an empty day"

の詩人にもあらず、はた

"Dreamer of dreams, born out of my due time,
Why should I strive to set the crooked straight?"

といふが如き夢幻空想の人にもあらずして、寧ろ現實界に於て勤勉力行の生涯を送りし人、その一生の事業は極めて複雜多趣にして、述作の浩瀚なるまた多くその比を見ず。常に裝飾美術の製作意匠に心を用ゐ、枯淡無味なる近代の工藝界に高遠の藝術趣味を輸入して、此方面に貢獻するところ大なりしは既に述べたる如くなれど、別に彼は社會主義の大思想家として、近代の英國に於て注目すべき偉人なり。千八百八十三年社會民主黨を組織して遂に自ら其首領となりしより、政治界における彼の運動は急進黨の先鋒なりしが、此方面に於てはかれ寧ろ失意の人なりき。千八百九十五年の頃に至つて健康俄に衰へしかば、翌年の夏を北歐諸威の海岸に送りて痾を養ひたれどその甲斐なく、秋十月英京に逝きぬ。高齢に達してなほ潑溂たる青春の活氣を失はず、人生の美を享樂して倦むことなかりし詩人の生涯はかくて終れり。

ここに注目すべきは社會主義者としてのモリスは、詩人としてのモリスと全く何等の關係なきことにして、其思想と天才とは、此一種の方面に於て互に背馳し衝突せるを見るも奇ならずや。即ち思想

家としての彼は極めて近世的にして、藝術家としては固より純然たる中世派の人なり。極端の社會主義共和說を抱きて王侯將相を無視したれども、詩歌に在ては常に名門右族の生活を描き、翠帳紅閨夢裡の人を寫して、或は帝王を讃し或は英雄を歌ふ。かくて詩人たるモリスには近世社會主義の片影だになくして、純乎たる文藝復興期の騷人の姿を見るなり。

『ジェイソン生涯』の歌をよみ、殊にまた『地上樂園』の名著を繙きたる者は、其作者が疑もなく詩祖チョオサアの『カンタアベリイ物語』に偉大の感化を蒙れる事を見るべし。げにもモリスが簡單明快の叙述は、其天禀の詩才すでにチョオサアに近きを見るべく、其構想に於て、題材に於て、其用語に於て、はたすべて希臘古典の物語をとりて全く之を中世化したる點に於ても、二者の酷肖は、この近英の詩伯が遠き『英詩の曉星』にその範をとりたるを證して餘あり。ただモリスはチョオサアに見ゆるが如きユウモアなく、熱情なく、また其寫實の筆致と性格の描寫とに於て、遠くチョオサアに及ばざるの觀あるのみ。其すぐれたるは、物語の叙述に巧なるが故にあらずして、寧ろ各部分の景情を描くに當りて、婉美の詩風殆ど繪畫のごときものあればなり。高樓に艶なる佳姬麗媛のすがたを寫しては、現代の名工の彫塑を見るが如く、海洋山野の景を叙するの技は、まことに山水畫家の靈筆なり。殊に近代の詩歌は深奥幽玄の想を複雜の辭にうつしたるもの多けれど、モリスは獨り中世にチョオサアが簡雅の風をまなびたるを特色となす可し。

中世尊崇の風はラファエル前派の根本思想にして、十六七世紀は彼等が爲に何の興味あるなく、偏理沒情の十八世紀に至つては殆ど其存在をすらも認めざるなり。モリスの眼中また鐵道あるなく、電信あるなく、匆忙繁劇なる近世生活の沒趣味を厭ひしは、毫も師ラスキンと異ならず。煤煙天を蔽うて白日ために光なき英京の巷は其顧みるところにあらずして、むかしチョオサアが世に在りし日、『淸きテムズのながれ、綠の園生を圍みて、さゝやかに白う淸かりし倫敦』の都を夢みてはあこがれのおもひ常にここを去ることなし、曾ておのが理想なる無何有の鄕を寫しゝ一篇 "News from Nowhere" (一八九〇) に描きしものは、即ち中世の世態を再現せしものにして、そこに封建騎士の俗、羅馬教會の信仰を見ざれども、さりとてまた器械なく、工業なく、騷擾の巷なきいにしへの世にして、ここに人々みな中世の建築をよろこび、中世の衣服を纒へる美鄕をうつし出でたるなり。

ひとしくこれ中世思慕の傾向なれども、異れる心情に映じては、おのづからここに著るしき差異あることを見るべし。今ロセッティを以てモリスに比すれば、前者は殆ど南歐フロレンスの風に心醉したる人なれど、後者は全くノルマンとアイスランドの古に熱中し、羅甸民族の傾向を帶びたるロセッティは純然たる獨逸民族の精神を傳ふるモリスと同じからざるなり。ロセッティは終生未だ曾て伊太利亞の地を蹈まずして夙にこれを慕ひし人、モリスに至つては親しく其地に遊んで而も何等の感興を惹き起すことなく、却て『われ南歐藝術に對して些の同情なし』と告白せるを見ずや。更に之を他の

方面より觀察すれば、ロセッティは神秘の詩人、しきりに幽遠の天堂界にあこがれしに反し、モリスの思想は飽くまでも人生の現實を離れず、その理想とする所は『地上樂園』の美郷に外ならざるなり。また單に兩者詩風の差異に就いていはば、ロセッティは主觀の詩人にして抒情詩風にすぐれ、モリスの作は終始を一貫して常に客觀的敍事詩的傾向を離れず。また前者に象徵神祕のすがたありて幽遠深奧の作多きに反し、後者は何人にも解し得べきやう中世を通俗化して、ひろく英國現代の民衆に其趣味を傳へんとしたるもの、此點に於て寧ろスコットに近きを見るなり。

以上ロセッティ兄妹とモリスとの評說を終りたれば、いま轉じてここに現存の大詩人スヰンバアンを說かん。彼はもとより其根本的傾向に於ては、ラファエル前派の影響感化を蒙りて起れる詩伯なれども、幾多の方面に於てさきの二詩人と其趣を異にし長所を同じうせず。その羅曼底格主義の鼓吹に於て、超世高蹈の態度に於て、はた中世趣味の復興に於ては、もとよりさきの諸詩人と同じけれども、主義を發揮するに當つて卓厲風發、詩壇を風靡したる勢すさまじきは、寧ろ百尺竿頭さらに一歩を進めて前二者の上に在るの感なきにしもあらず。

アルヂアノン・チアアルズ・スヰンバアン Algernon Charles Swinburne は、千八百三十七年四月五日倫敦に生る。英國海軍のスキンバアン提督の子にして家系はもと名門の出なり。幼少の頃は北英

ノルサンバランドなる祖父の家と、南方ワイトの島なる父の家とに育てられしかば、詩人の腦裏に深き印象を遺したるものは北方荒凉の風景に加ふるに、南英の豐沃溫藉のそれを以てしたるもの。われ等いまだ英國に遊ばざる者も、スヰンバアンが海洋の歌を誦しては、おのづから詩人の腦裏を往來せし光景を想ふに難からず。かれは初等教育を佛國にうけ、更に故國のイートン黌にうつれり。のち牛津大學の程にのぼりしが、詩人としての其生涯は既に此頃にはじまり詩作尠からず。殊に在學の間希臘羅甸古文の研究に非常の力を致して、學殖衆にすぐれしは吾人の深く注意すべき所にして、後年の大作はまことに其古典における造詣のあとを示して餘あるなり。げにも詩才學殖併せて秀拔なる者にあらずんば、詩文の醇なるものを作る能はざるは古今東西異るところなきなり。斯くて後故ありて彼は課程を終へずして大學を去り、更に南歐觀光の遊あり。フロレンスに故國の詩人ランダアを訪ひしが、スヰンバアンは夙に彼が倘古の詩風を欽慕したりし者、今また尊崇の情更に切なるを加へ、ここに共感化を蒙むること益々大なるに至りしなり。（『ポエムズ・エンド・バラッヅ』の集中 "In Memory of Walter Savage Landor" の作を參照すべし）而してかのロセッティ、モリス等と親しく相往來して、共に清新の藝術を賞し、ラファエル前派の詩風を學びたるは、この伊太利旅行より歸りし後なり。また此頃戲曲二篇を作りて秀拔の詩材すでにその鋒鋩をあらはし、たとひ詩句に生硬の譏を免れざりしと雖も、無韻詩律（ブランク・ヴアース）の自在すでに能く一部の評家の注目を惹きたりき。

千八百六十五年、彼がはじめて忽然として一代の耳目を聳動したる悲曲『アタランタ・イン・カリドン』"Atalanta in Calydon" あらはれぬ。その形式に於ても、その精神に於ても、全く古代希臘の悲劇を摸したる抒情詩風の戯曲にして、シェリイの同じ體の作、たとへば『プロメシウス・アンバウンド』の如きを除きて、近世の英文學またよく之と比肩するに足るものあるなし。カリドンの野に野猪を狩るメリイガアと、『雪のやうに美しう、風のやうに足早なる』アタランタの姫との物語を借りて、ここに高雅雄健の思想を托し、希臘古曲の法式を嚴守して、能く全篇の統一を保ちたるのみならず、裏面には神意に反抗するの不可能を示せる一種の fatalism の意を寓したる妙を見るべし。然れどもスヰンバアンの諸作に重んずべきものは其の內容たる思想感情にあらず、彼をして優に古今の大詩人と伍せしむるものは、實に詩形の美をなすに絕世の技あればなり。彼は聲調押韻のうへに英國の詩人が古來未だ嘗て試みざりし新聲を創め、最も深く音律の美に意を致したるが故に、時に或は音のため意を捨つるの傾向すらなきにしもあらず。物語を叙し感想を傳ふるはその主なる目的にあらずして、期する所は瀏喨たる樂聲の美に讀者を醉はしめんとするなり。若しロセッティやモリスの詩歌を以て繪畫に比すべくんば、スヰンバアンのはまさに純然たる音樂に外ならずして、この點に於てはたとひテニソンと雖も遠く及ばざるの觀あるなり。もとよりわれ等異邦異文の徒にして、殊に音樂の耳なきものには、これが完全の鑑賞を庶幾すること難けれども、しかもなほ彼の作を誦して高調ながく

腦裏に印せられ、不知不識の間これを諳誦するに至るものあるは、秀麗の聲調まことに古今に卓越するものあればなり。毫も不自然なる押韻なく、また巧に頭韻（アリテレーション）の法を用ゐたるはその獨得の技にして、殊に『アイアムビック』（⌣—）に、急速なる『アナペスト』（⌣⌣—）の詩脚を調和して、獨創の新調をつくり、英語本來の性質が困難なりとせる六律脚（ヘクザミタア）をさへ自由に驅使し得たるは、彼が一代の耳目を聳動したる所以なり。殊にこのアタランタの曲中第一の合唱（コーラス）は、壯麗の春色をうつして、聲調の美を擅にしたるに於て、古今の英詩に冠たるは萬人のみとむる所なり。

When the hounds of spring are on winter's traces,
　The mother of months in meadow or plain
Fills the shadows and windy places
　With lisp of leaves and ripple of rain;
And the brown bright nightingale amorous
Is half assuaged for Itylus,
For the Thracian ships and the foreign faces,
The tongueless vigil, and all the pain.

かれはまことに天成の樂人にして、英詩音律の發達に一新紀元を劃したる人なり。從來アイアムビ

ックの詩脚に限束せられたる英詩はスヰンバアンの新工夫によりて、『ダクティル』（一くく）『アナペスト』（くく一）『コリアムバス』（一くく一）を交へて變調を生じ、未だ曾て例なき新聲を英詩に聞く事を得たり。かたくるしき英語ひとたび彼が自在なる詩筆に上れば、剛柔高低のしらべおのづからその自在なるに驚く。之をたとふればあまたの樂器みな能く和諧の調をなして、さながら管絃樂を耳にする如く、ここに雷霆の轟くあり、海潮のとよもしあり、さてはまた若葉にそよぐ風なつかしき（スヰンバアンが所謂 lisp of leaves）をも交へて、身にしむ思ひ忘られず。

なほ次いで來る三つの合唱、即ち "Before the beginnig of years," "We have seen thee, O Love, thou art fair," "Who hath given man speech?" に抒情詩の高調を味はば、スヰンバアンが私淑したるシェリイの作は寧ろ見劣りせらるるの感なきにあらざるべし。

『アタランタ』の悲曲に世を驚かしたるスヰンバアンは、千八百六十六年更にまた初期抒情詩の作を集めて、『ポエムズ・エンド・バラッヅ』"Poems and Ballads" 第一巻を公にす、（第二巻一八七八年、第三巻一八八九年）。ラファエル前派の風格著るしきは即ちこの集なり。才藻のあふるるがままに險怪妖艷の趣を恣にして、青春熱情の詩人はここに猛火天を燬くの勢を以て詩壇の耳目を聳動したり。集中の諸篇は多く希伯來、希臘、ならびに歐洲中世の遺韻を近代の英詩に復活したるもの。その讀詩界を驚動したる所以のものは、戀愛を歌ふに感官の美を重んじ、世の所謂道義に對して飽くまで

も不羈奔放の態度をとりたればなり。おもふに基督教的道德の羈絆に反抗したる彼が詩眼に映ぜし戀愛觀は、古代希臘の異教(ペイガニズム)のそれにして、戀愛を崇拜し神聖視して之を讃美し、絶對的に近世道德の標準を無視したるもの、たま〳〵以て道學先生を顰蹙せしむるに足る。さきにロセッティの條に述べたるビュカナンの著『肉感詩派』の冷嘲を筆頭として、此詩集はいたく騷壇に物議を釀し、肉慾崇拜に對する辯難攻撃の聲極めて喧しく、出版書肆は遂にその發賣を中止するに至りき。げにも抱擁、接吻金髮、朱唇等の語を羅列して、情熱の熾盛を感官の美に托したる所謂『病的戀愛觀』morbid eroticism は、藝術鑑賞の眼なき凡俗の耳目を驚かしたるも怪むに足らず。かくてスヰンバアンは遂に一篇解嘲の文を草して、世評に酬ゆるに至りぬ。

いま集中の諸作に就きて、最も注目すべき諸篇を擧ぐれば、

卷頭の"Laus Veneris"(『ヴヰナスの讃美』)は、近世羅曼底格派の好んで用ふる所のタアンホイゼルの物語を用ゐ、力を極めて情慾肉感の美を歌ひたるもの、全卷の特色を先づ此一篇に徴すべし。

ロセッティ、モリスなどの詩篇に見ゆるラファエル前派の特色著るしき者には、"A Christmas Carol"(もとロセッティの繪畫によりたるもの、バラッドの體はロセッティのそれに酷肖せり)、"The Masque of Queen Bersabe"(神秘劇(ミラクル・プレイ)の形を用ゐて、希伯來古曲の體を摸したるも

のゝ "St. Dorothy"（古代殉教者の熱誠の信仰を歌ひたるもの）等をはじめ、"The King's Daughter" "The Sea-Swallows" などあり。

希伯來の遺韻を移したるものに、"Aholibah," "A Ballad of Burdens" あり。希臘古典に材をとれるは、"Phædra" "At Eleusis," "Itylus," "Hymn to Proserpine" などあり。情熱の奔放を以て著るしきものは、"Hesperia," "Anactoria," "The Garden of Proserpine" "The Triumph of Time" などをはじめとして、殆ど枚擧に遑あらず。

前後三卷の『ポエムズ・エンド・バラッヅ』のほか、『曉天の歌』"Songs before Sunrise"（一八七一）、『春潮集』"Songs of the Springtides"（一八八〇）、『中夏安息』"A Midsummer Holiday"（一八八四）等の詩卷に盛りたる幾十篇の珠玉に就きて、光もまばゆきその燦爛の美を說きて、批判引證の精緻に入るの遑あらざるが故に、ただ之等の詩篇を研究して得られたる結果を總括して、以下少しく之を說かん。"Ave atque Vale" といふに、佛蘭西の詩人ボドレエルを哭したる歌あり。輓歌の體としては、抒情の熱誠想像の奔放に於て、『リシダス』『アドネイス』『サアシス』など英國古今輓歌體の名什をすら凌駕したるものあり。おもふにボドレエルの詩集『惡の華』（ラール・ドウ・マル）の如きにあらはれたる險奇幽鋒の思想は、もと北米の詩人ポオより得たるものにして、スヰンバアンに同じ傾向あるもおのづから此佛國詩人に負ふところ尠からざるなり。いま此哀歌にあらはれたるは、年ごろ其景

慕尊崇したりし至情おのづから發して秀拔の調をなしたるもの。聲調の豐麗は劈頭の數行によりても之を窺ふことを得べし。

Shall I strew on thee rose or rue or laurel,
　Brother, on this that was the veil of thee?
　Or quiet sea-flower moulded by the sea,
Or simplest growth of meadow-sweet or sorrel,
　Such as the summer-sleepy dryads weave,
　Waked up by snow-soft sudden rains at eve?

更にまた想像の奔放と詞藻の壯麗とを示さんがため、ここに其第六節をかかげん。

　Now all strange hours fall……

彼は佛蘭西詩歌の影響をうくる事甚だ大にして、近世の詩人にして、彼が尊崇したりし者はボドレエルのみならで、佛國近代の羅曼底格派の始祖ともいふべきユウゴオ以下、熱烈の抒情詩人の諸作を愛誦して感化を蒙むる事尠からず。殊にまた古詩人ヰヨンの作を飜譯したるものを讀まば、彼が佛蘭西古詩に造詣する事甚だ深きを知るべし。殊に現今オオスティン・ドブソン、アンドルウ・ラング、エドマンド・ゴッス等名家の間にひろく行はるる ballade, rondel, sestina 等の佛蘭西古詩の體を、はじ

めて英國の詩歌に試みたるもの、亦スヰンバアンに外ならざるなり。

彼は單に佛蘭西文學に精緻の研究を積みたるのみならず、希臘羅馬の詩文に精通し、また深く中世の文學を究めて、其豐麗なる傳說民謠の類に明らかに、學殖の博大深遠なるに於てまことに近英詩人の第一位にあり。而して其學ぶところはおのづから彼の詩篇にあらはれ、天禀の詩才と相待つてここに曠世の大作をなしたるなり。こは古詩の飜譯或は古式の韻律を摸して作れる詩歌に著るしきのみならず、その作中希羅の古語を用ゐて作れる詩篇甚だ多く、曾て自ら謂へらく『余はおのが知れるいかなる國語の詩形にても喜んで之を用ふ。そはさながら樂器のごとく、全く音律のためなり。新しき詩形を見て直にこれをわが手または聲に試みんとするは、恰も幼兒が語り得る前に歌はんと試むるに似たり』と。詩人として小說家として佛蘭西近代の大家たるテオフィル・ゴオチエの逝くや、英伊佛諸邦の詩人皆追悼の歌を作つて靈前に捧げしが、うちスヰンバアンの作は最も長篇にして、今その詩集に收められたる "Memorial Verses on the Death of Théophile Gautier" (『ポエムズ・エンド・バラッヅ』第二集) の篇卽ち是なり。嚴格なる四行詩(クワトレン)の體を用ゐて頗る婉美を極む。此時スヰンバアンが寄せたるは、なほこの外にソネット一篇、佛語の短詩二篇、及び希臘羅甸の哀歌各一篇を加へぬ。さしも八十人の騷客遂に一人の此多才博識に及ぶもの無かりしといふも宜なるかな。彼はまた或時人のヲルヅヲルスの詩篇を論ずるを聞きつつ卽座に之が羅甸譯を造れりといふ。げにかの困難なる古代

語をさまで自由に驅使するの技は、まことに能く彼の詩才學殖を證したるものにして、吾人の驚嘆するところなり。かの平明なるテニソンの作品を讀むにすらも、古典の知識淺くしてはその深趣を逸する憾多きは、前章既に述べたるところ、ましてスヰンバアンの作に至つては、學淺くして未だ古典に精確の知識なきわれ等の如きにとりては、ただ字義の表面を辿るとも、典據に暗くして未だ其裏面に潛める韻致を殘なく味ふこと能はざるなり。『アタランタ』の悲曲以下の諸篇、これが嚴密の訓詁に至つては、別に古典學者の勞に待たざるべからず。

また之等の詩集に著るしきは、彼が壯年の頃に懷抱したる急激の自由主義なり。スヰンバアンの祖父はもとミラボオの親友にして、從つてわれ等の詩人も少年の頃すでに佛國革命に淺からぬ同情を有したる人、千八百六十七年より以後殆ど四年間は最も深く歐洲の革命自由の說に熱中したりき。必ずしも政界の俗事に心を傾けて詩神の寵にそむきたりしにはあらねど、彼は年ごろランダア、シェリイ、ユウゴオなど、近代自由主義の詩人を景慕したるものから、祖父の志をも承けて益々此傾向に向ひしなり。かくて大陸諸邦の革命の偉人を讃嘆し、專制政治に對して攻擊の筆を揮ひしもの多く、かれが壯年の慷慨悲憤を政治詩に洩らしたるもの尠からず。たとへば『伊太利の歌』といふに、ガリバルディ、マンニィなど自由の英傑を嘆美したる篇、俊爽いふべからず。『佛蘭西共和國の歌』『革命の夕』などの如きも亦此類なれど、特に詩集『曉天の歌』一卷、自由の曙光いまだあらはれずして暗黑

の夜と戰へるを叙したる詩篇、さながら將軍槊を横たへて慨然として高歌するが如く、抒情の筆はここに壯烈の極に達したり。

　スヰンバアンは近代の詩人のうち、海洋の壯觀を愛すること最も深かりし人なり。おもふに四面環海の國土に發達し、また遠き昔より海上生活に慣れたる北歐民族の精神をうつせる英文學が、海洋に關する詩歌に豐富なるは怪むに足らずと雖も、おのが熱烈壯大の氣魄を以て、或は蓼々たる潮聲のとよもすを耳にし、或は澎湃たる激浪の壯觀に對して、その眞精神を捉へ得たるもの、古來またスヰンバアンの如きは數多からず。かれもと高蹈超世の詩人、濁惡の穢土ならぬ海洋の清淨界に眞美の世界をみとめ得たるもうべならずや。げにも碧海渺漫の景は、潮聲の斷續昂低に伴うて常に彼が詩篇にあらはれ來りて、ここに自由平等を觀じ、ここに煩悶苦闘をおもへるなり。ことに『春潮集』の一卷最も秀抜なる此種の作を收むること多く、“On the Cliffs” に希臘の女詩人サッフォの昔を偲び、“The Garden of Cymodoce” に、巧妙なる例の頭韻（アリテレイション）を用ゐて海潮の音を摸したるなどはいふも更なり、いづれの集にも海洋に關する麗章なきものはあらず。從つてここに例證として擧ぐべきものは固より無限なれども、今『時の勝利』“The Triumph of Time” と題したる悲痛熱意ふたつながらこもれる初期抒情詩の名篇より一節を錄して、壯麗の趣を示さん。

“O fair green-girdled mother of mine,

Sea, that art clothed with the sun and the rain,
Thy sweet hard kisses are strong like wine,
　Thy large embraces are keen like pain.
Save me and hide me with all thy waves,
Find me one grave of thy thousand graves,
Those pure cold populous graves of thine,
　Wrought without hand in a world without stain."

此『わが母なる海』といふ語はスキンバアンが海洋を愛する事の深きを示したるもの、ガアンセイ灣頭の吟、海洋を讃したる篇にも同じ語を用ゐたり。いはく、

My mother sea, my fostress, what new strand.
What new delight of waters, may this be,
The fairest found since time's first breezes fanned
　My mother sea?

Once more I give me body and soul to thee,
Who hast my soul for ever: cliff and sand
Recede, and heart to heart once more are we.

My heart springs first and plunges, ere my hand
Strike out from shore: more close it brings to me,
More near and dear than seems my fatherland,
My mother sea

なほかみに列擧したる詩卷のうち特に異彩を放つものはバラッド體の作にあり。スヰンバアンは甞ておのが論文集のうちラファエル前派の作品に就いていへることあり。曰く、バラッド體の最高の形式に達せんには、詩人は先づ抒情詩的にして且戯曲的なる叙説の法に長ぜざる可からず。而してまた能く簡潔の詩鑵を用ゐて、羅曼底格の物語風に常なる廣漠の體を緊縮せんことを要すと。かくてロセッティの作『姉上ヘレン』を以て近代における此詩體の最大なるものとなしぬ。されどスヰンバアン自らのバラッド體は、抒情の巧あまりあつて寧ろ戯曲的ならざるの感あり。たとへば、"The Bloody Son" "The Weary Wedding" "The Bride's Tragedy" のごとき名篇すら、今少しく語を簡にして之を短縮せば、感興印象更に深き者あらんとは多くの評家のいふ所なり。而して『ポエムズ・エンド・バラッヅ』第一卷をさむるところの "The King's Daughter" "The Sea-Swallows" などに至つては、ロセッティやモリスを摸倣したるあと極めて歴然たるを以て名あり。されど卷中の "May Janet" のごとき、短篇なれども稍趣を異にして、寧ろ通俗の體に近からんとつとめたるが如し。

さきに『アタランタ』の名曲を公にして一躍大詩人の列に入りたるスヰンバアンは、之に次いで悲劇『シヤトラアル』"Chastelard"（一八六五）を作りぬ。蘇格蘭の女王メリイの事蹟を材としたるもの。女王に伴はれて佛蘭西より來りしわかき武士シヤトラアルとの間に起れる戀愛の悲劇なり。『アタランタ』の高雅雄渾なるに比して、この曲は情焔あくまでも盛に、史劇としての其成功はスヰンバアンの天才が戲曲の方面に於ても秀拔なるを證するに足れり。こはその後に出でたる『ボスヱル』"Bothwell"（一八七四）『メリイ・スチュアート』（一八八一）の二曲と共に、エリザベス朝の戲曲にならひたる三悲劇(トリロジイ)をなす者。なかにも『ボスヱル』一曲一萬五千行は寧ろ長きに失して、全篇の統一照應を缺くの憾あれども、其雄壯にして圓熟せる詩風は、確かに近英の一大雄篇たるを失はず。三篇みな流暢明快の無韻詩律を自由に驅使して、さきの『アタランタ』におけるが如く、古代希臘の運命主義を寓したるなり。スヰンバアンは夙に處女王朝の戲曲に精緻の研究を積みて、深くエブスタア、フォルドなどの作を愛して、其感化を蒙むること甚だ大に、また特に奔放熱烈なるマアロオの遺風を追慕したるあと著るしきは萬人の認むる所なり。（『ポエムズ・エンド・バラッヅ』第二集のうち"In the Bay"と題したるマアロオ追慕のうたを參照すべし）。其戲曲が筆路全くこれ等古名家のあとを追へるも怪むに足らず。ただ動作の緩漫なる故を以て、舞臺にのぼすに適せざるは近世戲曲の通弊なりかし。

ラファエル前派の詩客みな好んで豐麗なる中世傳說にその詩材をとれり。スヰンバアンもまた『ト

リストラム・オヴ・ライオネス』"Tristram of Lyonesse"（一八八二）に、かの有名なるケルト傳說の一部をとりて、熱情の奔放を壯麗艷美の詩風にうつしたり。旣にかみにも述べたる如く、テニソン、マシウ・アァノルド、モリスなど、近英の大詩人の名作に此題目を用ゐたるはあれども、スキンバアンのは稍それ等と趣を異にして、神祕夢幻の趣味なき代りに、絢爛華麗の態を恣にして人を眩惑せしめんとするを特色とす。而してスキンバアンは此篇に於て、巧に五脚對聯の莊麗なる詩形（卽ちヒロイック・カプレットの詩律にアナペストの脚を應用して、從來になき新調をはじめたるもの）を用ゐたり。今玆にイシュルト姬を寫したる有名の一節を掲げて、比喩對照など修辭の巧を盡くしし詞藻の陸離たる例證を示さん。

"The very veil of her bright flesh was mace
As of light woven and moonbeam-colored shade
More fine than moonbeams; white her eyelids shone
As snow sun-stricken that endures the sun,
And through their curled and coloured clouds of deep,
Luminous lashes, thick as dreams in sleep,
Shone, as the sea's depth swallowing up the sky's,

The Springs of unimaginable eyes.
As the wave's subtler emerald is pierced through
With the utmost heaven's inextricable blue,
And both are woven and molten in one sleight
Of amorous colour and implicated light
Under the golden guard and gaze of noon,
So glowed their aweless amorous plenilune,
Azure and gold and ardent grey, made strange
With fiery difference and deep interchange
Inexplicable of glories multiform;
Now, as the sullen sapphire swells towards storm
Foamless, their bitter beauty grew acold,
And now afire with ardour of fine gold.
Her flower-soft lips were meek and passionate,
For love upon them like a shadow sate
Patient, a foreseen vision of sweet things,
A dream with eyes fast shut and plumeless wings
That knew not what man's love and life should be.

Nor had it sight nor heart to hope or see
What thing should come; but, childlike satisfied,
Watched out its virgin vigil in soft pride
And unkissed expectation; and the glad
Clear cheeks and throat and tender temples had
Such maiden heat as if a rose's blood
Beat in the live heart of a lily-bud."

この一節こそは最も能く全篇の詩風を代表したるものにして、これやがて新羅曼底格派（ニオ・ロマンティック）の特色を極端に發揮せしものに外ならず。蓋し叙說の筆は複雜多趣を極めて、讀者の腦裏に輪郭明瞭ならざる朦朧たる印象を與ふる處に却て其美を存す。おもふに初期の羅曼底格の詩人中スコット、バイロンなどは勿論、キイツの作『聖アグネスの夕』『レミヤ』のごときすら、之を後のラファエル前派の詩風に比すれば、物語詩として寧ろなほ簡明直截なるの觀あり。然るにこの『トリストラム・オヴ・ライオネス』全篇を通讀せば、何人も人物景情の描寫つねに朦朧たるの傾向を帶ぶる事をみとむべし。

スヰンバアンがケルト傳說を詩材となしたるもの、なほこれ以外に "The Tale of Balen"（一八九六）あり。二人の兄弟バリンとバランとは城中の馬上試合に眉庇（まゆさし）ふかくおろして、互に其兄弟なる

を知らずして相戰ひ、一人先づ殺され、他は死に瀕して氣息奄々のうち初めて同胞なるをみとむといふ悲壯の物語、かみに述べたるアアノルドの『ソオラブとラスタム』に相似たるものあり。テニソンも亦“Balin and Balan”（テニソンのアアサア物語中、最後に出でたるもの）に同じ題目をとりたれど、悲壯沈痛の趣はスヰンバアン遙にまされり。

スヰンバアンは詩人として以外、別に文藝批評の論文を以て優に近世散文の一大家たるに恥ぢざるなり。而して彼が評論を草するや、其特に尊崇敬慕せる者にあらずんば、則ち駁撃論難毫も假借せざらんとする者なり。從つて其文は其詩の如く抒情的に、熱情の美に富む。おのが愛する者は力を極めて之を激賞し、惡める者は力を極めて之を辯難す。その結果は褒貶ともに極端に走りて、竟に冷靜なる客觀的批判の態度を失すと雖も、われ等はその豐麗暢達なる散文の美に醉ひ、彼が學殖の深遠と壯麗の詞藻とを慕うてまた他を顧るの遑あらざるなり。また自ら絶大の詩人なるが故にテクニックに明らかにして、深奧の透察に於ても毫も第一流の評家に下らざる者あり。われ嘗て其『沙翁研究』“A Study of Shakespeare”（一八七九）の一卷を繙き、初めて彼が雄渾の文と聰明の見に服してより詩人の評論は、古今の沙翁研究家の學究的態度に似ざる者あるを知りぬ。殊に彼が深く愛慕したるエリザベス朝文學に關する研究、ユウゴオ、シヤロット・ブロンテ、モリス等を論じたる諸篇は皆一代の名文にして、彼をして優に近英散文界の第一流に列せしむるに足る。

スヰンバアンの詩歌を通じて著るしきは、反抗的革命的精神の雄大なるに在り。さきに述べたる如く、『ポエムズ・エンド・バラッヅ』は現代の道學思想に反對して、その覊絆束縛を脱せんとし、矯激の態度遂に世の物議を招き、『曉天の歌』に至つては、別に政治上宗教上の革命思想を鼓吹して壯烈の詩篇をなしたり。蓋し羅曼底格派の作家が社會に對する矯激の態度は、いづれの世いづれの國にも相似たるものあれども、スヰンバアンの思想的傾向は、其最も多く尊崇したる詩人シェリイのそれに酷肖す。おもふに二者ともに名門の出にして、少壯のころ既に政治的社會的慣習に反抗したるは一なり。ただスヰンバアンの閲歷は寧ろ平靜無事にして、シェリイの急激なる行動なかりしと雖も、一たび筆をとつて文壇に立つに至つては、その現代基督教を難じ道學先生を攻撃せる態度の熱烈奔放を極めたるは、むしろシェリイ以上に出づる者なきにしもあらず。彼の詩歌は、シェリイの神韻縹緲として毫も肉感美を歌ひたるものなきに似ざれども、剛壯なる急進的思想に於ては全く同一の傾向あるもの、永く眠りたりし琴の絲に先づ指を觸れしはシェリイにして、之を彈じて天堂の妙樂を奏したるものこそ、げにスヰンバアンなれ。

ひとしくラファエル前派の詩人なれども、ロセッティは南歐伊太利亞の羅曼底格趣味を傳へ、モリスは主として北歐スカンディナヸアのそれに傾けり。而してスヰンバアンに至りては、學殖の該博遥にかみの二詩人の上にあるが故に、『アタランタ』の悲曲以下の諸篇に、主として希臘思潮の美を傳

へたるのみならず、別にまた廣く佛蘭西文學の趣致をも移植復活して、殆ど一個の折衷派とも稱すべき傾向を示したり。其希臘趣味を愛慕したるは、シエリイの感化は勿論、キイツ、ランダア等の影響も亦大なりしは疑ふべからざるなり。（此派の諸詩人みな各々斯の如き異れる特色を具ふるを以て『ラファエル前派』の名稱は繪畫の方面に於てこそ適當なれ、詩歌のうへには甚だ妥當を缺くの感なきにあらず。故に、此派と密接の關係ありて同一の主義を鼓吹したる近英散文の大家ヲルタア。ペイタアの如きは、千八百六十八年モリスの詩歌を論ずるに當り、現世を超越して前代の詩美を追慕せる此派の詩人に通有の傾向を目して、the Æsthetic Movement なる名稱を下すに至れるなり）。

スキンバアンの詩篇は雄渾莊重の特質を以て、古今の英文學に首位を占むるのみならず、詞藻の絢爛、聲調の婉美に於て同代の詩人また能く之に及ぶ者あるなし。而かも彼はその名聲に於て、讀者の數に於て、遠くテニソンに及ばざりしは何の故ぞや。蓋しスキンバアンの用ゐたる題材は多く之を希臘羅馬にとり、或は英佛の古代に求め、且つ彼が淵博の學殖を傾けたる其詞藻の美を遺憾なく鑑賞せんと欲せば、先づ讀者に尠からざる素養を要するを以て、テニソンの平明なる詩篇と異りて解し易からざるも其一因なり。されど最も有力なる原因は、急激にして剛壯なる反抗的精神鬱勃としてその詞章に溢れ來り、政治宗教道德に關して極めて危險なる思想を有すればなり。而かもまた其作が小數の詩人學者等にいかばかり歡迎せられたるかは、殆ど吾人が想像の外に在りといふべく、ことに少壯

氣鋭の詩人しきりに彼が獨創の聲調を學んで、現代の詩界に著るしき共反響を聞くことを得べし。

最近英詩概論 終

最近英詩概論　索引

(ア)

頁

アアサア王の歌 ……………………………… 306.—319.327. 331.388.479

アアサア王の傳說…………………………………………………… 301—306

アアサア物語 …………………………………………………… 299.—305

Earthly Paradise, The (地上樂園) ……………………………………

アアノルド(マシュー)Arnold, Matthew ……………………… 275.393.—405

アアギンク(ヘンリー) ……………………………………………… 323

アイアムビック ………………………………………………… 497—498

アイダ Ida ……………………………………………………………… 289

Idylls of the King (アアサア王の歌)……………………………………

アヴァロン …………………………………………………… 485—488

アガメムノン ……………………………………………………… 351

惡の華 …………………………………………………………………… 500

アストン ……………………………………………………………… 321

アソランドオ Asolando! ………………………………………… 352—354

アタランタ・イン・カリドン Atalanta in Calydon ………… 490.507.512

アタランタ競走 ………………………………………………………… 485

アタランタ姬 …………………………………………………………… 496

At Eleusis ……………………………………………………………… 500

アップレシエイシヤン賞論 ……………………………… 2[illegible]2.446

アドネイス ………………………………………………… 256.407.500

Anactoria ………………………………………………………………… 500

アナペスト ……………………………………………………………… 497

あはれみなきたをやめ ……………………………………… 257.444

After Alma ……………………………………………………………… 423

アプト・フォグラア Abt Vogler …………………………………… 380

Aprile …………………………………………………………………… 346

Ave atque Vale 500
Aholibah 500
アンドレア・デル・サルト Andrea del Sarto ....380.383.
Ambarvalia 406
Arthurian Cycle of Romance 307
アルセィスティスの戀 484

(イ)

異域望郷 379
イイツ 248.476.481
イイ＝イド 284.300.301.490
イシュルト姫 508
伊太利古詩人 Early Italian poets, The 438
伊太利の歌 503
いづれの運命にも準備たる 404
Itylus 500
去にし歲月 452
イノウ＝ (Œnone) 280.284
いのちの流 407
イノック・アアデン............................319—321.330
イフィゲニア 286
In utrumque paratus (いづれの運命にも準備たる)...................404
England goes to War 423
Incident of the French Camp (佛軍美談) ....
Insomnia (不眠) ....
イン・メモリアム In Memoriam... ....292—293.299—301.307.393.401
イワン・イワノキッチ Ivan Ivanovitch 379
インジロウ 471

(ウ)

ヴァアジル 283.300

Weary Weddig, The..500
ヴェニスの石..479
ヴオオン..473
Water Spirit's Song, The..472
ウオレス Wallace, Alfred Russel..272
疑と祈..326
Woodspurge, The..460
ヴヰナス..455
ヴヰナスの讃美 (Laus Veneris)..499

(エ)

英詩律脚論..336
Æsthetic Movement, The..513
エイタン Aytoun, William Edmondstoune..414
英雄崇拜論..489
エヴリン・ホープ Evelyn Hope..378.382
エッダ..481.488
Eden Bower..451
Etorie des Bretons..303
エトナ山上のエムペドクリイズ Empedocles of Etna..491
エドワアド三世..247
エドヰン・モリス..283
Enid..309
エンシェント・マリナア..252
エンデイミオン..256.264
えらび..452
エリオット(エベニイザ)..269
エリオット(ジオーヂ)..334
エルヱ・リイル..351.379
Elaine..310
エレクとエニイド Erec et Enide..303

(オ)

オウエン(ロバアト) 268
オヴキッド 482
王の悲劇 442
オオロラ・リイ Aurora Leigh 426
Ogier the Dane..485—483
オシアン Ossian 246.444
オジイア ....485—488
　恐ろしき夜の都..409.410
牛津運動 272
オディセイ 482.490
おもに抒情の歌 279
折り返し..456.464
オルカニヤ 432
On the Cliffs 504

(カ)

カアライル..254.272.414
Gardener's Daughter; The 281
Carlovingian Cycle of Romance 301
海上故國を憶ふ 380
ガイマア(ジエフリ) Gaimar, Geoffrey 303
香川景樹 262.339
學者の葬 383
カクストン 303
革命の夕 503
カサ・ギディの窓 Casa Giudi Windows 428
風吹くかた 407
カトウルラス 283
Garden of Cymodoce, The..504

Garden of Proserpine, The 500
かの君なくば 452
Coming of Arthur, The 302
カンタアベリイ物語 269. 492
カメル(トマス) 258
ガラハッド 179
ガルッピの樂 A Toccata of Galuppi's, ...380
Gareth and Lynette 309

(キ)

キイツ..2 4.275.444
キップリング 270
キネギイア Guenever, Guinevere 479
金槐集 335
Kinkg's Daughter, The 500.506
King's Tragedy, The ....454—456
キングスレイ 268
近代畫家論 234
キュピッドとサイキイ 484
驚異の復活...443.444
敎會及び宗敎...393
曉天の歌...500. 503.512
享樂受福 456
希臘古瓶の歌 256
希臘風 257
基督敎的社會主義 268

(ク)

Queen Mary 322
クウパア 248
クウパア墓畔吟 Cowper's Grave 428

くちづけ ……………………………………………………………………451
雲 ……………………………………………………………………………255
Cry of the Children (小童のなげき)……………………………………
クライスト ……………………………………………………………………261
グラウゼ ………………………………………………………………………482
クラシシズム ……………………………………………………260—265.405
クラショウ ……………………………………………………………………473
クラッブ ………………………………………………………………………248
クラフ(アアサア・ヒュウ) Clough, Arthur Hugh ……………405.409
クブラ・カン ……………………………………………………………………414
Grammarian's Funeral, A (學者の葬) ………………………………
クリスタベル ……………………………………………………………………444
Chistmas Eve and Easter Day ……………………………………349.357
Christmas Carol, A ……………………………………………………………490
グレイ ……………………………………………………………246.326.386
グレイン …………………………………………………………………………455
クレゼエ …………………………………………………………………………303
クレティアン・ドウ・トロア Chrétien de Troyes ……………………303
Crossing the Bar (水門をよぎりて) ……………………………………
クロムエル ………………………………………………………………………395

(ケ)

桂冠詩人 ………………………………………………………………………291
輕騎進行曲 ……………………………………………………………………298
ゲーテ ……………………………………………………………254.259.416
劇中人物 ………………………………………………………………………350
ケハアマ ………………………………………………………………………252
Caleb Williams …………………………………………………………………268
言語研究 ………………………………………………………………………279
ケンシントン公園の歌 Lines Written in Kenshington Gardens, …404
ゲントよりエイクスに報を傳へたる歌 How they brought the

Good News from Ghent to Aix; 351
Cathcart's Hill 423
ケリイ 462
ケルト傳說 508

(コ)

戀の遺言 451
戀の生れ 451
戀の戀人 452
戀の高御座 450
戀のながめ 451
高僧聖ブラクセッド寺に墳墓を命ず 379
降誕祭の前夜と復活祭の日 357. 393
Corn Law Rhymes 269
荒野の臨終 379
コウルリッヂ ....250—252,279.444
ゴオチエ(テオフイル) 502
荒村行 247
ゴールヅン・レゼンド 462
ゴールドスミス 247. 322
古歌拾遺 246. 248. 444
告天子 255
こゝろの望 451
古城の戀 378
ゴッス(エドマンド) 501
ゴッツオリ 432
ゴドキン(キリアム) 268
湖畔詩社 250
ゴブリン・マアケット Goblin Market 474
コムト 268
コリアムバス 498

コリンズ ……………………………………………………………246—247
コルネイユ ……………………………………………………………482

(サ)

サア・ガラハッド Sir Galahad ……………………………………281. 414
サアシス Thyrsis ……………………………………………………401.500
Sir Richard Grenville's Last Fight……………………………………423
西鶴 ……………………………………………………………………321
最後樂人の歌 …………………………………………………………253
Saisiaz, La (太陽)……………………………………………………
在天聖女……………………………………………………………456—459
Summum Bonum ………………………………………………………346
サイモンヅ(ジョン・アディントン)…………………………………469
Silent Voices, The ……………………………………………………326
サウジ……………………………………………………………252—253
サクセ・ゴータのマスタア・ヒユウグス Saxe Gotha, Master
Hugues of ……………………………………………………380. 386
サタンよ、わが後に退け………………………………………………452
サッカレイ ……………………………………………………………281
サッフオ ………………………………………………………………504
雜論集 …………………………………………………………………293
Sudden Light……………………………………………………………459
實朝 ……………………………………………………………………335
サン(ジョルジュ)……………………………………………………395
サラバ …………………………………………………………………252

(シ)

These all wait upon thee ……………………………………………471
Sea-Swallows, The……………………………………………………500.506
ジイバア Gebir ………………………………………………………257
Sea Limits, The ………………………………………………………460

City of Dreadful Night, The (恐ろしき夜の都)........................
City Poems (都の歌) ....
シエイクスピア..269. 326
沙翁研究 A Studp of Shakespeare, ...511
ジエイソン..481--483
ジエイソンの生涯..481--483.492
ジエフリ Geoffrey of Monmouth 302
シエリイ ....255—256.345.496. 512
ジオット 458
ジオルジオネ 453
Siguard the Volsung 489
詩人 280
詩神に寄する歌 248
詩人の心 280
獅子に助けられし武士の物語 Le Chevalier au Lyon 303
詩集(アアノルド) 395
詩集(ロセッテイ) 440
Sister Helen 454. 506
自然詩論 252
自然淘汰による種の起源 271
シッダル エリザベス) Siddall, Elizabeth ....437—440
失樂園 304. 319
詩とは何ぞや 449
神曲..346.460.462
信仰 326
新詩集 396
新生 462. 466
人生戯曲 421
シムベリン 302. 326
シモン(サン) 268
シモンズ(アアサア) 473

銘文(シルシ) 452
シルレル 261
しろぶね 442. 455
ジヤアム Germ..472—474
シヤープ 252
謝蕪村 445
シヤトラアル Chastelard..507
シヤロットの姫 The Lady of Shalott, ...280. 444
受胎告知..253.472
十九世紀羅曼庭格主義の發達史 468
ジユール Joule, James Prescott 271
自由の聲•愛の歌..422
シユトウルム•ウント•ドラング Sturm und Drang 261
春潮集..500.504
女王メリイ 323
小車のもののふ Le Chevalier de la charrette 303
小典零章 243
小童のなげき 428
ジヨオンズ、アアネスト) Jones, Earnest 415
ジヨオンズ(バアン) 435. 479
食蓮國人 280
抒情詩歌集..250.252.432
シヨペンハウエル 410
ジヨン•ギルピン..248
ジヨンソン(ベン) 292
常理主義 261

(ス)

Sweetness and Light 405
Soothsay 461
Skipping Rope, The..286

スコット ………………………………… … ……………253—254.259.490
薄田泣菫 …… . … . …. ……………………… . ……………………379
Stylites……………………………………………………………………281
スタエル夫人 …………… ……………………………………………261
ステッドマン ……….. ……………………….. …………………285
棄てられたるマアマン …………………………………………404.405
Storm and stress (シュトウルム・ウント・ドラング) ……………………
Stratton Water ……………………………………………………454. 456
Straff and Scrip, The ……………………………………………456
ストラッフオード Strafford………………………………………………346
Stream of Life, The (いのちの流れ) ………………………………
Stream's Secret. The ……………………………………………460
スパズモディック詩派 ………………………………………412—429
Springtide, Song of the (春潮集) …………………………………
スペディング(ジエイムズ) ………………………………………279
スペンサア ……………………………………………256. 304. 446
スペンサア(ハアバアト) …………………………………………271
スミス(アレクサンダア)………………………………………421—422
Three Seasons ……………………………………………………476
Through the Metidjate Abd-el-Kadr ………………………………382
スキフト …………………………………………………………405
スキンバアン(アルヂアノン チヤアルズ) Swinburne,
Algernon Charles …………………………264.322.387.435.494.513

(セ)

聖アグネス ………………………………… ……………………………444
世紀病 ……………………………… ………………………………254. 398
世紀末 …………………………………………………………274. 439
セイタニック派 …………… ……………………………………255
聖杯 …………………………………………………………………303
聖杯捜索 Le Queste del Saint Graal ……………………………305

セインツベリイ教授 ………………………………302.377.408.426.479.485
生命の家………………………………………………………448—453.477
Sailor Boy, The………………………………………………………………322
ゼームズ・リイの妻 James Lee's Wife……………………………………378
セオクリタス……………………………………………………282—285.306
世界の光 ………………………………………………………………………472
ゼスタ・ロマノオルム…………………………………………………………484
ゼニイ Jenny……………………………………………………………………466
仙女王 …………………………………………………………………………304
セント・アグネスの夕…………………………………………………256. 510
St. Dorothy……………………………………………………………………500
前途を望め………………………………………………………350.354.378
戰爭の歌 ………………………………………………………………………419
セリダン ………………………………………………………………………291
セルウッド孃(エミリイ) ……………………………………………………291
ゼロルド(ダグラス) …………………………………………………………387

(ソ)

想像的寫實主義 ……………………………………………………………251
想像の會談 ……………………………………………………………………257
ソオラブとラスタム Sohruband Rustum ………………………402—403
Songs before Sunrise (曉天の歌) ………………………………………
Song of Shirt, A………………………………………………………………260
ソオル Soul……………………………………………………………………379
ソルデロ Sordello …………………………………………………346.387

(タ)

タアンホイゼルの物語 ………………………………………………………499
Dames du Temps Jadis, Ballade des (昔のたをやめの歌) …………
ダアキン Darwin, Charles Robert ………………………………271.443
大海 ……………………………………………………………………………406

大洋 ……………………………………………………………………343
太陽 ……………………………………………………………………352
ダクティル ……………………………………………………………498
タスク …………………………………………………………………248
戰の樂人 ………………………………………………………………423
旅路の戀 ………………………………………………………408—409
單絃 ……………………………………………………………………452
男女 ……………………………………………………………………349
ダンテ ………………………………………………436.466—468
Dante at Verona ……………………………………………………259
Dante and his Circle, with the Italian Poets preceding him……438
ダンテの夢 ……………………………………………………………442
ダントン(シオドーア・ワッツ) ……………………………443.472
ダルトン Dalton, John ………………………………………………271

(チ)

中夏安息 ………………………………………………………………590
中世主義 Mediaevalism ……………………………………………445
ヂウマ …………………………………………………………………463
チエンチ ………………………………………………………………322
地理原理 ………………………………………………………………270
地上樂園 ……………………………………………………483—488
チヤアレズ(Charles Tennyson-Turner) …………………………
チヤイルド・ハロルド ………………………………………………418
チヤタアトン …………………………………………………………441
チヨオサア …………………………………………………286.446.492

(テ)

ティイク ………………………………………………………………261
帝國主義 ………………………………………………………………269
Daisy, The ……………………………………………………………298

Dypsychus (ふた心の人) ……………………………………………
テイラア(ヘンリイ) ……………………………………………291.283
デカダン文學 ……………………………………………439
デカメロン ……………………………………………324
Dead City, The ……………………………………………472
Death is a Desert, A(荒野の臨終)……………………………………………
手と雲……………………………………………470—471
テニソン(アルフレッド)Tennyson, Alfred ……………………………………………269.275
276—343.349.386.288.
Defence of Guenevere and other Poems……………………………………………479
デフェンス・オブ・ラックノウ ……………………………………………423
デェレル(アルブレヒト) ……………………………………………411
テルザ・リマ……………………………………………462
デギイ Davy, Humphry ……………………………………………271

(ト)

獨逸論 ……………………………………………261
ドウラ ……………………………………………281—282.320
Two Brothers, Poems by(二人兄弟の歌)……………………………………………
Two Voices, The (二つの聲)……………………………………………
ドオヴアの濱……………………………………………399—400
時の勝利 ……………………………………………504
ドブソン(オオスティン) ……………………………………………501
ドベル(シドニイ) Dobell, Sydney……………………………………………415
ドン一派の詩人 ……………………………………………413
ドン・ジュアン……………………………………………254
トマセオ ……………………………………………428
トムソン Thomson, William ……………………………………………248.268
トムソン James, ……………………………………………409
Triumph of Time, The …(時の勝利)……………………………………………
ドライデン ……………………………………………246. 264

Dramatis Personæ (劇中人物) ....

トリストラム・オブ・ライオネス Tristram of Lyonesse ....

トリストラムとイシュルト Tristram and Iseult 401

Dreamer, The 325

Dream of Fair Woman. A (美女の夢) ....

Dearm-Land (夢の郷) ....

トルストイ 268. 274

トレンチ 279

Troy Town..454

(ナ)

夏のたそがれ 343

Nuptial Sleep... 441

なほ一語 348

南方の夜 401

(ニ)

News from Nowhere 493

ニウマン 272

二人兄弟の歌 279. 342

肉感の詩派 441. 499

ニネエの歌 461

ニベルンゲンリイド 461

日本文學史 321

(ネ)

眠れる美女 444

(ノ)

ノウエル(ローデン) 334

ノウルズ 291

希望(ノゾミ)の快樂 ……………………………258
ノックス ……………………………471
ノバリス ……………………………261
ノルダウ ……………………………274

(ハ)

パアシイ Percy ……………………………246. 444. 488
Burden of Nineveh, The ……………………………460
ハアバアド ……………………………473
バアンズ ……………………………246–247. 249. 268
Higher Pantheism ……………………………332
バイロニズム ……………………………254. 345
ハイネ ……………………………410
バイロン ……………………………253–254. 345. 414. 419
バイロン傳 ……………………………258
House of Life (生命の家) ……………………………
ハウプトマン ……………………………462
ハエロック進軍 Havelock's March……………………………423
パオロとフランチェスカ ……………………………462
ハクスレイ Huxely, Thomas ……………………………271
白羊宮 ……………………………379
Passing of Arthur, The ……………………………314
Vanity of Vanities ……………………………472
馬場孤蝶 ……………………………379
ハント(ホルマン) Hunt, William Holman……………………………431. 434. 453
ハント(リイ) ……………………………291. 432
ハンド・アンド・ソオル Hand and Soul ……………………………437
Pantisocratic ……………………………250
パンドオラ ……………………………453
ハムレット ……………………………299. 300
Ballads and Sonnets……………………………442

Ballads of Burcleus, A 500
パラセルサス Paracelsus..346. 377
ハラム 279. 292
ハリソン 300
バリンとバラン Balin and Balan 300
Balcony. In a (露臺にて) ....
ハルトマン 462
バレット(エリザベス) Barret, Elizabeth..349-350. 425-428
Palace of Art, The (美術殿)..
Balen, The Tale of 510
ハロルド Harold 323
ハワアド(ヘンリイ) 446

(ヒ)

ビアトリス 438. 466
ビイアズ 468
ピーコック 259
ヒイマンズ 258
ビオウルフ 490
美術殿 280
Bishop orders his Tomb at St. Praxed's Church. The
(高僧聖プラクセット寺に墳墓を命ず) ....
美女の夢 280
Historia Britonum (ブリトン實錄) ....
ビッグ(スタンヤン) Bigg, Stanyan 415
ピネロ 322
ピパ過ぎ行く Pippa Passes..255
批評論集 394
貧者の詩人 248
Before Inkermann 423
ピンダア 334. 284

Hymn to Proserpine 500
ビュカナン(ロバアト) Buchanan, Robert 441
ビュルゲル Burger...253. 461
病的戀愛觀 Morbid eroticism 499

(フ)

ファイディッピデス Pheidippides 379
ファウスト 300
ファミリアン Firmilian.......................................415
ファラデイ Faraddy, Michael 271
Falcon, The 324
フィリプス 322
フイルドウシ 401
フイロメラ Phiromela 404
フエスタス Festus..416
Phædra...500
Famine Smitten, The 422
フオルド 507
Foresters, The 324
福音の琴 435
ふた心の人 406
二つの聲 281
二人のナポレオン 423
ふたり行くもけふを限り 379
佛人行事 301
佛陣美談 379
フッド 258. 269
懷硯 321
舟のなか 378
文學論 261
不眠 410

Bride's Tragedy..506
Bride's Prelude, The 454. 460
ブラウニング 275. 300. 343–389. 392. 403. 413
ブラウニング夫人(バレット) ....
ブラウン(マドクス) 436
Brother Brum...471
ブラックモオア 304
Bloody Son, The 506
佛蘭西共和國の歌 503
フラ・リッポ・リッピ Fra Lippo Lippi..................................380
ブリッヂス ロバアト) 405
ブリトン實錄 302
プリンセス Princess, The 285. 289–291. 327
Prince's Progress 472–275
プリムレイ 284. 338
プルウドン 268
Burgraves, Les 463
ブレイク 248. 476
Pleasure of Hope, The (希望の快樂)......................................
Blessed Damozel, The (在天聖女) ....
Fleshly Shool of Poetry, The (肉感の詩派)...............................
フレデリック・テニスン Frederick Tennyson 343
Pre-Raphaelite Brotherhood (ラレァエル前派)..............................
プロクタア 471
プロサアピナ 442
プロスピセ Prospice (前途を望め) ....
Promise of May, The 324
プロメシウス・アンバウンド...496
フロレンスなる小兒の家 426
フロレンス派 468
Future, The (未來)...

(へ)

ペイタア ……………………………………………………252. 446. 458. 513
ペイン(ジョン) ……………………………………………………………465
ペイレイ(フイリップ・ジエームジ) Bailey, Philip James………416–417
Pageant, A ……………………………………………………………………472
Babe Christabel, The Ballad of……………………………………………422
ペザント(チルタア) ………………………………………………………268
Hesperia ………………………………………………………………………500
ベッケット Becket …………………………………………………………323
ペツドーズ ……………………………………………………………………259
ペトラルカ …………………………………………………………446. 448
ベンザム ……………………………………………………………259. 289
ペルシヴアル Percevale ……………………………………………………303
Bells and Pomegranates……………………………………………………347
ベルチヤーム教授 ……………………………………………………………322
Hellenics (希臘風) ………………………………………………………
Heroic couplet ………………………………………………………………264

(ホ)

Forsaken Merman, The (棄てられしマアマン) ……………………
ボアロオ ………………………………………………………………………448
Voices of Freedom and Lyrics of Love (自由の歌・愛の歌) ……
Voyage, The …………………………………………………………………322
ポエムズ◦エンド・バラッヅ Poems and Ballads ………………498. 500
ポオ ……………………………………………………………………………410
ポオプ ……………………………………………………246. 264. 277. 342
ホウトン ………………………………………………………………………279
Portrait, The …………………………………………………………………459
ホオマア ……………………………………………………248. 317. 396. 455
Home Thoughts from Abroad (異域望郷) ………………………………

Home Thoughts from the Sea (海上故國を懷ふ) ....
ボオリイン 345. 359
ボオルダア Balder...... 418
ボズエル Bothwell 507
北米講演 393
北米評論 ....
ボツカチオ 324
ボッティチエルリ(サンドロ)..453
ボドレエル 410. 500
ホフマン 261
葡萄牙ソネット Sonnets from the Portuguese 426–427
ホレース 334
White Ship, The 454

(マ)

マアテイン・レルフ Martin Relph..379
マアロオ 507
My Last Duchess (わが故公爵夫人)..
マクフアアソン Macpherson 246
マコウレイ 258. 257
まことの女 452
Masque of Queen Bersabe, The 499
マツセイ(ゼラルド) Massey, Gerald ....415. 42 –424
マツプ(ウオタア) Mapes, Walter 303
マビノギオン Mabinogion 303. 488
マンゾオニ 261
Mannerism 465
マンフレッド 322
マリアナ 287. 444
Mari Magno (大海).. ......
Mal du Siècle (世紀病) ....

マロリイ Malleor ……………………………………………302. 308. 479

(ミ)

Meeting at Night (夜の逢瀬)… ……………………………………
亂れ髪 ……………………………………………………………441
Midsummer Holiday, A (中夏安息)……………………………
水門をよぎりて …………………………………………327. 353
未來 ………………………………………………………………404
ミラボウ …………………………………………………………503
ミル ……………………………………… ……………………269
ミルトン ……………………………………… 261. 319. 335. 384
ミレイ Millais, John Everett…………………………431. 472
都の歌 ……………………………………………………………421
ミュセエ ……………………………………………………449. 463

(ム)

ムーア ……………………………………………………………258
夢想 ………………………………………………………………453

(メ)

Maiden Song ……………………………………………………475
May Janet ……………………………… ……………………506
メタスタシオ ……………………………………………………402
メデイア …………………………………………………………482
Men and Women (男女) ………………………………………
Memorial Verses on the Death of Théophile Gautier ……………502
メリイガア ………………………………………………………496
メリイ・スチュアート……………………………………………507
メリメ(プロスペル) ……………………………………………395
メロオピイ Merope ……………………………………395. 401
メヨア ……………………………………………………………336

(モ)

モオド Maud……298–299. 319. 388
Morbidezza……439
物語詩……253
モリス Morris, William……435. 478–494
Morris & Compay……481
モルト・ダアサア Morte d'Arthur……302–304

(ユ)

Qua Cursum Ventus (風吹くかた)……
ユウゴオ……463. 501
ユーリピデス……482
憂愁……411
夢の郷……474
ユリシス Ulysses……281. 283

(ヨ)

夜の逢瀬……381

(ラ)

ライエル……270
Life and Death of Jason……481
Life Drama, A (人生戯曲)……
ラグビイ會堂……401
ラスキン……432
Last Confession, A……441
Last Tournament, The……312
Last Ride Together, The (ふたり行くも今日を限り)……
Lovers of Gudrun, The……485
ラビ・ベン・エヅラ……378

ラファエル前派 ……………………………………………………430–514
Love among the Ruins (古城の戀) ……………………………………
Love is Enough……………………………………………………488
Love Enthroned (戀の高御座)…………………………………………
Love from the North ……………………………………………475
ラング (アンドルウ)………………………………………………465. 501
ランスロット Lancelot …………………………………………303–305
ランダア …………………………………………………………257–258. 495
ララ・ルーク Lalla Rookh ………………………………………258
L'Arpa Evangelica (福音の琴) …………………………………………
L'allemagne (獨逸論)…………………………………………………

(リ)

リイア王 …………………………………………………………269. 302
リイランド(フレデリック) ………………………………………390
リクヰエスキャット Riquiescat …………………………………404
リシダス …………………………………………………………401. 500
Littératur, De la (文學論) ……………………………………………
Little Willie ……………………………………………………… 422
Renascence of Wonder, The (驚異の復活)…………………………
Ring and the Book, The (環と書) ……………………………………
旅人 …………………………………………………………………247
Lyrical Poems, Chiefly (おもに抒情の歌) …………………………

(ル)

ルクレティウス ……………………………………………………483
ルソオ ……………………………………………………………249. 261. 289

(レ)

レイヴン …………………………………………………………459
靈の美 ………………………………………………………………452

レオナルド・ダ・ギンチ ……………………………………………453
レオパルデイ ………………………………………………261. 410
Regum Britamniae (ブリトン實㸿)……………………………………
レティイの地球儀 ……………………………………………243
レノオレ Lenore …………………………………………253. 461
Revenge, The…………………………………………………322
レミヤ ………………………………………………………264
Reliques of Ancient English Poetry (古歌拾遺)……………………

(ロ)

Rose Mary ……………………………………………………454—456
羅馬人 Roman, The ……………………………………………418
羅馬人行事 ……………………………………………………
羅馬に於けるアラリック ……………………………………395
ロオーチヤアズ ……………………………………………250. 257
ロセッティ(クリスティナ) Rosseitt, Chrisina Georgina..439. 468. 471. 477
ロセッティ(ダンテ・ゲブリエル) Rossetti, Dante Gabriel ……………
431. 432. 434—471. 477. 478. 479. 495
ロセッティ(マリア・フランチェスカ) ………………………………436
ロセッティ(キリアム・マイケル) …………………………………436
露臺にて ……………………………………………………379
Lotus Eaters. The (食蓮國人)……………………………………
ロックスレイ館 Locksely Hall……………………………281. 298. 327
ロツクハルト …………………………………………………287
爐邊にて ……………………………………………………348
Romantic sentimentlism ………………………………………258
ロマンテイシズム ……………………………………………260—268
ロングフエロウ ………………………………………………462

(ワ)

War Waits (戰の樂人)..
War, Sonnets on the (戰爭の歌) ....
ワアド女史(ハムフリイ) 268
ワイアット(トマス) 446
わが故公爵夫人 379
わが星 348
ワグネル 303
環と書 351. 428

(ヰ)

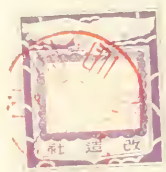
ヸヨン(フランソア) Villon, François 464. 501

(ヱ)

ゑすがた 466
エプスタア 471. 507

(ヲ)

ヲルヅヲルス 250. 251. 253. 273. 386. 398–400
ヲルヅヲルス選集 398
ヲルヅヲルス論 398

昭和四年五月五日印刷
昭和四年五月八日發行

厨川白村全集
第二卷

著者　厨川白村
發行者　山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二四番
電話芝(43)一二一一・一二二二・一二二三・一二二四番

(兩角製本)

株式會社秀英舍印刷